

山梨県北巨摩郡須玉町

腰巻遺跡（第1～3次調査）

2004

須玉町外1ヶ村病院組合
明野村教育委員会
須玉町教育委員会

山梨県北巨摩郡須玉町

こしまき
腰巻遺跡（第1次調査）

老人保健施設「しおかわ福寿の里」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

須玉町外1ヶ村病院組合
明野村教育委員会
須玉町教育委員会

例 言

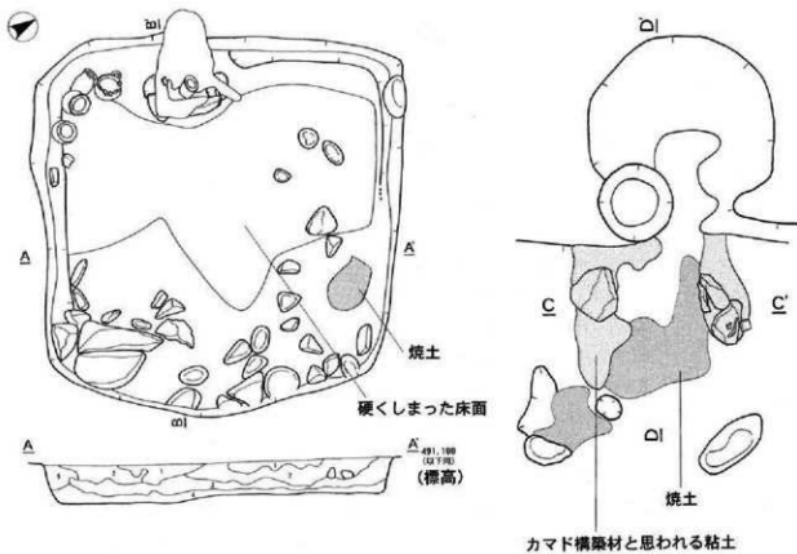
- 1 本書は、山梨県北巨摩郡須下町藤出字腰巻 787 番地にかに所在した腰巻（こしまき）遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の現地発掘調査は、平成 6 年 6 月 20 日に着手し、平成 6 年 9 月 13 日に完了した。
- 3 発掘調査は、須玉町外 1 ヶ村病院組合立老人保健施設「しおかわ福寿の里」建設工事に伴い実施した。
- 4 発掘調査は、明野村教育委員会、須玉町教育委員会、須玉町外 1 ヶ村病院組合が協同で実施した。調査組織は下記のとおりである。

調査主体 明野村教育委員会・須玉町教育委員会
調査担当 明野村教育委員会文化財調査員 佐野 降
須玉町教育委員会文化財担当 山路勘之助
須玉町教育委員会調査補助員 深沢裕三
調査事務局 須玉町外 1 ヶ村病院組合

- 5 本書の執筆、編集は佐野があたった。
- 6 本遺跡の発掘調査に係る公文書は須下町教育委員会および須玉町外 1 ヶ村病院組合が作成保管し、遺跡の出土品及び調査に係る諸記録は明野村教育委員会が保管している。
- 7 本遺跡の調査及び報告書作成に際し、次の方々にご指導、ご教示を賜った。ご芳名を記し感謝したい。(敬称略)
坂本美夫（山梨県埋蔵文化財センター）、瀬田正明（一宮町教育委員会）、平野修（帝京大学山梨文化財研究所）、
保坂康大（山梨県埋蔵文化財センター）、森川剛廣（山梨県埋蔵文化財センター）、山下孝司（茲崎市教育委員会）
- 8 調査参加者（五十音順、敬称略）
阿部恵子、石渡節子、今村憲一、上野如子、小野良子、河手寿子、菊地てる代、篠原啓子、清水祐至、清水小春、
清水みゆき、田中利行、筒井つや子、壺屋てる子、中田朗、入戸野きぬよ、入戸野たかじ、人戸野つるじ、入戸
野宏、横本隆廣、早川潤、福田和久、福田佐つき、無内としえ、松江かね代、三井幸子、三井義満、三塚てつ子、
皆川和子、皆川知子、宮崎庄八、宮崎俊子、宮崎房子、山口か志子、山田直樹、東京大学考古学研究会

凡 例

- 1 報告書中の地図は、国土地理院発行 5 万分の 1 地形図「八ヶ岳」「立崎」、須玉町外 1 ヶ村病院組合作成「しおか
わ福寿の里」用地現況図（250 分の 1）、須玉町作成「須玉町管内図」（1 万分の 1）を使用した。
- 2 図版中の網掛等の意味するところは以下のとおりである。



本文目次

例言・凡例

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡をめぐる環境	4
第3章 古墳時代の遺構と遺物	14
第4章 奈良時代の遺構と遺物	24
第5章 平安時代の遺構と遺物	32
第6章 その他の遺構と遺物	35

表 目 次

第1表 遺跡地名表	9	第2表 遺物観察表	121
-----------	---	-----------	-----

図版目次

第1図 調査区位置図	2	第2図 遺跡全体図	3
第3図 周辺の古墳時代遺跡分布図	6	第4図 周辺の奈良時代遺跡分布図	7
第5図 岸辺の平安時代遺跡分布図	8	第6図 1号住居 1号住居出土遺物	38
第7図 1号生居出土遺物	39	第8図 3号住居 3号住居カマド	40
第9図 3号住居出土遺物	41	第10図 3号住居出土遺物	42
第11図 4号住居	43	第12図 4号住居カマド 4号住居出土遺物	44
第13図 4号住居出土遺物	45	第14図 5号住居 5号住居カマド	46
第15図 5号住居出土遺物	47	第16図 5号住居出土遺物	48
第17図 8号住居	49	第18図 8号住居出土遺物	50
第19図 8号住居出土遺物	51	第20図 9号住居 9号住居カマド	52
第21図 9号住居出土遺物	53	第22図 10号住居 10号住居カマド	54
第23図 10号住居出土遺物	55	第24図 11号住居 11号住居出土遺物	56
第25図 12号住居 12号住居カマド	57	第26図 12号住居出土遺物	58
第27図 12号住居出土遺物 16号住居 16号住居出土遺物	59	17a号住居	
第28図 17a号住居カマド 17a号住居出土遺物	60		
第29図 17b号住居 17b号住居カマド	61	第30図 17c号住居出土遺物	62
第31図 17b号住居出土遺物 17c号住居 17c号出土遺物	63		
第32図 17d号住居 17d号住居出土遺物 17d号住居出土遺物	64		
第33図 18a号・18b号住居 18b号住居カマド	65		
第34図 18a号生居出土遺物	66	第35図 18a号生居山土遺物 18b号住居出土遺物	67
第36図 18b号住居出土遺物	68	第37図 19a号・19b号住居 19b号住居カマド	69
第38図 19b号住居出土遺物	70	第39図 20号・22号住居 20号住居カマド	71
第40図 20号住居山土遺物 21号住居出土遺物	72		

第41図	21号住居出土遺物 (1/2) 24号住居 (1/40) 24号住居出土遺物 (1/2、6 1/4)	73
第42図	26号住居 26号住居出土遺物	74
第43図	27号住居 27号住居カマド	75
第44図	27号住居出土遺物	76
第45図	28号・36号住居 28号住居出土遺物	77
第46図	28号住居出土遺物	78
第47図	36号住居出土遺物	79
第48図	29号住居出土遺物 30号住居	80
第49図	30号住居出土遺物	81
第50図	30号住居出土遺物	82
第51図	32号住居 32号住居カマド	83
第52図	32号住居カマド 32号住居出土遺物	84
第53図	34号・38c号・38b号住居	85
第54図	34号住居出土遺物	86
第55図	38a号住居カマド 38a号住居出土遺物	87
第56図	38a号住居出土遺物	88
第57図	38a号住居出土遺物	89
第58図	38b号住居カマド 38b号住居出土遺物	90
第59図	38b号住居出土遺物	91
第60図	385号住居出土遺物 35号住居	92
第61図	37号住居 37号住居出土遺物	93
第62図	37号住居出土遺物	94
第63図	37号住居出土遺物 39号住居出土遺物	95
第64図	41号住居 41号住居カマド	96
第65図	41号住居出土遺物	97
第66図	41号住居出土遺物	98
第67図	42号住居 42号住居カマド	99
第68図	42号住居出土遺物	100
第69図	43a号・43b号住居	101
第70図	43a号住居カマド 43a号住居出土遺物	102
第71図	43a号住居出土遺物	103
第72図	43b号住居カマド 43b号住居出土遺物	104
第73図	43b号住居出土遺物	105
第74図	46号住居 46号住居カマド	106
第75図	51号住居 51号住居出土遺物	107
第76図	52号・53号住居	108
第77図	52号住居カマド 52号住居出土遺物	109
第78図	52号住居出土遺物	110
第79図	53号住居カマド	111
第80図	53号住居出土遺物	112
第81図	掘立柱建物	113
第82図	掘立柱建物	114
第83図	掘立柱建物	115
第84図	掘立柱建物	116
第85図	1号溝 1号溝出土遺物	117
第86図	1b号・2号掘立柱建物出土遺物 その他の時期の遺物	118
第87図	その他の時期の遺物	119
第88図	造構外山土遺物	120

第1章 調査に至る経緯

山梨県北巨摩郡明野村と須玉町が運営する須玉町外1ヶ村病院組合は、平成6年に総合立老人保健施設「しおかわ福祉の里」建設を計画した。明野村教育委員会と須玉町教育委員会は、両町村の共同事業であることから埋蔵文化財の発掘調査を共同で実施することとし、平成6年4月に事業用地において埋蔵文化財所在確認調査（試掘調査）を実施した。

所在確認調査では事業用地1,600m²に試掘坑13ヶ所、試掘溝10ヶ所を設け、遺構の有無を確認した。その結果、縄文時代、古墳時代、奈良時代、平安時代の出土品と、古墳時代を主体とする遺構の存在を確認し、事業用地の全域で発掘調査の実施が必要と判断した。

所在確認調査の結果を受けて、須玉町教育委員会と病院組合事務局とで事業の実施と埋蔵文化財の取り扱いについて協議し、事業の実施に先立ち事業用地全域で記録保存のための発掘調査を実施することとした。調査に要する経費は病院組合を組織する明野村と須玉町が全額を負担することとした。発掘調査は、所在確認調査と同様に明野村教育委員会と須玉町教育委員会が共同で実施することとした。

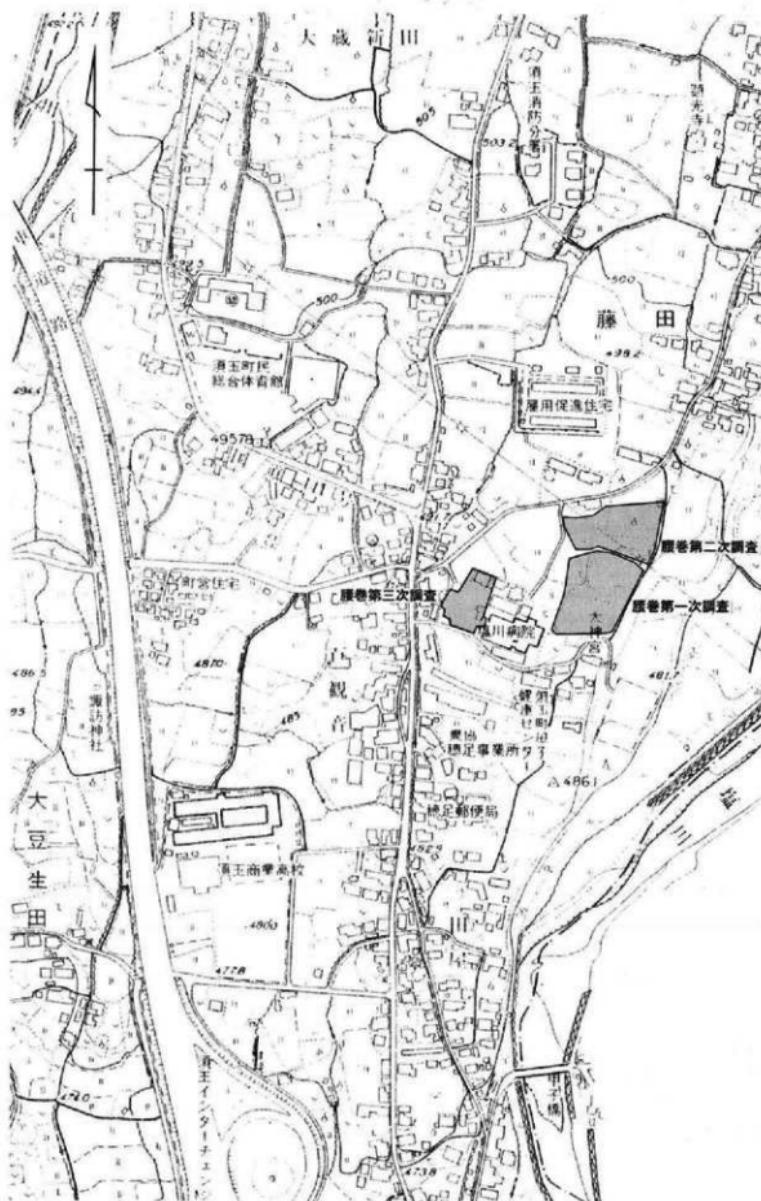
現地での発掘調査は、平成6年6月20日から同年9月13日にかけて実施し、調査対象面積は4,600m²であった。所在確認調査の結果から算出した発掘調査費の総額は12,360,000円で、病院組合の山賃比率に従い明野村が1/3、須玉町が2/3を負担した。

水田に囲まれた事業用地での発掘調査は、調査期間が農作期にあたったこともあり、埋没谷内で多量の湧水に苦しまれ、必ずしも万全の成果を得ることはできなかった。しかし、所在確認調査で想定した遺構数を大きく上回る遺構を検出し、古墳時代の住居17軒、奈良時代の住居18軒、平安時代の住居7軒、掘立柱建物16棟を調査し、テンパイ・45箱分の土器、石器、金属製品を得た。

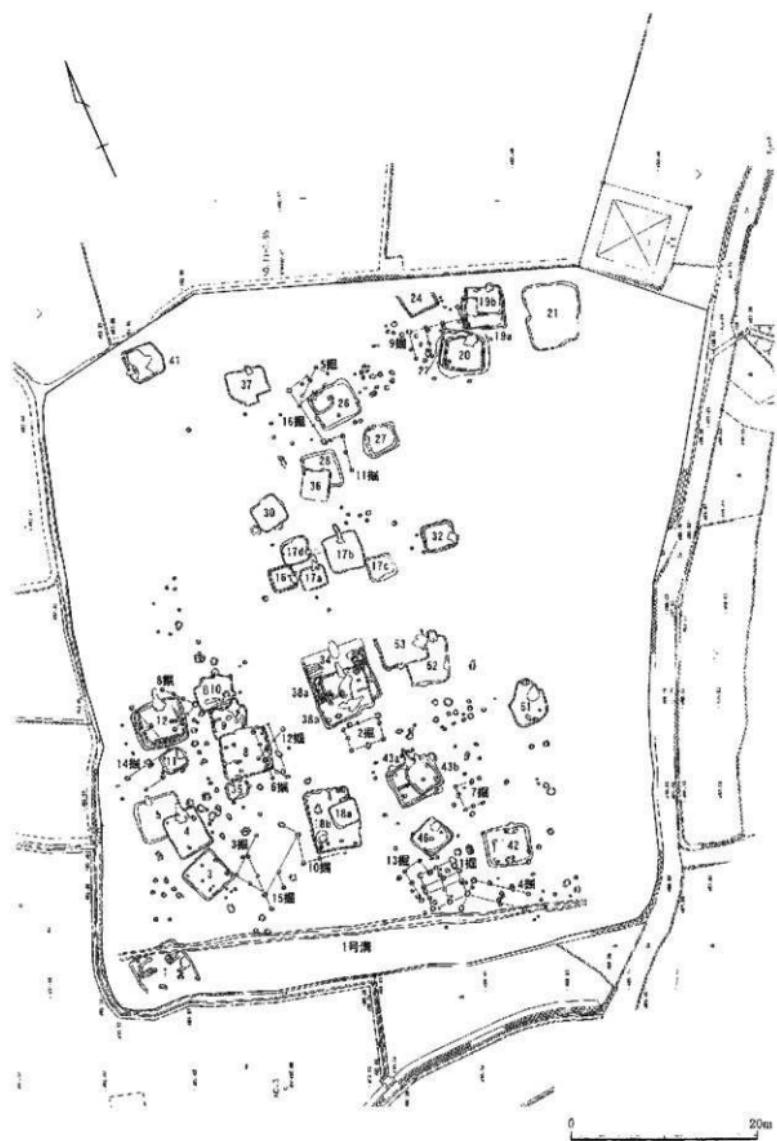
調査記録と出土品の整理作業は、当初の調査計画で想定した調査費全額を現地調査に充てざるを得なかったため、次年度以降に延期することとし、平成7年度に洗浄、注記、復元作業を須玉町教育委員会で、実測、報告書作成作業を明野村教育委員会が実施した。

先述したとおり、腰巻遺跡内において計画された老人保健施設「しおかわ福祉の里」建設工事に先立ち、明野村教育委員会と須玉町教育委員会では、工事用地内の埋蔵文化財所在確認調査を実施したが、この時点で腰巻遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったため、調査においては、まず遺跡の有無を確認することを第一の目的とした。この結果、複数の試掘坑で縄文時代の土器と土師器が出土したため、埋蔵文化財包蔵地であると判断し、次に用地内における遺跡の広がりと遺構の有無、遺構密度を確認するために2辻幅の試掘溝10本を掘削した。調査期間の割約上、試掘溝の表土を重機で剥ぎ取り、下層を人力で掘削することとした。この調査の結果、堅穴住居跡とみられる遺構が数ヶ所で確認され、現地形から推測される旧微地形を勘索すると、月地全体に遺跡が分布していることが確実視された。

以上の事前調査の結果を踏まえ、施設建設工事計画により遺跡に破壊が及ぶ範囲を把握する作業を行った。建設工事では、北から南へ緩く傾斜する従前の地形を、北側で削平し南側に盛土することで平坦な用地を造成することとなっていた。また施設は用地のほぼ中央に建設され、基礎工事等による掘削は地表下深くまで及ぶ。遺跡を現状保存できる可能性が残された区域は、南側に予定されている駐車場の一部のみであった。建設工事を担当する病院組合事務局と協議した結果、用地全面を発掘調査しても調査経費に大きな差がないと想されること、現状保存区域を設定することで工事の実施とのちの土地利用計画に支障が生じる可能性が残ることなどの理由により、木発掘調査は、老人保健施設建設用地の全体を対象に実施することとした。



第1図 調査区位置図 (1/5,000)



第2図 遺跡全休図（数字は遺構番号を示す）

第2章 遺跡をめぐる環境

腰巻遺跡は、山梨県北巨摩郡須下町藤田 787 番地一帯に所在する。

山梨県北西部は、西は赤石山脈（南アルプス）で足尾伊那地方と接し、北は木火山ハッ岳の緩やかな山麓で長野県諏訪地方とつながる。東には主峰金峰山を戴く秩父山地が迫り、標高 2000 m を超える山並みに三方を囲まれた地域である。

それぞれの山並みからは、駿河湾に注ぐ富士川の支流が発している。赤石山脈北部の高峰甲斐駒ヶ岳からは釜無川が南北に細長い低地を刻み、ハッ岳では須玉川、甲川などの河川が、山麓に大小の谷を刻みながら出畑を潤している。秩父山地に発する塩川は、深い渓谷を刻んで谷あいをうねるように流れ、その両岸には幾段もの河岸段丘が発達している。ハッ岳南麓の河川と塩川は、腰巻遺跡の南方で合流して河岸の低地を形成しながら南流し、甲府盆地へつながるはそい同郷を用意している。塩川は、やがて釜無川、笛吹川と合流し甲府盆地西端を駿河湾めざして流れ下る。

遺跡は、塩川右岸の河岸段丘上に立地する。段丘面には、旧自然堤防と思われる南北に僅かに削斜する微高地が展開し、遺跡は、そうした微高地に位置する。標高は 490 m ほどで、現在、遺跡の周辺は、組合立塩川病院があるほか、主に宅地と水田として利用されている。表層の耕作土と堆積土の下層には、河川砂礫が堆積している。現在の年平均気温は 13 度、年平均降水量は 1,151 mm で、冬季には「ハッ岳おろし」と呼ばれる強い北寄りの季節風が吹き付ける。

遺跡のある須下町藤田字腰巻とその周辺は、鶴見地区と呼ばれる。この鶴見地区は、東の塩川、西の須下川にはさまれ、地区の南端で兩河川が合流する。かつて兩河川により形成された氾濫原は、東西幅 1,000 m ほどの平坦面を残して東西両側が侵食され、塩川沿いでは河岸段丘の発達が顕著である。腰巻遺跡は氾濫原の東端に位置し、塩川との現比高差は 50 m ほどである。

須下川と塩川は合流した後、南に流れ下るが、その右岸に、東西 600 m から 1,000 m の平坦な氾濫原を南北 6.5 km にわたって形成している。この平坦地は、「藤井平」と呼ばれ、古くから水田が広がる穀倉地帯であった。藤井平には縄文時代から弥生時代、さらに中世に至る多数の遺跡が知られ、山梨県北西部の拠点的地域であったといえる。そして、鶴見地区は氾濫原「藤井平」の北端とみることができる。

藤井平と鶴見地区は、穀倉地帯として重視されただけではなかった。古代においては、甲斐国中心部と信濃国東部、現在の長野県佐久地方とをむすぶ十妻幹線「御坂路」が、塩川をはさんで接する茅ヶ岳山麓を南北に延び、中世以降には、「佐久往還」（現国道 141 号線）が、甲斐国と信濃国を結んでいた。古代末から中世初頭には、甲斐源氏の一族が、鶴見地区的北側の若狭子地区に拠点を構えたといわれるよう、中世には交通の要衝であり、甲斐国北西部の拠点としての性格も持ち合わせていた。こうした地理条件は、古代においても同様であったと考えられる。

腰巻遺跡とその周辺の遺跡の分布から、甲斐国北西部の歴史環境をみたい（第 3 図）。

縄文時代には多數の遺跡が知られたハッ岳南麓と茅ヶ岳山麓周辺は、丘陵地形が大半でしかも高冷地であるためか、弥生時代になると遺跡数が激減する。それでも弥生時代後期にはハッ岳南麓の柳坪遺跡（24）、鶴見地区的腰巻遺跡（118）、藤井平の中田小学校遺跡（78）、堂ノ前遺跡（89）などの集落遺跡が散見される。

古墳時代前期になると遺跡数が増加する。ハッ岳南麓では柳坪遺跡（24）、酒呑場遺跡（28）、頭無遺跡（30）などの集落遺跡が知られ、北村遺跡（34）では方形周溝墓群が調査されている。茅ヶ岳山麓でも神坂遺跡（129）の集落と大日川原遺跡（128）の方形周溝墓群が調査されている。藤井平周辺でも坂井南遺跡（93）などで集落と墓域が確認されている。

一方で古墳時代中期の遺跡は少なく、ハッ岳南麓の龍角遺跡（33）、龍角西遺跡（32）、原町農業高校遺跡（36）、藤井平で枇杷塚遺跡（98）が知られる程度である。しかし龍角遺跡と龍角西遺跡のように一定数の住居群が知られ、古墳時代前期から営住が強まる傾向にあると推測することができる。

古墳時代後期にはこうした営住傾向がさらに顕著になり、かつて地域の中心的な集落が出現するようである。ハッ岳

南麓では柳坪遺跡（24）、柳坪北遺跡（23）がみられる一方、藤井平北端にあたる腰巻遺跡（118）は古墳時代後期から奈良平安時代と継続して一定規模の集落が經營されている。藤井平の上横屋遺跡（92）はごく限られた面積が調査されたのみであるが、そこで検出された住居跡は激しく重複し、かなりの住居をともなう集落であると見込まれる。

こうした古墳時代後期の集落群に、6世紀後半から7世紀にかけての群集墳を築造した勢力をみることができる。八ヶ岳南麓では天王塚古墳、三つ塚古墳、須土川沿いの低地では湯沢古墳群、茅ヶ岳山麓では三之歳古墳群、藤井平では火の雨塚古墳が知られる。これらの古墳群と築造集団との具体的な関係は不詳であるが、古墳が所在する地域周辺には古墳時代後期の集落遺跡が知られ、一定規模の地域集団が成立していたと考えられる。

保坂康夫氏によると、こうした伝統的な集団のうち八ヶ岳南麓に生活した人々は7世紀代に入ると姿を消すという（保坂 2002）。そして、時を同じくして腰巻遺跡に少なからぬ住居をともなう集落が築かれたことから、八ヶ岳南麓などの集団が集住して腰巻遺跡の集落を形成したと推測される。保坂氏は腰巻遺跡への集住が律令制の確立期から50年ほど先んじていることを指摘し、自然環境の変化が集住を促したとしている。

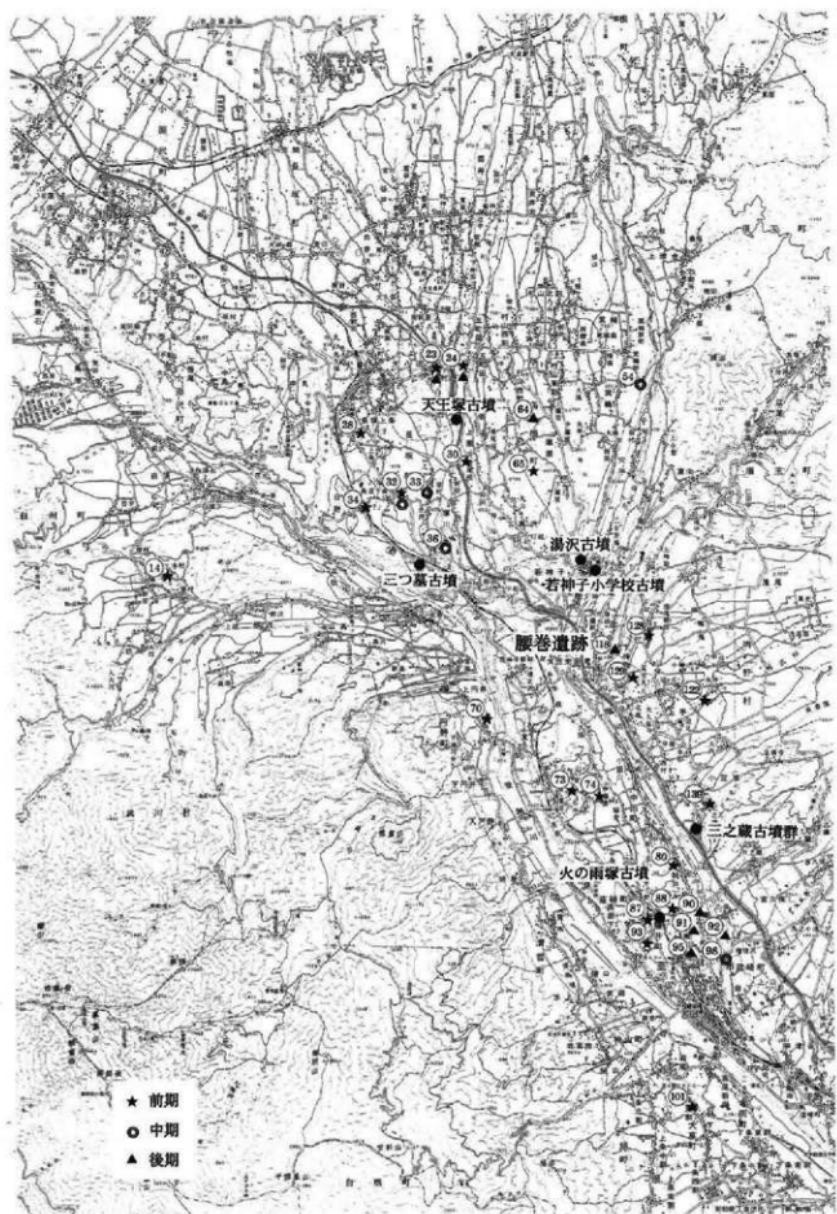
並崎市宮ノ前遺跡とその周辺の微地形を分析した高橋学氏は、塩川の現谷底平野には、埋没旧中州と埋没旧河道の存在が読み取れ、宮ノ前遺跡などの古代集落は埋没急中州上に立地するとした（高橋 1992）。一方、埋没旧河道は、沂水に見舞われる恐れが残るもの、地下水位が高く灌溉用水の引水が容易であるため、水田などの生産域に想定されるという。

宮ノ前遺跡では、弥生時代前期とされる水田跡が発見されているが、藤井平を見渡すと、古墳時代前期から平安時代に至るまで連続と一定規模以上の集落遺跡が知られている。そして特に8世紀初頭頃から集落が拡大していくようである。高橋氏によると、こうした集落の成長の背景には、生産域として良好な条件に恵まれた埋没旧河道の状況を想定することができる。刻々と変化する塩川の川氾濫源にあって、順次、集落適地、生産適地となつた埋没旧中州、埋没旧河道に人々が住し、また水田を開発するようになったものと想われる。

藤井平の北端、腰巻遺跡周辺においても、藤井平の古墳時代集落出現とほぼ同時期に集落遺跡が出現することから、宮ノ前遺跡周辺で観察された旧地形の環境変化と土地利用が予想されるところである。保坂氏が想定する八ヶ岳南麓からの移住と腰巻遺跡周辺への集住現象の背景には、以上のような自然環境の変化が考えられる。

引用文献

- 高橋 学 1992 「宮ノ前遺跡の地形環境分析」『宮ノ前遺跡』並崎市教育委員会ほか
保坂康夫 2002 「第二節 律令制腰巻期の生活の変化」『須玉町史』通史編第一巻第一編第七章 須玉町



第3図 周辺の古墳時代道路分布図 (1/50,000)



第4図 周辺の奈良時代遺跡分布図 (1/50,000)



第5図 周辺の平安時代遺跡分布図 (1/50,000)

第1表 遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時期	発見	特記事項	山典
1	竹坂	小瀬沢町	9世紀後半	生糞(平安3)、鐵冶遺跡	鶴舞、羽口多數出土	1
2	竹坂	小瀬沢町	平安時代	生糞(平安3)		2
3	上平出	小瀬沢町	平安時代			3
4	竹田	小瀬沢町	9世紀後半	生糞(平安11)、獨立柱建物5棟	土師器焼成場、「寺」墨書き	3・4
5	上小原	白石町	平安時代	生糞(平安8)		5・6
6	大然1	白石町	平安時代	生糞(平安1)		7
7	植木	白石町	10世紀中期～11世紀前	生糞(平安7)	「神寺」墨書き	8
8	所々1	白石町	9世紀後半～10世紀後半	生糞(平安6)、獨立柱建物4棟		9
9	所々2	白石町	9世紀後半～9世紀後半	生糞(平安10)、獨立柱建物2棟	所々：遺跡と一体の遺跡と思われる	9
10	所々	白石町	9世紀後半	生糞(平安10)、獨立柱建物	「寺」墨書き、上馬	10
11	川原源小学校	白石町	9世紀後半～10世紀後半	生糞(平安1)	「馬、女、木」墨書き	11
12	西久保	白石町	平安時代	生糞(平安7)		12
13	北上田	白石町	平安時代	生糞(平安7)		13
14	古御所東	内山町	古御所時代(前期)、平安時代(9世紀後半～12世紀)	生糞(平安2)、平安4(?)	櫛書き「社」?「貞、木」、「千」、扇形瓦 遺物?	14
15	御所上	白石町	9世紀後半～11世紀	生糞(平安7)	獨立柱建物?	15
16	上山田3	白石町	9世紀後半	生糞(平安8)、國立社遺物	獨立社遺物は中里か	15
17	白石南	白石町	10世紀中期～	生糞(平安2)		16
18	大八山・笠原	白石町	9世紀後半～10世紀後半	生糞(平安6)		17
19	幽新堀西	長坂町	10世紀	生糞(平安6)		18
20	深川	長坂町	9世紀後半	生糞(平安1)		19
21	小木田鉢野	長坂町	10世紀前半	生糞(平安6)、獨立柱建物	20・21	
22	小木田	長坂町	平安時代	生糞(平安6)		22・23
23	細坂1・2	長坂町	古墳時代(後、後期)	生糞(古墳1)		24
24	御村	長坂町	古墳時代(前、後期)、平安時代(9世紀後半～10世紀後半)	生糞(古墳1)、平安5(?)	基金具、造方、木製出	25・26
25	深川	長坂町	平安時代	生糞(平安1)		27
26	心春山北	長坂町	9世紀中期～10世紀後期	生糞(平安6)		28・29
27	御坂村	長坂町	9世紀後半～12世紀初期	生糞(平安1)		30
28	西久保	長坂町	古墳時代(初期)	生糞(古墳15)、獨立柱建物5		31・32
29	長坂1・2	長坂町	平安時代	生糞(平安1)		33
30	強塙	長坂町	平安時代(後期)	生糞(古墳2)		35
31	里足	長坂町	9世紀後半～10世紀後半	生糞(平安15)	常青「山」、「東」、「星」、旗津	34・35
32	東久保	長坂町	古墳時代(前、中期)、平安時代(9世紀後半～10世紀後半)	生糞(古墳15・平安7)		36
33	駒坂	長坂町	古墳時代(中期)、平安時代(9世紀前半)	生糞(古切跡群・平安1)	長坂町教育委員会の表示による	
34	北村	長坂町	古墳時代(前段)	生糞(古切跡群)		37
35	宮久保	長坂町	9世紀後半～10世紀後半	生糞(平安4)、獨立柱建物1棟		38
36	原町・森裏高砂校舎(下原)・遺跡	長坂町	古墳時代(中段)、平安時代	生糞(古墳1)・平安6		39
37	宮豊田	武川村	9世紀後半～11世紀	生糞(平安7)、獨立柱建物15	常青「山」、「千利」、「生」、「矢」、「虎」、 鎌治造像、全頭觀示多窓、「馬」、羽口、 帶金具	40・41
38	向原	武川村	平安時代	生糞(平安3)		42
39	東原	人来村	9世紀後半～10世紀末	生糞(平安13)、獨立柱建物1基、 獨立柱跡3堆		43
40	東原跡B	大泉村	9世紀後半～10世紀後半	生糞(平安6)、獨立柱建物、網 治遺構	「安原」墨書き	44
41	中村	大泉村	9世紀～10世紀	生糞(平安7)	櫛書き金井出土、東津神遺跡と一体の遺 跡か?	45
42	火津	大泉村	平安時代	生糞(平安8)		46
43	谷戸被弘屋周邊跡	人来村	平安時代	生糞(平安8)		47
44	寺所第2	大泉村	平安時代	生糞(平安2)、網立柱建物2基、 十坑32室		48
45	城下	大泉村	10世紀～11世紀前半	生糞(平安20)、獨立柱建物	丸井、櫛幅向脚、耳皿、千脚	49
46	豆生田跡3	大泉村	9世紀の半～10世紀後半	生糞(平安6)、獨立柱建物		50
47	企生	大泉村	9世紀の半～10世紀後半	生糞(平安6)		51
48	吉所	大泉村	9世紀後半～10世紀末	生糞(平安47)、獨立柱建物3棟、 土坑12基、溝4条	墨書き多數出土、新羅	52・53
49	弓ノ原	人来村	平安時代	生糞(平安2)		54
50	御田	人来村	9世紀後半	生糞(平安6)、獨立柱建物1棟		55
51	木ノ下・大坪	大泉村	9世紀後半～10世紀後半	生糞(平安6)、獨立柱建物2棟、 土坑2基、溝4条	櫛書き「門御經跡物あり	55
52	裏寺跡	高根町	9世紀前半～9世紀後半	生糞(平安6)	ハサヒ須屋で古い寺跡の集落	56
53	更ノ神	高根町	平安時代	生糞(平安1)		57
54	八ツ牛・八ツ牛北	高根町	11世紀	生糞(平安4)、獨立柱建物2棟		58
55	東久保	高根町	9世紀中期～10世紀末	生糞(平安35)、獨立柱建物2棟	猪213kg出土、鎌治工跡地、羽口多數 出土、石器器「劍、劍、出士、刀身×4用、2箱 ×4個」の甚だな屈折性建物あり	59
56	青木北	高根町	9世紀中期～10世紀末	生糞(平安12)、獨立柱建物2棟、 北土2基	東久保石碑南方に移動する一体の遺跡、 鍵石を有する船穴在る?	60
57	社11	高根町	9世紀中期～10世紀末	生糞(平安14)	鎌治網遺跡あり	61

番号	遺跡名	所在地	時期	発掘	登記事項	出典
58	西原北	高根町	剝離後半	住居(平安2)		56
59	西原	高根町	9世紀後半～10世紀後半	住居(平安2)		64
60	森林寺跡	高根町	9世紀後半	住居(平安3)	樹木不明の1箇×9箇の大きな森立柱建物1棟どう	59
61	高内	高根町	9世紀後半	住居(平安3)		56
62	川尻廻上	高根町	9世紀後半	住居(平安2)	古墳時代中期の遺構あり	65
63	高廻南	高根町	9世紀後半	住居(平安2)		66
64	小池土塁場	高根町	古墳時代(後期)			
65	小池山ノ前	高根町	古墳時代(後期) 平安時代	住居(古墳9・平安1)		67
66	宮の前	高根町	9世紀～10世紀	住居(平安1)		68
67	大林上	高根町	平安時代	住居(平安6)		69
68	葛原東久保	高根町	平安時代	住居(平安6)		69
69	湖尻	高根町	8世紀後半～10世紀後半	住居(平安2)、建立柱建物2棟、埴輪馬糞	小田丸、金剛般若、円形彩色土器、高井、「陰平宝室」、上部施作成造模、板状造形馬糞あり	45・76
70	石之坪	豊崎市	古墳時代(後期) 平安時代	住居(平安3)、方形周溝遺構		71・72
71	上本日	豊崎市	8世紀～10世紀後半	住居(奈良平安11)、窓立柱建物		73
72	次郎窓	豊崎市	平安時代	住居(平安6)		74
73	宿窓	豊崎市	古墳時代(前期)	住居(古墳8)		75
74	伊萬清第2	豊崎市	古墳時代(前期)	住居(古墳2)		76
75	中瀬	豊崎市	11世紀	住居(平安2)		77
76	水無	豊崎市	10世紀～11世紀	住居(平安2)	八葉鏡出土	78
77	半施田	豊崎市	9世紀後半～11世紀	住居(平安7)、建立柱建物1棟	砂網片、瓦器、土器、羽口、經理夢棒	79
78	中山小学校	辰巳町	8世紀～12世紀	住居(奈良平安12)、孤立	「泉井」布引、全範鏡2点	80
79	前田	豊崎市	8世紀～12世紀	住居(奈良平安12)、全範鏡	羽口、铁製品多数	81
80	立石	豊崎市	古墳時代(前期) 平安時代	住居(古墳7)、平安(2)	羽口	82
81	宮ノ前第2	豊崎市	5世紀	住居(奈良平安10)、建立柱建物10棟	新羅内沟石、瓦、瓦块	83
82	宮ノ前	豊崎市	8世紀～11世紀	住居(奈良平安417)、柱立柱建物5棟	金環車、舟立三足、内面磨、鍍金輪、鍍金輪、鍍金多枚、带金糸、鍔、「寺」墨書き	84
83	御井	豊崎市	8世紀後半～10世紀	住居(奈良平安2)	8世紀後半の住居、内側は土製品	85
84	宮ノ前第6	豊崎市	8世紀～11世紀	住居(奈良平安12)、建立柱建物1棟	上井となる遺構の時期は8世紀前半、源井、須磨大賀、共ノ前遺構の銀河瓦段か	86
85	北後印	豊崎市	8世紀～10世紀後半	住居(奈良平安6)、建立柱建物1棟	平安時代の北後印解	87
86	宮ノ前第3	豊崎市	8世紀～9世紀後半	住居(奈良平安6)、孤立立柱建物2棟	砂網遺構、羽口、円筒状土製品、鐵製刀身、羽口、「口」鏡、「仲」、「足」、「上」墨	88
87	坂井	豊崎市	古墳時代(前期)	住居(古墳1)、方形容溝2番		89
88	後山	雄武市	古墳時代(前期) 平安時代(8世紀後半～10世紀後半)	住居(古墳2)・奈良3・平安9)、孤立柱建物2棟	羽口	90
89	宮ノ前	豊崎市	8世紀～9世紀後半	住居(奈良平安15)		91
90	根井津之森	豊崎市	古墳時代(後期)			
91	從岡山ノ前	豊崎市	古墳時代(後期) 8世紀～11世紀	住居(古墳4・奈良4・平安2)	9世紀の住居1軒、11世紀の「戸」字	92
92	上横田	豊崎市	古墳時代(後期) 8世紀～11世紀	住居(古墳3)・奈良平安8)		93
93	坂井南	豊崎市	古墳時代(前期) 平安時代	住居(古墳8)・平安7)、方形容溝12番		94～97
94	二宮地	豊崎市	10世紀	住居(平安15)、建立柱建物5棟	高方、灰釉陶器腹墨字罐	98
95	後御田2	豊崎市	古墳時代(後期)	住居(古墳4)		99
96	北下条	豊崎市	8世紀～11世紀	住居(奈良平安9)		100
97	下横田	豊崎市	平安時代	住居(平安2)		101
98	帆代理	豊崎市	古墳時代(中期) 中期	住居(古墳2)		102
99	新田	豊崎市	9世紀後半～10世紀後半	住居(平安6)	「丁」、板文墨書き	103
100	大船寺東	豊崎市	9世紀前半	住居(平安2)		104
101	久保塙敷	豊崎市	6世紀時代(前期)	住居(古墳4)		105
102	船の前	須玉町	9世紀～10世紀?	住居(平安1)		106
103	豊原塙	須玉町	9世紀末～10世紀後半	住居(平安1)	大型建立柱建物は平安時代の遺構か?	106
104	神之御前町	須玉町	9世紀～10世紀?	住居(平安1)	施朱塗柱	106
105	御東西	須玉町	9世紀～10世紀?	住居(平安2)、獨立柱建物2棟		106
106	川又南	須玉町	平安時代	住居(平安2)		107
107	西川	須玉町	9世紀後半～10世紀後半	住居(平安2)	跳溝	108・109
108	真壁塙	須玉町	平安時代	住居(平安2)		109
109	塙塙	須玉町	平安時代	住居(平安2)		109
110	塙塙	須玉町	平安時代	住居(平安2)		109
111	熊野塙	須玉町	平安時代	住居(平安2)		109
112	穴田・佐藤	須玉町	9世紀後半	住居(平安1)		109
113	中蛇塙	須玉町	10世紀後半	住居(平安2)		110
114	洲塙	須玉町	10世紀～11世紀	住居(平安2)		111
115	大小久保	須玉町	8世紀後半～12世紀	住居(平安1)、土器詰成造模	セラフ 猫耳の内黒灰、土師質裏の生地灰、布目瓦、伊勢空松纹灰	112
116	南下	須玉町	9世紀後半～12世紀	住居(平安1)		106

番号	済跡名	所在地	時期	遺構	登記事項	山内
117	山之神	須坂町	平安時代	住居（平安）		113
118	鹿巣・鹿性北	須坂町	古墳時代（後期）、奈良、平安時代（8世紀～10世紀後半）	住居（古墳時代・奈良8・平安9）、 窯跡（古墳時代）	「大池」馬糞あり	
119	大豆生印	須坂町	8世紀～11世紀	住居（表土平安9）、石列、带石 建物	右目瓦、輪埴陶器、羽口、「匱」右吉	114
120	七ノ原	須坂町	9世紀後半～10世紀後半	住居（平安10）、獨立柱建物10 棟	ムササビ化粧瓦を被出し、「寛平永寶」、紙 符御器	115
121	北原	明野村	平安時代	住居（平安6）、獨立柱建物10 棟	朱塗	116
122	麻訪草	明野村	平安時代	住居（平安11）		
123	中村越恵神	明野村	平安時代	住居（平安3）		117
124	若狭	明野村	9世紀後半～10世紀後半	住居（平安10）、獨立柱建物10 棟	周辺にも同時期の遺跡あり	118
125	葉面空	明野村	平安時代	住居（平安10）		119
126	寺前	明野村	9世紀後半～10世紀後半	住居（平安約80）、獨立柱建物 約20棟	秋耕跡、火葬施設、火葬墓、繩泊遺構	120・121
127	朝之木	明野村	9世紀後半～10世紀後半	住居（平安11）、獨立柱建物33 棟	馬糞晉、組合ゴテ	122～124
128	大日川西	明野村	古墳時代（後期）、平安時代（8 世紀後半）	住居（古墳1・平安1)、方形周 溝墓12基		125
129	神代	明野村	古墳時代（後期）、奈良、平安 時代（9世紀後半～10世紀後半）	住居（古墳8・奈良1・平安11）	「廻」、「匱」馬糞	126
130	寺門寺	明野村	9世紀前半	住居（平安10）		127
131	船西	明野村	平安時代	住居（平安10）		128
132	寺之内Ⅱ・Ⅲ	明野村	9世紀後半～12世紀	住居（平安10）	繩手夷精 輪埴陶器	129
133	高台・中谷井	明野村	古墳時代（後期）、平安時代（8 世紀後半～10世紀末）	住居（平安10）		129
134	水井裏Ⅴ	明野村	平安時代	遺1處	「小笠原收」與「高城か」	134
135	麻板馬場2	明野村	9世紀後半～10世紀後半	住居（平安10）	駿河地方の土師器等假品	135
136	麻板馬場3	明野村	9世紀後半～10世紀後半	住居（平安10）		136
137	酒山田	明野村	8世紀～10世紀後半	住居（奈良平安4）	茅・油西壁等…の8世紀代の集落跡	137
138	下人内	明野村	9世紀後半～11世紀	住居（平安10）	「延喜式官」、「文」墨書き多款 水垢	138
139	中畠	明野村	古墳時代（前闇）			

報告書一覧

1	佐藤勝彦	1996	「小説式町竹原道跡」	山陰西町教育委員会
2	末木 雅	1974	「山陰西町中央道文化財白神地名源流調査報告書—北巨摩郡小畠町地区内」	山陰西町教育委員会
3	佐藤勝彦	1983	「西門道跡」	小畠町教育委員会
4	佐藤勝彦	1985	「前田道跡」	小畠町教育委員会
5	杉本 光	1999	「上小田道跡〔第1次調査〕」「八、丹考古平成10年度年報」	北巨摩郡西町文化財担当委員会
6	杉本 光・五林李政	2000	「小田道跡〔第2次調査〕」「八、丹考古平成11年度年報」	北巨摩郡西町文化財担当委員会
7	杉本 光	1997	「大坂道跡」「八、丹考古平成8年度年報」	北巨摩郡西町文化財担当委員会
8	杉本 光	1997	「難木道跡」	小畠町教育委員会
9	新井 敦	1959	「高僧1号塚、高僧2号塚」	小畠町教育委員会
10	新井 敦	1988	「城下道跡」	小畠町教育委員会
11	杉本 光	1997	「白石原小学校道跡」	白石村教育委員会
12	杉本 光	1988	「西之久坂道跡」	白石村教育委員会
13	杉本 光	1993	「北上道跡」	白石村教育委員会
14	杉本 光	1999	「古南町黒道跡」	白石村教育委員会
15	前井 政	1991	「上北山道跡、新居庄上塗跡」	北巨摩郡市村文化財担当組合
16	村岡洋水	2002	「西脇南道跡」「八、丹考古平成13年度年報」	北巨摩郡教育委員会
17	蛭井勇貴	1989	「大八山、岸田溝跡」	蛭井町教育委員会
18	蛭井勇貴	1991	「唐折坂内塗跡」	蛭井町教育委員会
19	蛭井勇貴	1987	「瀬戸津道跡、別当十三塚道跡、御当道跡、蛭井道跡」	長坂町教育委員会
20	岡崎範之	1984	「小和田道跡〔第1次調査〕」	長坂町教育委員会
21	津木忠志	1986	「小和田道跡〔小和田北道跡〕」	長坂町教育委員会
22	小當山 勝	1997	「小摩道跡」	長坂町教育委員会
23	村松佳幸	2001	「小坂道跡—第2次発掘調査」	小坂町教育委員会
24	藤原功	2002	「柳原北道跡」	柳原町教育委員会
25	末木 雅	1975	「山陰西町中央道文化財白神地名源流調査報告書—北巨摩郡長坂、東野、吉崎地内」	山陰西町教育委員会
26	末木 雅	1986	「高津道跡」	山陰西町教育委員会
27	村松牛作	2003	「道田道跡」「八、丹考古平成14年度年報」	北巨摩郡市村文化財担当組合
28	平野 俊也	2001	「上原山北道跡」	高岡村教育委員会
29	小沢山 隆	1988	「上原山北道跡」	高岡村教育委員会
30	飯豊範之ほか	1984	「高原川行進跡」	新潟市立民族民俗博物館
31	近代史研究会	1997	「高根塚2号墳〔第1、2次調査〕」	山陰西町教育委員会
32	西條康夫・村松佳幸	1997	「白井塚道跡〔第3次〕」	山陰西町教育委員会
33	小豆山 隆	1997	「千坂上塗跡〔第3次〕」	長坂町教育委員会
34	村松佐幸	2001	「高足道跡〔第2次調査報告書〕」	長坂町教育委員会
35	宮沢公雄	2000	「高屋道跡〔第2次調査報告書〕」	朝日村教育委員会
36	村松佐幸	2001	「安舟西戎跡」	長坂町教育委員会
37	小宮山 隆	1996	「喜多井塗跡」	長坂町教育委員会
38	村松佐幸	1999	「高久芦道跡」	長坂町教育委員会
39	鶴原利博	2003	「高野鹿立行進〔下原〕道跡〔第4次〕」	山陽小野田市教育委員会
40	半野 宏	1988	「門前田道跡〔第1次〕」	武川村教育委員会
41	半野 宏	1988	「門前田道跡〔第2次〕」	武川村教育委員会
42	竹山誠人・平山忠也	2000	「山川供進跡」「八、丹考古平成31年度年報」	北巨摩郡市村文化財担当組合
43	飯豊範之	1998	「高足道跡」	山陰西町教育委員会
44	森原助	1995	「高野神社」	大糸町教育委員会
45	白瀬忠次	2001	「山陰東北夷賀編」 原始・古代・考古〔道跡〕	山陰西町
46	西浦 誠・末田明訓	1994	「大神道跡」	山陰西町教育委員会
47	瀬波泰彦・横嶋公明	2001	「高谷谷戸塚及び高坂道跡」「八、丹考古平成12年度年報」	北巨摩郡市村文化財担当組合
48	伊藤公明	1996	「所持山道跡」「山越一平塚20周年」	北巨摩郡市村文化財担当組合
49	近藤 稔・八色寺心夫	1990	「山ノ口・班田道跡」	山陰西町教育委員会
50	網野忠一	1996	「大野牛塗跡〔第1回〕」	大糸町教育委員会
51	八木忠夫	1988	「牛ノ子道跡〔中世道〕」	山陽小野田市教育委員会
52	新井 哲・八木寺心夫	1987	「今西道跡」	山陽小野田市教育委員会
53	伊藤公明・瀬波泰彦	2000	「寺吉正跡〔第2次発掘調査報告〕」	大糸町教育委員会
54	山木、今尾	1997	「牛ノ口道跡〔第1次・第3次調査〕」	山陰西町教育委員会
55	近藤勝彦	1983	「牛ノ口・八木道跡」	大糸町教育委員会
56	高吉正樹	1997	「牛の歩道跡」「麻原北道跡、大木神跡・草薙堂道跡・当り町道跡、萬葉空車道跡、高丸神跡・阿波の筋道跡、一山道跡、新原道跡」	山陰西町教育委員会
57	八井寺忠夫	1989	「高ノ神道跡」	山陰西町教育委員会
58	南京正樹	1997	「仙台寺跡・高木道跡・八牛道跡・持井北道跡・ハッキ北道跡・下原店跡・末田道跡・木出道跡」	萬葉町教育委員会
59	南京正樹	1994	「高保正樹」	萬葉町教育委員会
60	南京正樹	1994	「高保正樹」	萬葉町教育委員会
61	森 和敏	1992	「青木北道跡・魚の木道跡」	山梨県教育委員会
62	鶴原助・塙 伸	1997	「白山・道跡〔第2次調査と興味ある古文書〕」	社會問題研究調査会
63	河曾正樹	1995	「七社・通路」	高根町教育委員会
64	河曾正樹	1987	「西門道跡・池田道跡」	高根町教育委員会
65	河曾 武・三上村利彦	1993	「川口坂上通路」	山梨県教育委員会
66	河曾 武	1998	「高木道跡・青木道跡」	山梨県教育委員会
67	河曾 武・河曾正樹	2002	「小池神の行進跡」「八、丹考古平成15年度年報」	北巨摩郡市村文化財担当組合
68	田口明子	2000	「高知坂跡・大木上塗跡・宮の前道跡・高見町道跡・大木道跡」	山陽小野田市教育委員会
69	高宮正樹	2001	「高宮正久坂跡」「八、丹考古平成16年度年報」	北巨摩郡市村文化財担当組合

70	成利 司・保恵康夫	1996	『源氏物語』	山梨県教育委員会
71	鶴巣 勉	2000	「丁之坪漫遊」(東光)』	豊崎町教育委員会
72	岡田慶男	1998	『石之坪漫遊』「八ヶ岳古平城9年度年報』	北巨摩郡町村文化財財團委員会
73	山下幸司	1992	『上木田漫遊』	春日井市教育委員会
74	桃山士子	2003	『大字坂上漫遊』	春日井市教育委員会
75	中山誠一	1993	『富民漫遊』	山梨縣教育委員會
76	山・李尚	1991	『白神山漫遊』2通合』	山梨縣教育委員會
77	山下孝司	1988	『金山漫遊・下木川漫遊・中道漫遊』	山梨縣教育委員會
78	山下孝司	1996	『水無瀬』	山梨縣教育委員會
79	山下孝司	1995	『丁之坪漫遊』	山梨縣教育委員會
80	山下孝司	1985	『中田小学校消滅』	山梨縣教育委員會
81	山下孝司	1988	『中田漫遊』	山梨縣教育委員會
82	山下孝司	1994	『立石漫遊』	山梨縣教育委員會
83	山下孝司	1991	『宮ノ森山漫遊・北掌原漫遊』	山梨縣教育委員會
84	岸野 伸・鈴懸鷹一	1992	『丁之坪漫遊』	山梨縣教育委員會
85	深坂慶史	1986	『駒井流域発掘調査報告書』	山梨縣教育委員會
86	山下孝司	1997	『金ノ原山漫遊』	甲府市教育委員會
87	山下孝司	1999	『足後川漫遊』	甲府市教育委員會
88	山下孝司	1995	『宮ノ前原漫遊』	山梨縣教育委員會
89	山下孝司	1996	『丁之坪漫遊』	甲府市教育委員會
90	山下孝司	1989	『丁之坪漫遊』	甲府市教育委員會
91	山下孝司	1987	『中本川漫遊・堂の前流域』	甲府市教育委員會
92	伊藤正志	1997	『駒田山・旗浜鉱』	甲府市教育委員會
93	秋山千子・鶴間俊明	1996	『上高尾漫遊』	甲府市教育委員會
94	山下孝司	1984	『駒井流域』	甲府市教育委員會
95	山下孝司	1989	『駒井川』	甲府市教育委員會
96	山下孝司	1996	『駒井南・大池』漫遊』	甲府市教育委員會
97	伊藤正志	1996	『駒井流域(第6次区域)』『丁之坪・平成7年度』	北巨摩郡町村文化財財團當主
98	岡田慶也ほか	1998	『丁之坪漫遊』	北巨摩郡町村文化財財團當主
99	伊藤正志	1995	『飛山第一漫遊』	更級町教育委員會
100	山下孝司	1991	『眼下名漫遊』	足柄上郡教育委員會
101	山下孝司	1991	『下野松漫遊』	足柄上郡教育委員會
102	山下孝司	1996	『相模原漫遊』『年報 平成8年度』	足柄上郡教育委員會
103	伊藤正志	1996	『茅田漫遊』	山梨縣教育委員會
104	新津 義和ほか	1996	『大船寺春秋改稿』	山梨縣教育委員會
105	水山明利	1984	『久保原敷地跡』	山梨縣教育委員會
106	須玉町	1986	『演王町第一卷・古代・中世』	須玉町
107	山崎志之助	1986	『白山漫遊』	須玉町教育委員會
108	八幡山 仁夫	1988	『PFC山崎場』	山崎町教育委員會
109	山野地ひ跡	1986	『丁之坪漫遊』	須玉町教育委員會
110	山野地ひ跡	1994	『中越漫遊』『塙山道遊』	須玉町教育委員會
111	山野地ひ跡	2000	『飛来漫遊』『丁之坪春秋平成12年度年報』	須玉町教育委員會
112	山野地ひ跡	1993	『八小路漫遊』	須玉町教育委員會
113	山野地ひ跡	2003	『山・飛来跡』	須玉町教育委員會
114	木下 伸ひか	1976	『山越山・宍道湖文化財勿使地免耕畠地當者』(北巨摩郡笛吹町地内)』	山梨縣教育委員會
115	佐野 伸・無題初一	1998	『上ノ原漫遊』	上ノ原町教育委員會
116	大森隆巳	1988	『北山漫遊』	朝野村教育委員會
117	大森隆巳	1993	『千手木本』・立道跡、池の下道跡、鶴石立道跡、小町道御津道跡	朝野村教育委員會
118	大森隆巳	1991	『御法度跡・油田跡』	朝野村教育委員會
119	大森隆巳	1989	『鶴石立道跡・奥多摩老道跡・白山1道跡』	朝野村教育委員會
120	明野村郷土文化財センター	1999	『寺前御跡考古調査報告』	明野村教育委員會
121	明野村郷土文化財センター	2000	『寺前御跡考古資料』	明野村教育委員會
122	佐野 雄	2002	『御ノ木漫遊』	明野村教育委員會
123	大山秀弓	2003	『御ノ木漫遊』』	明野村教育委員會
124	大山秀弓	2004	『御ノ木墓・水戸原V墓跡』	明野村教育委員會
125	高田重治ほか	2001	『大日川底遺跡』	明野村教育委員會
126	佐野 雄	1994	『神說』	明野村教育委員會
127	宮武公理	1987	『音門山漫遊』	明野村教育委員會
128	佐野 雄	1986	『島義漫遊』『八ヶ岳古平城9年度年報』	北巨摩郡町村文化財財團當主
129	佐野 雄	1998	『村之内3・立道跡、立谷・中谷井漫遊』	明野村教育委員會
130	佐野 雄	1999	『灰鳥』	明野村教育委員會
131	佐野 雄	1997	『トガ内道跡・無数堀跡遺跡・中原跡』	明野村教育委員會
132	佐野 雄	2005	『高丸山遺跡』	明野村教育委員會

第3章 古墳時代の遺構と遺物

腰巻遺跡第1次発掘調査で検出された古墳時代の遺構は、以下に報告する豊穴住居17軒である。なお2号、13号から15号、23号、25号、29号、31号、33号、39号、40号、45号、47号から50号の各住居番号は、確認時に遺構認定したものの掘削調査の結果、有意な遺構と判断されなかつたため欠番とする。

1号住居（第6図～第7図、写真図版1）

位置・重複 調査区南西隅に位置し、溝跡と重複する。住居埋土の断面観察により、溝跡が新しいことを確認した。

形状・規模 南北推定5.5m、東西5.9mの方形で、豊穴は深さ0.6mである。床面積は27.2m²。主軸方向はN-16°-Wである。

床 面 床面は地山のしまった細砂層を利用しており、貼床ではない。全面にわたり固く踏みしめられている。

壁 溝 壁際には壁溝らしき小溝が検出された箇所もあるが、明確な壁溝は設けられていない。

カマド 北壁中央で、灰色粘質土と焼けた礫、焼土を検出した。カマドは溝跡に切られており、原形をとどめない。溝跡南側に粘質土が広がっていることから、おそらく、溝の掘削以前にすでにカマドは破壊されていたものと思われる。北壁には短い徑道が検出された。

柱 穴 柱穴と思われる規則正しく配置されたビットが4箇所で検出された。複数のビットが重複し合って検出された。

遺 物 埋土第1層（黒色土）から、大小の難に混じって多数の十輪器破片が出土している。6図6の須恵器壺は床面から10cm程度浮いた第2層出土である。6図と7図に図示した遺物は、いずれも破片で、第1層出土である。7図8はミニチャア土器である。古墳時代後期の土師器壺類破片は90点、0.718kg、古墳時代後期の土師器甕類破片は747点、12.69kg、平安時代の土師器壺類破片が2点、0.02kg、須恵器壺類破片が0.12kg、須恵器甕類破片は17点、0.42kg、石器5点、1.55kg、石製筋輪車1点0.03kgが出土している。平安時代の土師器破片は、調査区外で近接する住居跡かあるいは溝跡に属する遺物と思われる。

時 期 住居の時期を直接的に示すと思われる遺物は出土していないが、破片資料は疑ね古墳時代後期に位置づけられる。6図6の須恵器壺から7世紀前半段階に位置づけられよう。

調査所見 柱穴と柱穴に連絡する小溝、北壁沿いの壁溝の検出数から、本住居は2回以上の拡張があったものと推測される。カマドの検出状況、床面上に遺物が残されていないことから、本住居は廃絶時に道具類が片付けられ、また、カマドが破壊されたものと思われる。埋土が自然堆積した後、第1層上面に多数の礫が土器破片とともに廻集されたようである。遺物には少なからぬ平安時代の土師器破片が混じっている。本住居は、遺構の特徴から古墳時代後期に属するものと推測されるが、おそらく調査区外で9世紀代の平安時代住居が近接しているものと推測される。

3号住居（第8図～第10図、写真図版1）

位置・重複 調査区の南西隅に位置する。重複する遺構はないが、4号住居と近接する。

形状・規模 南北4.2m、東西4.1mの方形で、豊穴は深さ35cmである。床面積は14m²で、主軸方向はN-25°-Wである。

床 面 床面は地山のしまった細砂層を利用しており、貼床ではない。全面にわたり固く踏みしめられている。

壁 溝 西壁と南壁の一部に小溝が検出されたほかは、壁溝は確認されなかった。

カマド 北壁中央で灰色粘質土、袖石と焼けた平たい礫、焼土を検出した。短い煙道が検出された。袖石2枚は、原位置で立った状態で検出されたが、カマドは人為的に破壊されていると思われる。

柱 穴 柱穴は検出されなかった。浅い小ビットがみられたが、いずれも地山隙を抜き取った痕跡と思われる。

遺 物 大半の遺物は第4層と第5層から出土している。9図5の鉢がカマド西側の床面から5cm程度浮いた

位置で、9号6がカマドで出土している。鉄製品2点が出土している。古墳時代後期の土師器壺類破片は4点0.58kg、上師器壺片は308点5.58kg、平安時代の土師器壺皿破片は74点0.5kg、須恵器壺類破片は7点0.22kgが出土している。平安時代の土師器片は4号住居からの混入と考えられる。

時期 住居の時期を直接に示すと思われる遺物は出土していないが、図示した資料から7世紀前半段階と想定しておきたい。

5号住居（第14図～第16図、写真図版2）

位置・重複 調査区の南西隅に位置し、4号住居と重複する。4号住居は奈良時代の住居であり、5号住居より新しい。

形状・規模 南北4.5m、東西4.8m、竪穴は深さ45cmである。床面積は推定17.5m²、主軸方向は、N-1°-Eである。

床 面 床面は大小の礫が多数混じる砂礫層で、固く踏みしめられた箇所や貼床は確認されていない。

壁 溝 検出されていない。

カマド 北壁のやや西寄りで、袖石と焼土、粘質土が検出された。2枚の袖石は原位置で立って検出されたが、カマドは人為的に破壊されているものと思われる。

柱 穴 床面に地山の礫が多数露出しているためであろうか、柱穴は一切、確認されなかった。

遺物 墓上に大小の礫が多数含まれており、遺物は全てそれらの礫とともに出土している。礫の下の床面直上で出土した遺物もあるが、いずれも小破片で、住居に直接関連すると確信できる出土状況ではない。唯一の例外は15図8の土師器壺で、カマド中央部で逆さになって出土している。15図6は破片を接合すると完形に近く復元されるが、埋土中から散在して出土している。古墳時代後期の土師器壺類破片は90点0.82kg、甕類破片は362点8.5kg、奈良時代の土師器壺皿破片は5点0.08kg、須恵器壺類破片は8点0.15kg、石器1点0.14kg、鉄製品1点が出土している。

時期 高床を別にすると住居に直接關すると思われる遺物はないが、古墳時代後期、7世紀後半段階と想定しておきたい。

調査所見 調査区のなかでも4号住居、5号住居が位置するあたりは、地山に大小の礫が多数含まれており、本住居の埋土に混じる多數の礫は、1号住居等の掘削時に地山から掘り出されて、廃棄されたものと想像できる。本住居の埋土には洪水による砂礫の堆積は確認されておらず、また、他の住居でも洪水の発生を示唆する状況は認められない。したがって本住居埋土の礫は、少なくとも洪水によりもたらされたものとは考えられない。

8号住居（第17図～第19図、写真図版2）

位置・重複 調査区の南西寄りに位置し、9号住居と重複する。9号住居は奈良時代の住居である。南側に小型の35号住居が接する。35号住居がやや新しい時期と思われ、あまりに近接しているため、同時に並存したものとは思われない。

形状・規模 南北5m、東西5.8m、竪穴は深さ35cmである。床面積は20.8m²、主軸方向はN-6°-Eである。

床 面 固くしまった地山の細砂層を床面とし、貼床は検出されていない。南壁の中央から住居の中央部、北壁中央のカマド周辺に床面が特に固く踏みしめられており、後述する4本の柱穴の外側はさほどしまっていない。

壁 溝 全周にわたって横溝らしき小溝が検出されたが、非常に浅く、單に床面と壁面の接点がやや深めに掘り込まれたに過ぎないのかもしれない。

カマド 北壁の中央で焼けた細長い礫と焼土が検出されたが、9号住居に切られており、詳細は不明である。

柱 穴 規則正しく配置された4本の柱穴が中央付近に検出された。北東角の住穴は井戸に深く10cm程度であるが、ほかはいずれも40cmほどの深さに掘り込まれている。この4本の周間に最も30cmから40cm程度の深さのピッ

トが検出されている。南西隅のビットは規則正しく配置された4本の柱穴のうち西側の2本と直線的に並んでいるため、住居の構造に係るものと想像される。西壁から柱穴のうちの1基に延びる小溝が検出されている。

遺物 19図4は胸部で半分に割られた土師器壺であるが、住居北東隅付近の床面土で出土している。これ以外の遺物は、一部に床面直上から出土したものがあるが、多くは埋土巾から出土した。床面上で出土した遺物も小破片のみである。古墳時代後期の土師器壺類は265点3.04kg、甕類破片は308点9.3kg、須恵器壺類破片は2点0.2kgが出土している。

時期 住居の時期を端的に示す資料が少ないが、埋土出土の遺物から、6世紀末から7世紀前半頃の遺構と想定したい。

調査所見 住居埋土には炭化材小片や旋土粒子、焼土塊が含まれている。住居の床面も一部が焼上化していた。しかし、焼け落ちた炭化材などは一切検出されず、本件層が焼失住居であることを示す明快な状況は確認されなかった。埋土の断面観察によると、住居は自然堆積した埋土で埋められた後、東西両壁付近に大小の跡が人為的に投棄されたようである。したがって住居廃絶とともに住居に火をかけるような行為があったとしても、その後、焼け落ちた建築材等は片付けられたものと考えられる。

10号住居（第22図～第23図、写真図版2）

位置・重複 調査区南西寄りに位置し、9号住居、12号住居と近接する。9号住居は奈良時代の遺構、12号住居は古墳時代後期でもやや新しい時期の遺構である。本住居では、2軒の住居の重複が認められるが、古い遺構については平面形を確認することができなかった。

形状・規模 新しい住居は南北3.1m、東西推定3.4mの方形、竪穴の深さは40cmである。古い住居は南北3m程度でおそらくは方形の遺構であったろうと推測される。新旧住居全体の床面積は10.3m²で、新住居の主軸線方向はN-E-Eである。

床面 固くしまった地山を床面としており、貼床は検出されていない。カマド西側には大きな地山の跡が床面上に突出している。

壁溝 南壁と西壁付近で小溝が検出されたが、浅く塗溝とは考えにくい。

カマド 北壁中央で焼跡、旋土、粘質土が検出されたが、カマドは原形をとどめていない。短い煙道が検出されている。

柱穴 住居の南東隅で深さ30cmの土坑が検出されたが、柱穴は確認されなかった。土坑は床面を切って掘り込まれ、かつ住居と同じ埋土で埋まっていた。住居廃絶時には開口していたと考えられる。

遺物 23図10はカマド西側の埋土中、床面から10cmほどの位置で、ほぼ完形で出土している。23図11は、カマド内とその周囲から出土した破片が接合して、完形の半分程度の大きさに復元されている。ほかの遺物はいずれも埋土中からの出土上で、破片資料ばかりである。古墳時代後期の土師器壺類破片は65点0.98kg、甕類は157点6.17kg、須恵器壺類破片は3点0.08kgがそれぞれ出土している。古い住居の埋土から出土した遺物はない。

時期 住居の時期を直接的に示す資料はないが、新住居は、埋土出土遺物から古墳時代後期、7世紀前半頃の遺構と考えておきたい。古い住居はそれ以前の時期としかいえない。

調査所見 不規則な平面形から、2軒以上の遺構が重複していると考えた。実際、埋土の断面観察でも西側で遺構の重複を確認することができる。しかし、古い遺構の平面形は確認できず、カマド等の付属施設についても検出されなかった。

11号住居（第24図、写真図版3）

位置・重複 調査区南西寄りで検出された。12号住居と近接する。

形状・規模 南北2.5m、東西2.6mの小型で方形の竪穴遺構である。竪穴の深さは30cm程度である。床面積は3.4

床、主軸方向はN-13°-Wである。

床 面 固くしまった地山を床面にしており、貼床は検出されていない。

壁 溝 西壁から北壁にかけてと南東隅に小溝を検出したが、浅く壁溝とは考えられない。

カ マ ド カマドは検出されなかった。北壁近くの床面が若干焼土化していたが、袖石の埋め込み痕跡や粘質土等は確認されず、常設のカマドが設置されていたとは考えられない。

柱 穴 検出されなかった。

遺 物 遺物はいずれも破片で、埋土の上層部で出土している。古墳時代後期の瓦類破片は19点 0.17kg、甕類は57点 1.7kg、須恵器甕類破片1点 0.01kgが、それぞれ出土している。

時 期 埋土中から出土した遺物をもとに想定すると、古墳時代後期、7世紀後半と考えておきたい。

調査所見 後述する12号住居もほぼ同時期であるが、あまりに近接しており、同時に並存したとは考えにくい。近接することと、11号住居遺物がいずれも埋土上層からの出土であることを考え合わせると、これらの遺物は12号住居から混入した可能性もありうる。小型の竪穴造様式でカマドも確認されない木住居の機能について、有用な情報は得られなかった。

17b号住居（第29図～第31図、写真図版4）

位置・重複 調査区中央からやや北寄りに位置し、17a号、17c号住居に近接する。調査区北西部から南東にかけて旧流路と思われる黒色土帯があり、本住居は旧流路内に位置する。

形状・規模 南北4m、東西4mの方形で、窓穴は深さ50cm、床面積は13.9m²。主軸方向はN-2°-Wである。

床 面 旧流路に住居が設けられているためか湧水がひどく、固くしまった床面は確認できなかった。尖端図に示した床面は、カマドとカマド底を基準に想定した。掘削調査の過程では、埋土下層に燒土粒子と炭化物粒子が含まれていたため、それらの有無をもって床面を確認したが、その高さはカマドから想定される床面の高さと整合した。

壁 溝 床面と同様、その有無を確認できなかった。

カ マ ド 北壁中央で、粘質土、焼土、疊、煙道を検出したが、原形はとどめていない様子で、湧水のため、本来袖石を有していたかどうかを確認することはできなかった。

柱 穴 湧水のために確認できなかった。

遺 物 遺物は埋土中と床面直上から出土しているが、ひどい湧水のために遺物が泥と化した埋土といっしょに動いてしまい、正確な出土位置を記録できなかった。奈良時代の遺物が灰中に含まれるが、これは掘削調査の際、黒色土中で壁の確認が遅れ、隣接する17c号住居にまで食い込んで掘削したため、一部の遺物を17b号住居分として取り上げたことによる。加えて、元末、17c号住居からの混入があったことも考えられる。50図2の手づくね整形の土師器は、住居北東角の床面直上から出土した。古墳時代後期の土師器瓦類破片は28点 0.48kg、甕類は106点 2.6kg、奈良時代の土師器瓦類は2点 0.034kg、甕類は8点 0.54kgが出土している。

時 期 資料数は少ないが、カマドの形状も勘案すると、古墳時代後期、7世紀前半としたい。

調査所見 本生居のほかにも旧流路内に数軒の生居が検出され、いずれも湧水のために重複の有無の確認、壁面と床面の検出、遺物の取り上げに苦慮し、満足な調査はできなかった。手探り状態で壁面を探してようやく平面形を確認したが、この辺に隣接し合う住居間で遺物が混じり合い、分別できなくなってしまったものもある。これら分別不可能な遺物は、32図3～6に一括して提示した。湧水は水田耕作にともなう滲水で、農閑期には山水しない。

17d号住居（第32図、写真図版4）

位置・重複 調査区中央北寄りに位置し、16号住居、17a号住居と近接する。16号住居と南西角でわずかに重複する。

形状・規模 南北2.9m、東西2.8mの方形で、窓穴は深さ0.5mである。床面積は6.1m²。主軸方向はN-102°-Wで

ある。

床 面 溝水のために床面の状況を確認できなかった。地山起源の黄褐色土が確認されることから、地山をそのまま床面としたか、黄褐色土の泥床であったと推測される。

壁 溝 北西角に小溝を検出したが、すぐに水が湧いてきたため、ほかの箇所で既溝と思われる施設を確認することができなかった。

カ マ ド 東壁のやや南寄りに株石、粘質土、焼土を検出した。東壁から長さ 1.5 m の柱道が 17 b 号住居に向かって延びているが、17 b 号住居の調査の過程で、気づかないまま換土と疊 2 点を残して破壊してしまった。

柱 穴 溝水のため柱穴の有無を確認できなかった。

遺 物 埋土中から土師器破片と土師器甕破片が出土したほか、土師器甕類破片 61 点 0.99 kg、須恵器甕類破片 2 点 0.035 kg、須恵器甕類破片 1 点 0.02 kg が出土した。

時 期 白土遺物が限られ、また溝水のために正確な出土位置を確認できなかったが、それらから判断すると 7 世紀前半頃と思われる。

調査所見 南壁沿いに礫がまとまって山立したが、床面から 20 cm 近く浮いているため、埋土中に投棄されたものと思われる。

18 号住居（第 33 図～第 36 図、写真図版 4）

位置・重複 調査区南寄りに位置し、18 a 号住居と 18 b 号住居の 2 軒が重複している。以下、18 a 号住居と 18 b 号住居とに分けて報告する。

18 a 号住居（第 33 図～第 35 図、写真図版 4）

形状・規模 南北 2.5 m、東西 2.9 m の方形で、竪穴の深さは 0.4 m である。床面積は 6.5 m²。主軸方向は、N-85° - E である。

床 面 脏くしまった黄褐色土の地土をそのまま床面としている。

壁 溝 検出されなかった。

カ マ ド 検出されなかった。

柱 穴 検出されなかった。

遺 物 古墳時代後期の土師器不類は 13 点 0.13 kg、土師器甕類破片が 47 点 0.83 kg、須恵器甕類破片 4 点 0.06 kg が埋土から出土している。18 b 号住居と接合する破片が多く、18 a 号住居に直接関連するものは少ないと思われる。奈良平安時代の遺物は出土していない。

時 期 18 b 号住居を破壊して掘り込まれていることから、18 b 号住居より新しい遺構である。奈良平安時代の遺物が一切みられないことから、7 世紀代の住居と考えたい。

調査所見 竪穴は浅く残るのみであったため埋土の堆積状況を図化しなかった。埋土はほかの住居と同様、しまりのない黒色土で、堆積状況から 18 a 号住居が 18 b 号住居を破壊して掘り込まれていることが確認された。埋土中に投棄された礫が多数出土している。特に西壁沿いに多数の礫が、壁に沿って列状に検出された。この状況からも 18 a 号住居があたらしいことが確認された。

カマドを探査したが、焼土、釉石、焼瓦、粘質土など、カマド施設を思わせる状況は一切確認されなかった。実測図には、床面に密着した礫の分布を示したが、これらをみてカマドと思しき箇所は認められない。

18 b 号住居（第 33 図・第 35 図～第 36 図、写真図版 4）

形状・規模 南北 6.7 m、東西 5.0 m の長方形で、竪穴の深さは 0.3 m である。床面積は 29.5 m²、主軸方向は、N-99° - E である。

床 面 地山を床面としている。壁沿いを陰いで固く踏みしめられている。

壁 溝 東壁以外の壁沿いで小溝を検出したほか、北壁から南側へ延びる小溝が検出された。

カマド 東壁からやや内側に寄った位置に、焼土と袖石と思われる板状跡が検出された。土師器壊破片も多数出土している。

柱 穴 検出されなかった。南西角で直径 1.2 m、深さ 0.6 m の土坑が検出された。土坑埋土は踏み固められておらず、住居使用時には開口していたものと思われる。遺物は出土していない。

遺物 墓土とカマド周辺から、古墳時代の上師器環類破片 71 点 0.91 kg、甕類破片 88 点 3.99 kg が出土している。34 図 1 の环はカマド東面床面から出土し、ほぼ完形である。35 図 6 の环は住居南東隅から出土しており、ほぼ完形である。36 図 1 の高环は、カマド南側で東壁沿いから出土しており、やはりほぼ完形品である。

時期 出土遺物は破片が多いが、そのなかで完形に近いものが数点ある。これらで床面出土あるいはカマド周辺から出土したものを探査すると、本住居は 6 世紀末から 7 世紀初頭頃と考えられる。

調査所見 18a 号住居と同様、埋土を固化しなかったが、やはり自然堆積したと想われる黒色土で埋まり、埋土巾には疊が投棄されていた。カマドの南側 0.3 m の床面上に大きな疊 2 点と多孔石 1 点がまとまって置かれていた。多孔石は縄文時代の石器と思われるから、連跡内で出土した多孔石を搬入したものと思われる。

29 号住居・39 号住居（第 48 図・第 63 図）

調査所見 調査区中央北寄りの 28 号住居と 37 号住居との間で古墳時代と平安時代の遺物がまとまって出土したため 29 号住居と 39 号住居としたが、住居プランを確認できなかった。そこでトレッチにより調査を進めたが、深い位置で出土品がないこと、床面などが検出されなかったことなどから、最終的に住居と判断することはできなかった。なぜ遺物がまとまって出土したのか解明できなかった。

30 号住居（第 48 図～第 50 図、写真図版 6）

位置・重複 調査区中央北寄りに位置する。

形状・規模 南北 3.3 m、東西 3.4 m の方形で、豈穴の深さは 45 cm。床面積は 8.9 m² で、住居の主軸方向は N-20° - W である。

床 面 調査中に大量の湧水があったため、床面の状況を確認できなかった。

壁 溝 湧水のため床面上で造構確認できなかった。

カマド 湧水を排水するためにやむなく排水溝を重機で掘削したところ、不運にもカマドを破壊してしまい充分な確認ができなかったが、北壁中央よりやや東寄りで焼土と焼跡が検出された。

柱 穴 湧水のため床面上で造構確認できなかった。

遺物 カマドと思われる地点で赤彩された上師器環（49 図 1）と完形の土師器甕（49 図 5）が出土した。またカマド西側、住居北西角近くの床面上ではほぼ完形の土師器甕（50 図 3）が、住居東壁中央から 50 図 2 の球胸甕が、49 図 2 の土師器環はカマドと思われる地点から 70 cm ほど南側の床面上でそれぞれ出土している。これらを含めて住居全体から古墳時代の上師器環と破片が 35 点 0.58 kg、土師器甕と紋片が 73 点 7.88 kg、切妻器甕破片 3 点 0.06 kg、奈良時代と思われる土師器環破片が 10 点 0.07 kg、出土位置は不明だが刀子 1 点が出土している。

時期 山手品の特徴から古墳時代後期の 7 世紀後半と思われる。

調査所見 住居床面からは焼土と炭化した建物部材が出土している。湧水がひどく出土したはしから崩れていってしまったため、住居全体での出土状況を写真で記録することができなかったが、図示したとおり部材は放射状に出土している。

34号住居（第53図～第54図、写真図版7）

位置・重複 調査区中央に位置する。38a号住居と38b号住居と重複する。34号住居が最も古い遺構である。

形状・規模 南北推定6.6m、東西6.7mの方形で、竪穴の深さは25cmである。床面積は推定38.9m²で住居主軸方向はN-0°である。

床 面 固くしまった黄褐色の砂質地山を床面としている。

壁 溝 略滑いに浅い溝を検出した。

カマド 北壁中央で焼土を検出した。調査区全体で湧水が激しいためやむなく重機を用いて排水溝を掘削したところ本住居の北側1/4を破壊してしまった。この掘削作業の際に地山露と思われる大きな花崗岩と焼上が検出された。この焼上はカマドと思われる。

柱 穴 38a号、38b号住居と重複しない北側で2ヶ所の柱穴を検出した。また38a号住居内でも2ヶ所で柱穴を検出した。38a号住居内で検出された柱穴は34号住居の小溝との位置関係から34号住居に属する施設と判断した。以上により本住居には4本の柱穴が備わっていたと考えられる。

遺物 54図6の球形甕は、胸中央で故意に割られているようであるが、カマドがあったと思われる地点の南側の床面上で出土している。これを含めて住居全体から古墳時代の土師器壺破片31点1.02kg、土師器甕破片128点2.25kg、須恵器甕破片25点0.47kg、刀子破片1点が出土した。

時期 出土遺物から古墳時代後期7世紀前半代の遺構と思われる。

調査所見 本調査区中では最大規模の住居であるが、排水溝で北壁を失ったのは残念であり辽闊であった。4ヶ所で検出された柱穴から壁に向って小溝1～3本が延び、何らかの施設の存在と改修が伺えるが、施設の性格を示す資料は得られなかった。

35号住居（第60図、写真図版7）

位置・重複 調査区南西寄り、8号住居南に隣接する。重複はないが8号住居とごく近接する。

形状・規模 南北2.3m、東西1.8mの方形の小型住居で、竪穴の深さは40cmである。床面積は2.8m²、住居の主軸方向はN-93°-Eである。

床 面 明黄褐色の固くしまった砂質地山を床面としており、貼床は検出されなかった。

壁 溝 検出されなかった。

カマド 東壁中央で焼土、礫、浅いくぼみが検出された。礫に被熱痕は認められず、カマド構築材かどうか分からぬ。

柱 穴 検出されなかった。

遺物 古墳時代の土師器壺破片8点0.04kg、土師器甕破片37点0.47kgが埋土から出土した。図示できるものはなかった。

時期 造構の時期を明示する出土品はなかったが、出土品の特徴から古墳時代後期7世紀前半代の遺構と思われる。

調査所見 本調査区の住居と思われる遺構のなかでは最小規模である。明確ではなかったがカマドと思われる施設が検出されていること、18a号住居、43b号住居など小型の住居がほかにも検出されていることから、本遺構も住居と考えた。

38a号住居（第53図・第55図～第57図、写真図版7）

位置・重複 調査区中央に位置し、34号住居、38b号住居と重複する。本住居は34号住居より新しく、38b号住居より古い。造構検出当初は、34号住居と38号住居の2軒が重複すると判断したが、調査が進捗するにつれ38号住居がさらに2軒の重複であることが判明した。

形状・規模 西壁沿いで検出された周溝の本数から本住居は1回の拡張を経ていると想定される。拡張後の住居は南北4.7m、東西5.5m、床面積は20.9m²である。拡張前の住居は南北4.7m、東西4.8m、床面積は18.4m²である。豊穴の深さはともに50cmである。住居主軸方向はN-2°-Eである。

床 面 明黄褐色の固くしまった砂質地山を床面としており、貼床は検出されなかった。

壁 溝 実際に浅い溝を検出したほか、床面上でも小溝が検出された。

カ マ ド 北壁中央で煙道、粘土、礫、焼土、浅いくぼみを検出した。煙道は34号住居埋土を掘り込み灰色粘土を交えた土で築かれている。両袖石は比較的の原形を留め、カマド本体を構築したと思われる被熱した粘土塊も出土している。天井石や袖石の一部は外されて移動しているようである。

柱 穴 床面上で数基のビットが検出されたが、うち2基は本住居が切る34号住居の柱穴と思われる。ほかのビットで本住居の構造にかかわると推測されるのは、住居中央の東寄りで検出された深さ40cmのビットである。

遺 物 調査の当初は38a号住居と38b号住居の出土品を分別することなく処理していた。38号住居全体として取上げたものは、古墳時代の土師器壊破片101点0.49kg、土師器壊破片481点6.44kg、奈良時代の土師器壊破片38点0.21kg、須恵器壊破片12点0.09kg、須恵器壊破片11点0.2kgである。38a号住居として取上げたものは、古墳時代の土師器壊破片40点0.33kg、土師器壊破片260点11.35kg、奈良時代の土師器壊破片24点0.35kg、須恵器壊破片7点0.22kg、須恵器壊破片22点0.84kg、筋轆車1点、刀子1点である。59図～60図に示した出土品のほとんどは埋土中から破片状態で出土したものである。56図1の土師器壊は住居北東角寄りの東壁沿いで床面から10cm程度の高さで横倒しになって出土している。口縁部の一部が欠損しているのがほぼ完形である。57図6の筋轆車はカマドの70cm南の埋土中で出土した。

時 期 山土状況から本住居の時期を明示する資料はないが、34号住居を切り、奈良時代と思われる38b号住居に切られる重複関係と埋土中の出土品から、古墳時代後期7世紀後半の遺構と思われる。

調査所見 カマド南側から住居中央にかけて検出された不定形のくぼみの中央には地山の大きな礫がある。床面では暗褐色上で充填された土坑のようにみえたため発掘したが、おそらくは住居を構築する際にこの大きな礫を掘り出そうとした痕跡ではないかと思われる。床面では東西南北それぞれの方向に延びる小溝を検出したが、その機能を示唆する情報は得られなかった。

41号住居（第64図～第66図、写真図版8）

位置・重複 調査区北西隅に位置する。

形状・規模 南北3.6m、東西3.7mの方形で、豊穴の深さは30cmほどである。床面積は11.0m²、住居の主軸方向はN-98°-Wである。東側は地山に礫が多く含まれるためか壁が大きく崩んでいる。

床 面 黒色土と黄褐色土が混じる地山を床面としている。貼床は検出されなかったが床は固くしまっていた。地山には多数の礫が混じり、壁と床面に露出している。

壁 溝 東壁以外で浅い溝が検出された。

カ マ ド 西壁の中央寄り西寄りで比較的の原形を留めたカマドが検出された。カマドは袖石に灰色の粘土を貼り付け、扁平で細長い礫を天井にわたしてある。大井石はずり落ちて原位置を留めていない。カマド内から完形の土師器壊と壊破片が出土した。カマド底部には支石が残る。

柱 穴 検出されなかった。

遺 物 カマドとカマド南側の住居南西角で完形ないしほぼ完形の土師器壊5点が出土したほか、住居床面上で土師器壊の大型破片が出土している。65図1と66図1、66図5はカマド内で出土した。65図6、65図9、65図10、65図11、66図2、66図3は住居南西角の床面上でまとまって出土した。65図8のみ床面から10cmほど浮いて出土し、半分程度の大きな破片状態であった。これらを含めて住居全体の出土品は、古墳時代の土師器壊破片95点1.88kg、土師器壊破片239点17.2kg、小型土器1点0.03kg、螺貝1点である。

時 期 カマド内とその周辺の出土品は住居に直接的に属するものと思われ、古墳時代後期7世紀前半の遺構と思われる。

調査所見 焼失住居ではないにもかかわらず本住居内に多量の土器が残された理由は分からぬが、古墳時代後期の住居での十器セットを示すものと考える。

43a号住居（第69図～第71図、写真図版8）

位置・重複 調査区南東寄りに位置し、43b号住居と重複し、43b号住居が新しい。

形状・規模 南北4.4m、東西4.9mの方形で、竪穴の深さは60cmである。床面積は14.4m²、住居の主軸方向はN-5°-Wである。

床 面 裸が混じる黄褐色の砂質の地山を床としており、貼床は検出されなかった。

壁 溝 43b号住居と重複する範囲を除き、壁沿いに深さ10cm程度の浅い溝が検出された。

カマド 北壁のほぼ中央に位置する。袖石の周間に植物繊維を混ぜ合わせた粘土が良好に残る状態で検出された。特にカマド内部の窓上は被熱して赤く硬化し、しっかりと袖石に貼り付いた状態であった。粘土中には植物繊維が混ぜ込まれた痕跡が明瞭に観察された。このように粘土がしっかりと袖石を覆っているため袖石には頗る被熱痕が認められなかった。袖石は河原の礫が用いられていて、このような礫は遠隔の地山あるいはすぐ東側を流れる塙川の河床で容易に採取することができる。カマドから壁の外側に長さ1.5mの煙道が延びている。煙道の先端には直行する小溝が掘られ、疊と小さな丸石が溝内から出土している。煙道部で焼土は検出されていない。

柱 穴 柱穴と思われる2基の小ビットが検出された。西壁から住居中央に向って浅い溝が検出され、溝内に小ビットがある。この小ビットは深さが30cmほどあり、43b号住居内でもちょうど対称的な位置に同様のビットが検出された。この2基の小ビットが柱穴と考えた。ほかに床面上で浅いビットが検出されたがおそらく地山礫の抜取り痕と思われる。

遺 物 70図2の土師器壺はカマド煙道で出土している。71図1と71図2もカマド内から出土した。73図4の須恵器壺は南壁沿いの壇上中から出土した。本住居は当初、43号住居1軒として調査をはじめたため、埋土中の出土品も一括して取上げている。その出土量は古墳時代の土師器壺破片58点0.55kg、土師器壺破片433点10.14kg、奈良時代の土師器壺破片22点0.44kg、須恵器壺破片14点0.14kg、須恵器壺破片11点1.01kg、刀子1点、礪器4点である。43a号住居と43b号住居とを区別するようになった後の本住居出土品の総量は、古墳時代の土師器壺破片3点0.19kg、土師器壺破片11点0.4kg、小型土器1点0.03kgである。

時 期 カマドの出土品は古墳時代後期7世紀後半に位置付けられると思われ、一方埋土中では須恵器壺など奈良時代に位置付けられる出土品がみられる。後述する43b号住居との重複関係からも本住居は古墳時代後期7世紀後半に位置づけられると思われる。

調査所見 造場検山時には1軒の住居と判断して調査に着手したが、その後2軒の住居の重複であることが判明した。セクションベルトでの埋土断面の観察と、カマドの残存状況から43b号住居が43a号住居を切ることを確認した。本住居を古墳時代後期の造場と判断したが、43b号住居が奈良時代の遺構と考えられることとも矛盾しない。西壁沿いの床面上で焼土と炭化材が混じる黒褐色土が出土したが、焼失住居と判断するほどの量ではない。同様の焼土と炭化材は重複する43b号住居床面上でも検出されている。

51号住居（第75図、写真図版9）

位置・重複 調査区南東寄りに位置する。

形状・規模 南北4.7m、東西3.8mの範囲で暗灰色の落ち込みがみられ、遺物も出土したため住居と認定し調査したが、カマドなどの施設は確認されなかった。竪穴の深さは20cmほどである。

床 面 検出されなかった。

壁 溝 検出されなかった。

カマド 造構の北東部に浅いくぼみがみられたが焼土などは検出されなかった。

柱 穴 検出されなかった。

遺物 遺構全体に縛と壊破片等が散在していた。75 図 2 の土師器壊はほぼ完形である。出土品の総量は古墳時代の土師器壊 8 点 0.92 kg、土師器壊破片 73 点 0.95 kgである。

時期 出土品の特徴から古墳時代後期、7世紀中頃と思われる。

調査所見 住居跡か判断する材料がなかったが、何らかの堅穴造構であると思われる。

第4章 奈良時代の遺構と遺物

調査区では奈良時代と思われる住居13軒が検出されている。古墳時代の住居に比べて軽くて小型で、住居北壁にカマドを設けるものと東壁に設けるものとがみられる。

4号住居（第11図～第13図、写真図版1）

位置・重複 調査区南西角に位置する。古墳時代後期の3号住居、5号住居と近接、重複する。本住居が新しい。

形状・規模 南北4.6m、東西3.9mの長方形で竪穴の深さは35cm。床面積は15.6m²、住居の主軸方向はN-8°・Wである。埋土中には人骨の跡が投棄されていた。

床 面 固くしまった明黄褐色の砂質地山を床面とし、貼床は検出されなかった。床面には地山に含まれる大小の礫が露出している。

壁 溝 住居の南半の壁沿いに小溝を検出した。

カマド 北壁中央で灰色粘土、焼土、浅い窓み、煙道が検出された。カマドは原形を留めていない。

柱 穴 検出されなかった。

遺物 12図1の土師器壊はカマドの粘土中から出土した。埋土中から古墳時代の土師器壊破片37点0.41kg、土師器壊片199点3.53kg、平安時代の土師器壊破片8点0.264kg、上師器皿破片2点0.02kg、須恵器壊破片7点0.24kg、須恵器壊片7点0.13kgが出土した。武藏型土師器壊（13図1・3）の出土が注目される。

時期 12図1の土師器壊を根拠に奈良時代の遺構と推測する。

9号住居（第20図～第21図、写真図版2）

位置・重複 調査区中央西寄りに位置し、古墳時代後期の8号住居と重複し10号住居と接する。

形状・規模 南北3.6m、東西3.7mの方形で、竪穴の深さは40cmである。床面積10.5m²で住居主軸方向はN-7°・Eである。

床 面 明黄褐色の固くしまった地山を床面としており、貼床は検出されなかった。

壁 溝 壁際で浅い溝が検出された。

カマド 北壁東寄りで窓、灰色粘土、焼土、煙道を検出した。カマド底には厚さ10cmほどの燒土が検出された。崩れたカマドの内部から21図1の土師器壊が、また崩れたカマド粘土上から21図2の土師器壊が出土した。

柱 穴 検出されなかった。

遺物 カマド周辺と埋土中から古墳時代の土師器壊破片5点0.06kg、土師器壊片86点2.72kg、奈良平安時代の土師器皿破片31点0.52kg、磁器2点が出土した。21図1には墨書きがみられる。

時期 カマド出土の土師器壊から奈良時代の遺構と考えられる。

12号住居（第25図～第27図、写真図版3）

位置・重複 調査区南西寄りに位置し、11号住居に近接する。

形状・規模 南北5m、東西5.4m、竪穴の深さ60cm、床面積は18.1m²である。平面形は方形で、北壁からカマド煙道が長く延びる。壁溝が3本検出され、2回の拡張が想定される。最も内側の壁溝に囲まれた床面積は11.9m²、2回目の壁溝に囲まれた床面積は15.2m²である。

床 面 固くしまった地山を床面としており、貼床は検出されなかった。壁際を除くほぼ全面が、踏み面められている。

壁 溝 3本の壁溝がほぼ全周にわたり検出された。壁溝は深さ5cm程度と浅く、平安時代住居のそれと較べると頗りない感じであるが、もっとも外側の壁溝は明瞭に確認されている。内側2本は非常に浅く、本当に壁溝と認

定してよいか判然としない。

カマド 北壁中央で粘質土、焼土、礫を検出した。カマドは確が抜き取られ破壊されているが、粘質土で形作られた両袖がほんやりと残り、東側の袖石が原位置を保っている。煙道が北壁から1.2mほど延びている。カマドの粘質土中から土製の人形が正位で出土した。住居中央の床面が焼土化しており、カマドと同質の灰色の粘質土が検出されている。住居の中央部に常設のカマドがあったとは考えにくいが、仮設的なカマド類似の施設が設けられていたのであろうか。直径20cm、深さ20cmほどの小ピットが検出されている。

柱穴 住居中央の左右に規則的に小ピットが配置されている。西側は小溝が壁に向かって延びている。東側は2基のピットがあり、いずれも30cmから50cmと深い。小溝は検出されなかった。東側のピットのさらに南側でピットを検出されたが、こちらは地山壁の抜き取り痕と思われる。

遺物 大半の遺物は破片状態で、埋土上層において大小の跡とともに出土している。ただし26図7の須恵器壺蓋は住居北西隅の床面上で内面を上にして出土している。カマドから上製人形1点が出土している。住居中火付近の埋土上層部で銅製環1点が出土した。礫や土器破片に混じって出土しており、特別な出土状況を確認することはできなかった。出土品総量は、土師器壺類破片が81点0.84kg、甕類は407点9.12kg、須恵器壺蓋類は6点0.24kg、土製人形1点0.04kg、銅製環1点0.01kgが、それぞれ出土している。

時代 陶器は埋土上層の出土が多いが、それらから判断すると奈良時代と思われる。

調査所見 調査区内に限ることであるが、奈良時代に位置づけられる住居のうち、本住居は最大規模を誇り、柱穴、小溝、カマドも、よく察っている印象を受ける。加えて、人形、銅製環といった遺物が出土している。

16号住居（第27図、写真図版3）

位置・重複 調査区中央に位置する。17a号住居、17d号住居と近接する。

形状・規模 南北2.6m、東西2.7mの方形で、竪穴の深さは35cmである。床面積は4.8m²で住居主軸方向はN-92°-Eである。

床 面 固くしまった明黄褐色の砂質地山を床面としている。貯灰は検出されなかった。

壁 溝 壁沿いに浅い溝を検出した。

カマド 東壁の中央よりやや南寄りで灰色粘土、焼土、礫を検出した。カマドは原形を留めていない。

柱穴 植出されなかった。

遺物 埋土から破片が出土している。古墳時代の土師器壺破片2点0.04kg、土師器甕類破片65点0.9kg、奈良平安時代の土師器壺類破片7点0.03kg、須恵器破片7点0.1kgである。

時代 出土品が少ないが、図示した須恵器破片から奈良時代の遺構である可能性がある。

17a号住居（第27図～第28図、写真図版3）

位置・重複 調査区中央に位置する。16号住居、17d号住居と近接する。住居周辺は坦没谷で黒色土が数十センチ以上堆積している。そのため本住居とその周辺の住居を確認時に分離して認識することができず、17号住居として調査を開始した。調査が進むにつれて4軒の住居がまとまって分離していることが判明し、17a号から17d号住居と呼称することとした。

形状・規模 南北2.8m、東西2.4mの方形で、竪穴の深さは50cmである。床面積は5.4m²で住居主軸方向はN-88°-Eである。

床 面 16号住居と同様の床面と思われるが、湧水がひどく確認できなかった。調査時においても床面高はカマドの跡の状況をみながらようやく確認した。

壁 溝 湧水のため確認作業ができなかった。

カマド 北壁の中央よりやや東寄りで礫、粘土、焼土、煙道が検出された。

柱 穴 湿水のため確認作業ができなかった。

遺 物 墓上中から奈良時代の土師器壺1点0.002kg、土師器壺破片58点1.03kg、須恵器壺破片5点0.14kgが出土した。17a号住居に分離する以前に17号住居一括として処理した出土品は古墳時代の土師器壺破片24点0.17kg、土師器壺破片488点8.37kg、奈良時代の土師器壺破片14点0.01kg、平安時代の土師器壺破片13点0.1kg、須恵器壺破片7点0.075kg、須恵器壺破片3点0.14kgである。

時 期 出土品が少ないが、図示した土師器壺から奈良時代の遺構である可能性がある。

17c号住居（第31図、写真図版4）

位置・重複 調査区中央に位置し、17a号住居、17b号住居と近接する。

形状・規模 南北2.7m、東西2.8mの方形で、豊穴の深さは35cmである。床面積は4.9m²で住居主軸方向はN-1°-Wである。

床 面 湿水のため確認作業ができなかった。

壁 溝 湿水のため確認作業ができなかった。

カマド 住居北東角で焼土と縁を検出した。湿水のため充分な調査ができなかった。

柱 穴 湿水のため確認作業ができなかった。

遺 物 17a号住居の項で報告したとおり17号住居一括で処理した出土品と17c号住居で取上げた出土品とがある。17c号住居では古墳時代の土師器壺破片6点0.024kg、奈良時代の土師器壺破片4点0.017kg、土師器壺破片42点5.62kg、土器片製円盤1点が出土した。第31図5の土師器壺は本住居の遺物と思われる。

時 期 出土品が少ないが奈良時代の遺構である可能性がある。

26号住居（第42図、写真図版5）

位置・重複 調査区北寄りに位置する。

形状・規模 南北4.2m、東西4.5mの方形で、床面積は14.7m²、住居主軸方向はN-79°-Eである。

床 固くしまった明黄褐色の砂質地山を床面としている。貼床は検出されなかった。床面には地山の縁が多数露出している。

壁 溝 床面に縁が多いためか検出できなかった。住居北西角を測るよう深い溝がコの字状に検出されたが、その機能を示す資料を得ることはできなかった。

カマド 東壁の中央よりやや内寄りで焼土を検出したが、カマドは全く原形を留めていない。

柱 穴 住居中央で2基のごく浅いピットが検出された。ピットの深さは5cm程度だが、これらが柱穴の可能性がある。

遺 物 42図3を除き墓上中から小破片が出土したのみである。3は住居南西角から出土した須恵器壺で2/3程度が残っていた。住居全体では古墳時代の土師器壺破片13点0.1kg、土師器壺破片1点0.01kg、奈良平安時代の土師器壺破片66点0.5kg、土師器壺破片227点3.34kg、須恵器壺破片12点0.45kgが出土した。

時 期 住居の時期を示す資料に恵まれないが、奈良時代の遺構と思われる。

27号住居（第43図～第44図、写真図版6）

位置・重複 調査区の北寄りに位置する。

形状・規模 南北3.1m、東西3.6mのやや不整形の方形で、豊穴の深さは0.2mである。床面積は6.8m²。主軸方向はN-9°-Wである。

床 面 地山を床面としており、貼床は検出されていない。地山は、大小の縁が露出した黄褐色の細砂質である。

壁 溝 西壁と南壁沿いが溝状に浅く窪んでいたが、床面に縁が多いため明確に壁溝と認定することはできなかっ

た。

カマド 東壁中央で礫、焼土、粘質土を検出した。左右の袖石は比較的良好に残り、カマドの原形をうかがわせる。煙道は検出されなかった。

柱 穴 検出されなかった。

遺 物 古墳時代の土師器壊類は 11 点 0.22 kg、甕類は 45 点 1.91 kg、奈良時代の土師器壊片 2 点 0.03 kg、須恵器不統片 1 点 0.05 kg、甕片 3 点 0.07 kg、石器 1 点 0.08 kg、砥石 1 点 0.42 kg、紡錘車 1 点 0.05 kg が出土している。主に埋土から出土した破片資料である。砥石は住居中央の床面上で出土している。紡錘車は南壁中央の床面から若干浮いた位置で、壁に貼りつくようにして出土している。

時 期 破片資料のみであるが、これらから奈良時代の遺構と推測される。

28号住居（第 45 図～第 46 図、写真図版 6）

位置・重複 調査区山央北寄りに位置し、36号住居と重複する。36号住居が新しい。

形状・規模 南北 4.0 m、東西 3.9 m の方形で、豊穴は深さ 35 cm である。床面積 10.9 m² で主軸方向は N-1° -W である。遺構の南 1/3 は 36号住居に切られて失われている。

床 面 黒褐色の埴山を床面としており、埴山の小礫が露出している。湧水のため硬度は確認できなかった。

壁 溝 漩水のために床面上で遺構確認ができなかった。

カマド 焼土、粘土などは一切検出されなかった。北東角の壁に貼りつくようにして土師器甕破片がまとまって出土している。カマド構造材として利用されたならば、ここをカマドと想定することができるがどうであろうか。

柱 穴 漩水のために床面上で遺構確認ができなかった。

遺 物 古墳時代の土師器壊片 8 点 0.07 kg、土師器甕破片 1 点 0.08 kg、奈良平安時代の上師器壊片 24 点 0.2 kg、土師器甕破片 114 点 2.7 kg、須恵器甕破片 16 点 0.66 kg が埋土中から出土している。小さな破片であるが縦内系环が出土している。

時 期 遺構の時期を明確に示す出土品はなかったが埋土中の土器は奈良時代の土師器壊と甕、須恵器が卓越しているため、奈良時代の遺構である可能性が高い。

32号住居（第 51 図～第 52 図、写真図版 6）

位置・重複 調査区中央北寄りに位置する。

形状・規模 南北 3 m、東西 3.4 m の方形で、豊穴の深さは 30 cm である。床面積は 6.8 m²、主軸方向は N-92° -E である。

床 面 黄褐色の固くしまった砂質埴山を床面としている。貼床は検出されなかった。

壁 溝 壁際に浅い溝が検出された。

カマド 東壁中央のやや南寄りで粘土、礫、焼土、煙道が検出された。周囲にカマド構造材と思われる大きな礫が散在しており、カマドは一部の袖石を除き原形をとどめていない。

柱 穴 柱穴は検出されなかった。南壁中央付近の床面上で浅いくぼみが 3ヶ所で検出された。出入口施設に係る小ビットであるかもしれない。

遺 物 埋土中から奈良時代の土師器壊片 1 点 0.02 kg、土師器甕破片 25 点 1.32 kg、須恵器 4 点 0.1 kg が出土している。

時 期 遺構の時期を明示する出土品はないが、奈良時代の遺構と思われる。

36号住居（第 45 図・第 47 図、写真図版 6）

位置・重複 調査区中央の北寄りに位置し、28号住居と重複する。ともに奈良時代の遺構と考えられるが、埋土断

由觀察から本住居が新しいと判断した。

形状・規模 南北3m、東西2.9mの方形で、窓穴の深さは70cmである。床面積は7.3m²、住居の主軸方向はN-72°-Wである。調査中に湧水があり壁がみるみる崩れていってしまったため、写真では住居の南半分がクレーター状になっている。

床 面 多量の湧水のため確認できなかった。

壁 溝 多量の湧水のため確認できなかった。

カマド 多量の湧水のため確認できなかった。

柱 穴 多量の湧水のため確認できなかった。

遺物 多量の湧水のために重複する28号住居との境界がはっきりしないまま遺物の取上げ処理をせざるを得なかった。そのために28号住居と本住居の一括取上げ処理した小破片遺物は両住居に渡って混ざり合ってしまったものもあると思われる。現地調査で木住居の遺物と判断して取上げたものは、奈良時代の土師器壊破片25点0.39kg、甕破片42点1.44kg、須恵器壊破片13点0.84kgである。

時期 山土遺物から奈良時代の遺構と思われる。

37号住居（第61図～第63図、写真図版7）

位置・重複 調査区中央の北寄りに位置する。

形状・規模 南北3.1m、東西4.3mの長方形で、窓穴の深さは45cmである。南壁に取り出しがある。床面積は12.7m²、住居の主軸方向はN-6°-Eである。

床 面 黄褐色の砂質地山を床面としている。湧水のため貼付があるかどうかは確認できなかった。床面には地中に含まれる礫が露出している。

壁 溝 湧水のため確認できなかった。

カマド 北壁中央のやや東寄りに浅いくぼみと礫、わずかな焼土を検出した。

柱 穴 湧水のため確認できなかった。

遺物 墓上からの出土品は、古墳・奈良時代の土師器壊破片401点2.35kg、土師器甕破片1147点13.8kg、須恵器壊破片1点0.09kg、須恵器甕破片27点0.6kg、鉢輪車2点、鐵製品1点である。本遺跡の調査で唯一の瓶が出土される。

時期 出土遺物から奈良時代の遺構と思われる。

38b号住居（第53図・第58図～第60図、写真図版7）

位置・重複 調査区中央に位置し、34号住居、38a号住居と重複する。本住居が最も新しい。

形状・規模 南北2.9m、東西3.9mの長方形で、床面積は8.7m²、住居主軸方向はN-87°-Eである。

床 面 固くしまった明黄褐色の砂質地山を床面としており、助床は検出されなかった。

壁 溝 東壁以外の壁沿いで浅い溝を検出した。

カマド 東壁のほぼ中央部で礫、灰色粘土、焼土、くぼみ、煙道を検出した。カマド煙道は38a号住居埋土に掘り込まれている。カマドを構成したと思われる礫は一部の袖石を除いて原位置を留めず、カマド焚き口周辺で積み重ねられるようにして出土した。

柱 穴 検出されなかった。

遺物 38a号住居の項でも報告したとおり、38a号住居と38b号住居は当初単に38号住居として調査をはじめたため、出土品の一部が混在してしまった。58図1の須恵器短頸壺破片は住居南壁沿いの床面上で出土している。59図4の須恵器壊破片は住居東角から出土している。59図1、2、3の土師器壊はカマドで山土している。住居全体の出土品は古墳時代の土師器壊破片28点0.31kg、甕破片147点3.12kg、奈良時代の土師器壊18点0.54kg、須

患器坏破片 11 点 0.4 kg、壺破片 7 点 0.08 kg である。ほかに 38 号住居一括として処理したものが 38 a 号住居の項に報告してある。

時 期 カマド内の出土品から奈良時代の造構と思われる。

調査所見 当初、38 号住居 1 軒と認識して調査をはじめたところ、38 b 号住居のカマドを検出し、2 軒の重複であることに気づいた。そのため本住居の東壁は掘り飛ばしてしまった。38 b 号住居の埋土セクションを観察すると重複関係が確認されたが、38 a 号住居と 38 b 号住居の埋土色の違いはわずかであり、造構検査面では両者の違いを認識できなかった。

42 号住居（第 67 図～第 68 図、写真図版 8）

位置・重複 調査区南東角に位置し、44 号住居に近接する。

形状・規模 南北 4.2 m、東西 4.7 m の方形で、竪穴の深さは 40 cm。床面積は 14.7 m² で住居主軸方向は N-9° -E である。

床 面 固くしまった明黄褐色の砂質地山を床面としており、貼床は検出されなかった。床面には地山の顔が若干露出している。住居中央付近の床面が特に固くしまり、平坦であった。

壁 清 検出されなかった。住居の中央と西壁の間で L 字状に浅い小溝を検出した。

カマド 北壁の中央よりやや東寄りで粘土、疊、焼土、短い煙道を検出した。カマドは原形を留めていない。カマドからは 68 図 4 の土師器壺破片がまとまって出土した。

柱 穴 検出されなかった。南壁沿いで浅いピット 2 基が検出され、出入口の施設に関連するものである可能性がある。

遺 物 古墳時代の上師器壺破片 6 点 0.05 kg、下師器壺破片 80 点 5.01 kg、奈良時代の下師器壺破片 26 点 0.2 1 kg、須恵器壺破片 13 点 0.3 kg、須恵器壺破片 3 点 0.14 kg、鉄製品 2 点、縄文時代の打製石斧破片、くぼみ石 1 点、磨石 1 点が主に埋土から出土した。

時 期 カマドで出土した土師器壺が本住居の時期を示すと考えられることから奈良時代の造構と思われる。

43 b 号住居（第 69 図～第 72 図、写真図版 8）

位置・重複 調査区南東寄りに位置し、43 a 号住居と重複する。造構確認当初、2 軒の重複と認識できず 43 号住居 1 軒として調査に着手した。

形状・規模 南北 3.1 m、東西 3.3 m の方形で、竪穴の深さは 70 cm。床面積は 6.7 m² で住居主軸方向は N-13° -W である。

床 面 固くしまった明黄褐色の砂質地山を床面としており、貼床は検出されなかった。床面には地山の顔が若干露出している。

壁 清 地山の顔が多い北壁沿いを除き、浅い溝が検出された。

カマド 北壁の中央よりやや東寄りで粘土、疊、焼土、煙道を検出した。カマドは原形を留めていない。

柱 穴 検出されなかった。

遺 物 43 b 号住居からは古墳時代の上師器壺破片 8 点 0.18 kg、奈良時代の上師器壺破片 1 点 0.003 kg が出土している。このほか 43 号住居として一括して処理した出土品があり、43 a 号住居の項に報告してある。72 図 1 の上師器壺は住居南西角の埋土から出土している。

時 期 43 a 号住居中にも奈良時代の須恵器やいわゆる壺状灰といわれる上師器壺が混じっているが、それらは本住居に属するものである可能性がある。本住居山呂とあわせて本住居の時期を示している可能性があり、本住居は奈良時代と考えておきたい。

調査所見 43 a 号住居の項でも報告したとおり、床面上で焼土、炭化材が混じる黒褐色土が出土したが、焼失住居

と判断されるほどの量ではない。43a号住居と43b号住居の埋土中には多量の礫が投棄されており、周辺の住居を建設する際に出土した礫が搬入されたものと思われる。この多量の礫の出土状況も両住居の重複関係に合致した様相であった。

46号住居（第74図、写真図版8）

位置・重複 調査区南東角に位置し、42号住居、43号住居と重複する。

形状・規模 南北3.2m、東西3.5mの方形で、堅穴の深さは30cm。床面積は8.0m²で住店主軸方向はN-29°-Wである。

床 面 固くしまった明黄褐色の砂質地山を床面としており、貼床は検出されなかった。床面には地山の礫が多数露山している。

壁 溝 南壁沿いで浅い溝が検出された。

カマド 住居の北西角で礫と焼土を検出した。カマドは袖石の一部と天井石と思われる礫を除き、原形を留めていない。

柱 穴 検出されなかった。

遺物 埋土から奈良時代の土師器壊破片5点0.06kg、甕破片11点0.16kg、須恵器壊破片2点0.03kgが出土した。

時期 住居の施期を示す資料に恵まれなかったが、埋土中の出土品から奈良時代の遺構と思われる。

52号住居（第76図～第78図、写真図版9）

位置・重複 調査区中央の東寄りに位置し、53号住居と重複する。本住居が古く53号住居が新しい。

形状・規模 向北5.0m、東西4.6mの方形で、堅穴の深さは40cmである。床面積は19.5m²、住店主軸方向はN-12°-Eである。

床 面 大小の礫が多数混じる暗黄褐色の地山を床面とし、貼床は検出されなかった。

壁 溝 床面に礫が多く混じるためか、精査したが検出されなかった。

カマド 北壁東寄りで礫、焼土、浅いくぼみが検出された。カマドは原形を留めていない。

柱 穴 検出されなかった。

遺物 77図2、77図4、78図1はカマドから出土した。77図1と78図3の砾石は東壁沿いの埋土中で出土している。いずれも破片である。住居全体では古墳時代の土師器壊破片42点0.3kg、上師器壊破片209点2.97kg、奈良時代の土師器壊12点0.16kg、須恵器壊破片2点0.2kg、須恵器壊破片6点0.77kg、砥石1点である。

時期 カマド出土遺物から奈良時代の遺構と考えられる。

53号住居（第76図・第79図～第80図）

位置・重複 調査区中央の東寄りに位置し、52号住居と重複する。本住居が新しい。

形状・規模 東西5.0mの方形で、堅穴の深さは35cmである。住居主軸方向はN-90°-Eである。調査区の湧水を排水するために溝を掘削したところ、本住居の北半分を破壊してしまった。そのため南北の規模と床面積は不明である。本住居は52号住居を調査中にその存在に気づいたもので、東壁と南壁の一部を検出することができなかった。

床 面 大小の礫が多数混じる暗黄褐色の地山を床面とし、貼床は検出されなかった。

壁 溝 西壁から南壁にかけて小溝を検出した。

カマド 東壁の中央よりやや南寄りで灰色粘土、礫、焼土を検出した。

柱 穴 検出されなかった。

遺物 墓上から古墳時代の土師器壊破片28点0.15kg、奈良時代の土師器壊破片18点0.32kg、土師器壊破

片 190 点 3.0 kg、須恵器壺破片 4 点 0.03 kg、須恵器甕破片 17 点 0.27 kg が出土した。

時 期 出土遺物から奈良時代の遺構と考えられる。

第5章 平安時代の遺構と遺物

平安時代と思われる住居は5軒が検出され、平安時代の住居の可能性がある遺構2基が検出された。

19a号住居（第37図、写真図版5）

位置・重複 調査区北東角に位置し、19b号住居と重複する。本住居が古く19b号住居が新しい。

形状・規模 南北3.6m、東西4.5mの方形で、窓穴の深さは30cmである。床面積は11.1m²、住居主軸方向はN-65°-Wである。

床 面 固くしまった明黄褐色の砂質地山を床面とし、貼床は検出されなかった。床面には地山に混じる大きな塊が突出している。

壁 溝 北壁の一部を陥き周溝が検出された。住居南西角に短い溝が検出されている。

カマド 北壁の中央よりやや東寄りに焼土と浅いくぼみが検出された。19b号住居に切られているためカマド本体と跡は検出されなかった。

柱 穴 検出されなかった。

遺物 本住居は当初1軒の住居と判断して調査を始めたところ、19a号住居と19b号住居の2軒の重複であることが判明した。そのため出土遺物も19号住居1軒でまとめて収上げている。19a号住居と19b号住居の双方の出土品総量は、古墳時代の上師器環破片7点0.044kg、上師器壺破片7点0.21kg、平安時代の上師器壺破片28点0.316kg、土師器壺破片126点1.073kg、須恵器壺1点0.136kg、須恵器壺13点0.44kg、繩器1点である。

時期 図示できる出土品に恵まれなかったが平安時代の住居と考えられる。

19b号住居（第37図～第38図、写真図版5）

位置・重複 調査区北東角に位置し、19a号住居と重複する。本住居が新しく19a号住居が古い。

形状・規模 本住居は周溝の形状から1回の拡張を経ていると思われる。拡張後の住居は南北3.0m、東西3.6mの長方形で、床面積は8.9m²。拡張前の住居は南北3.0m、東西2.6mの長方形で、床面積は5.8m²。窓穴の深さは35cmで、住居の主軸方向はともにN-23°-Wである。北壁沿いに高圧電線鉄塔のアース線が埋設されており、北壁は床面近くを掠いで破壊されていた。

床 面 固くしまった明黄褐色の砂質地山を床面とし、貼床は検出されなかった。

壁 溝 拡張前、拡張後ともに全周で浅い溝を検出した。

カマド 北壁中央よりやや東寄りで焼土、疊、灰色粘土を検出した。カマド上に高圧電線鉄塔のアース線が埋設されており、一部が破壊されていた。

柱 穴 検出されなかった。

遺物 第38図1は19b号住居南西角の埠上中で、2は19b号住居北東角の埠面上で、1の疊破片はカマドと周辺でそれぞれ出土した。

時期 カマド周辺の出土品から平安時代の住居と考えられる。

20号住居（第39図～第40図、写真図版5）

位置・重複 調査区北東角に位置し、19号住居と近接する。22号住居と重複し、本住居が新しい。

形状・規模 南北3.7m、東西4.1mの方形で窓穴の深さは40cmである。床面積は11.2m²で住居の主軸方向はN-21°-Wである。39図の住居平面図に示したとおり、本住居の高窓が、22号住居の重複部分とは別に浅く掘られている。住居建設時の荒掘りの痕跡かと思われる。

床 面 固くしまった明黄褐色の砂質地山を床面とし、貼床は検出されなかった。

壁溝 壁沿いに浅い溝を検出した。

カマド 北壁中央のやや東寄りで灰色粘土、礫、焼土、浅い掘り込みを検出した。両袖石の一部が原位置を留めていると思われる。

柱穴 検出されなかった。住居南西角で浅いくぼみが検出された。

遺物 墳上中からは古墳時代の土師器甕9点0.1kg、奈良平安時代の土師器坏破片24点0.35kg、土師器甕破片71点0.92kg、須恵器坏破片6点0.07kg、須恵器甕破片7点0.21kg、刀子破片2点が出上した。

時期 住居の時期を明確に示す資料に恵まれなかった。埋土中の出土品は、40図1が奈良時代の盤状坏、40図4は平安時代の土師器甕と時期が分かれる。しかし土師器甕は多量の破片がまとまって出土していることから平安時代の造構と考えておきたい。

21号住居（第40図～第41図、写真図版5）

位置・重複 調査区北東角に位置する。19a号住居と19b号住居に近接する。

形状・規模 本住居は疊だらけの地山中にほんやりと変色した部分があることから住居と判断したものである。不定形の長方形で堅穴の深さは10cmに満たないが、その形状から2軒の住居が南北に隣接していると重複していると考えられる。実際に発掘調査したところ住居かどうか明確に判断できなかった。床面と思われる面にはわずかに焼上や炭化物がまとまる箇所があり、それらがカマドの痕跡であったとも考えられる。そのような理由で木住居は詳細区を作図することなく調査を終了した。

床面 多くの礫を含む明黄褐色の砂質地山を床面とし、貼床は検出されなかった。

壁溝 検出されなかった。

カマド 本住居が2軒の住居の重複と考えた場合、造構の中央部分と北端の2ヶ所で確認された焼土がカマドの位置を示すものと考えられる。したがって、それぞれの住居のカマドは北壁の中央からやや東寄りに位置したものと思われる。

柱穴 検出されなかった。

遺物 平安時代の土師器坏破片が床面上と埋土から出土している。出土量は古墳時代の土師器坏破片1点0.03kg、平安時代の土師器坏破片140点1.33kg、平安時代の土師器坏破片40点0.3kg、平安時代の土師器甕破片71点0.92kg、須恵器坏破片6点0.07kg、須恵器甕破片7点0.21kgである。内面を黒色処理した土師器坏が多い。

時期 2軒の住居と想定した場合、両住居とも平安時代の造構と考えられる。

22号住居（第39図、写真図版5）

位置・重複 調査区北東角に位置し、20号住居と重複する。本住居が占い。

形状・規模 南北3.9mで、東西もほぼ同様程度の方形であると推測される。堅穴の深さは20cmである。住居の大半は20号住居に切られ失われている。

床面 固くしまった明黄褐色の砂質地山を床面とし、貼床は検出されなかった。

壁溝 住居の北西角で浅い溝を検出した。

カマド 北壁の中央付近と思われる位置で焼土を検出した。これがカマドの痕跡と思われる。

柱穴 検出されなかった。

遺物 平安時代の土師器坏破片1点0.06kg、土師器甕破片5点0.26kgが出土した。

時期 出土品はいずれも小破片のみであり、住居の時期を示す資料はない。平安時代と思われる20号住居に切られていること、造構の位置、煙道のないカマドの形状、19a号住居と19b号住居との対比などから判断して、本住居も平安時代の造構である可能性が高いと思われる。しかし20号住居では古墳時代の遺物が数多く出土し、またわずかながら奈良時代の遺物が出土しており、本住居が古墳時代もしくは奈良時代の造構である可能性を示唆すると

も考えられる。

24号住居（第41図）

位置・重複 調査区北端に位置する。19号住居に近接する。

形状・規模 東西3.4mで竪穴の深さは20cm。遺構の北半分は調査区外で、形状と規模は不明である。

床 面 固くしまった明黄褐色の砂質地山を床面とし、貼床は検出されなかった。

壁 溝 壁沿いで浅い溝を検出した。

カマド 調査区外に位置すると思われる。周囲の19号住居、20号住居、21号住居から推測すると北壁に位置する可能性が高い。

柱 穴 調査区内では検出されていない。

遺物 41図に示した古相の遺物の他に平安時代の土師器壊11点0.11kg、土師器壊破片18点0.34kg、須恵器壊破片2点0.04kgが出土した。

時期 刑 遺構の時期を明確に示す資料は得られなかったが、平安時代の可能性が考えられる。

調査所見 本住居は遺跡の調査が終了する間際になって確認されたため、充分な調査の時間を得られなかった。埋土は19号住居、20号住居と同様の暗褐色の埋土であった。

第6章 その他の遺構と遺物

掘立柱建物跡とその可能性があるピットのまとまりが16ヶ所で検出された。現地で掘立柱建物であると判断できた1号、2号掘立柱建物を除き、ほかの建物跡についてはピット位置を計測したデータが事故により消失しピット位置と出土品の組合ができなくなった。そのため時期を推定することができない。それら位置を特定できないピットの出土品の大半は古墳時代の土師器坏、甕の破片で、ほかに奈良時代の土師器坏、甕の破片、須恵器破片がある。平安時代の出土品はごくわずかである。

1号掘立柱建物

位置・重複 調査区南東角に位置し、13号掘立柱建物、4号掘立柱建物と重複する。奈良時代の42号住居、46号住居と近接する。現地調査では1棟の総柱建物と考えたが、整理作業の段階で2棟の側柱建物に分離されると判断した。それぞれ1a号掘立柱建物、1b号掘立柱建物として以下に報告する。

1a号掘立柱建物（第81図、第86図）

形状・規模 南北1間2m、東西2間4mの側柱建物で、ピットの深さは30cmほどである。

遺物 柱穴と思われるピットから縄文時代の土器破片3点、古墳・奈良時代の土師器壺細片3点、奈良時代の土師器坏細片1点（86図1）が出土している。

時期 ピット出土品から奈良時代の遺構と考えられる。

1b号掘立柱建物（第81図）

形状・規模 南北2間2.7m、東西2間4.1mの側柱建物で、ピットの深さは30cmほどである。ピットの一部が1a号掘立柱建物ピットと重複するが、現地で新旧関係を確認できなかった。

遺物 柱穴と思われるピットから縄文時代の土器破片4点、古墳・奈良時代の土師器壺細片20点、古墳時代の土師器坏細片8点、奈良時代の上部器坏破片3点が出土している。

時期 ピット出土品から奈良時代の遺構と考えられる。

2号掘立柱建物（第81図、第86図）

位置・重複 調査区の中央南寄りに位置し、38b号住居に近接する。

形状・規模 南北2間2.4m、東西2間4mのやや歪んだ側柱建物で、ピットの深さは30cmほどである。

遺物 柱穴と思われるピットから奈良時代の土師器壺細片3点、須恵器甕破片1点（86図2）が出土している。

時期 ピット出土品から奈良時代の遺構と考えられる。

3号掘立柱建物（第81図）

位置・重複 調査区南西角に位置し、15号掘立柱建物と重複する。3号住居、18a号住居に近接する。

形状・規模 南北2間3.8m、東西3間7.2mの歪んだ側柱建物で、ピットの深さは30cmほどである。

4号掘立柱建物（第82図）

位置・重複 調査区南東角に位置し、1号掘立柱建物、1号溝跡と重複する。42号住居に近接する。

形状・規模 南北2間3.2m、東西3間6mの側柱建物で、ピットの深さは30cmほどである。

5号掘立柱建物（第82図）

位置・重複 調査区北端に位置し、16号掘立柱建物、奈良時代の26号住居と重複する。

形状・規模 南北推定3間4.6m、東西1間1.4m以上の側柱建物で、ピットの深さは30cmほどである。

6号掘立柱建物（第82図）

位置・重複 調査区中央西寄りに位置し、12号掘立柱建物、古墳時代の8号住居と重複する。

形状・規模 南北3間5.2m以上、東西1間1.6m以上の側柱建物で、ピットの深さは30cmほどである。

7号掘立柱建物（第82図）

位置・重複 調査区南東寄りに位置し、43号住居、46号住居に近接する。

形状・規模 南北推定2間2.7m、東西2間2mの側柱建物で、ピットの深さは20cmほどである。

8号掘立柱建物（第82図）

位置・重複 調査区西端に位置し、奈良時代の12号住居と重複する。

形状・規模 南北3間3.8mの側柱建物で、ピットの深さは30cmほどである。

9号掘立柱建物（第83図）

位置・重複 調査区北東角に位置し、平安時代の20号住居と重複する。

形状・規模 南北3間4.6m、東西3間5.6mの総柱建物の可能性がある遺構で、ピットの深さは30cmほどである。

10号掘立柱建物（第83図）

位置・重複 調査区南西角に位置し、8号掘立柱建物、古墳時代の18号住居と重複する。

形状・規模 南北推定2間3.2m、東西推定3間4.6mの側柱建物で、ピットの深さは20cmほどである。

11号掘立柱建物（第83図）

位置・重複 調査区中央北寄りに位置し、16号掘立柱建物、奈良時代の28号住居と重複する。

形状・規模 南北2間3.8m、東西1間2.1mの側柱建物で、ピットの深さは30cmほどである。

12号掘立柱建物（第83図）

位置・重複 調査区中央西寄りに位置し、6号掘立柱建物、古墳時代の8号住居と重複する。

形状・規模 南北3間3.8m、東西3間4.1mの側柱建物で、ピットの深さは30cmほどである。

13号掘立柱建物（第83図）

位置・重複 調査区の南東角に位置し、1a号掘立柱建物、1b号掘立柱建物と重複する。奈良時代の46号住居に近接する。

形状・規模 5基のピットが規則正しく配列することから掘立柱建物と想定した。南北2間3.6m、東西1間2mの長方形で、ピットの深さは30cmほどである。

14号掘立柱建物（第84図）

位置・重複 調査区西端に位置し、12号住居と重複する。

形状・規模 南北推定4間8m、東西2間5.4mの総柱建物の可能性がある遺構で、ピットの深さは20cmから90cmほどである。

15号掘立柱建物（第84図）

位置・重複 調査区南西角に位置し、3号掘立柱建物と重複する。

形状・規模 南北推定3間6.2m、東西1間2.3mの側柱建物で、ピットの深さは20cmほどである。

16号掘立柱建物（第84図）

位置・重複 調査区北端に位置し、5号掘立柱建物、26号住居と重複する。

形状・規模 南北3間6.6m、東西1間2.4mの側柱建物で、ピットの深さは30cmほどである。

1号溝跡（第85図）

位置・重複 調査区南端を東西方に延び、古墳時代の1号住居と重複する。本造構が新しい。

形状・規模 幅1.1m、東西50m、深さ50cmの溝跡で、西から東に向って緩やかに下る勾配である。溝の西端と東端の高低差は60cmで東端が低い。溝断面はU字状で、塙土に流水の痕跡と思われるような砂礫の堆積は認められなかった。

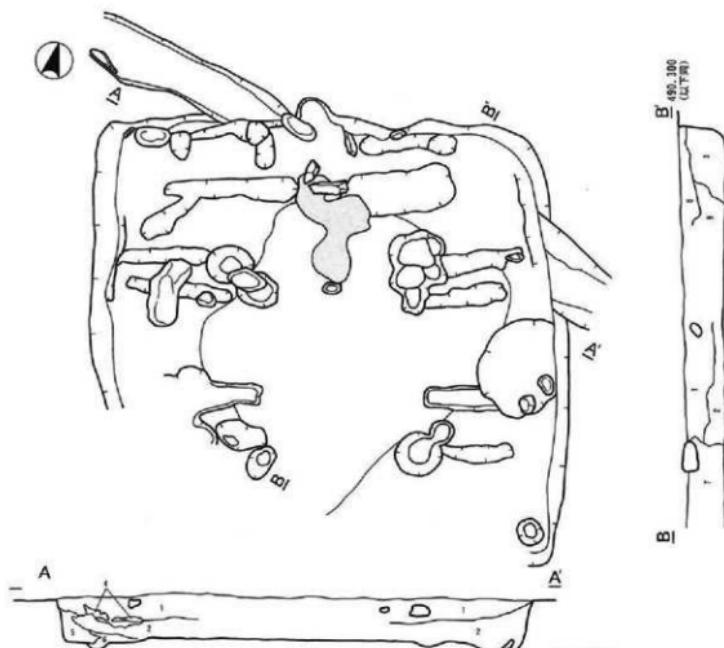
遺物 古墳時代から奈良時代の土師器壊破片36点、上師器壊破片95点、須恵器破片9点、平安時代と思われる土師器杯鉢片1点が出土している。

時期 1号住居との重複関係から古墳時代の1号住居より新しい。溝の時期を明確に示す出土品には恵まれなかった。周囲に平安時代の造構がみられないにもかかわらず平安時代と思われる土師器不1点が含まれていることから、平安時代の造構の可能性を考えられる。

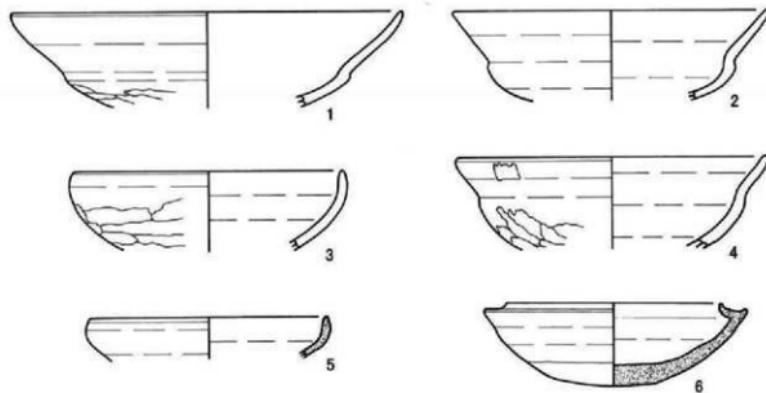
造構外の出土遺物（第86図～第88図）

調査区の中央、16号住居から32号住居の周辺で縄文時代の遺物が出土している。出土品は縄文時代中期後半曾利式、加曾利E式を中心で、ほかに打製石斧などの石器、土偶破片がある。

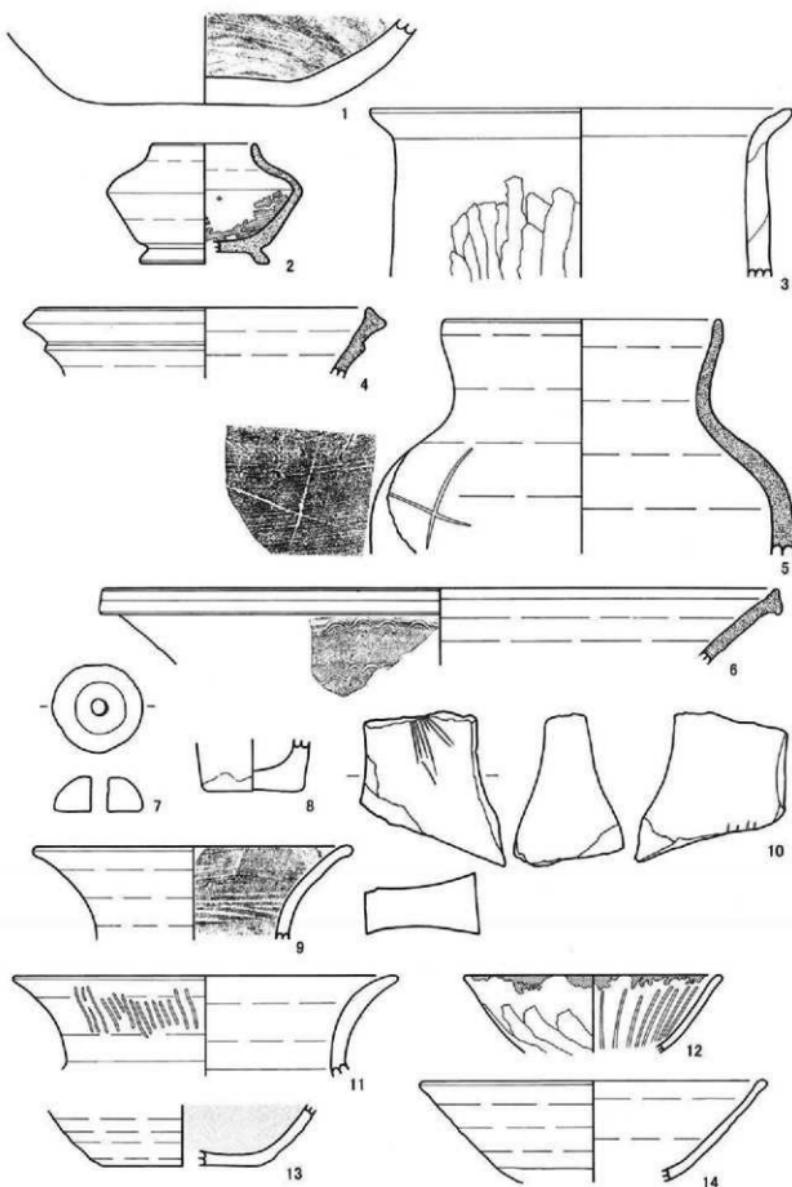
古墳時代から平安時代の出土品、金属製品が調査区域の表十と造構外で出土している。出土位置に特別の傾向は認められなかった。鉄製斧の出土が注目される。



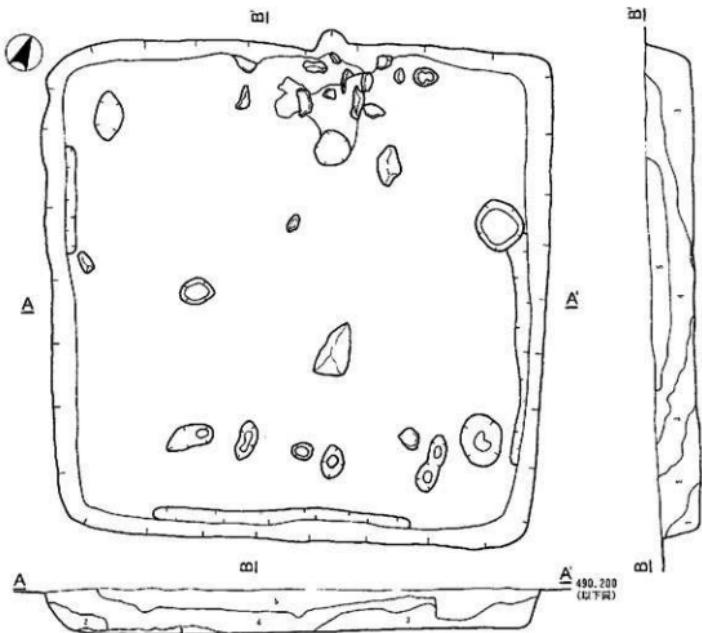
- 1層 黒色土。
- 2層 黄褐色粒子がわずかに混じる黒色土。
- 3層 黄褐色粒子がわずかに混じる暗褐色土。
- 4層 土が混じる黒色土。
- 5層 暗褐色ブロックが混じる黄褐色土。
- 6層 黄褐色ブロックが若干混じる黒色土。
- 7層 カクラン
- 8層 《溝覆土》やしまりのある黒色土。
- 9層 《溝覆土》黄褐色粒子が混じる暗褐色土。



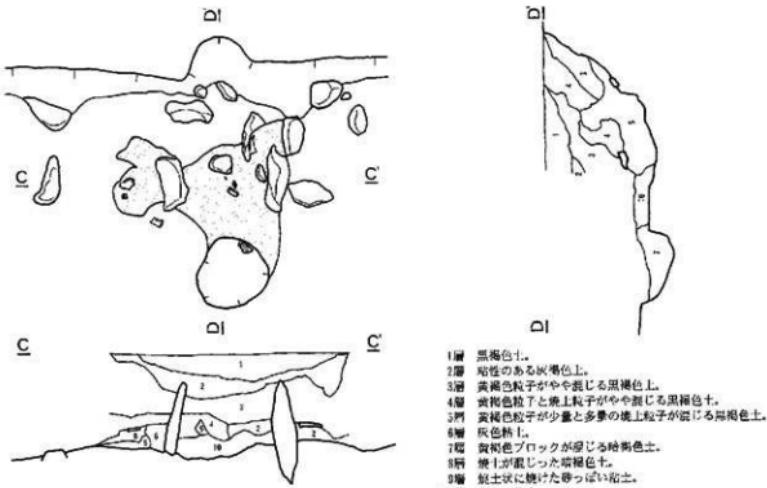
第6図 1号住居 (1/60) 1号住居出土遺物 (1/2)



第7图 1号住居出土遺物 (1/2、6 1/4)

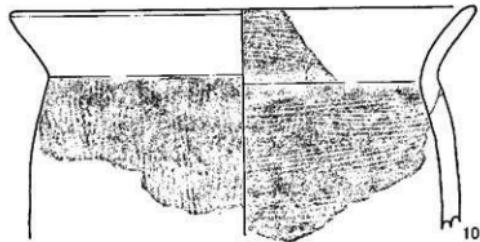
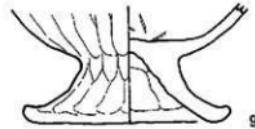
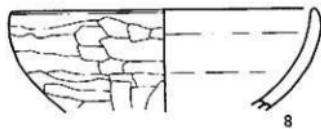
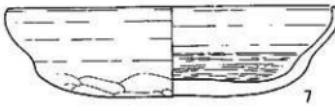
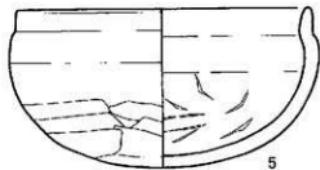
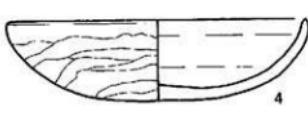
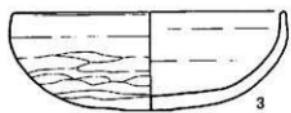
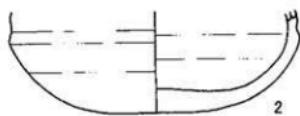


- 1層 しまりのない灰褐色土。
2層 黄褐色粒子がやや混じる灰褐色土。
3層 灰褐色粒子がやや混じり、やや黒味がかった灰褐色土。
4層 しまりのない灰褐色土。
5層 黒色土。

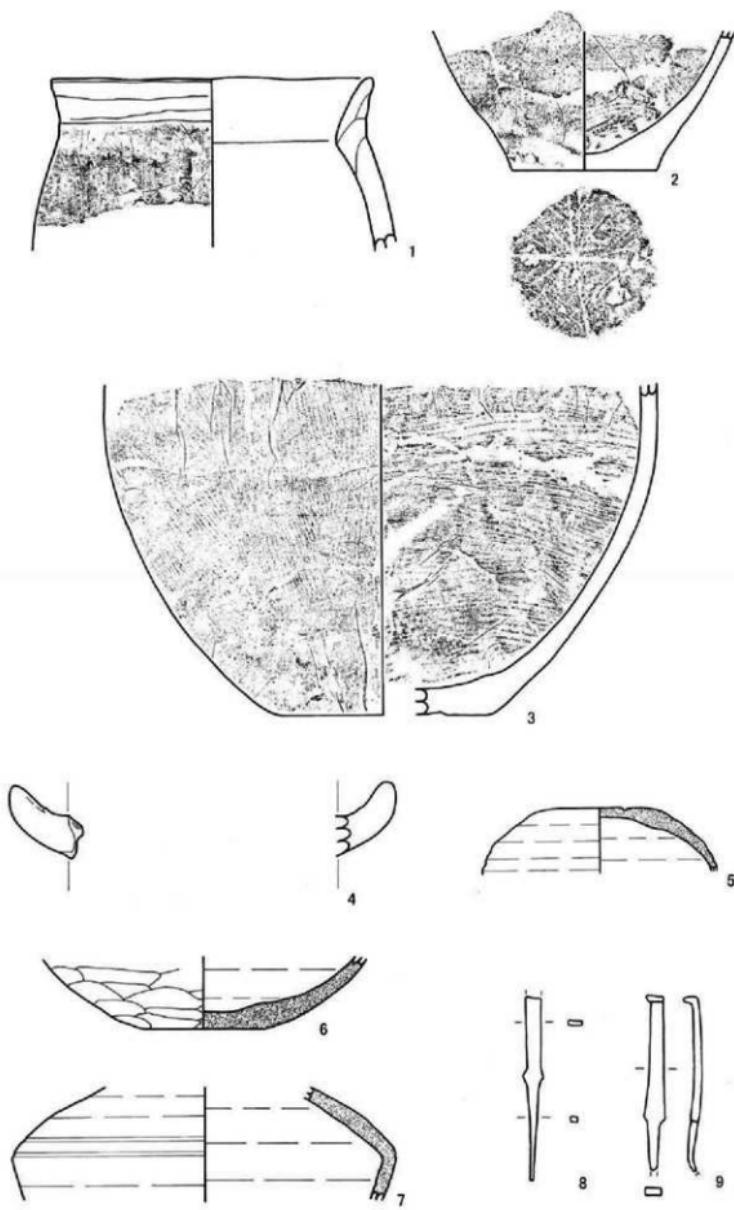


- 1層 黒褐色土。
2層 黒褐色の土。
3層 黄褐色粒子がやや混じる黒褐色土。
4層 黄褐色粒子と黒土粒子がやや混じる黒褐色土。
5層 黑褐色粒子が少量と多量の黒土粒子が混じる黒褐色土。
6層 灰色土。
7層 黄褐色ブロックが混じる黒褐色土。
8層 黒土粒子が混じった黒っぽい粘土。
9層 黏土土中に焼けた赤っぽい粘土。
10層 かたい粘土。

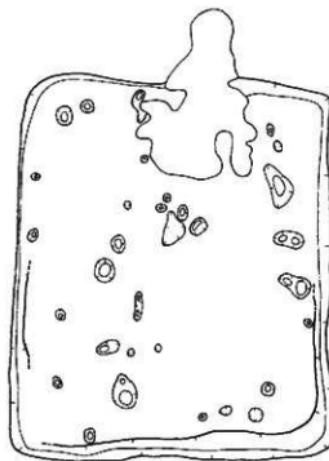
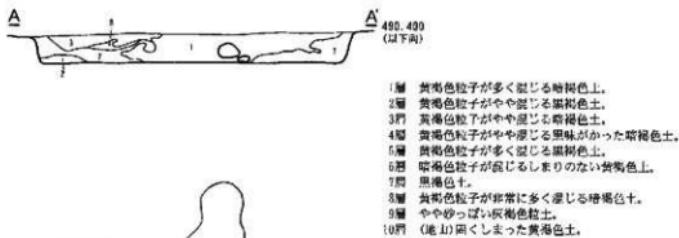
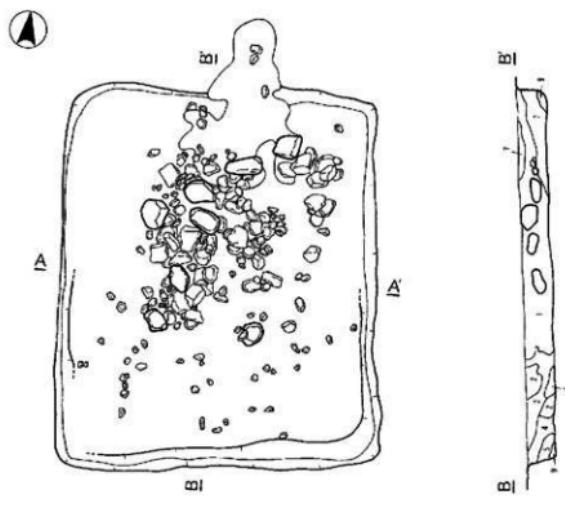
第8図 3号住居 (1/40) 3号住居カマド (1/20)



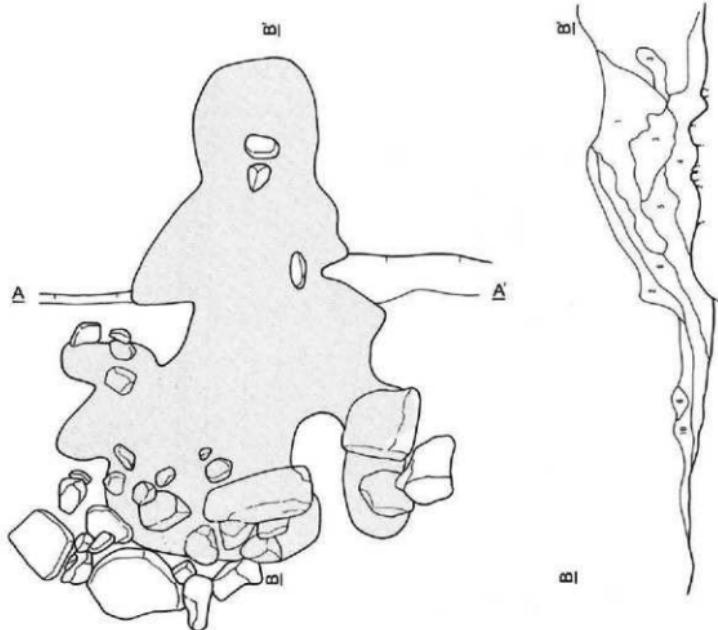
第9図 3号住居出土遺物 (1/2)



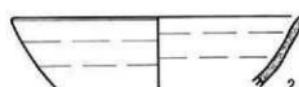
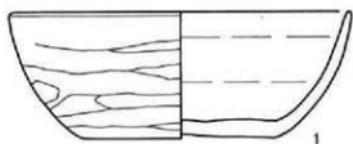
第10图 3号住居出土物 (1/2)



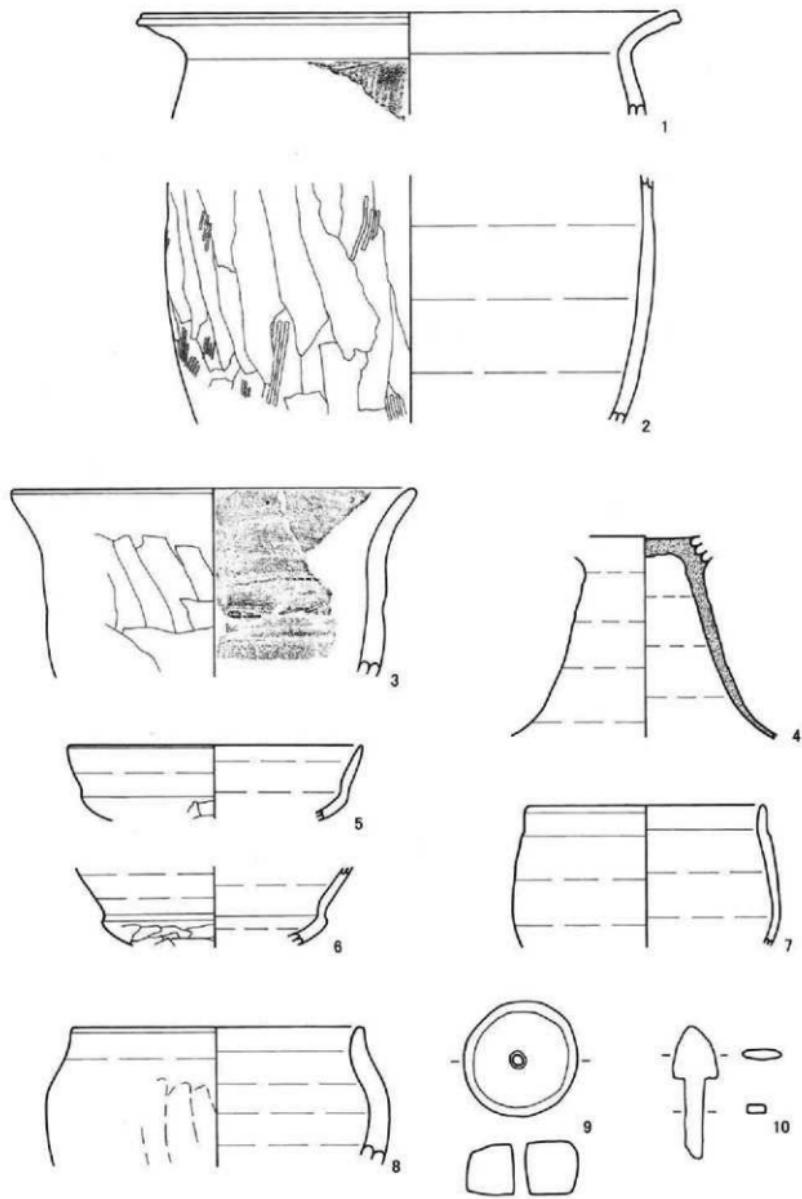
第11図 4号住居 (1/60)



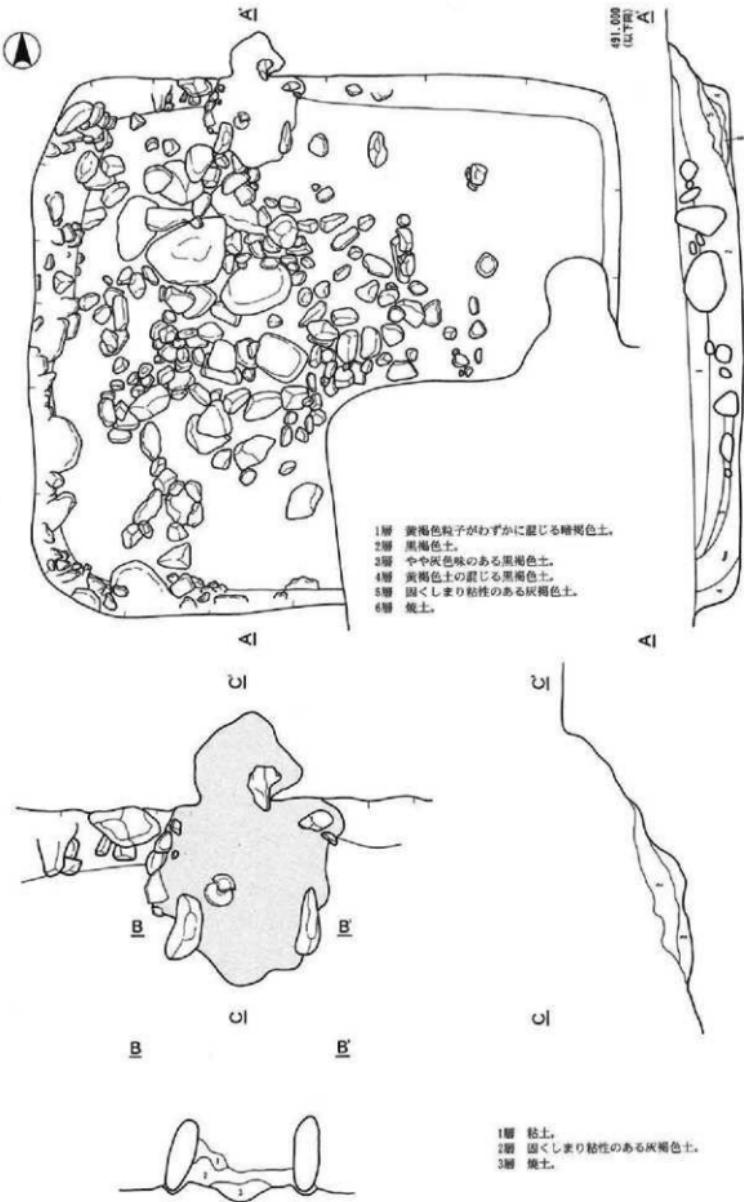
- 1層 ややしまる暗褐色土
- 2層 灰白粘土が混じる灰白色土。
- 3層 黄色粒子が混じる暗褐色土。
- 4層 黄色粒子がわずかに混じる暗褐色土。
- 5層 黄色粒子が少し混じる暗褐色土。
- 6層 粘土。
- 7層 黄褐色土。
- 8層 粘土。
- 9層 暗褐色土。
- 10層 黄褐色粒子と灰白粘土が混じる暗褐色土。



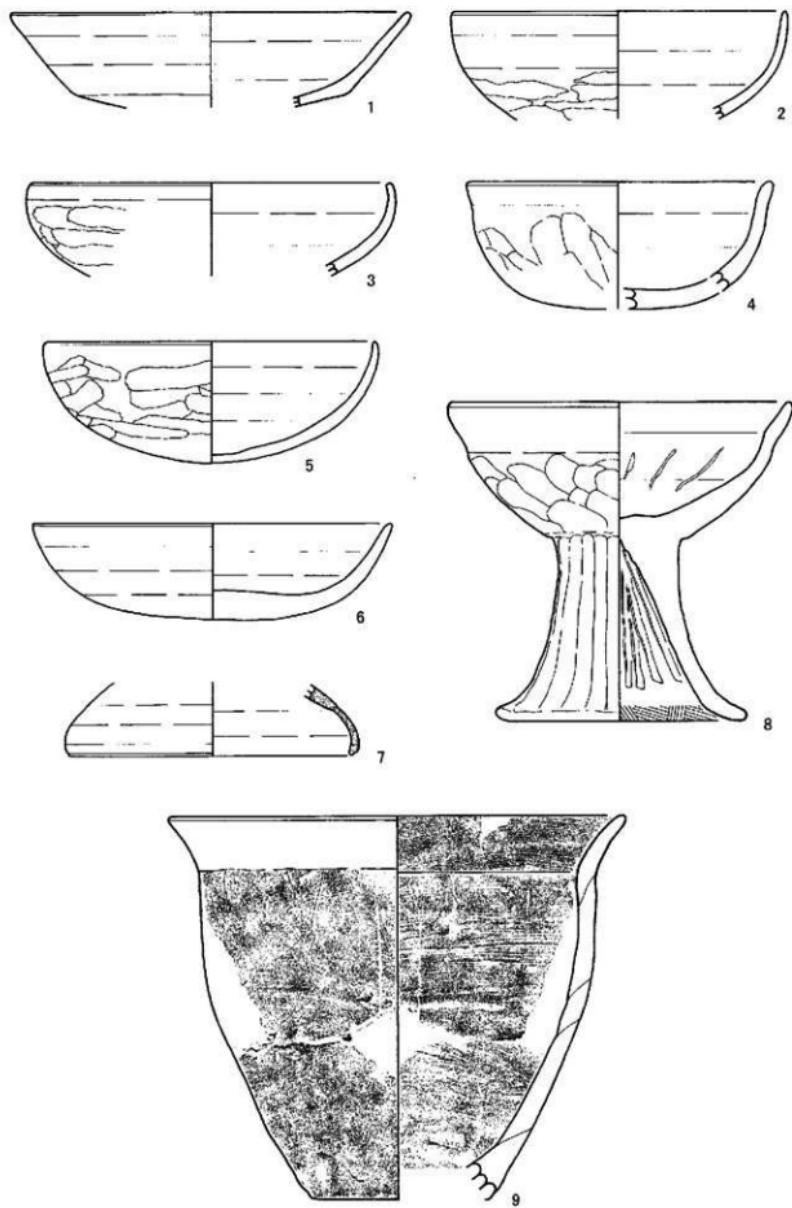
第12図 4号住居カマド (1/20) 4号住居出土遺物 (1/2)



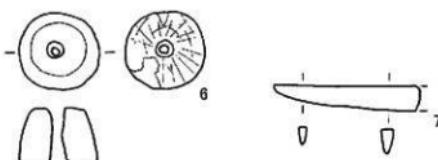
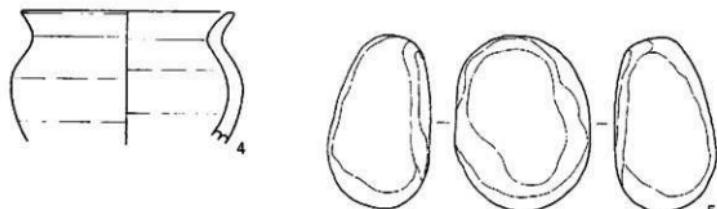
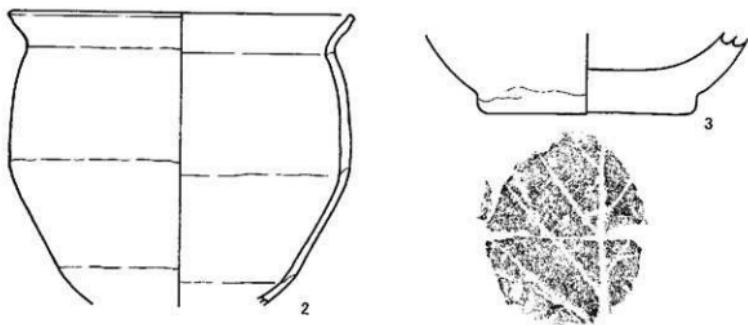
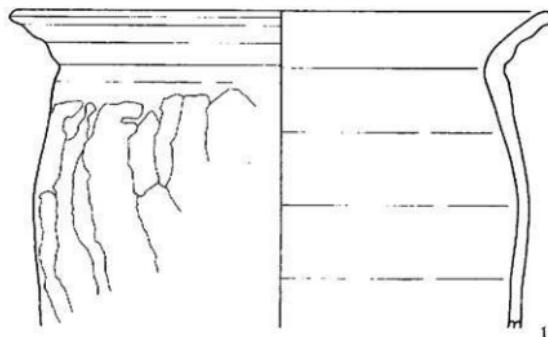
第13圖 4號住居出土遺物 (1/2)



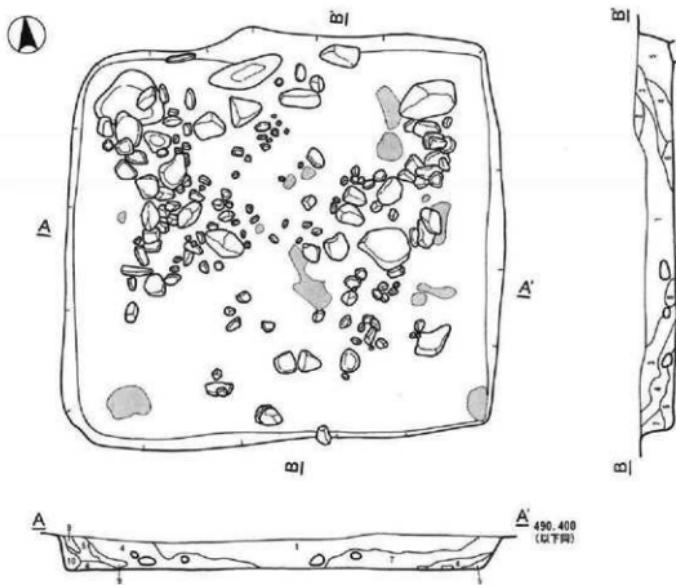
第14図 5号住居 (1/40) 5号住居カマド (1/20)



第15图 5号住居出土遗物 (1/2)



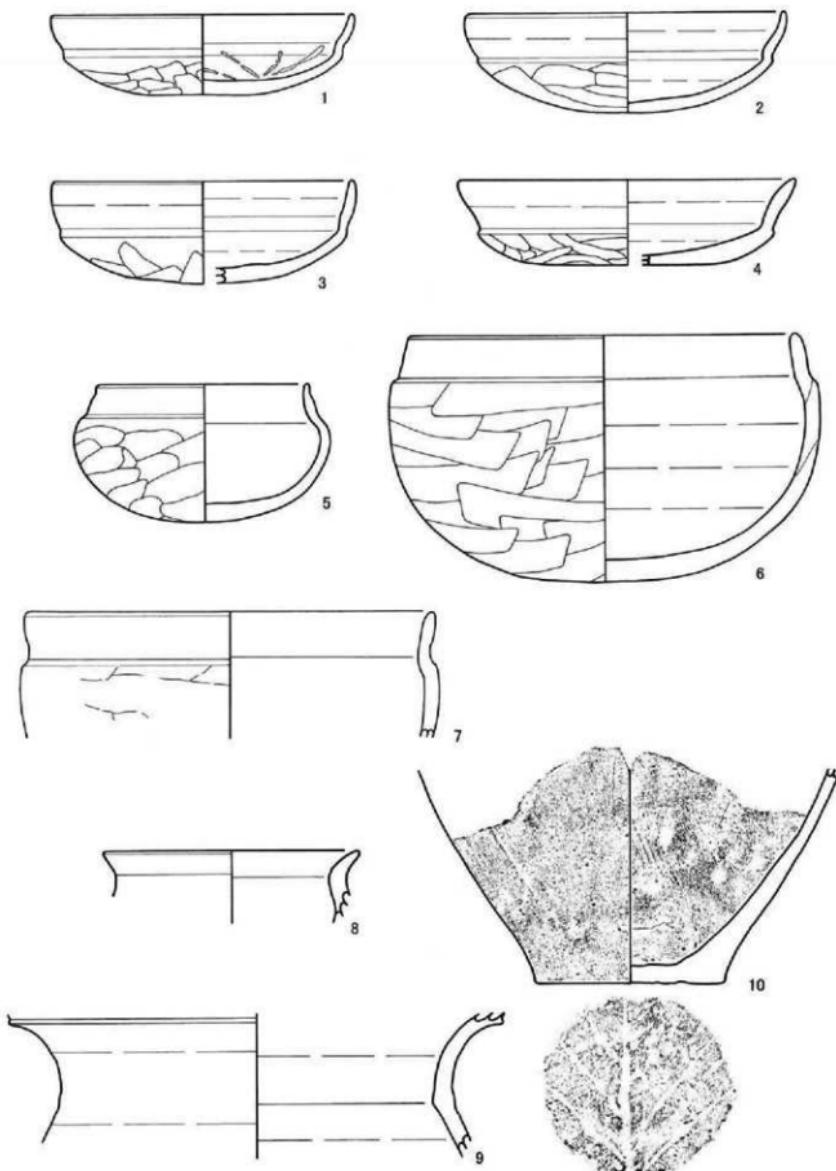
第16図 5号住居出土遺物 (1/2、2 1/4)



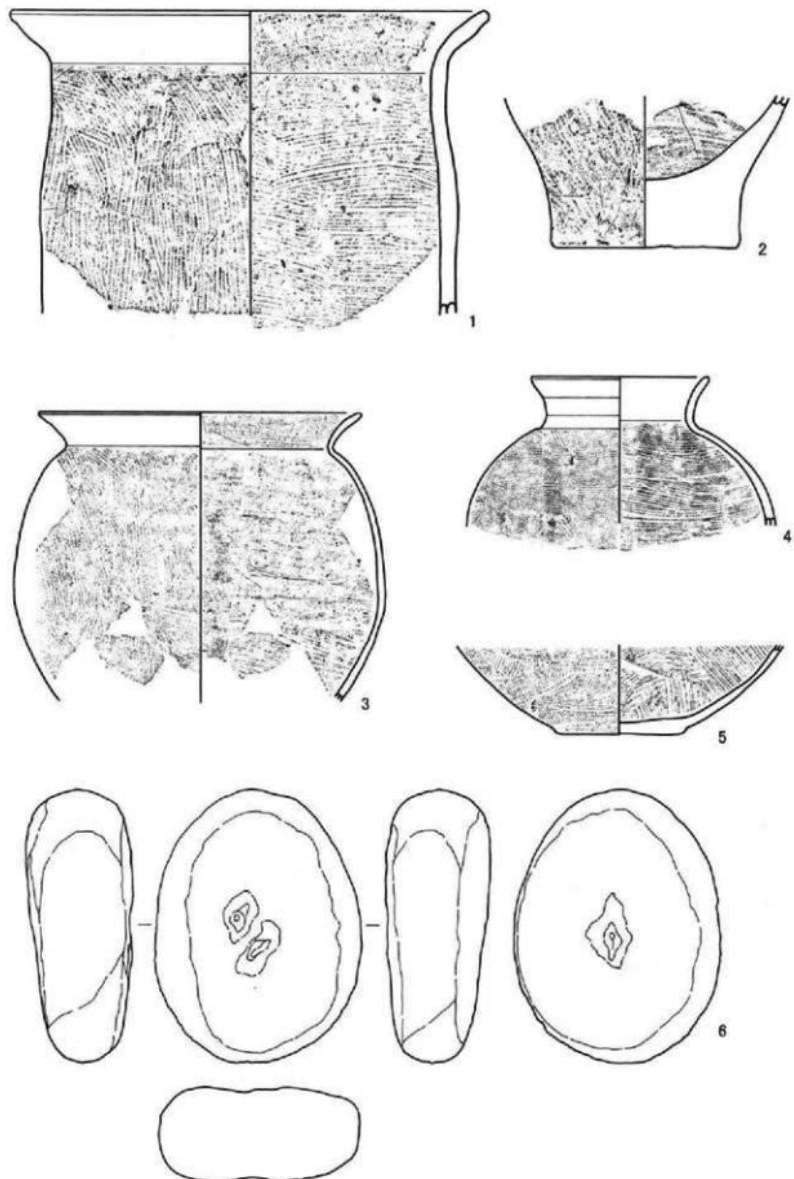
- 1層 焼土と炭粒子が混じるしまりのない黒色土。
 2層 やや固い暗褐色土。
 3層 焼土粒子が若干混じる暗褐色土。
 4層 黄褐色粒子が多く混じる暗褐色土。
 5層 黄褐色粒子がやや混じる暗褐色土。
 6層 焼土粒子、黄褐色粒子が混じる暗褐色土。
 7層 しまりのない暗褐色土。
 8層 焼土。
 9層 黒褐色土。
 10層 くすんだ黄褐色土。



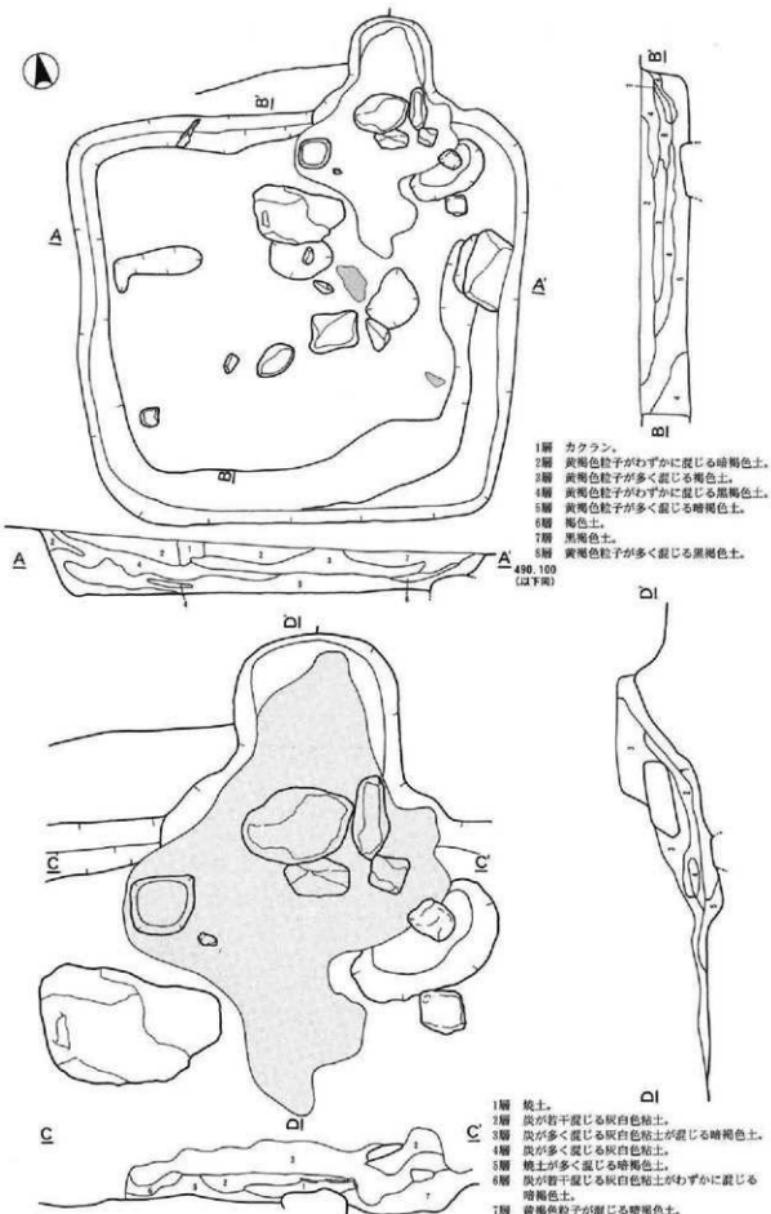
第17図 8号住居 (1/60)

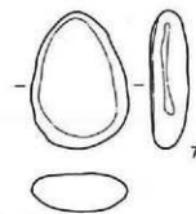
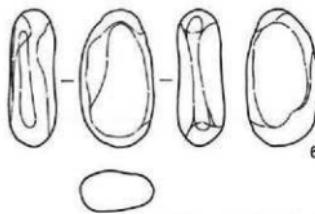
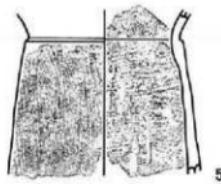
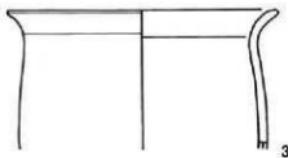
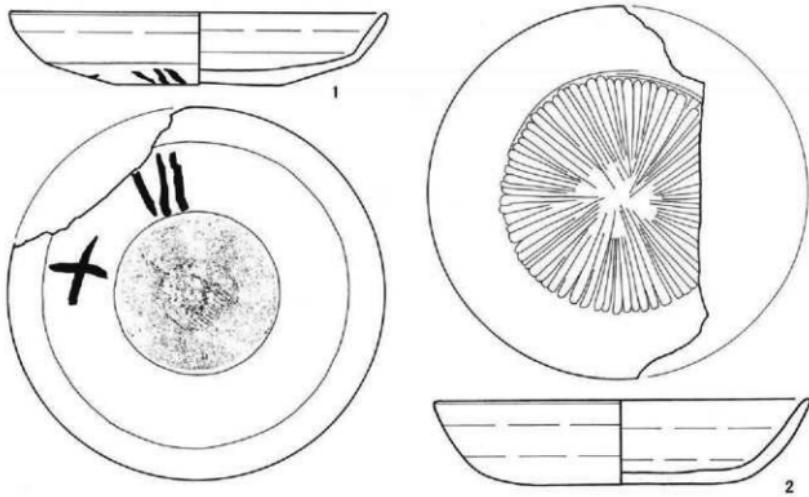


第18図 8号住居出土遺物 (1/2)

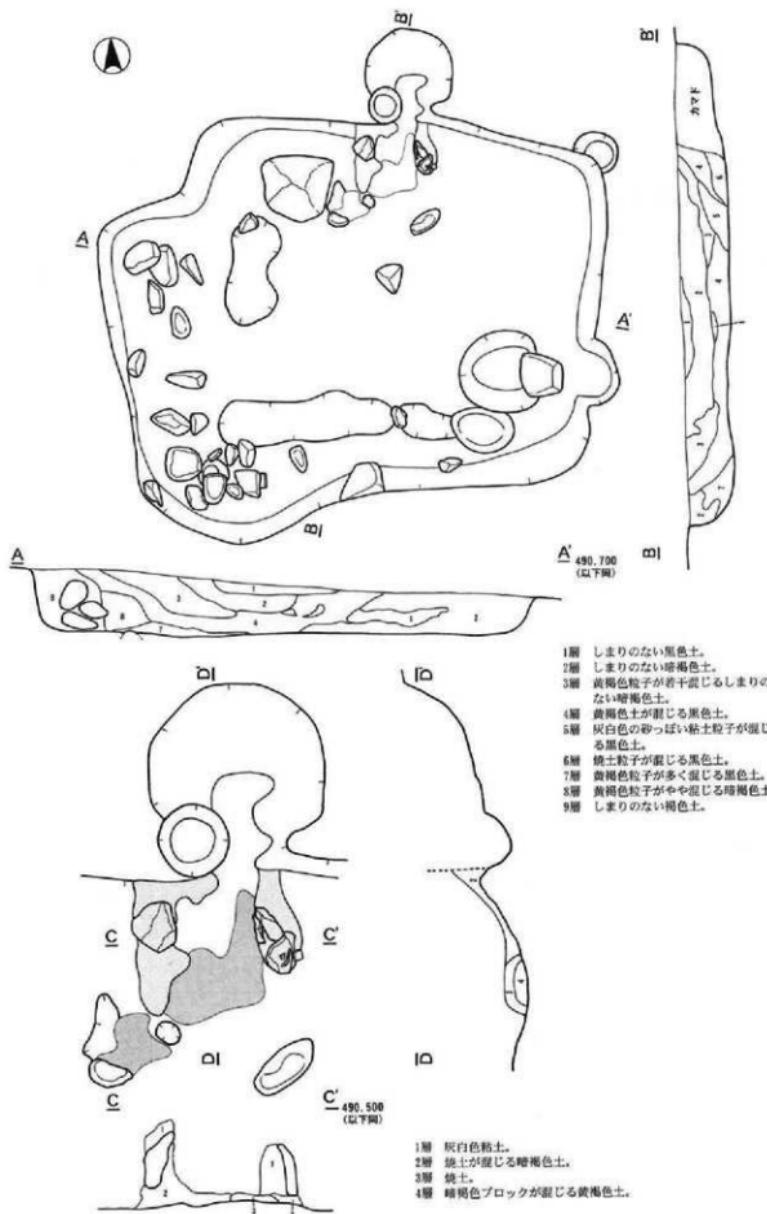


第19圖 8号住居出土遺物 (1/2、3~5 1/4)

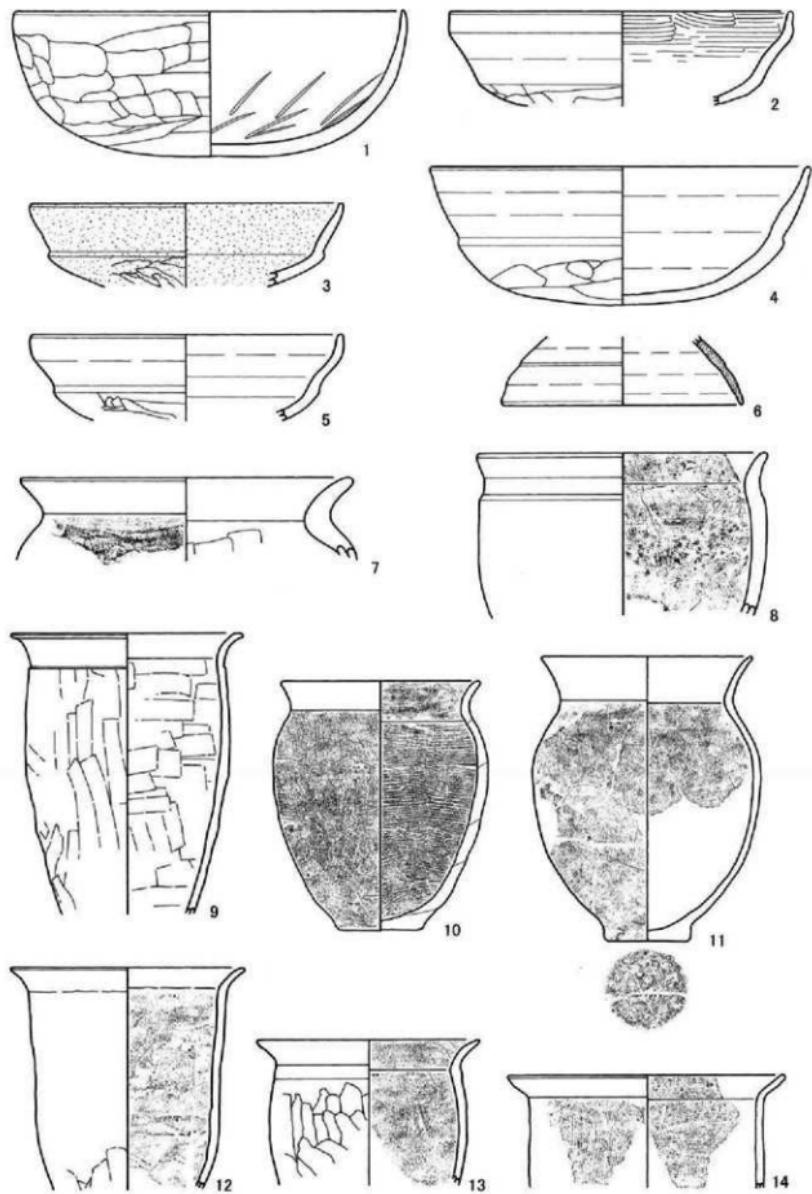




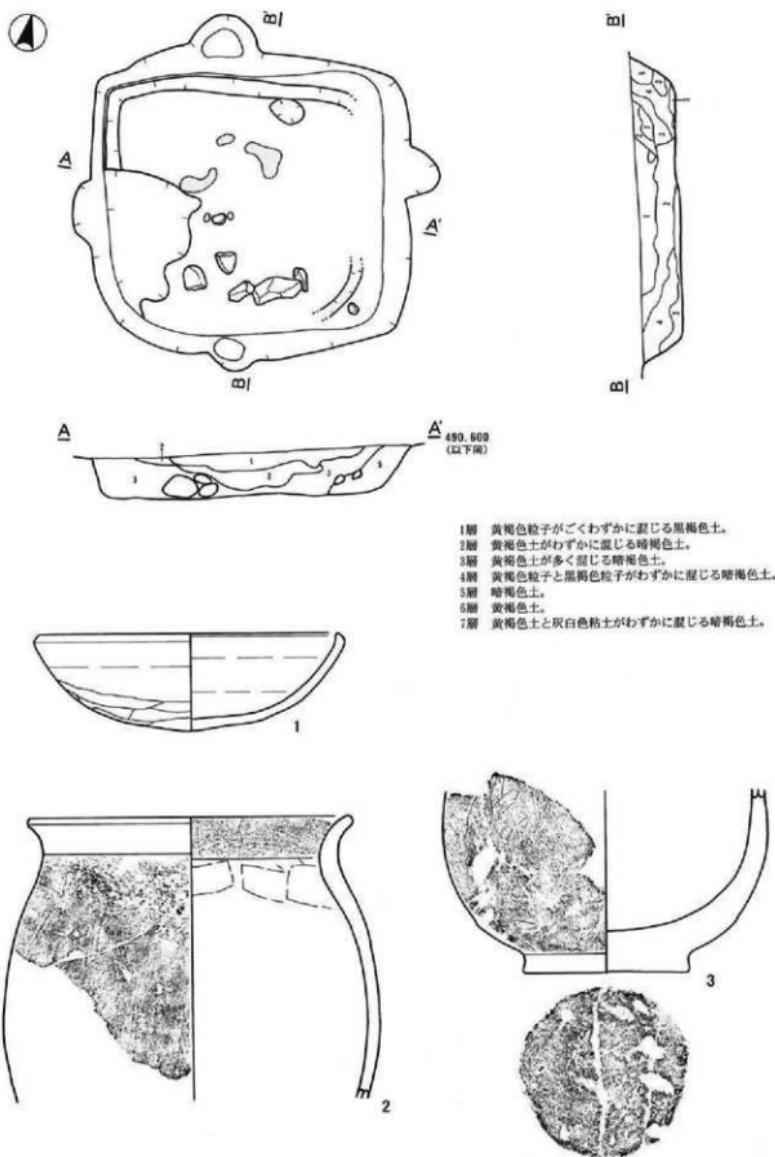
第21圖 9号住居出土遺物 (1/2、3~7 1/4)



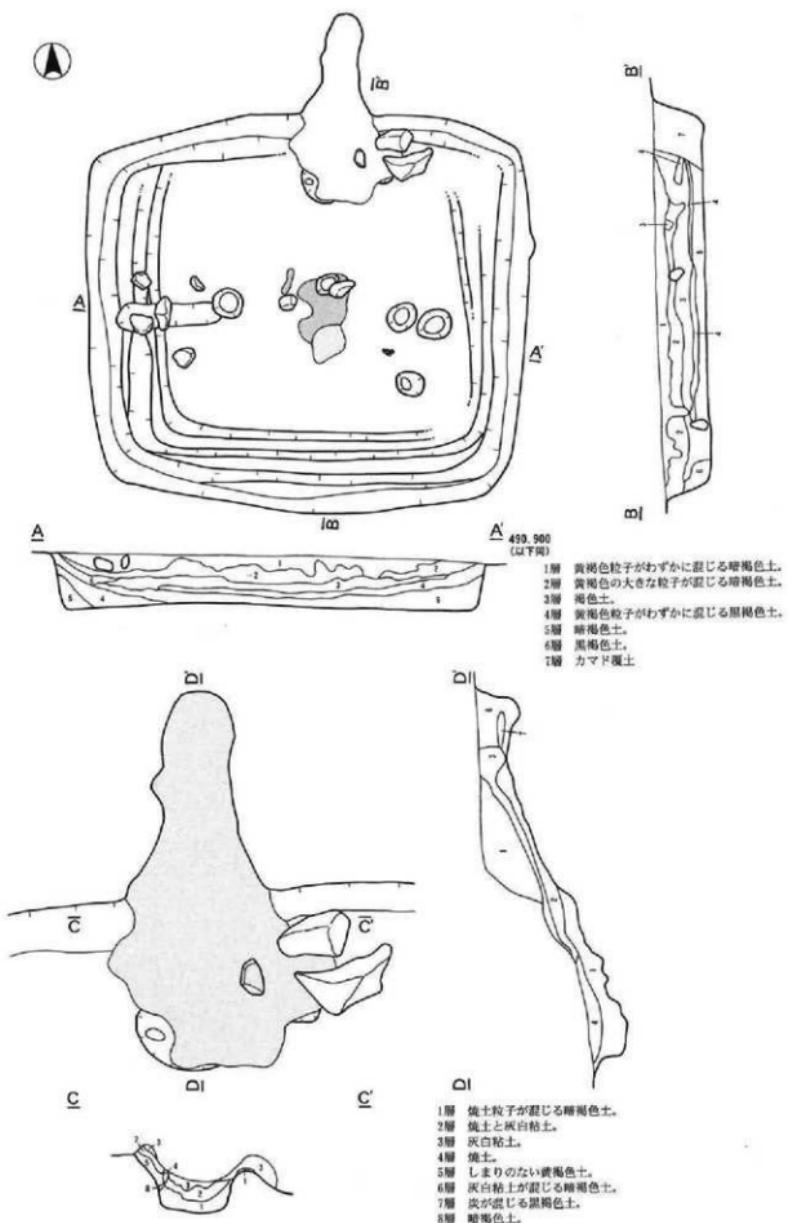
第22図 10号住居 (1/40) 10号住居カマド (1/20)



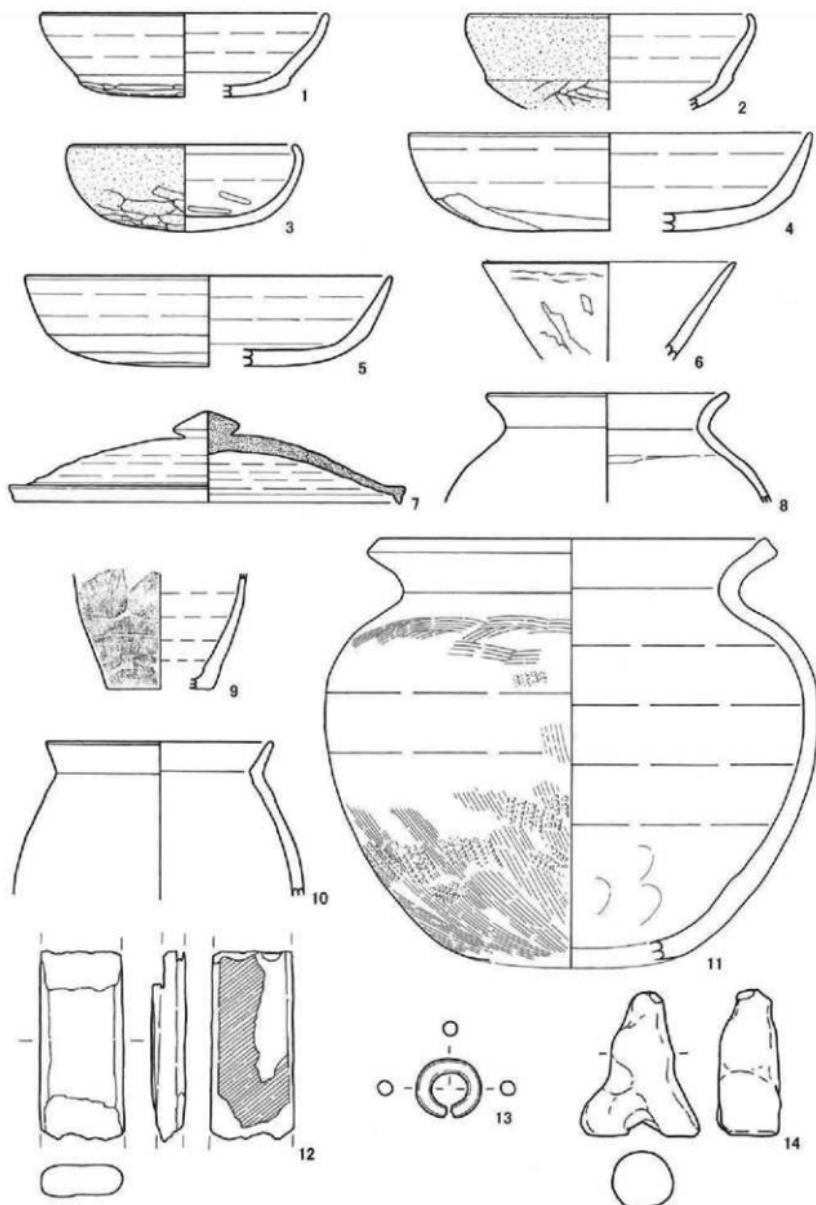
第23圖 10号住居出土遺物 (1/2、 9~14 1/4)



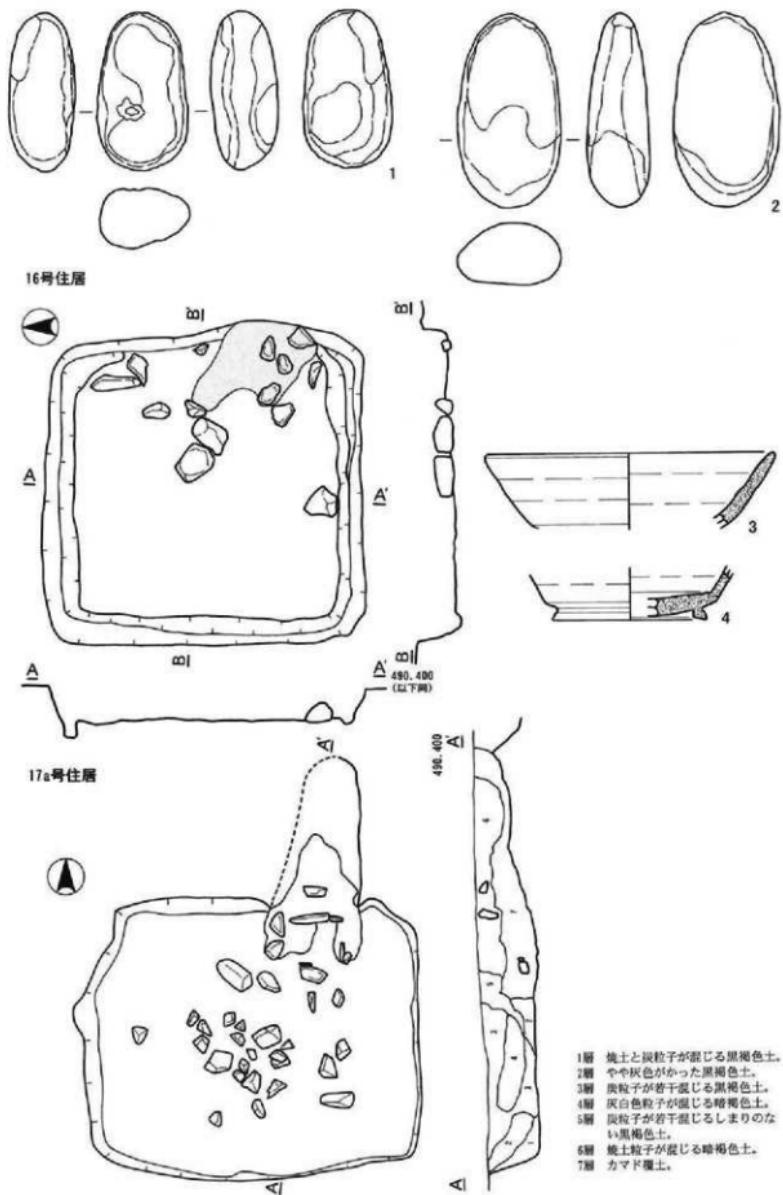
第24図 11号住居 (1/40) 11号住居出土遺物 (1/2)



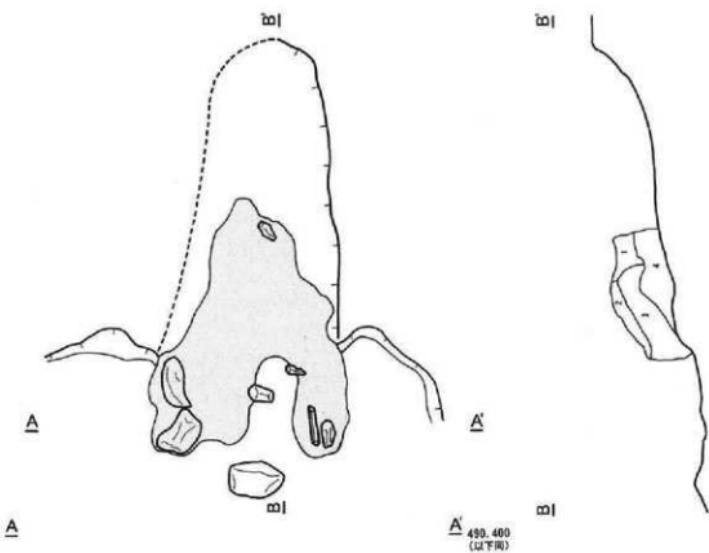
第25図 12号住居 (1/60) 12号住居カマド (1/30)



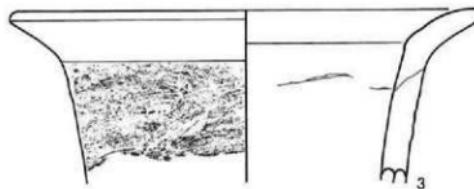
第26図 12号住居出土遺物 (1/2、 6・8~10 1/4)



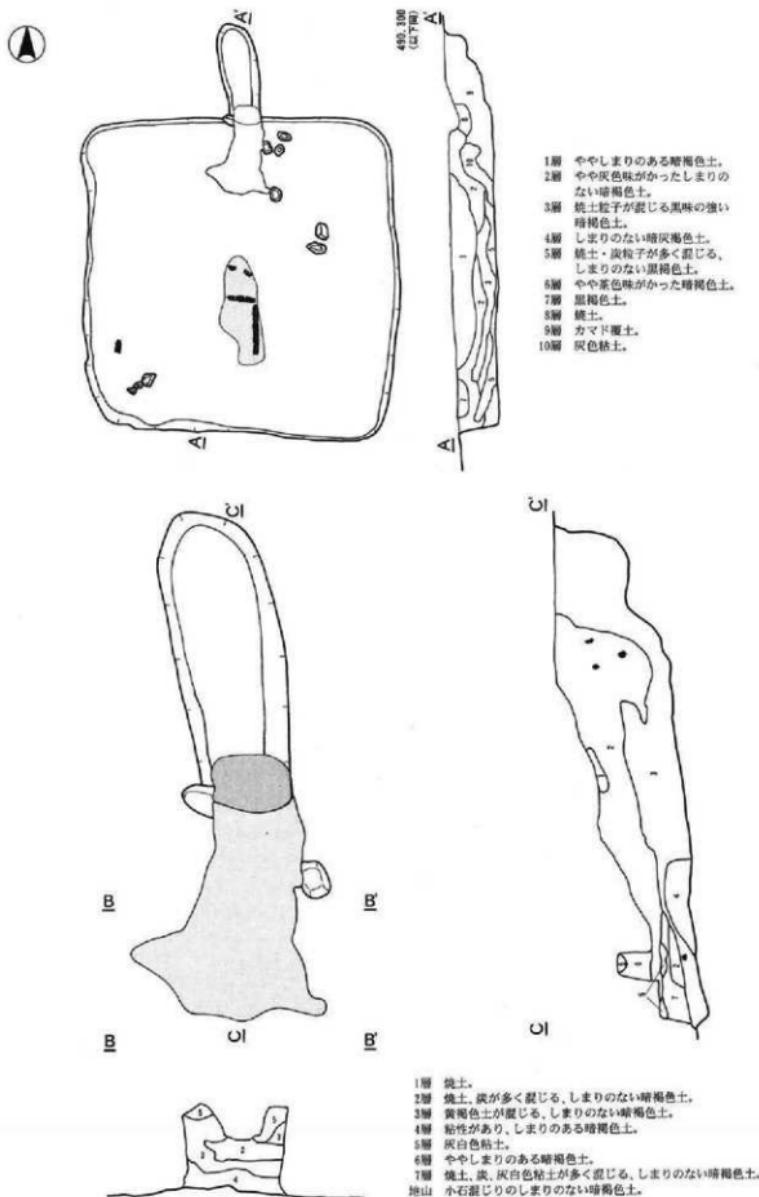
第27図 12号住居出土遺物 (1/4) 16号住居 (1/40) 16号住居出土遺物 (1/2) 17a号住居 (1/40)



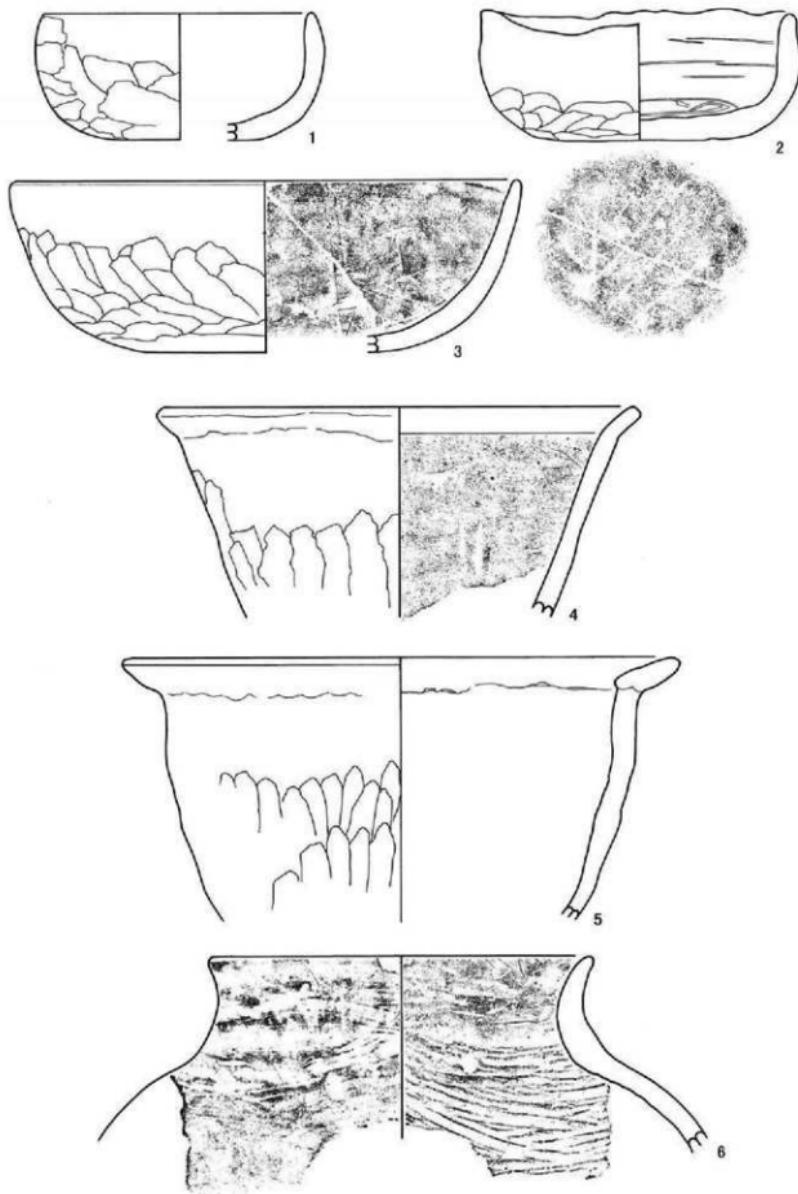
1層 灰白色粘土。
2層 燃土が混じる灰褐色粘土。
3層 燃土粒子が多く混じる暗褐色粘土。
4層 灰白色粘土の混じる暗褐色粘土。



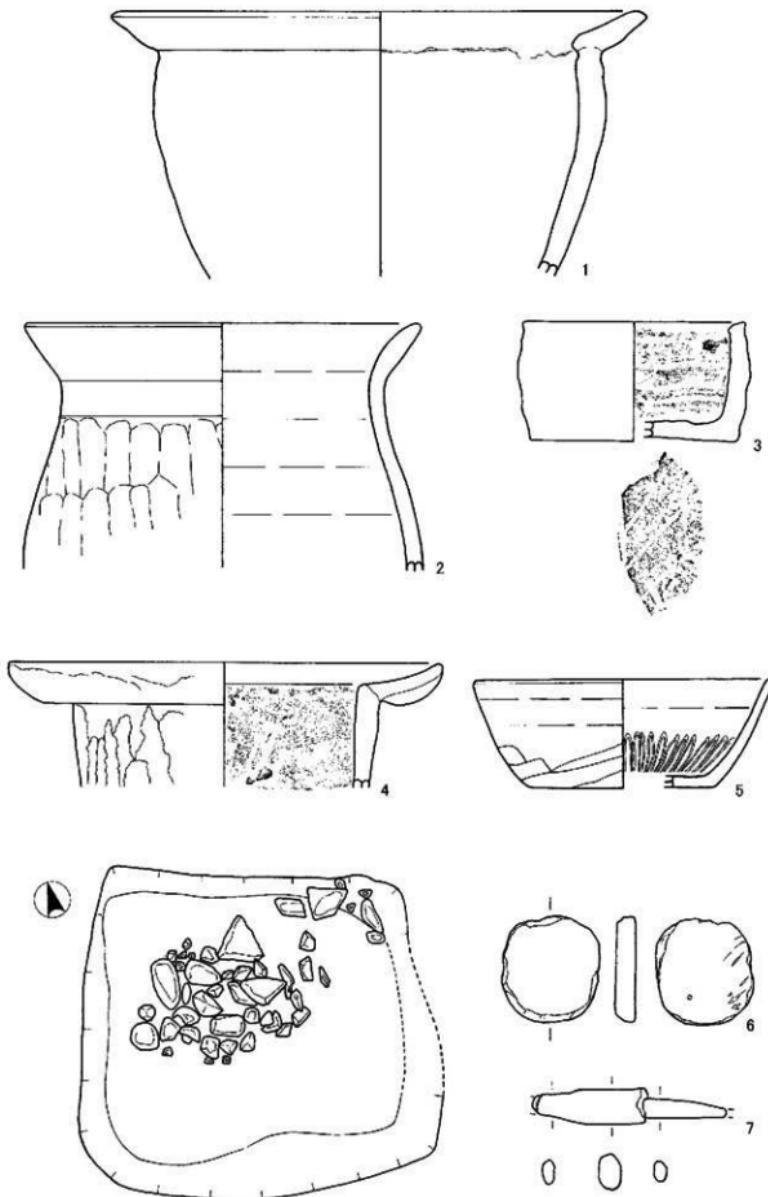
第28図 17a号住居カマド (1/20) 17a号住居出土遺物 (1/2)



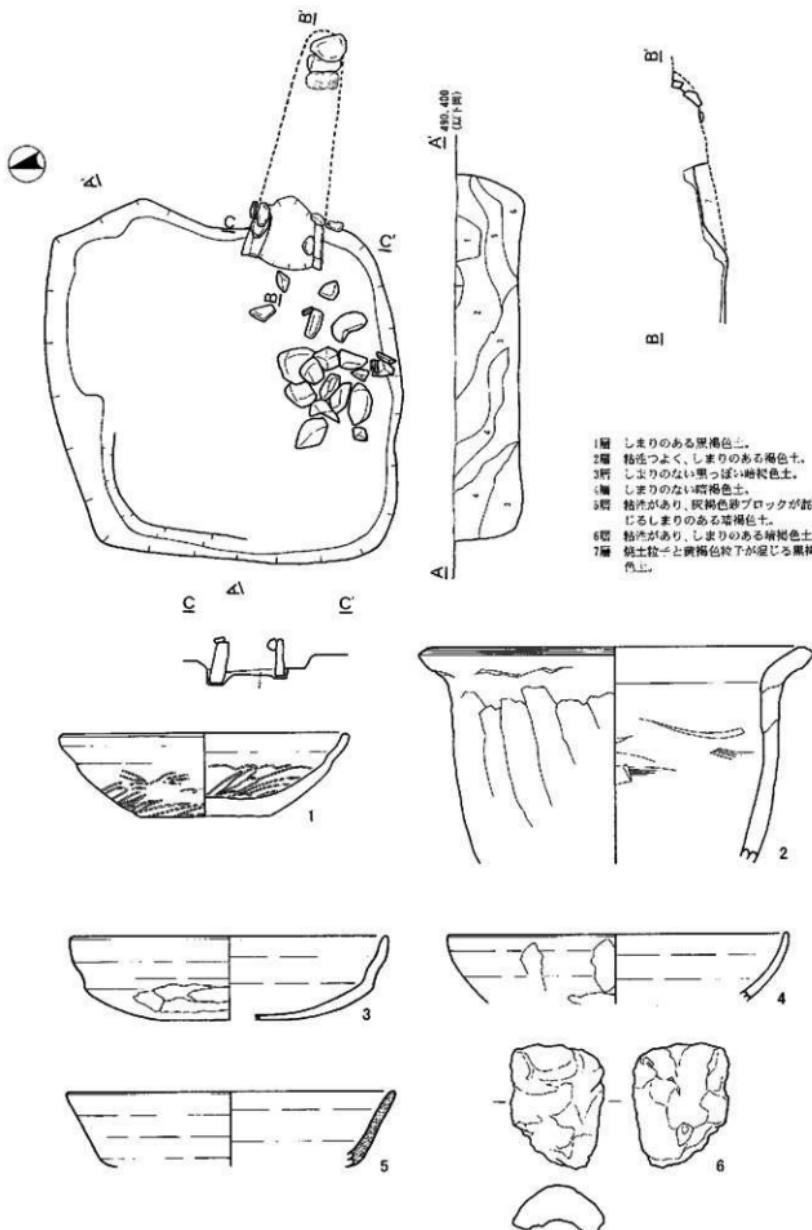
第29図 17b号住居 (1/60) 17b号住居カマド (1/20)



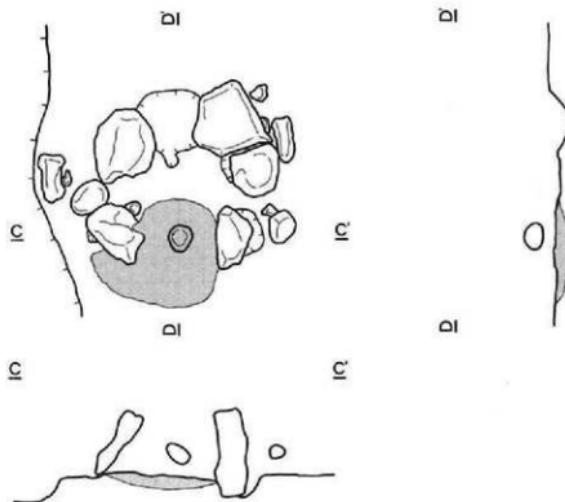
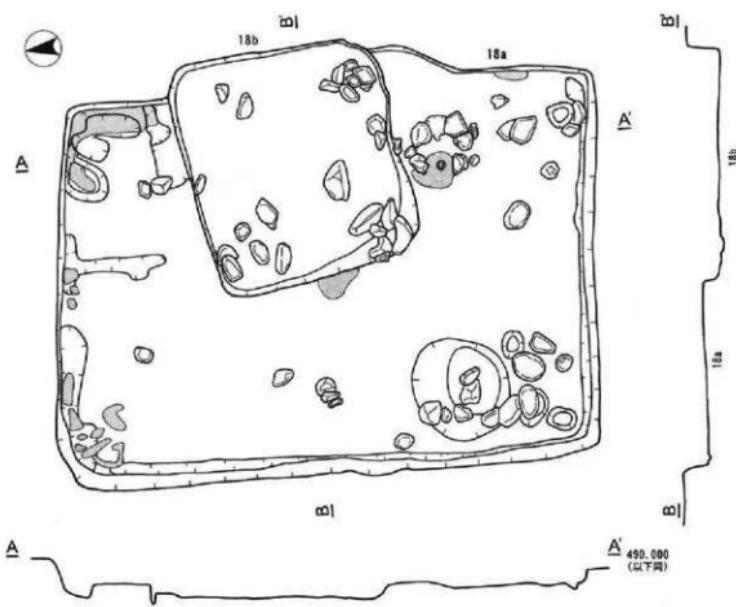
第30図 17b住居出土遺物 (1/2)



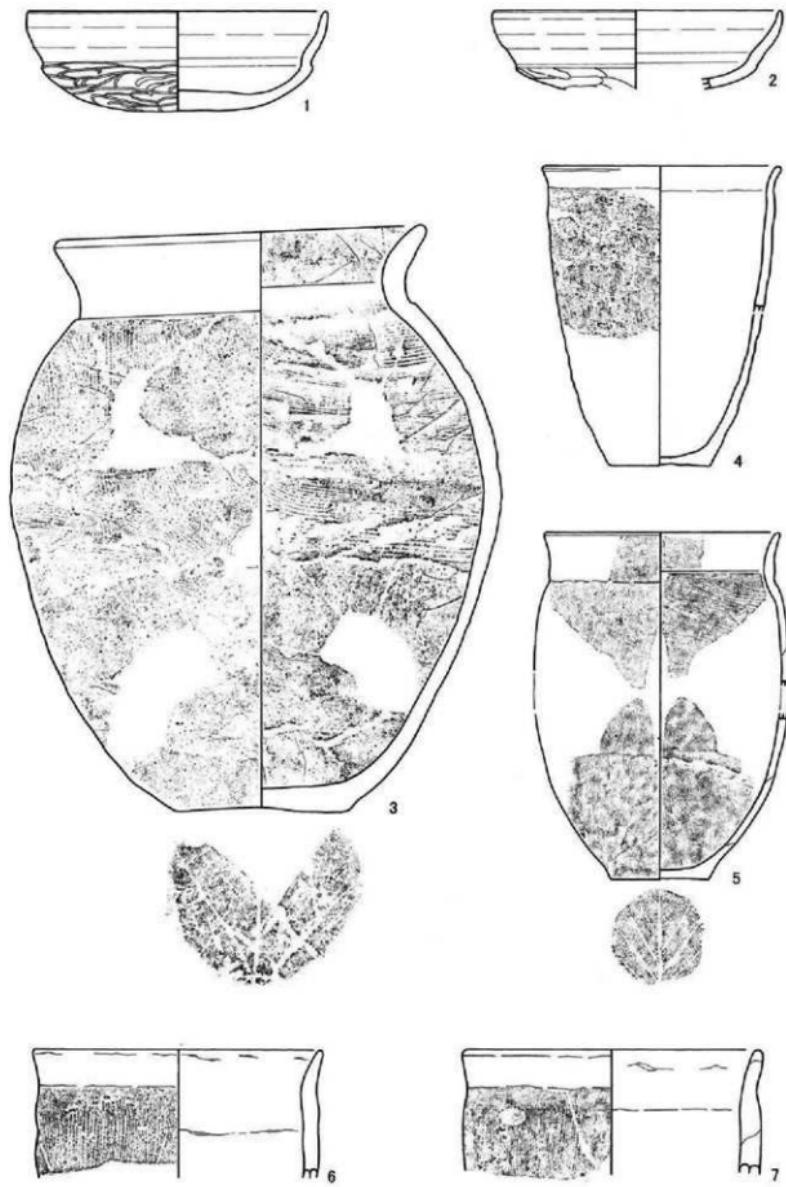
第31图 17b号住居出土遗物 (1/2) 17c号住居 (1/40) 17e号出土遗物 (1/2)



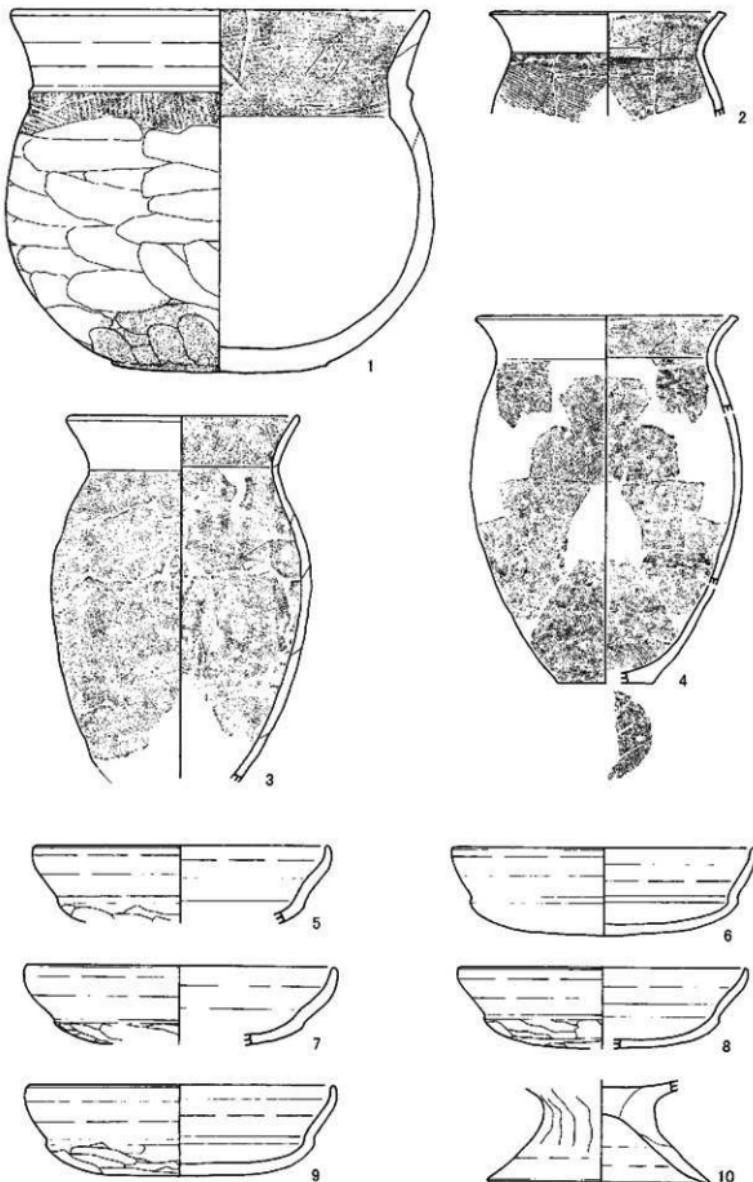
第32図 17d号住居 (1/40) 17d号住居出土遺物 (1/2) 17号住居出土遺物 (1/2)



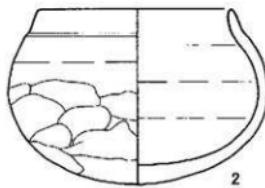
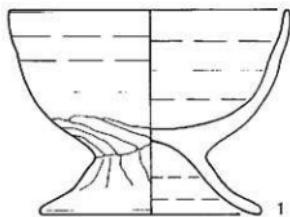
第33図 18a号・18b号住居 (1/40) 18b号住居カマ F (1/20)



第34圖 18a号住居出土遺物 (1/2、 4・5 1/4)

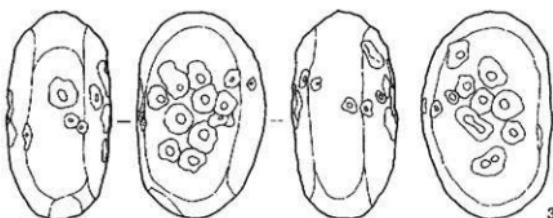


第35図 18a号住居出土遺物 (1/2、 2~4 1/4) 18b号住居出土遺物 (5~10 1/2)

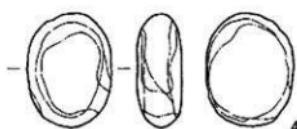


1

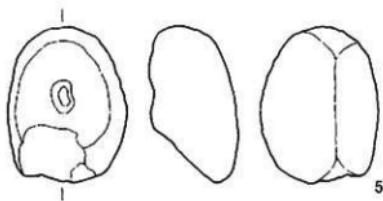
2



3



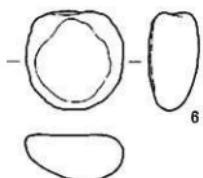
4



5

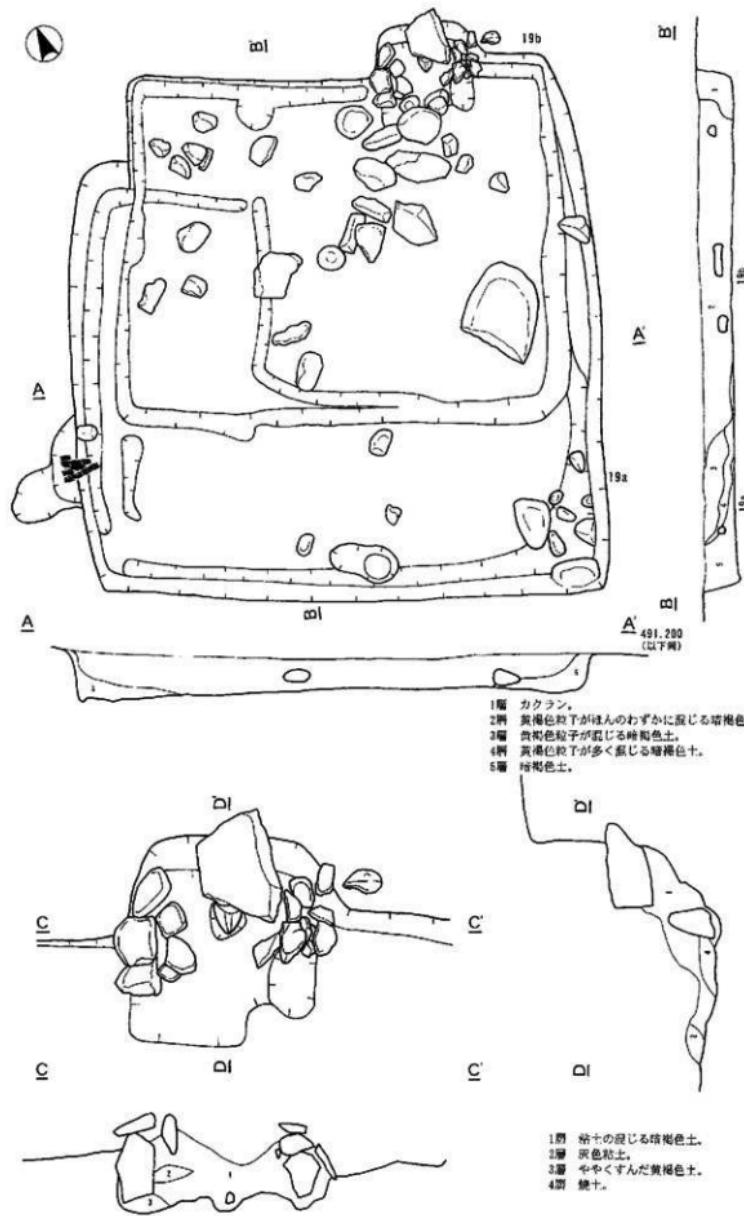


7

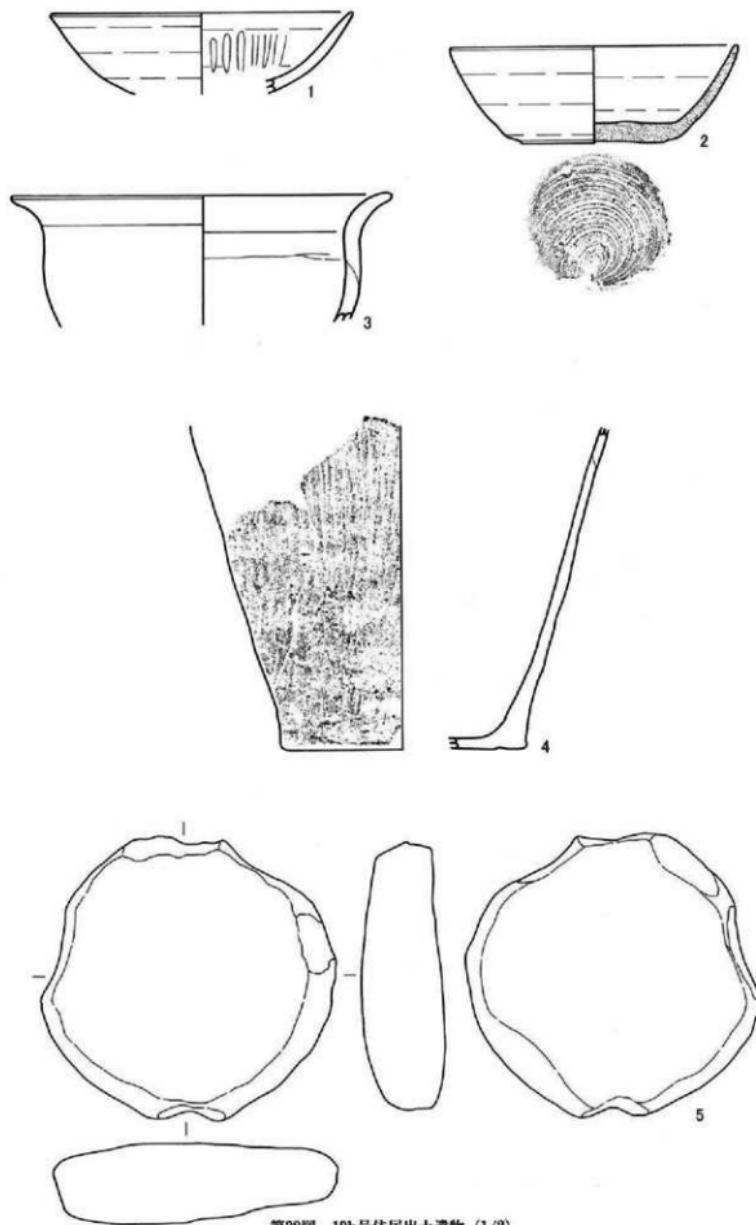


6

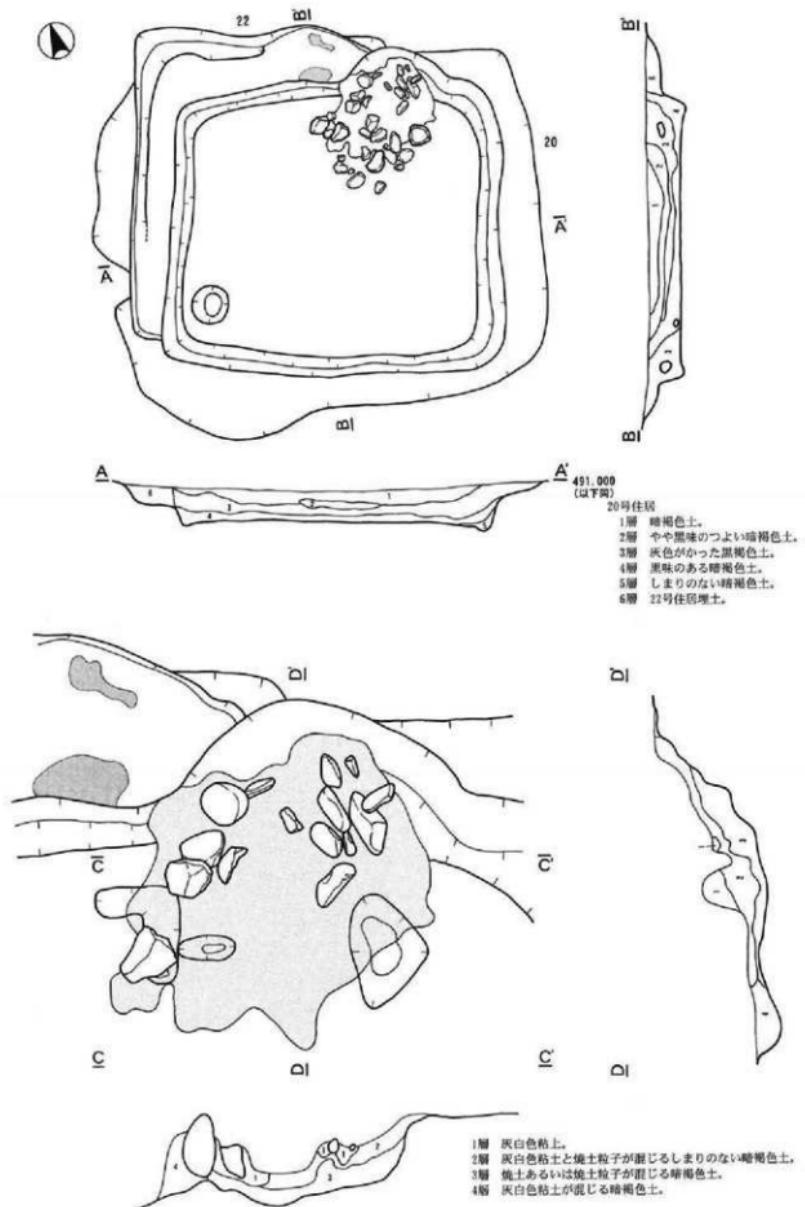
第36図 18b号住居出土遺物 (1/2, 3~6 1/4)



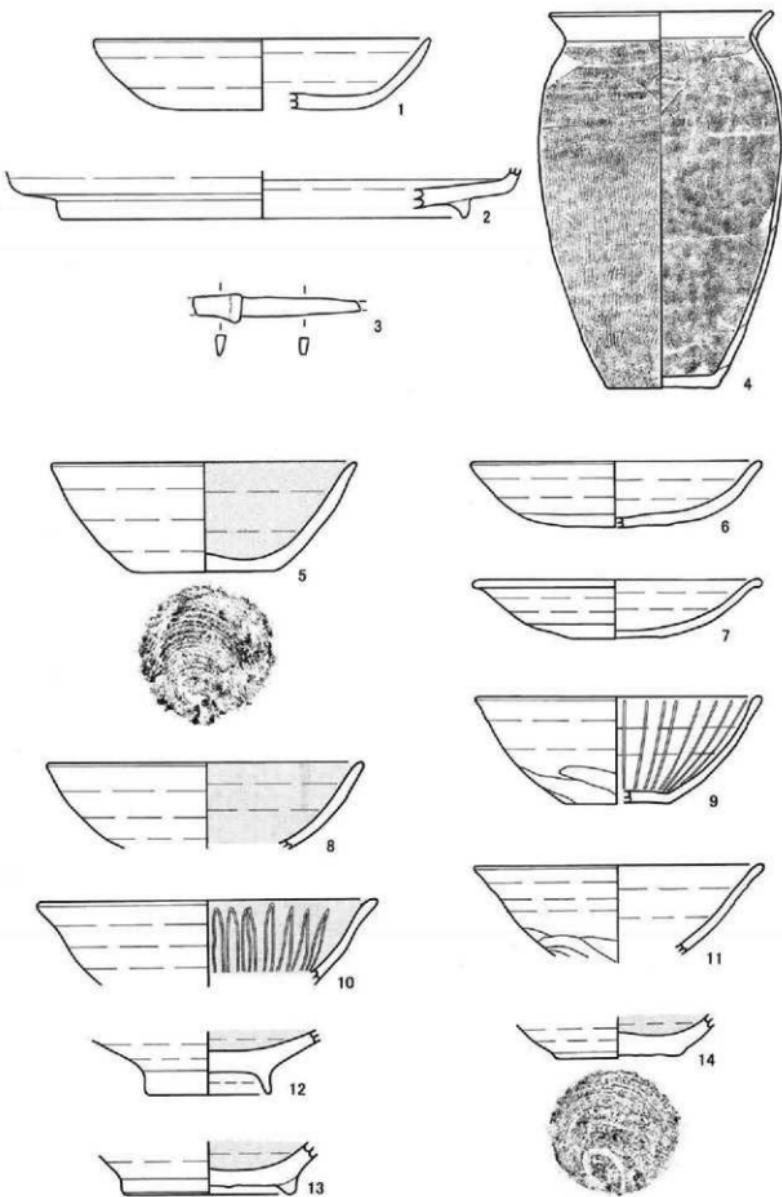
第37図 19a号・19b号住居 (1/40) 19b号住居カマド (1/20)



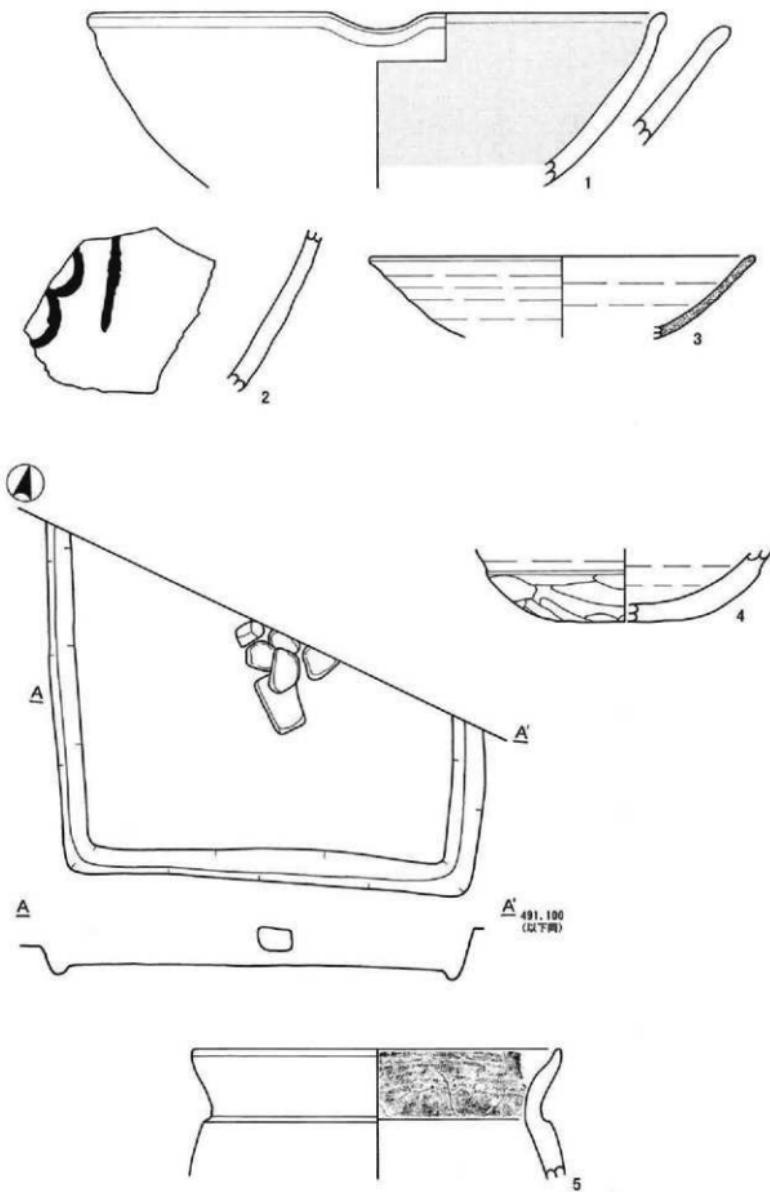
第38図 19b号住居出土遺物 (1/2)



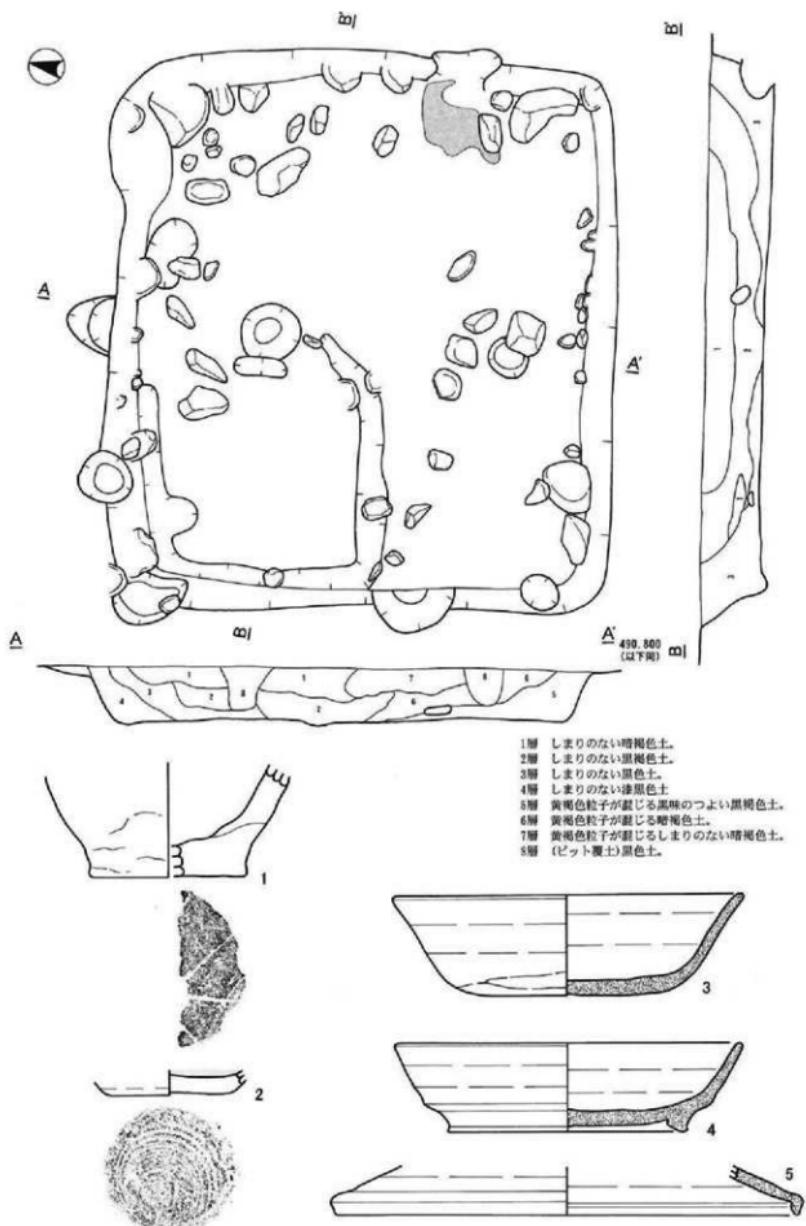
第39図 20号・22号住居 (1/60) 20号住居カマド (1/20)



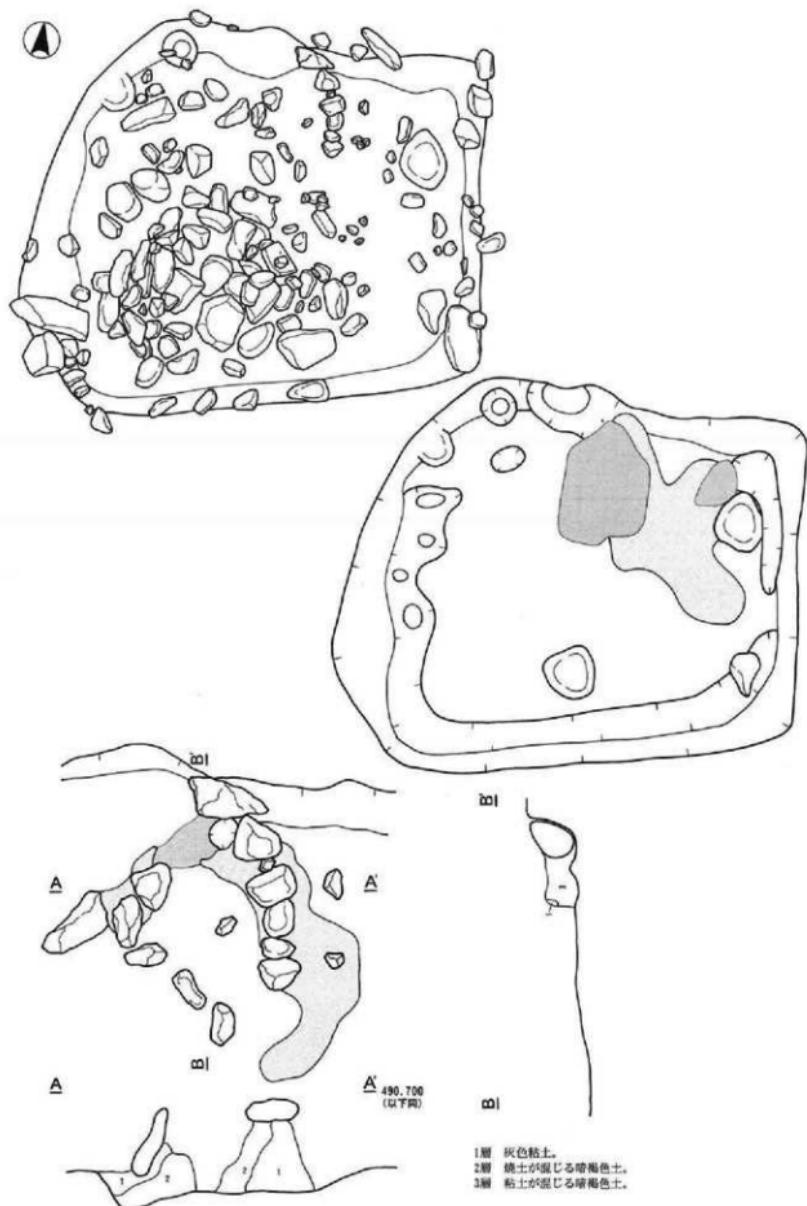
第40圖 20号住居出土遺物 (1~3 1/2, 4 1/4) 21号住居出土遺物 (8~14 1/2)



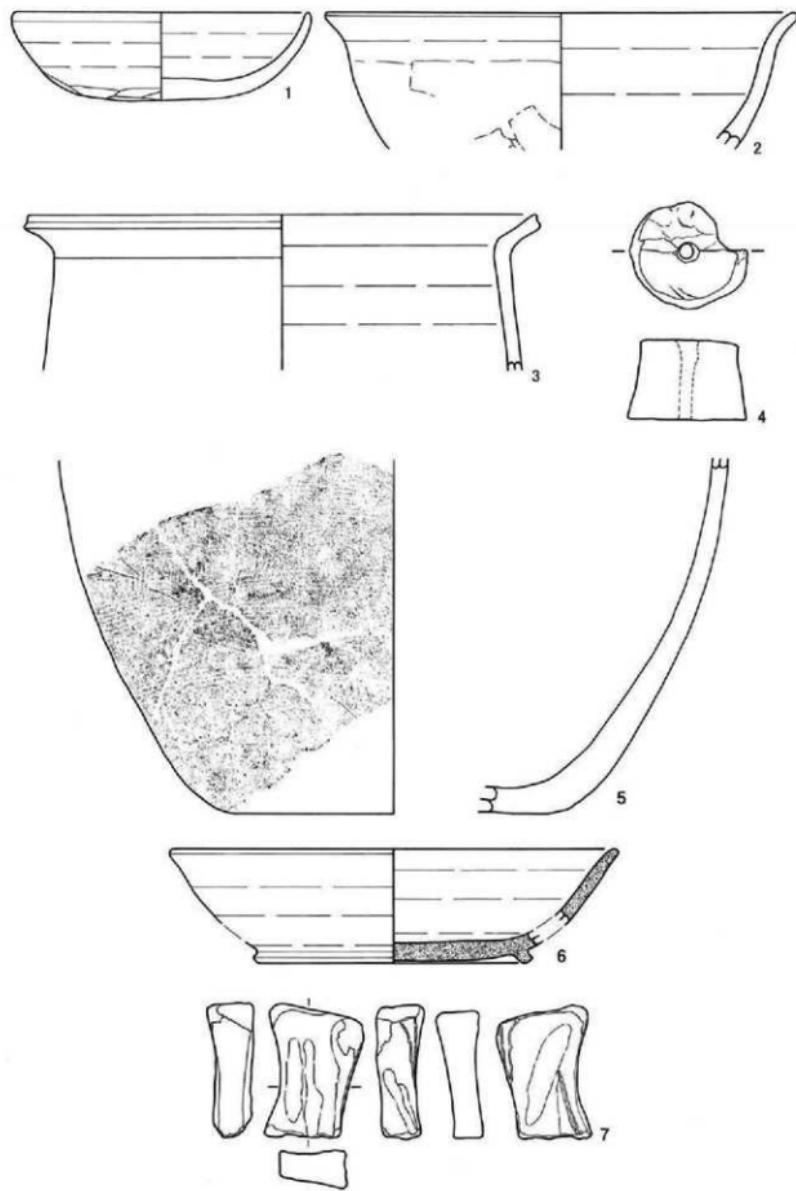
第41圖 21号住居出土遺物 (1/2) 24号住居 (1/40) 24号住居出土遺物 (1/2)



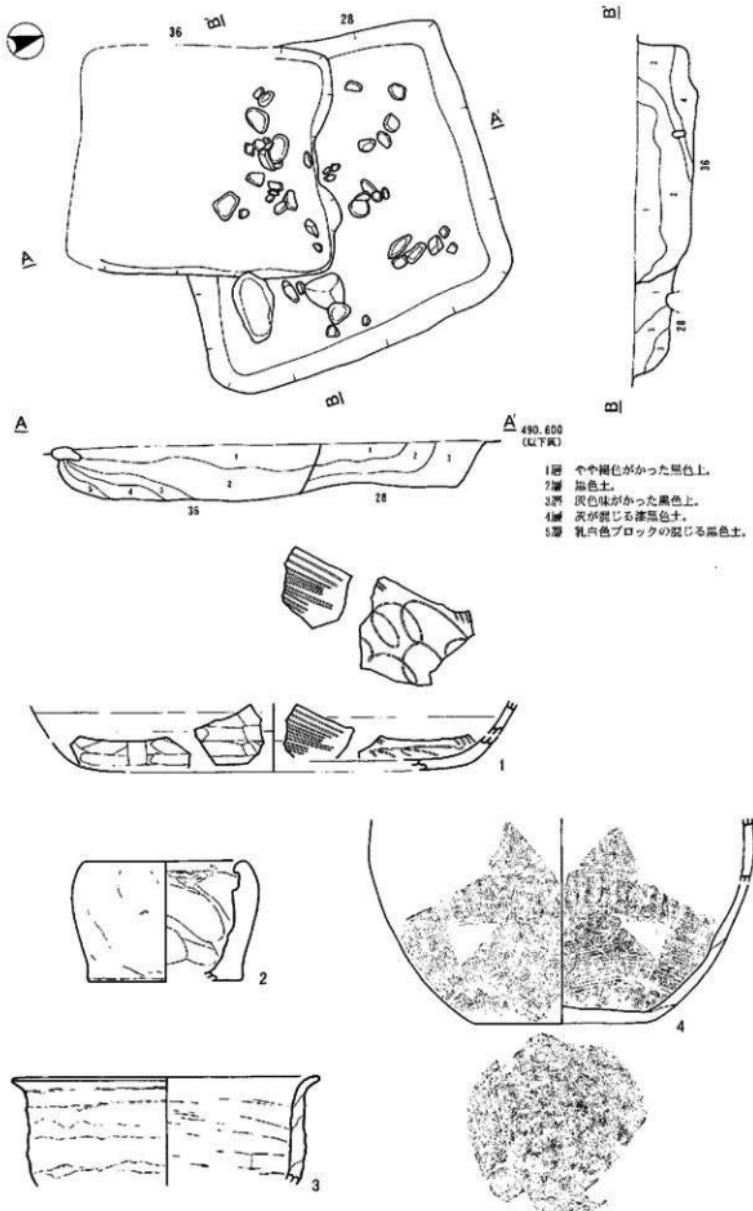
第42図 26号住居 26号住居出土遺物 (1/2)



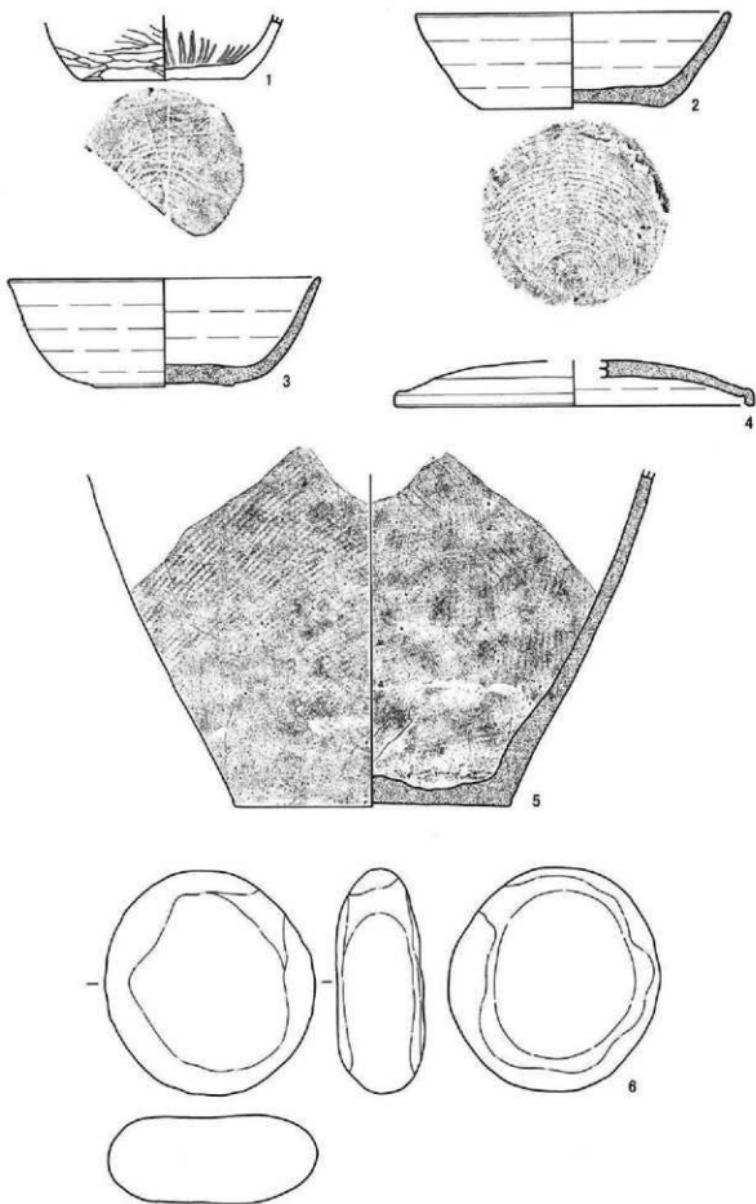
第43図 27号住居 (1/40) 27号住居カマド (1/20)



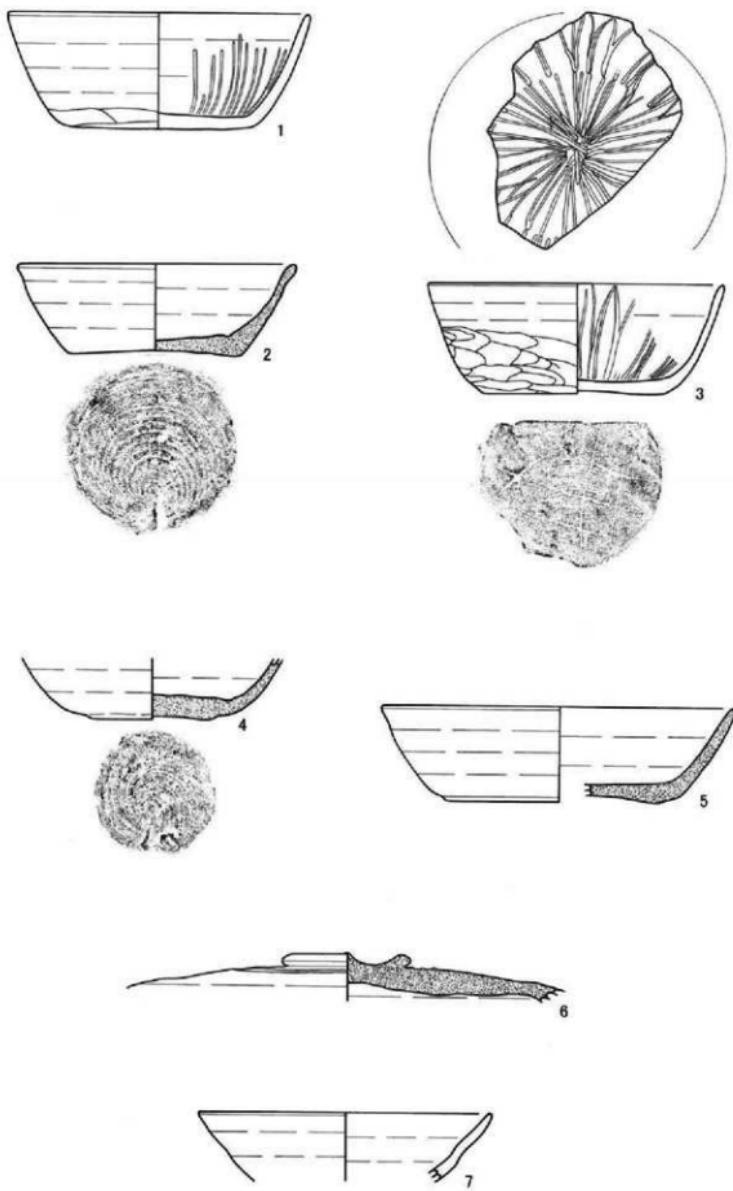
第44图 27号住居出土遺物 (1/2)



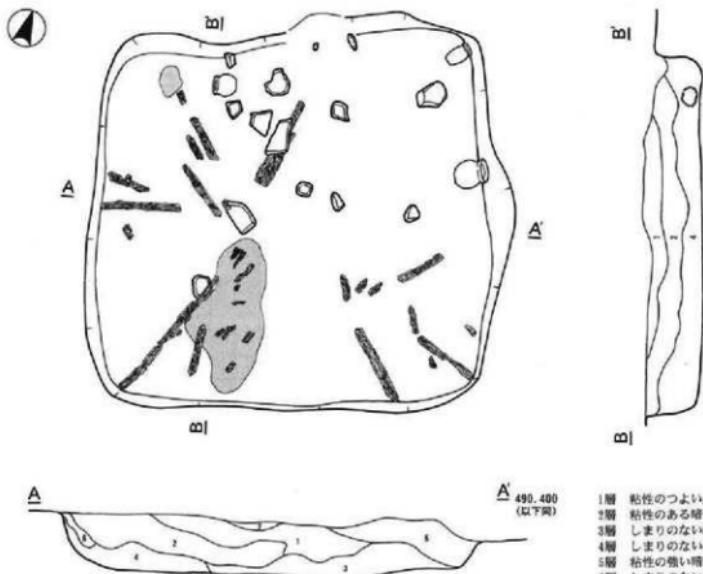
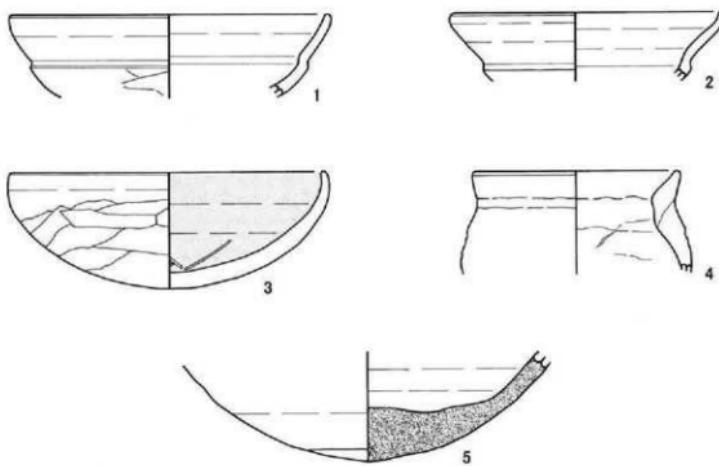
第45図 28号・36号住居 (1/60) 28号住居出土遺物 (1/2、3・4 1/4)



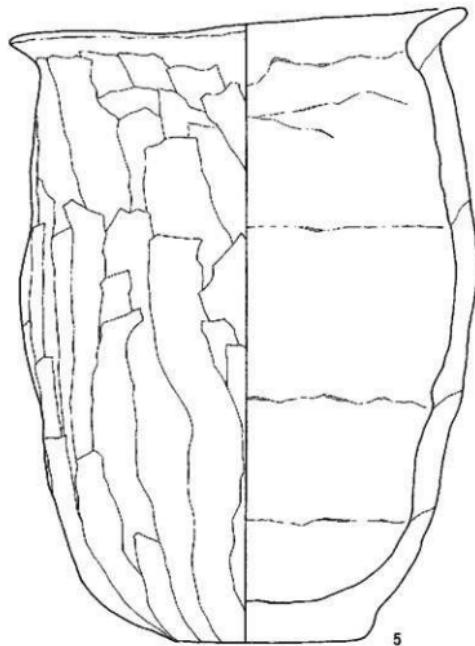
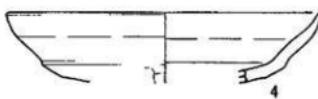
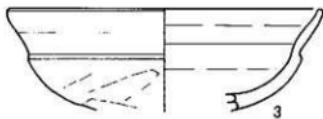
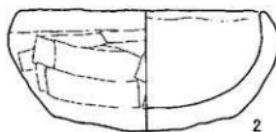
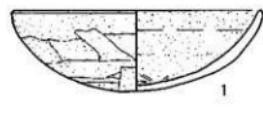
第46圖 28號住居出土遺物 (1/2)



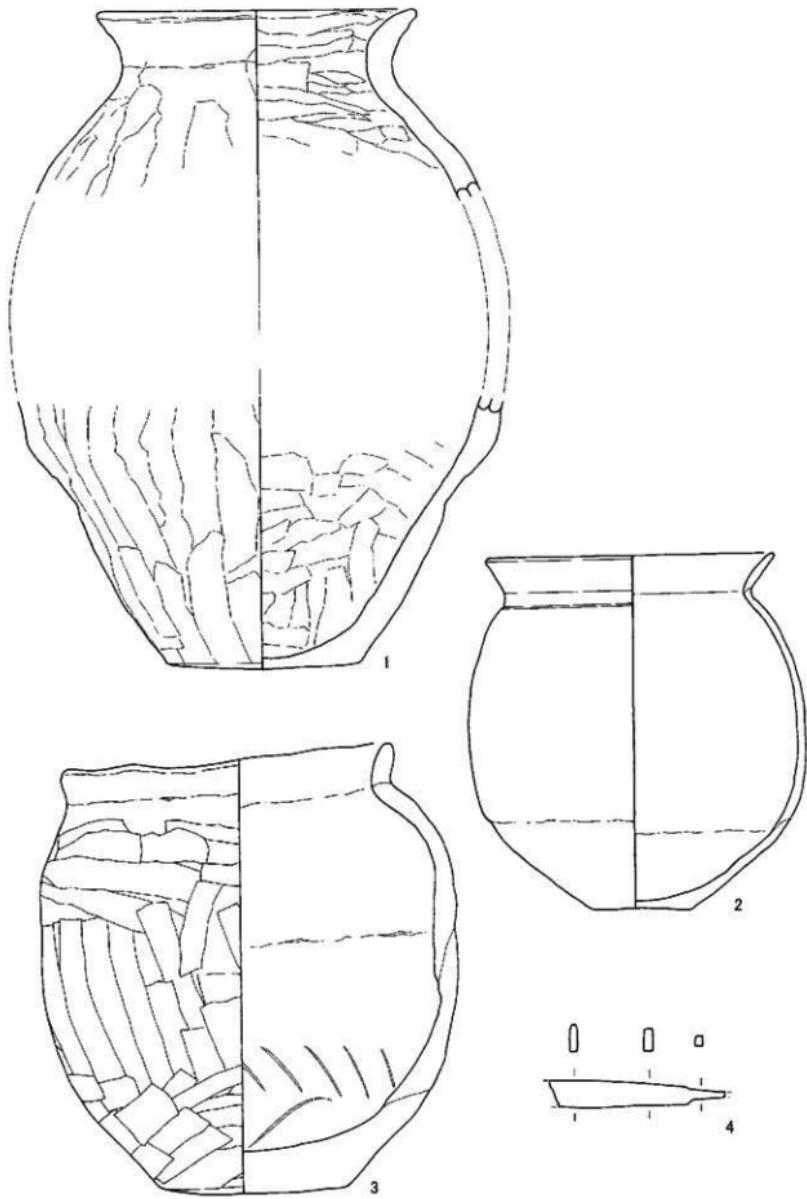
第47图 36号住居出土遗物 (1/2)



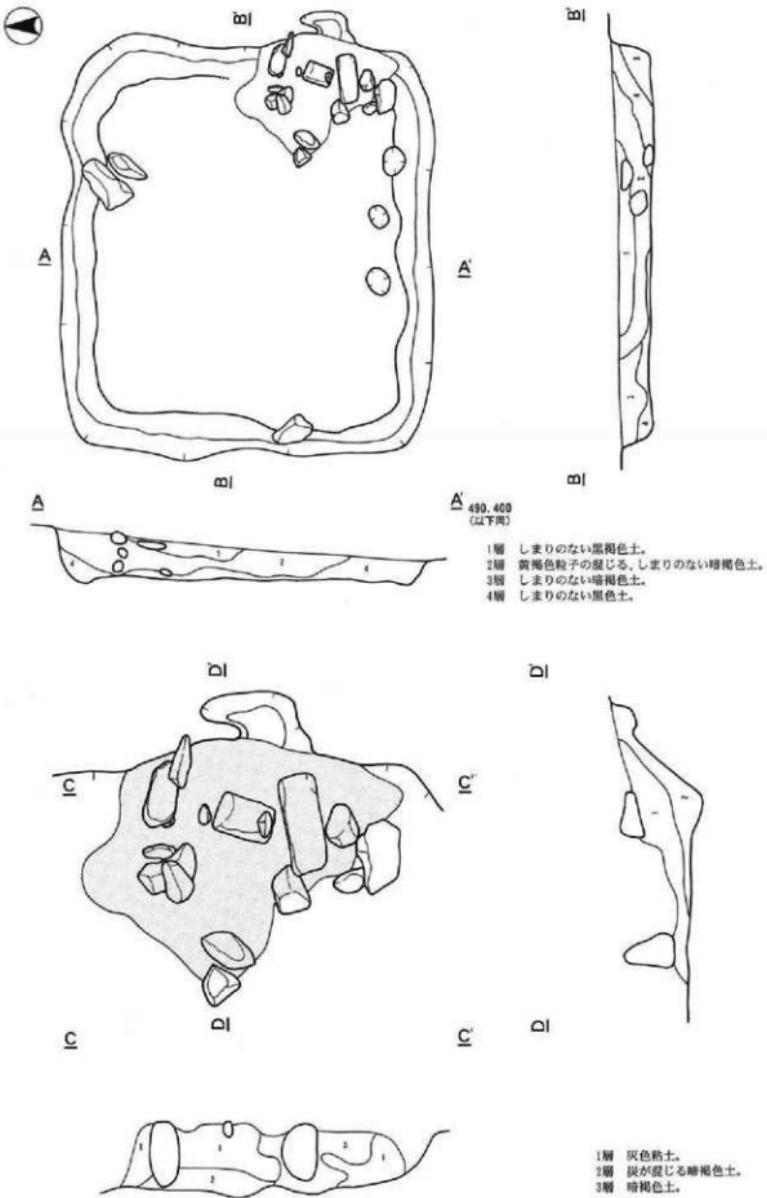
第48図 29号住居出土遺物 (1/2) 30号住居 (1/40)



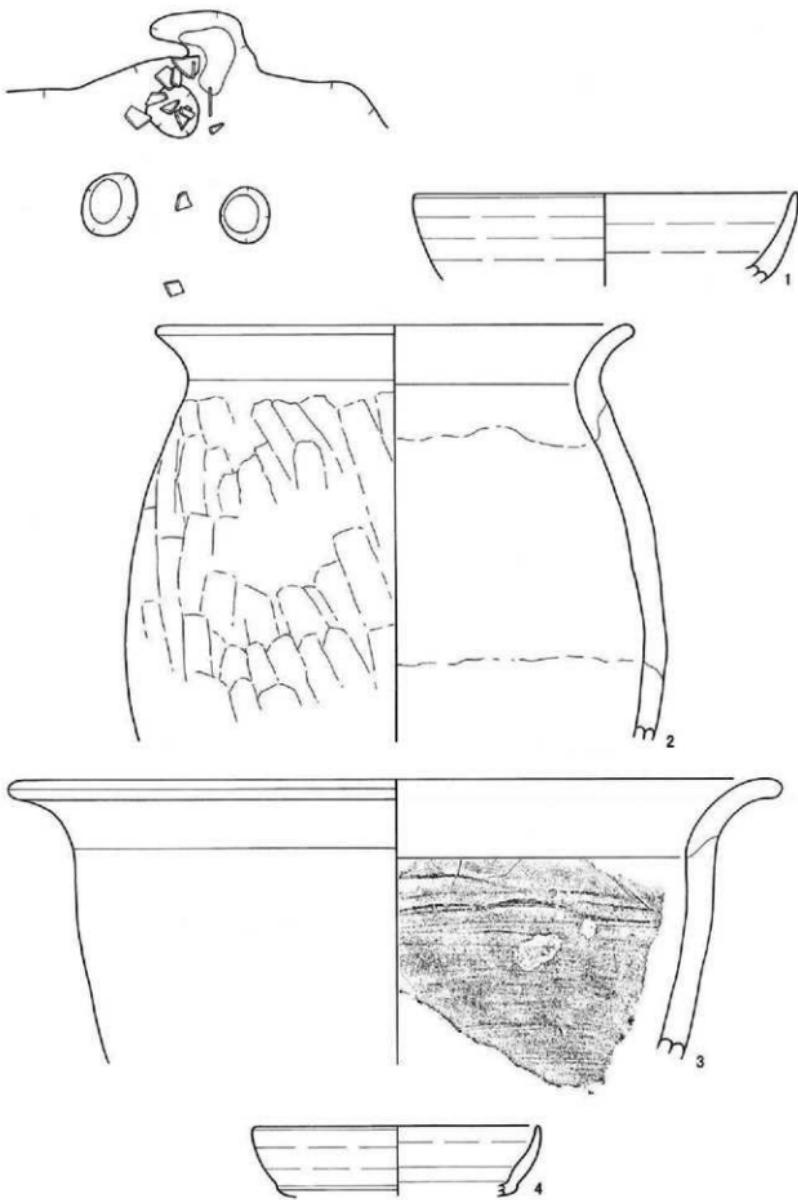
第49圖 30號住居出土遺物 (1/2)



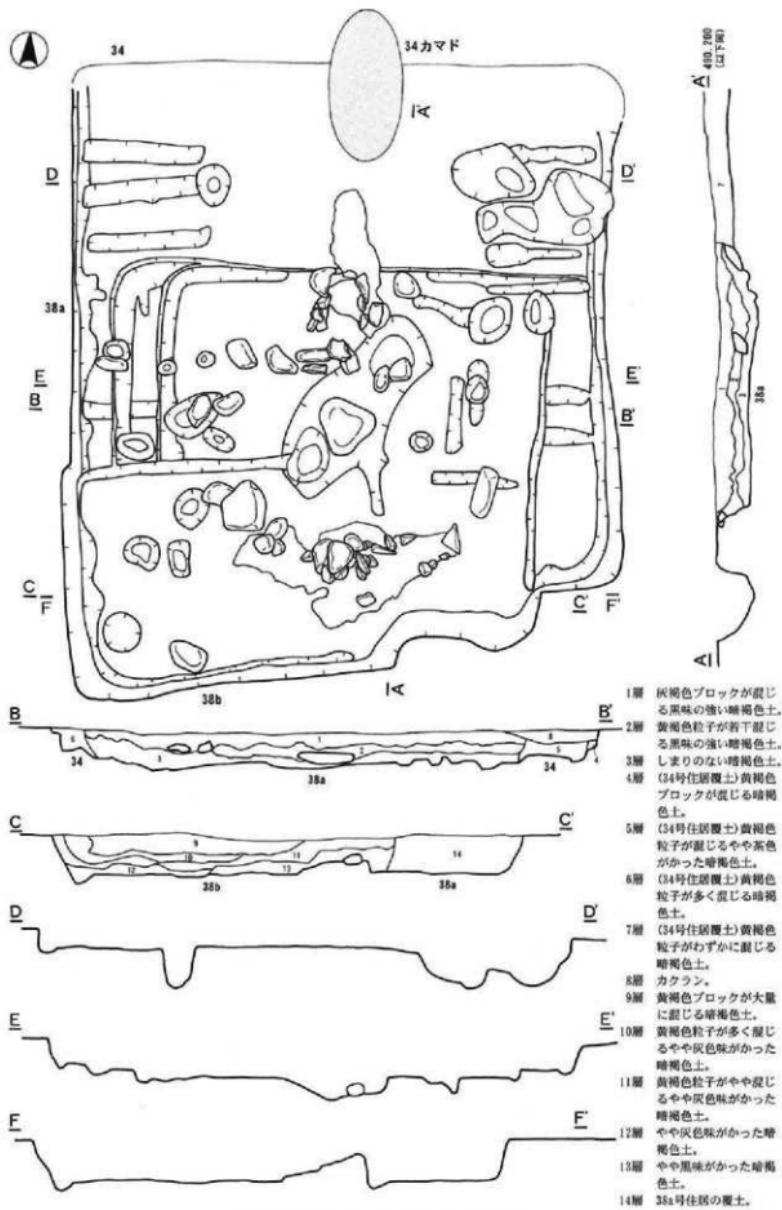
第50図 30号住居出土遺物 (1/2、2 1/4)



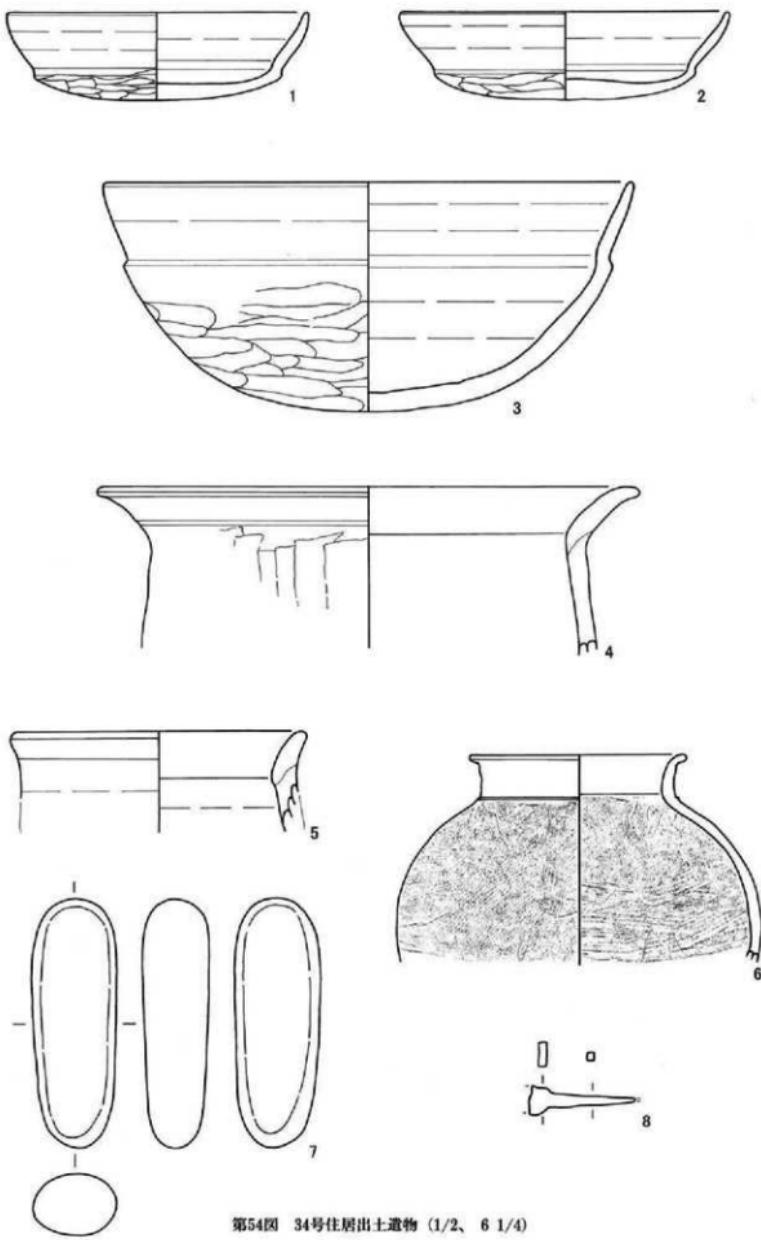
第51図 32号住居 (1/40) 32号住居カマフ (1/20)



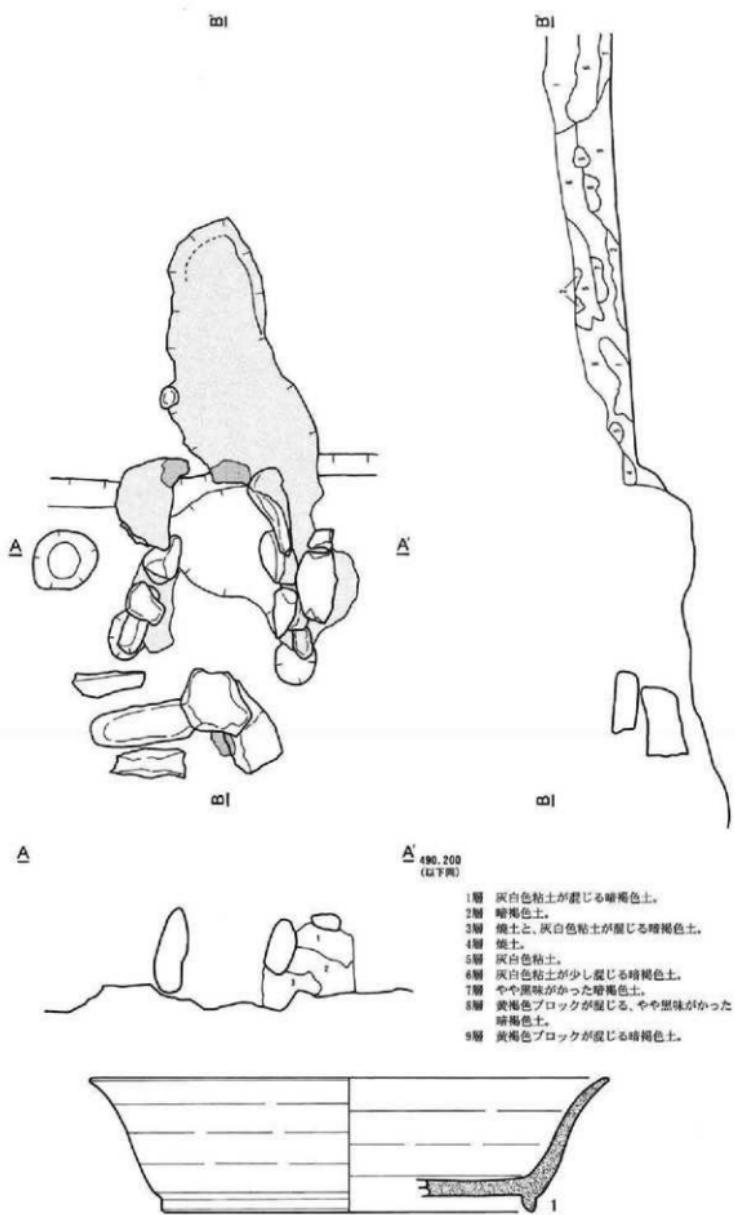
第52図 32号住居カマフ (1/20) 32号住居出土遺物 (1/2)



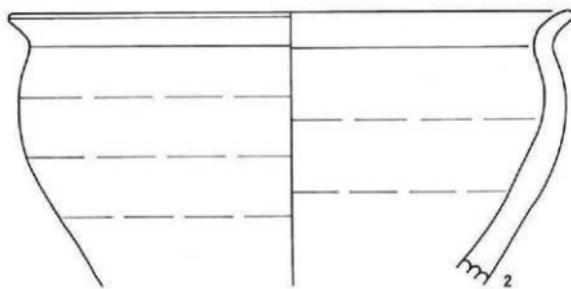
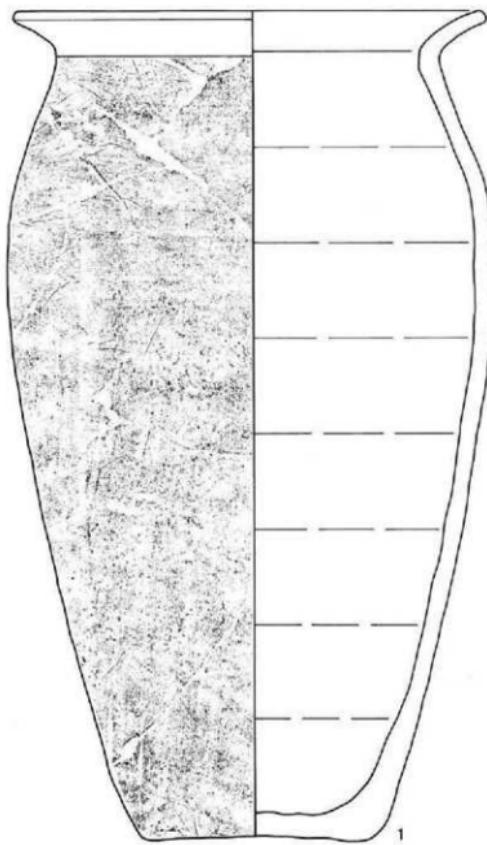
第53図 34号・38a号・38b号住居 (1/60)



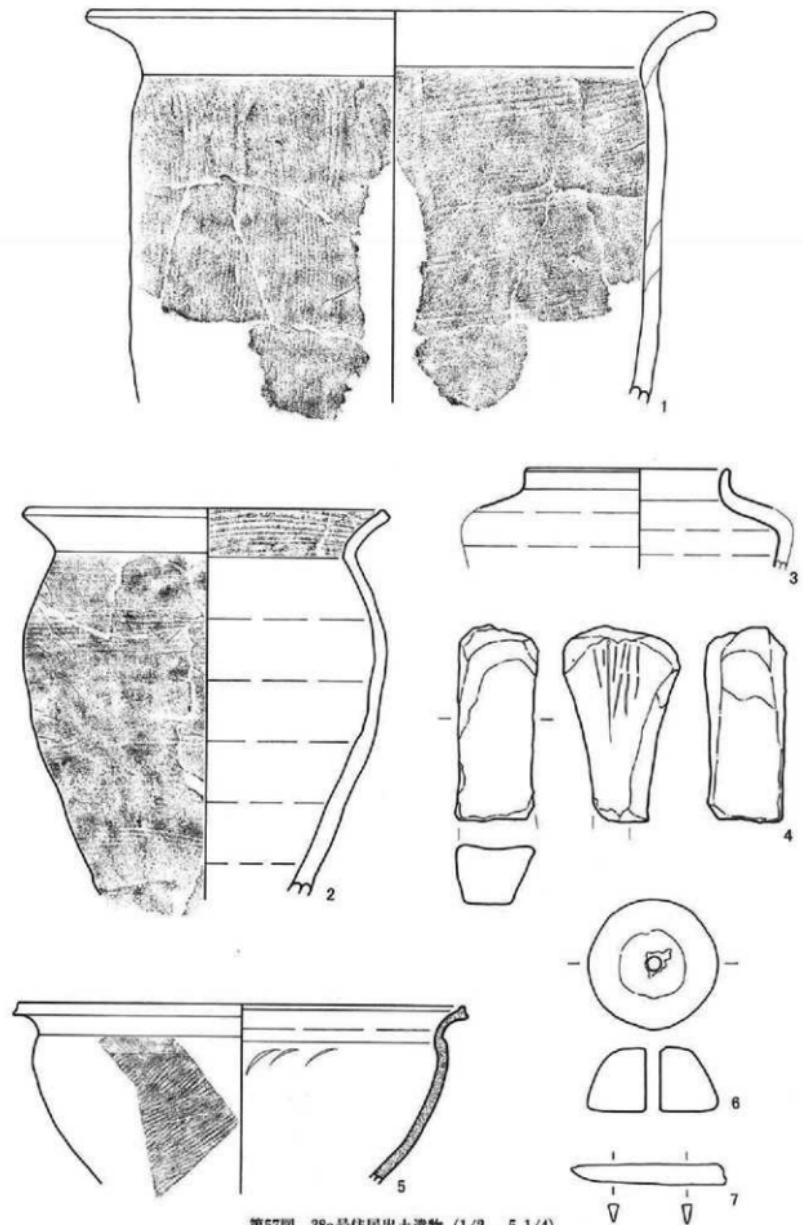
第54図 34号住居出土遺物 (1/2、 6 1/4)



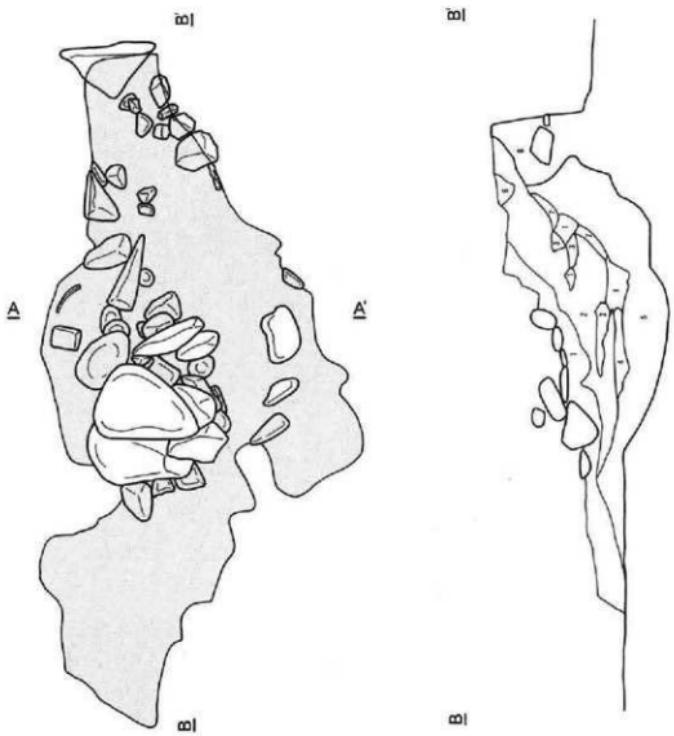
第55図 38a号住居カマフ (1/20) 38a号住居出土遺物 (1/2)



第56図 38a号住居出土遺物 (1/2)

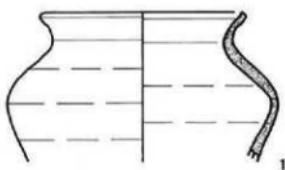
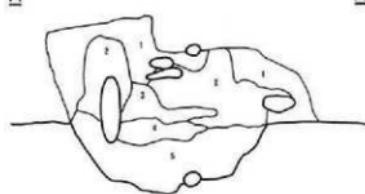


第57圖 38a號住居出土遺物 (1/2、5 1/4)

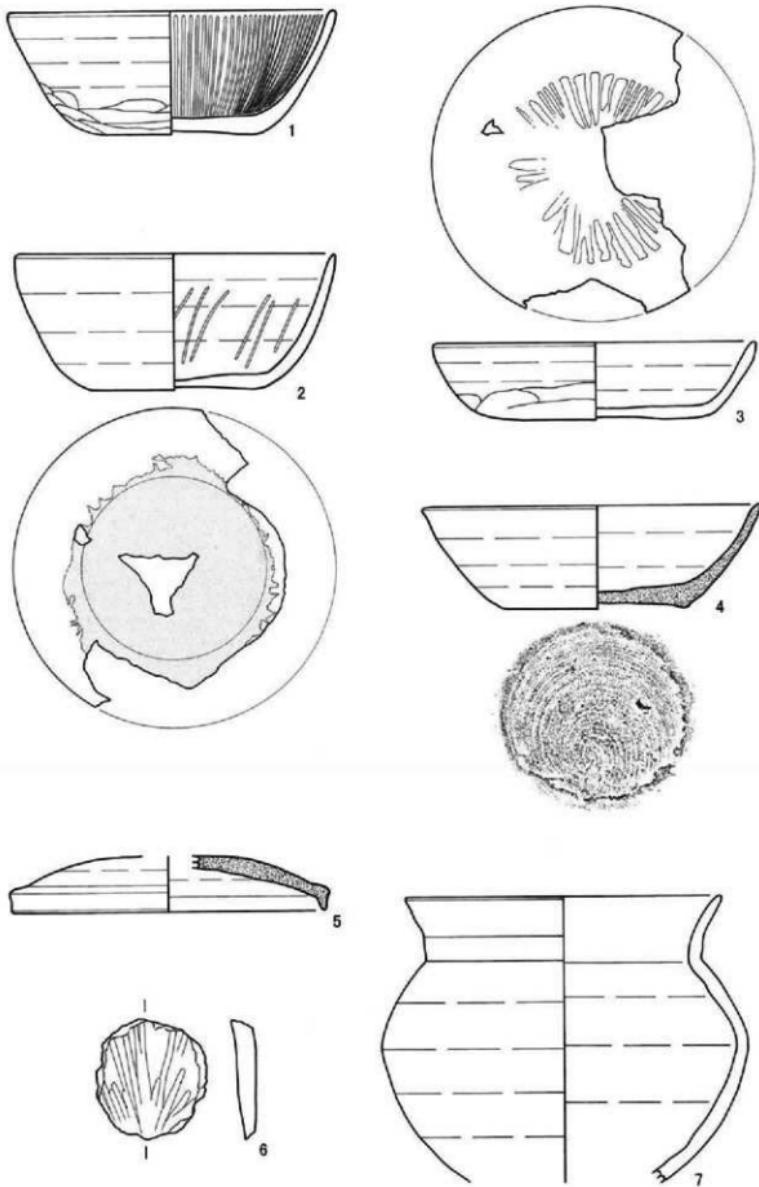


A' 400.000
(以下同)

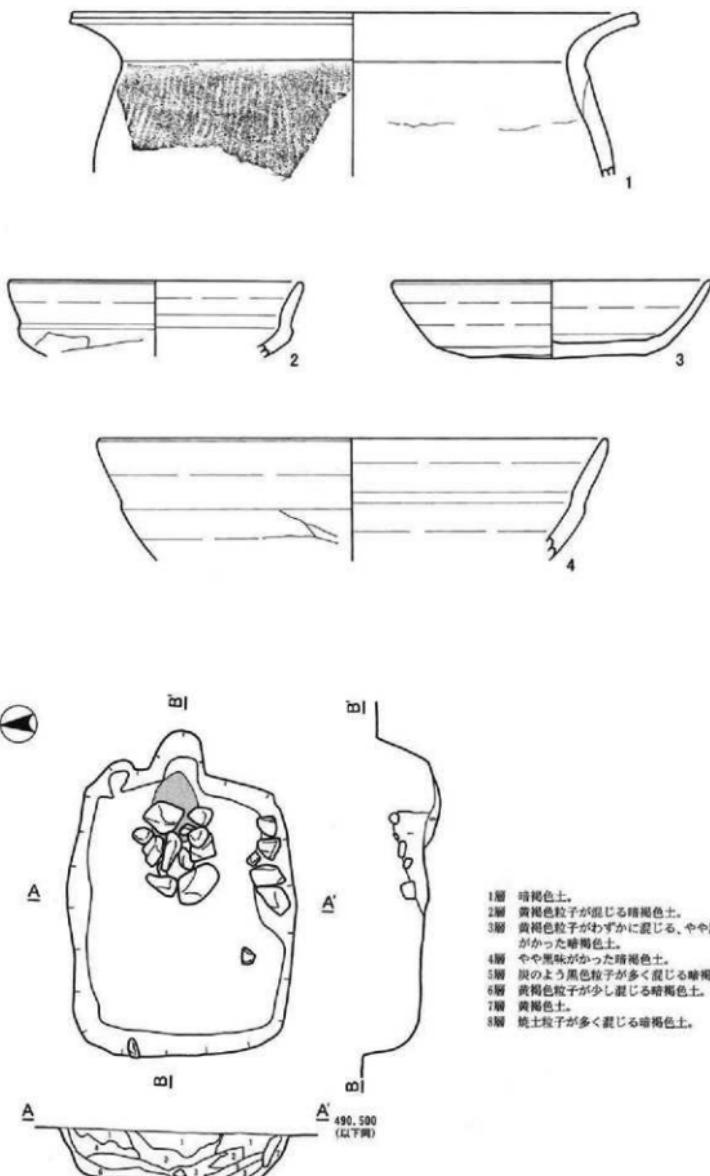
- 1層 灰色粘土が混じる暗褐色土。
- 2層 灰色粘土。
- 3層 ワラ材が混じる、赤く焼けた固い粘土。
- 4層 焼土。
- 5層 黄褐色粒子が混じる暗褐色土。
- 6層 暗褐色土。
- 7層 焼土が混じる暗褐色土。
- 8層 38号住居覆土。



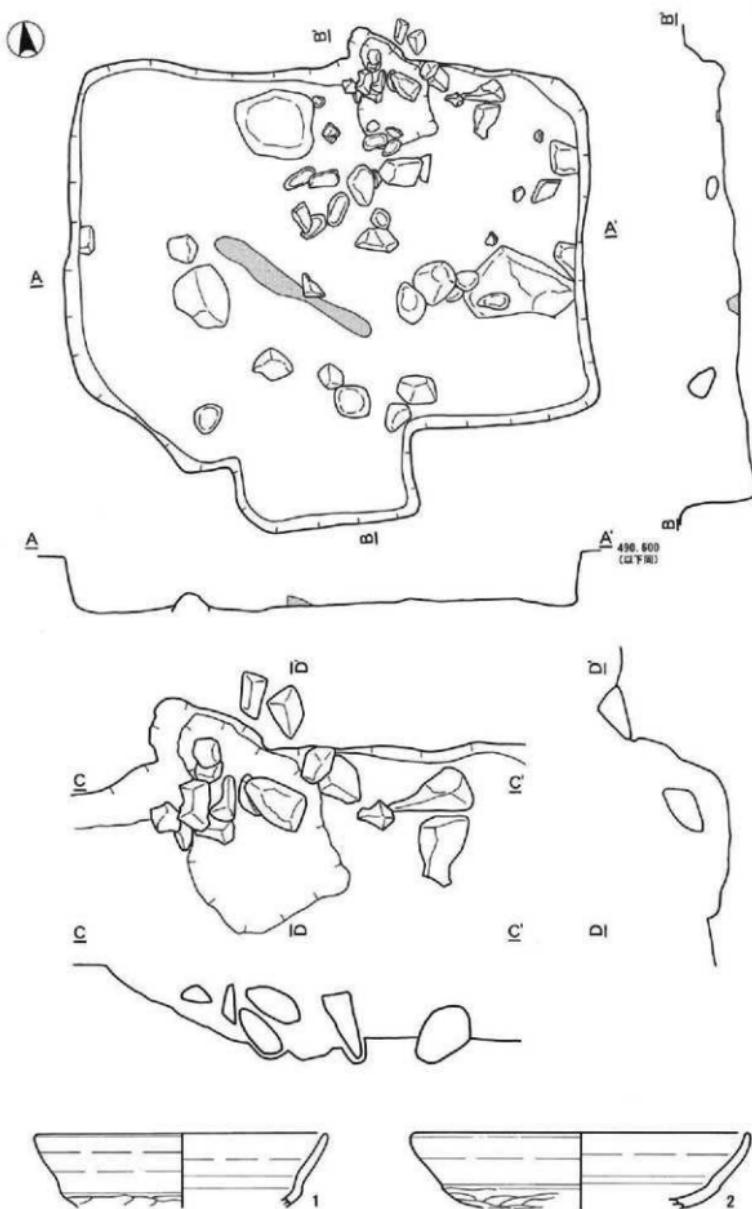
第58図 38b号住居カマフ (1/20) 38b号住居出土遺物 (1/2)



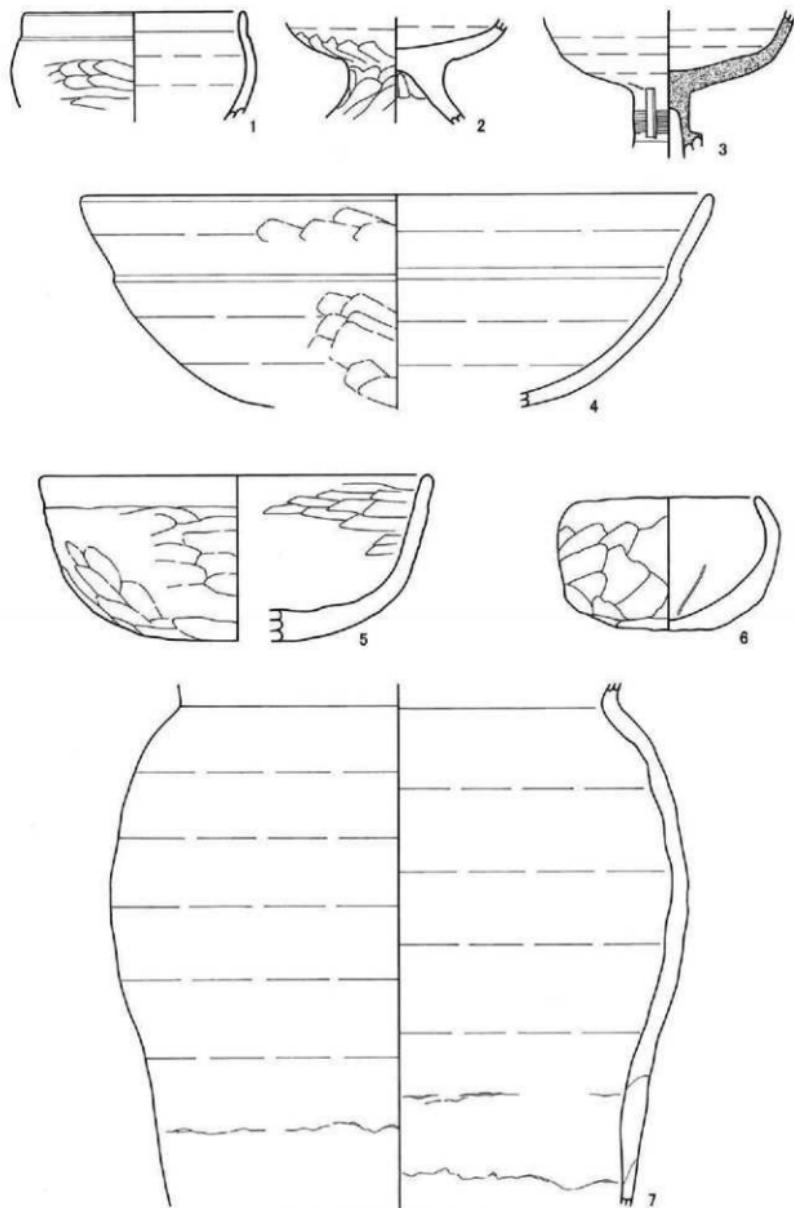
第59圖 38b號住居出土遺物 (1/2)



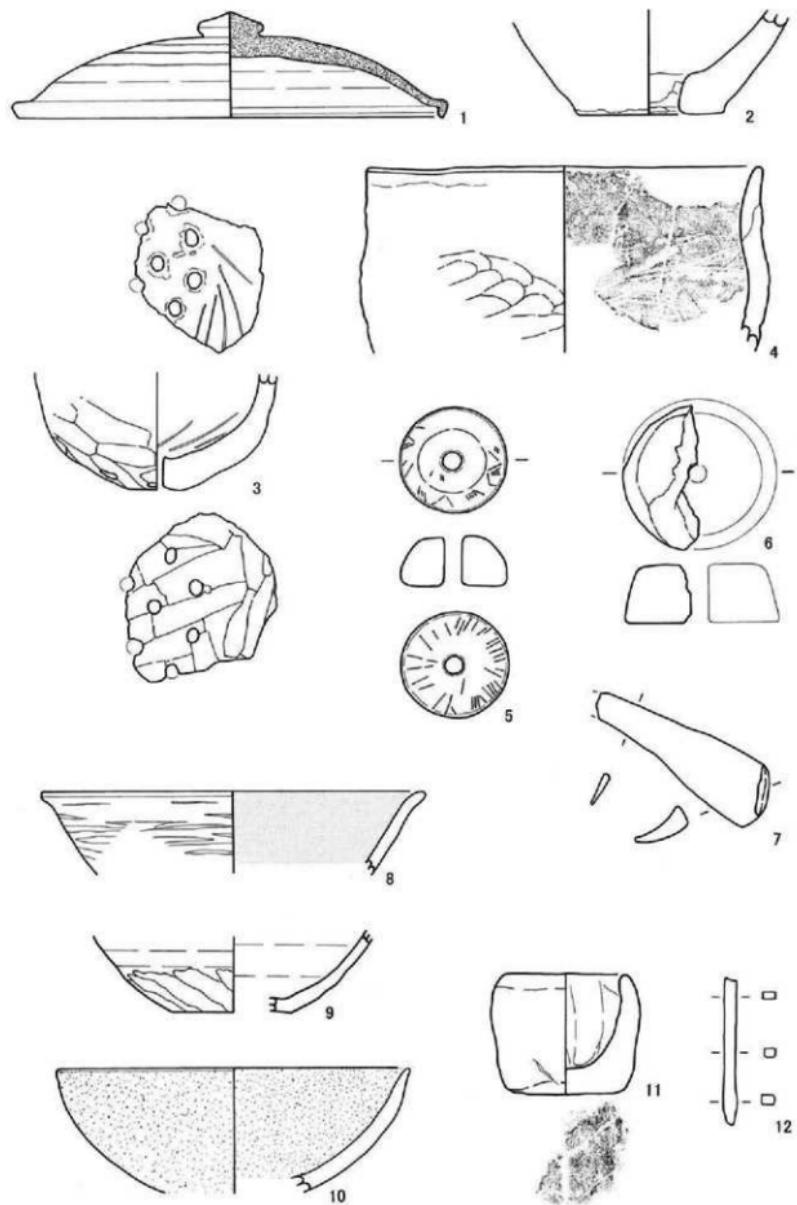
第60図 38b号住居出土遺物 (1/2) 35号住居 (1/40)



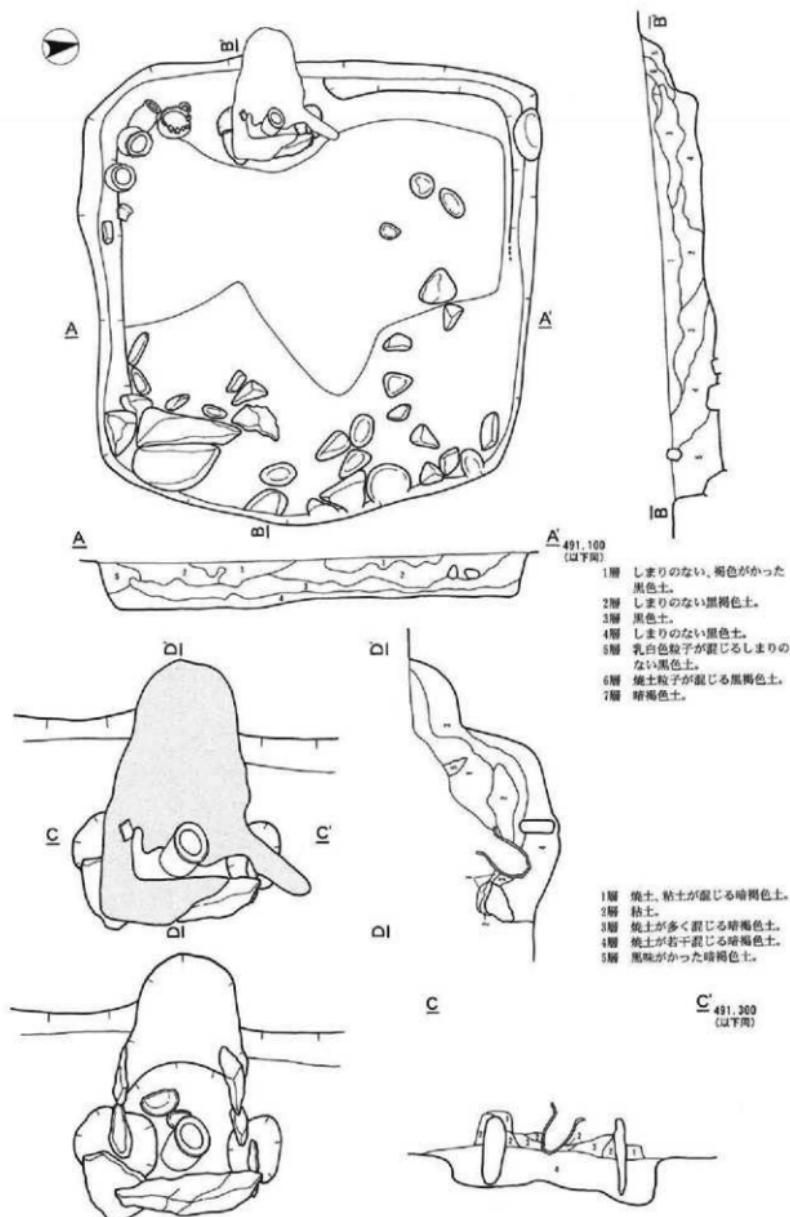
第61圖 37號住居 (1/40) 37號住居出土遺物 (1/2)



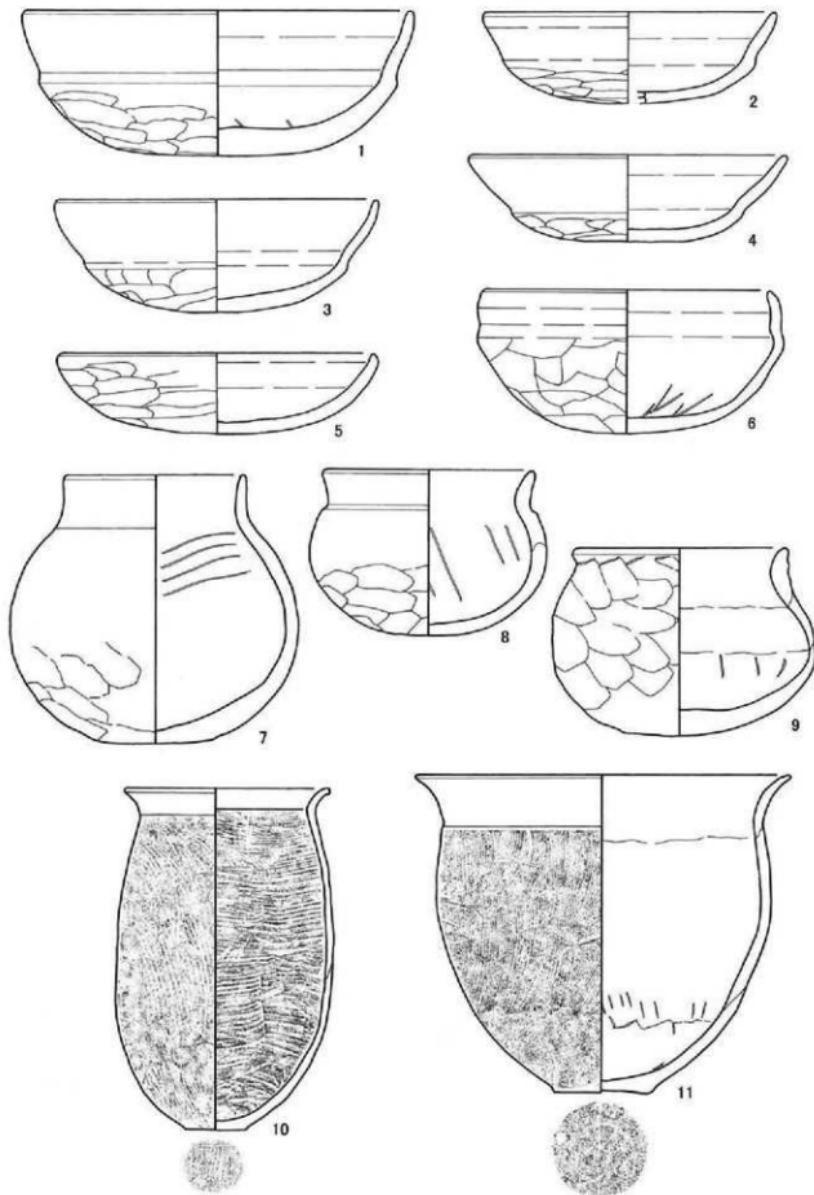
第62图 37号住居出土遺物 (1/2)



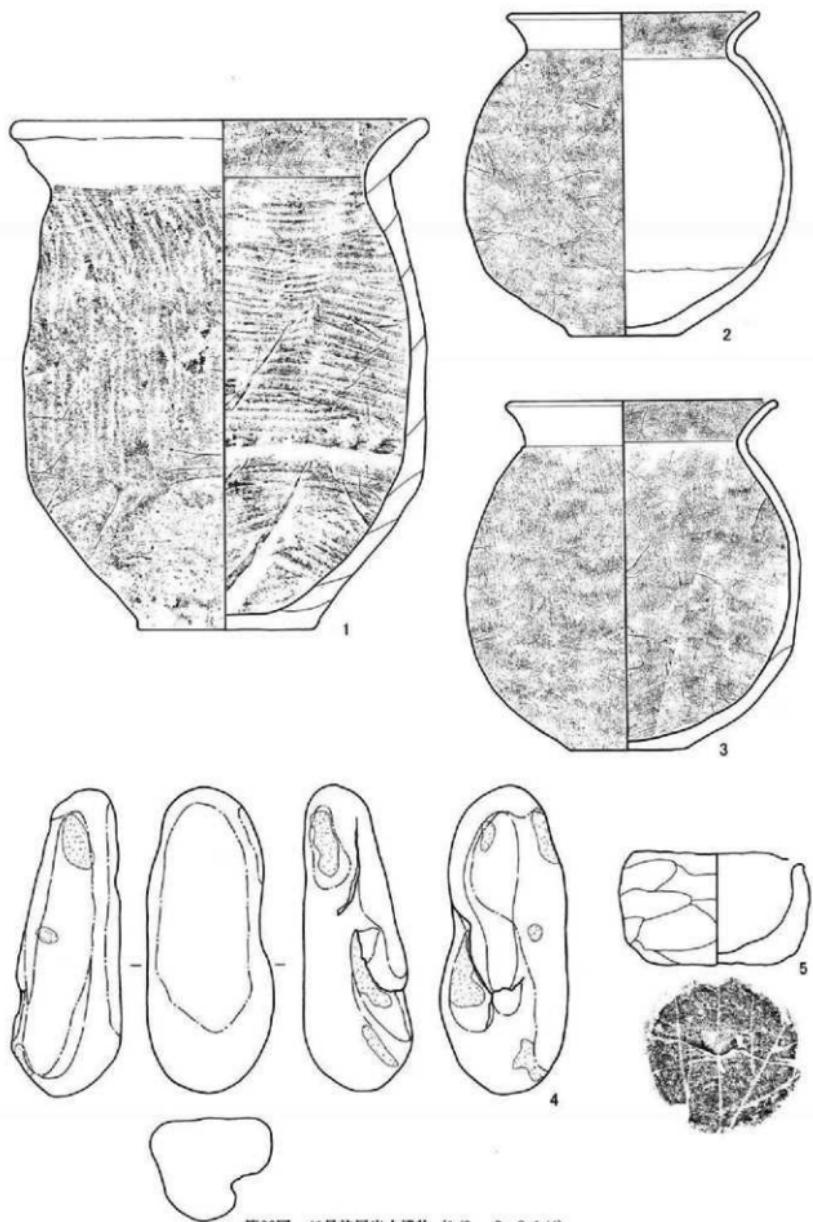
第63圖 37号住居出土遺物 (1~7 1/2) 39号住居出土遺物 (8~12 1/2)



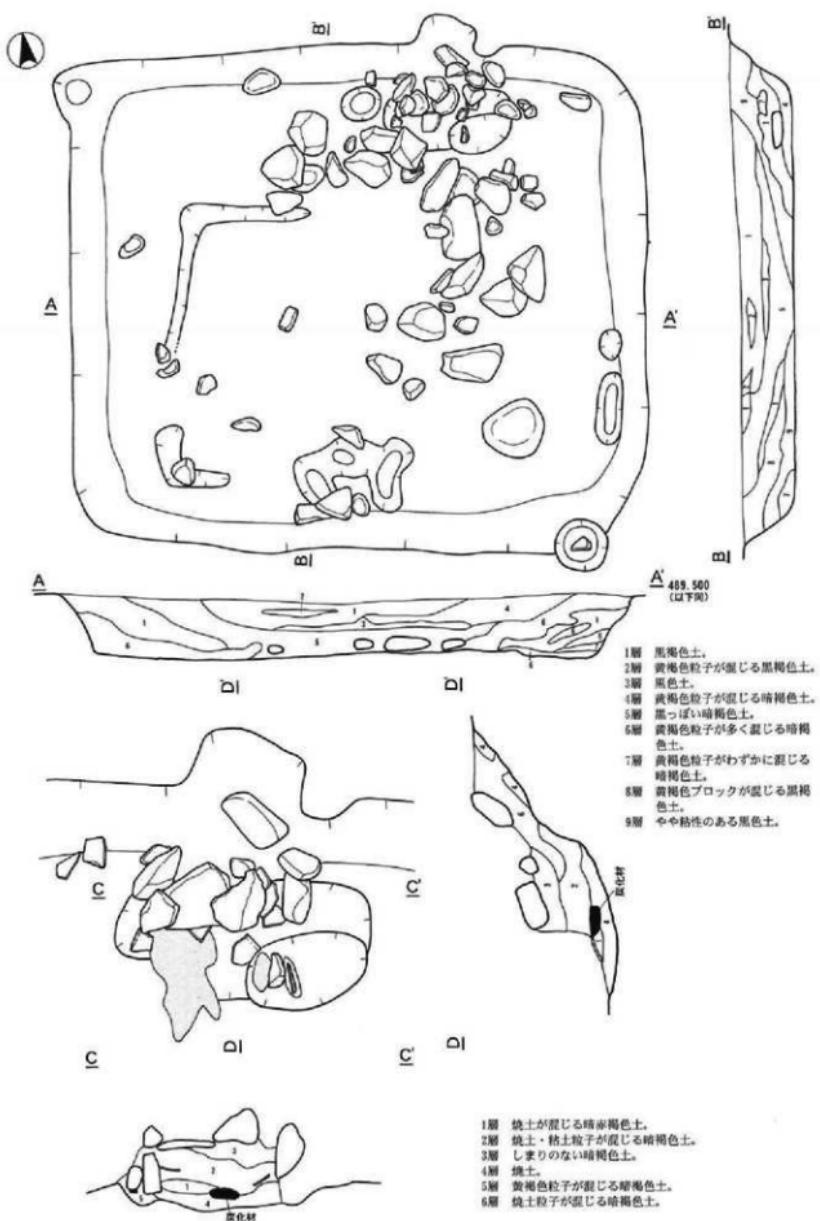
第64図 41号住居 (1/40) 41号住居カマド (1/20)



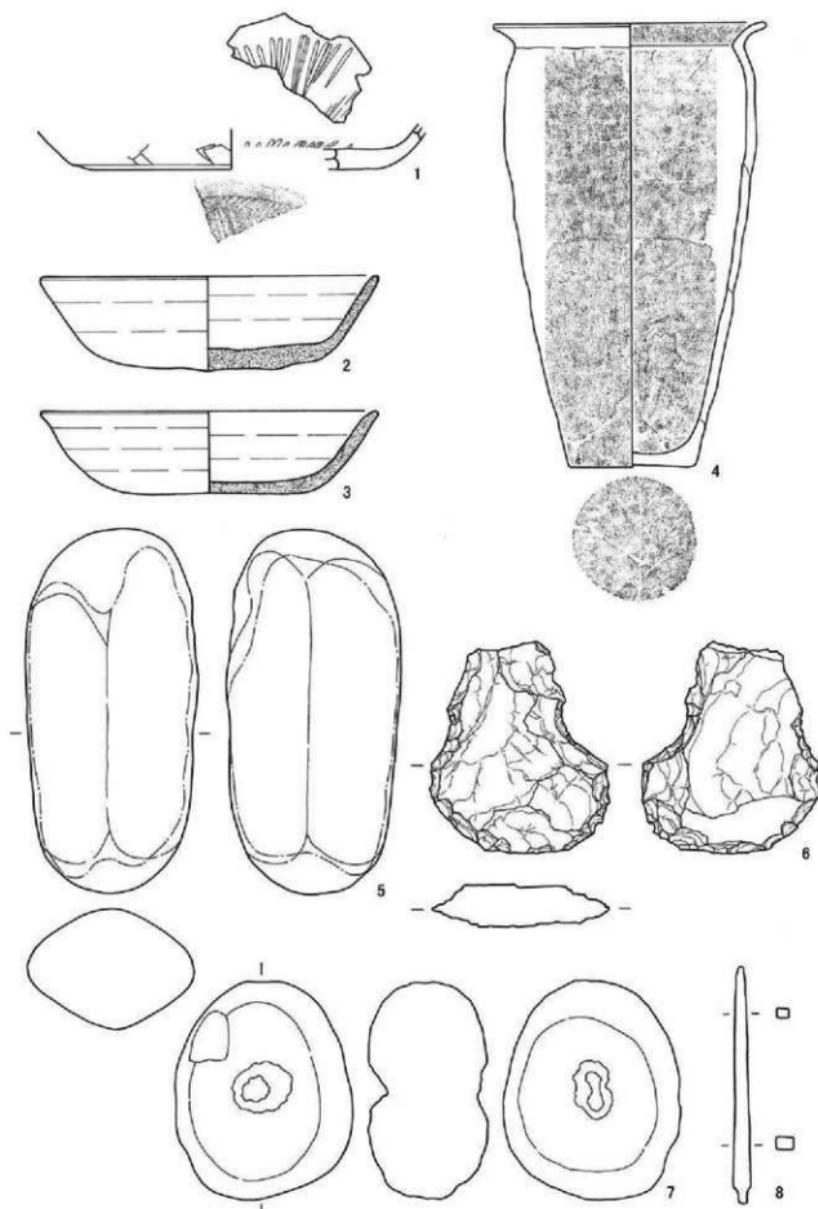
第65図 41号住居出土遺物 (1/2、 10・11 1/4)



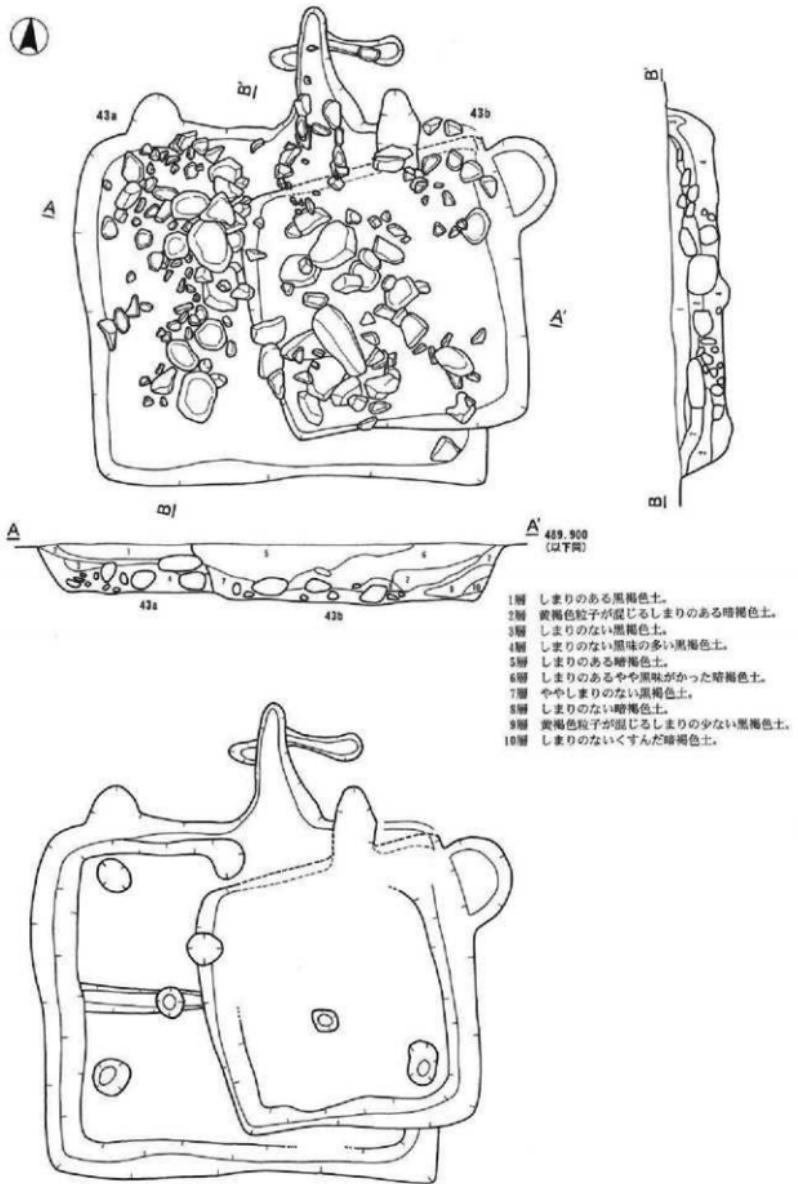
第66圖 41號住居出土遺物 (1/2, 2·3 1/4)



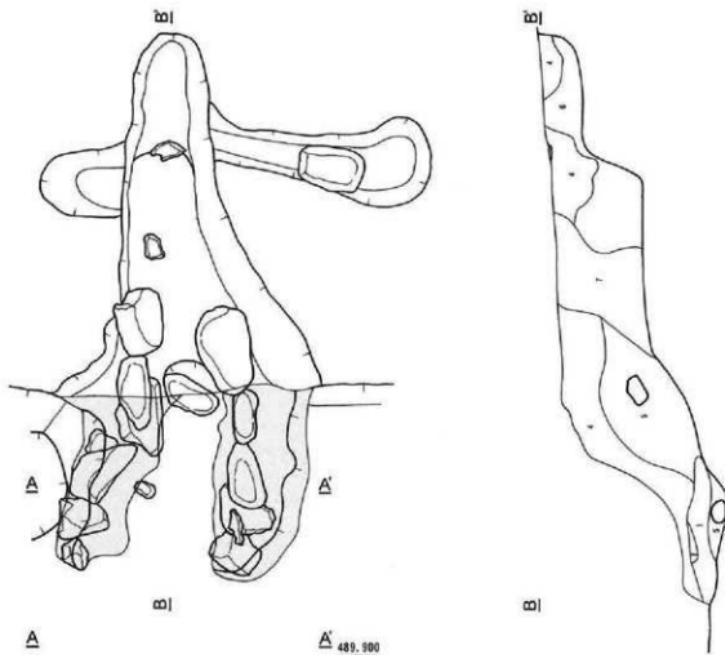
第67図 42号住居 (1/40) 42号住居カマド (1/20)



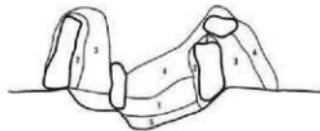
第68図 42号住居出土遺物 (1/2、4 1/4)



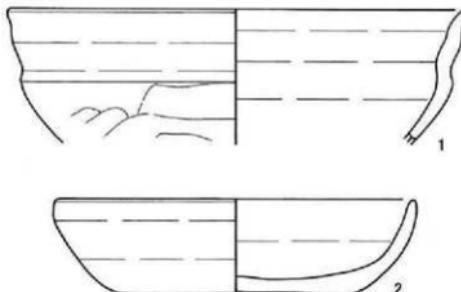
第69図 43a号・43b号住居 (1/60)



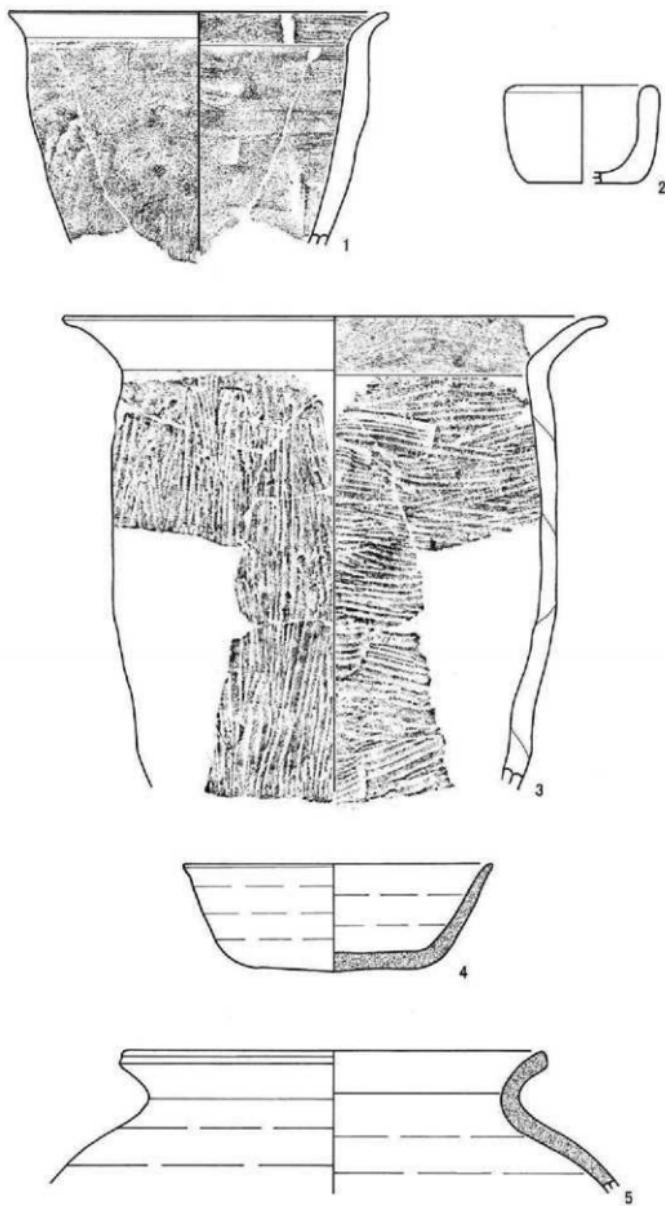
A
△
△ 489.900
(以下同)



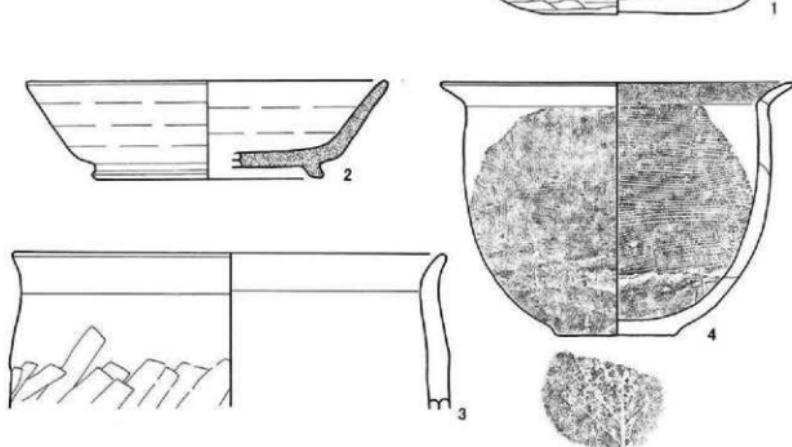
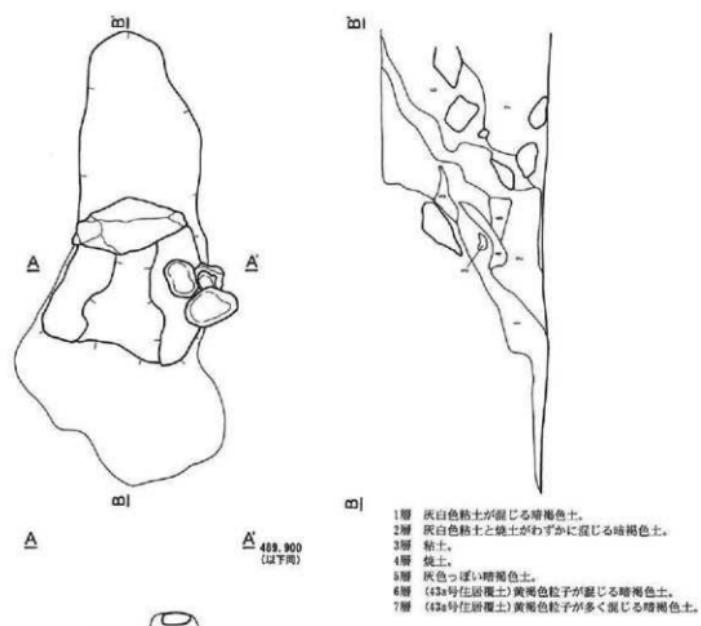
43a号住居カマド
1層 焼土。
2層 オレンジ色に焼けた粘土。
3層 灰白色粘土。
4層 灰白色粘土と燒土粒子が混じる暗褐色土。
5層 灰白色粘土と燒土粒子が混じる暗褐色土。
6層 黄褐色粒子が混じる暗褐色土。



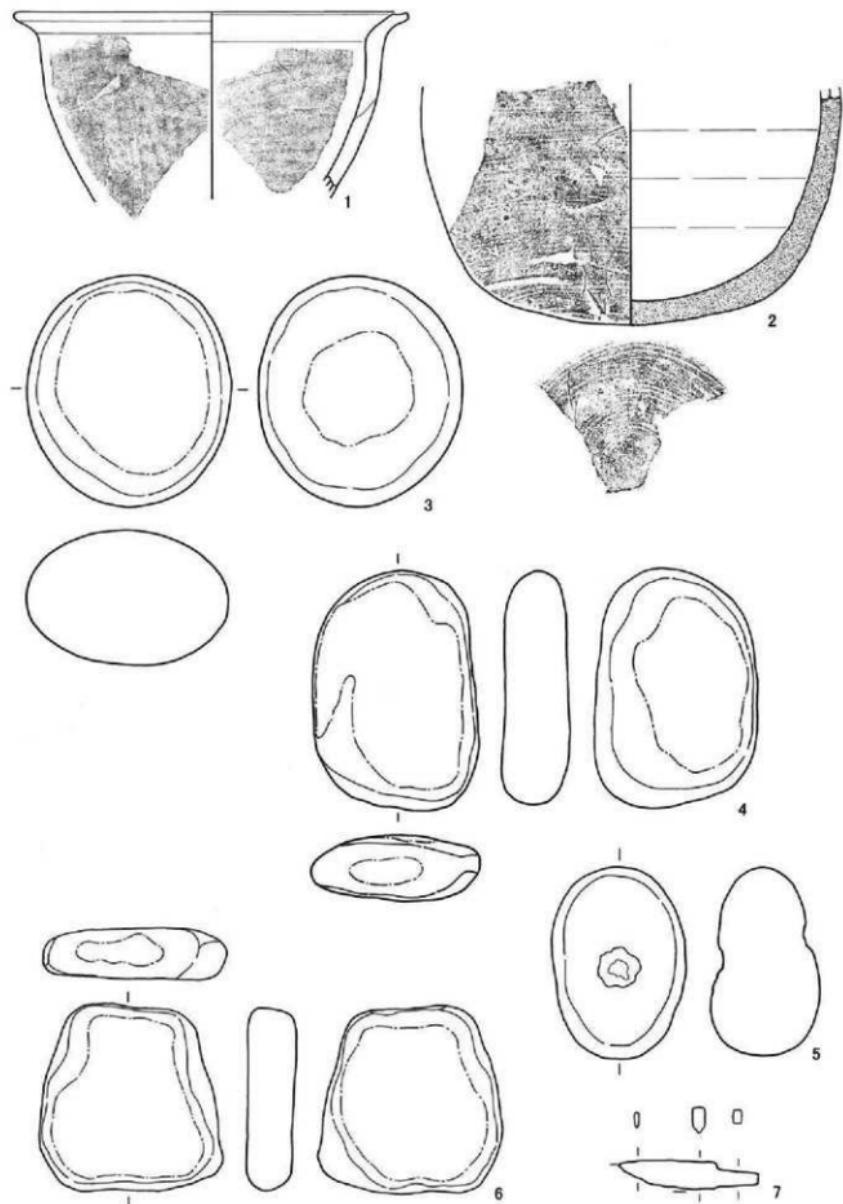
第70図 43a号住居カマド (1/20) 43a号住居出土遺物 (1/2)



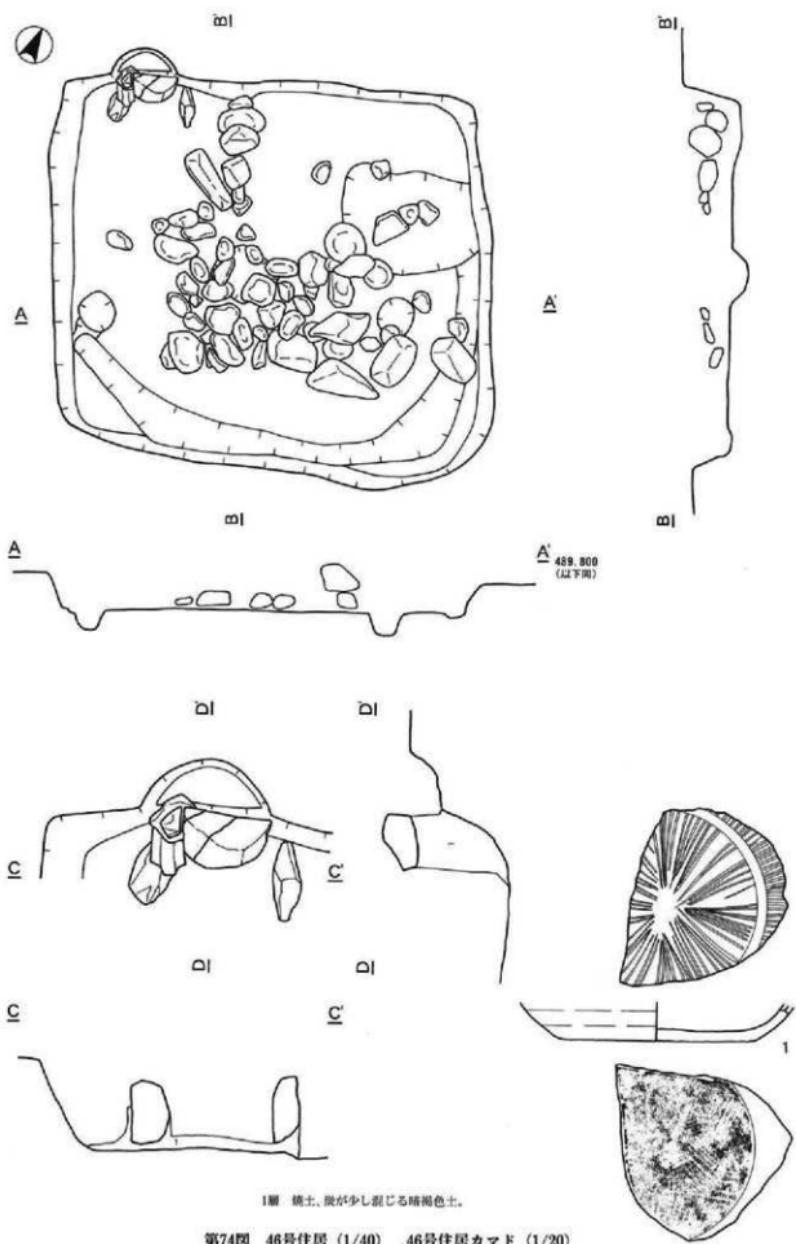
第71圖 43a號住居出土遺物 (1/2)



第72図 43b号住居カマド (1/20) 43b号住居出土遺物 (1/2, 4 1/4)

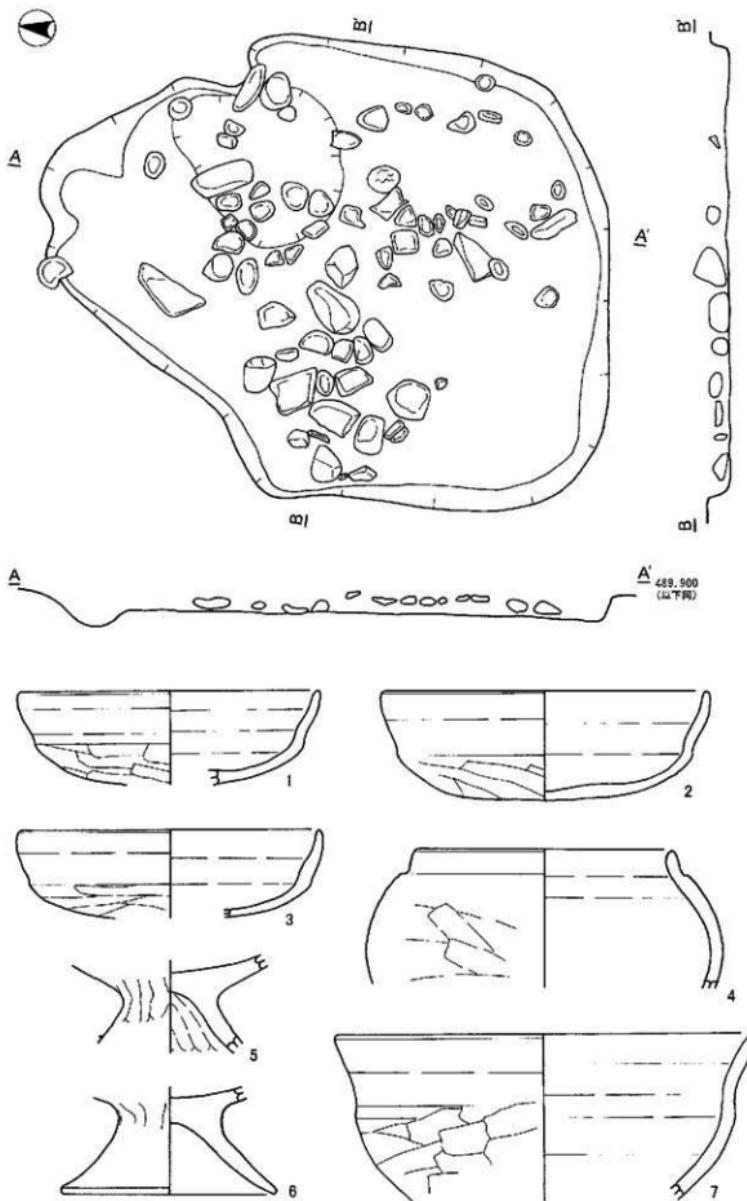


第73圖 43b号住居出土遺物 (1/2、1・6 1/4)

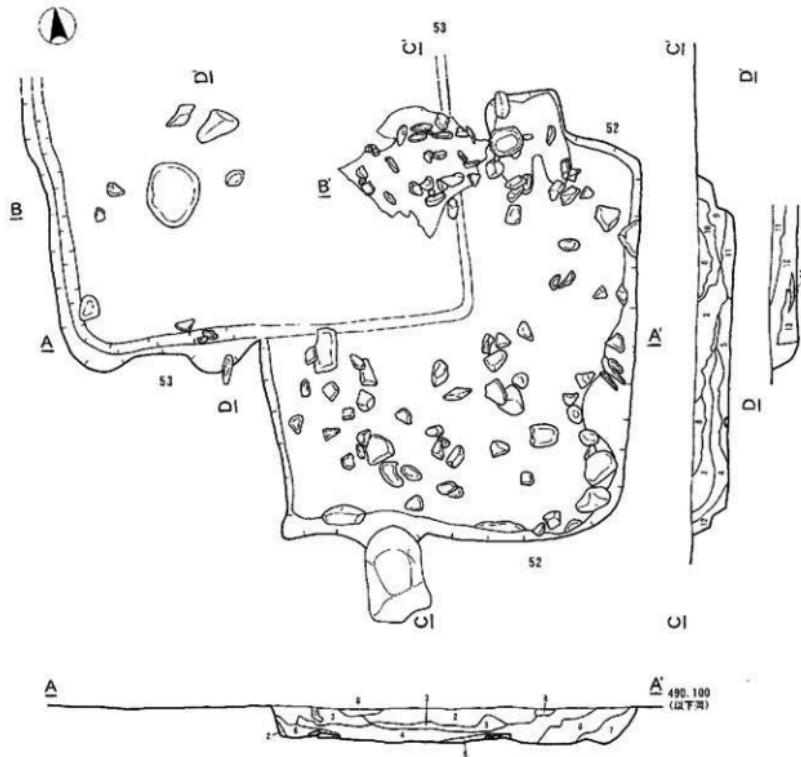


1層 焙土、灰が少し混じる暗褐色土。

第74図 46号住居 (1/40) 46号住居カマド (1/20)

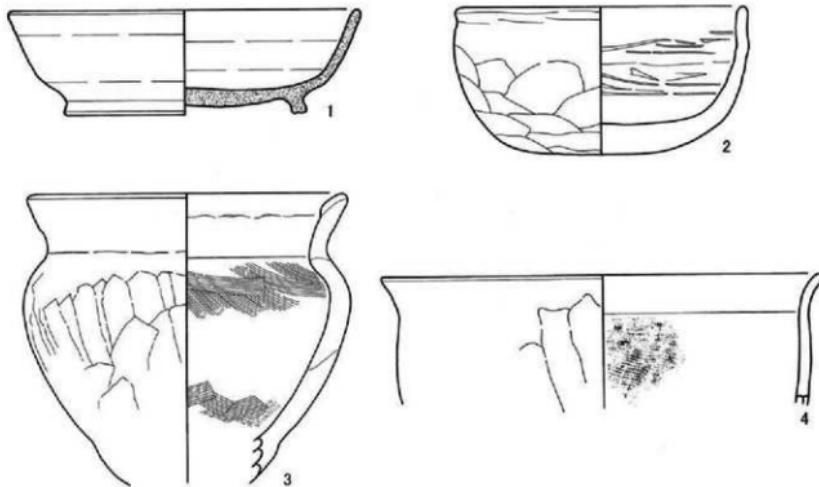
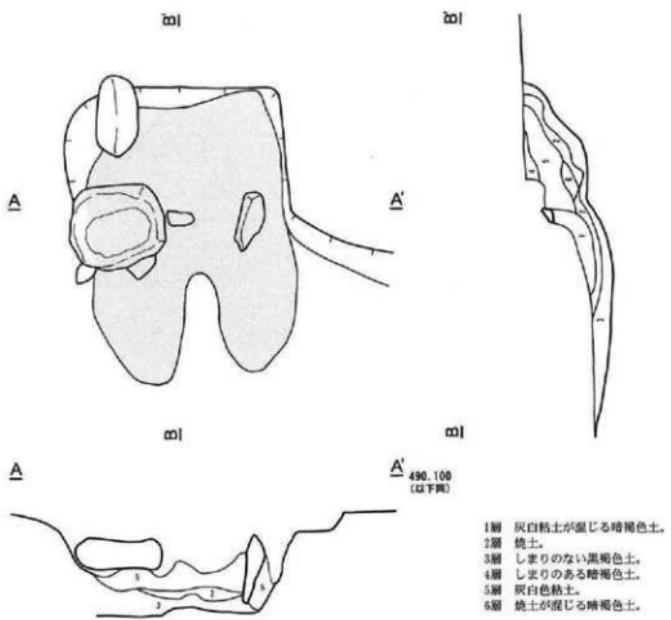


第75圖 51号住居 (1/40) 51号住居出土遺物 (1/2)

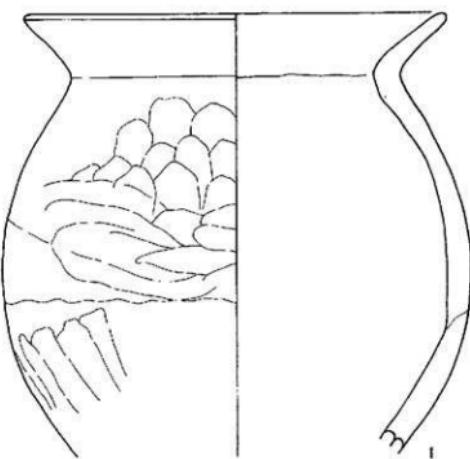


- 1層 カクラン。
- 2層 しまりのない暗褐色土。
- 3層 褐褐色土のほじる暗褐色土。
- 4層 しまりのないやや赤味のつよい暗褐色土。
- 5層 やや粘性のある風っぽい暗褐色土。
- 6層 褐褐色土が混じるやや黒っぽい暗褐色土。
- 7層 黒褐色。I。
- 8層 露出がかった暗褐色土。
- 9層 やや粘性のある、黒っぽい暗褐色土。
- 10層 やや粘性のある、やや赤っぽい暗褐色土。
- 11層 固くしまった暗褐色土。
- 12層 やや黒っぽくややわらかい暗褐色土。
- 13層 しまりの少ない暗褐色土。
- 14層 黄褐色粒子がわずかに混じるやや黒っぽくややわらかい暗褐色土。

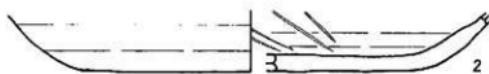
第76図 52号・53号住居 (1/60)



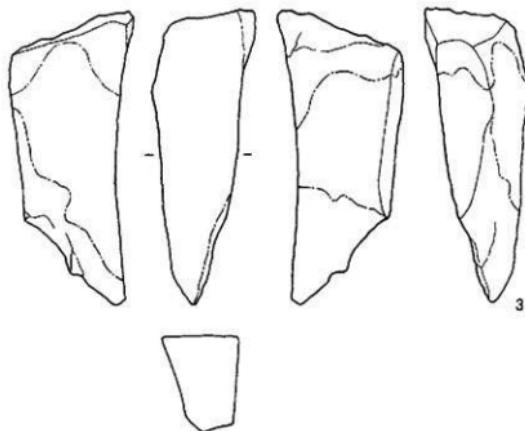
第77図 52号住居カマド (1/20) 52号住居出土遺物 (1/2)



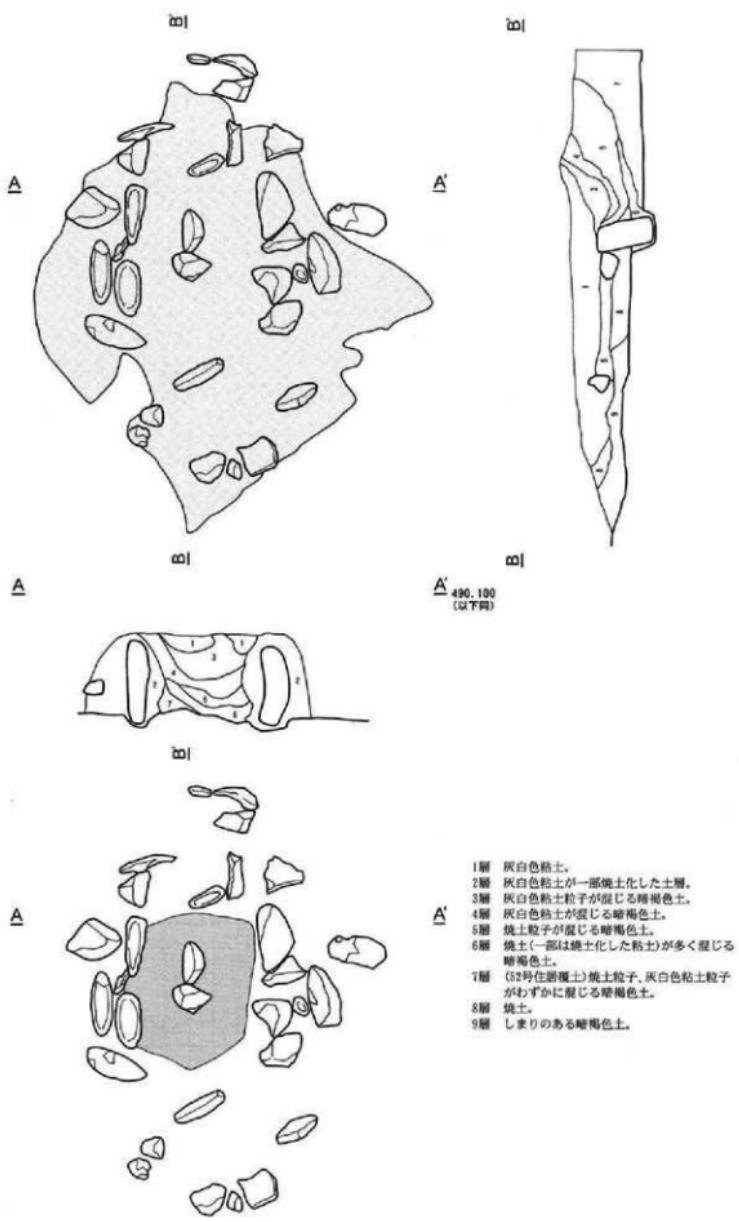
1



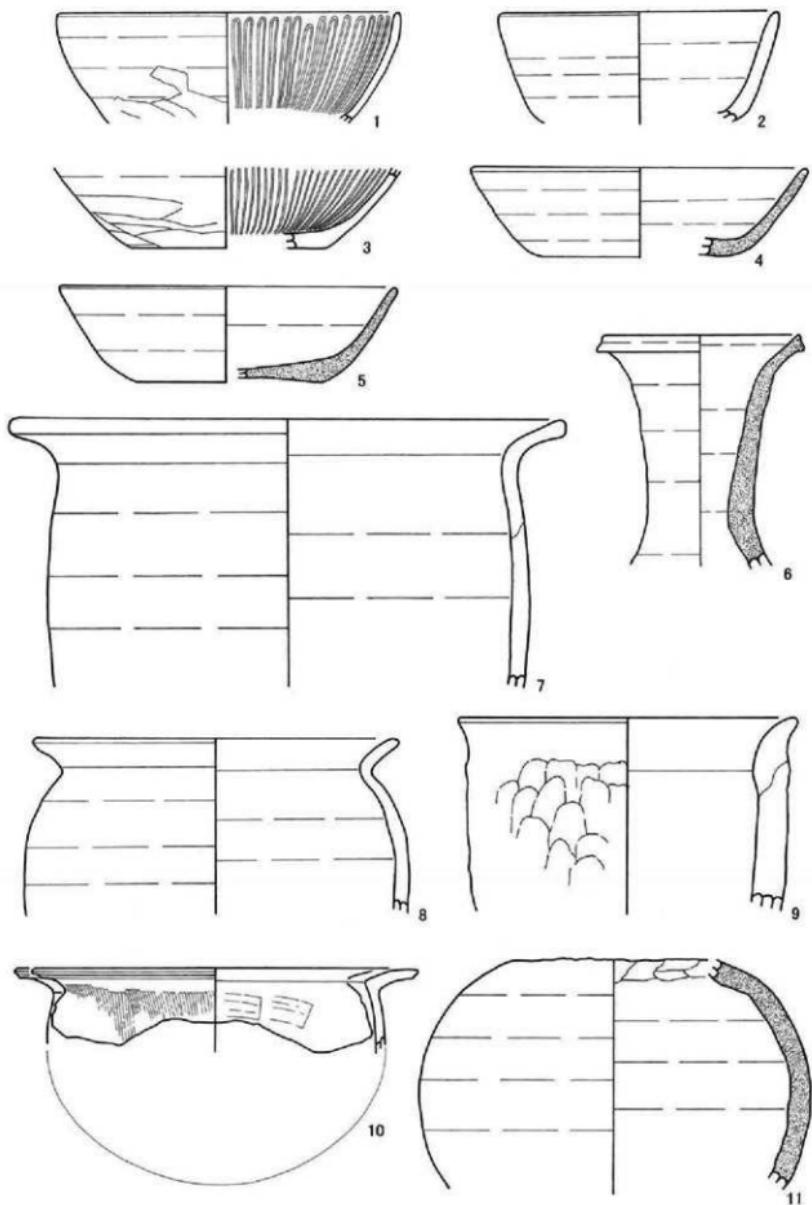
2



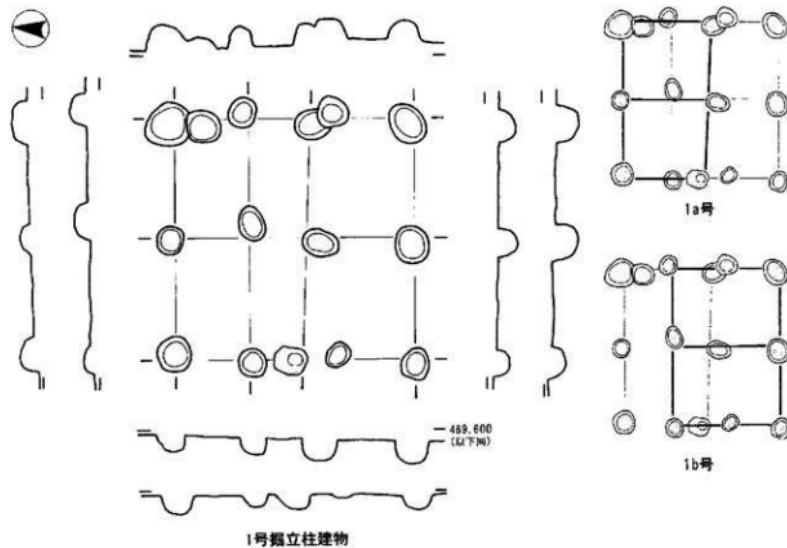
第78图 52号住居出土遺物 (1/2)



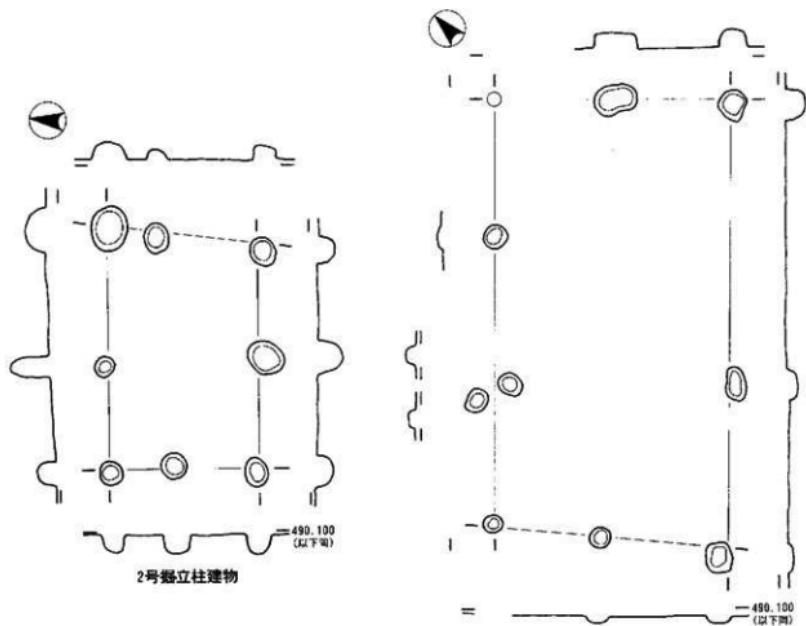
第79図 53号住居カマフ (1/20)



第80圖 53號住居出土遺物 (1/2)

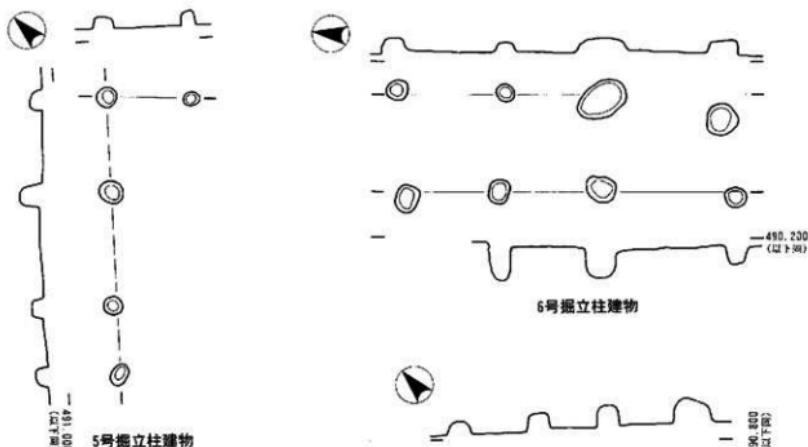
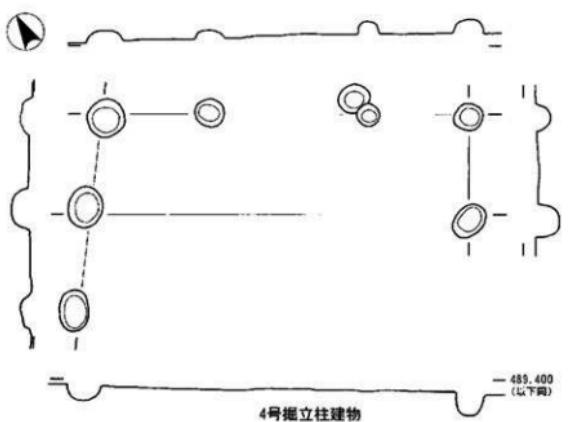


1号据立柱建物

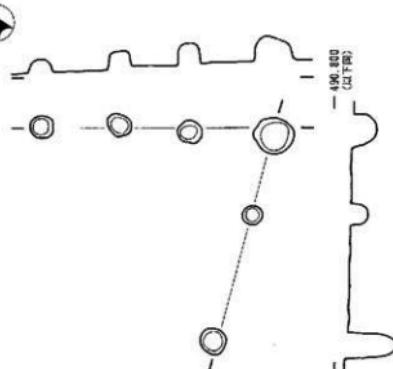
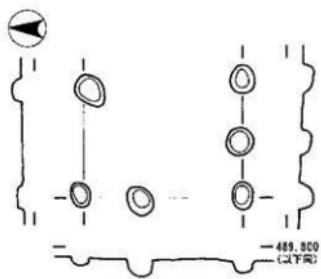


第81図 据立柱建物 (1/80)

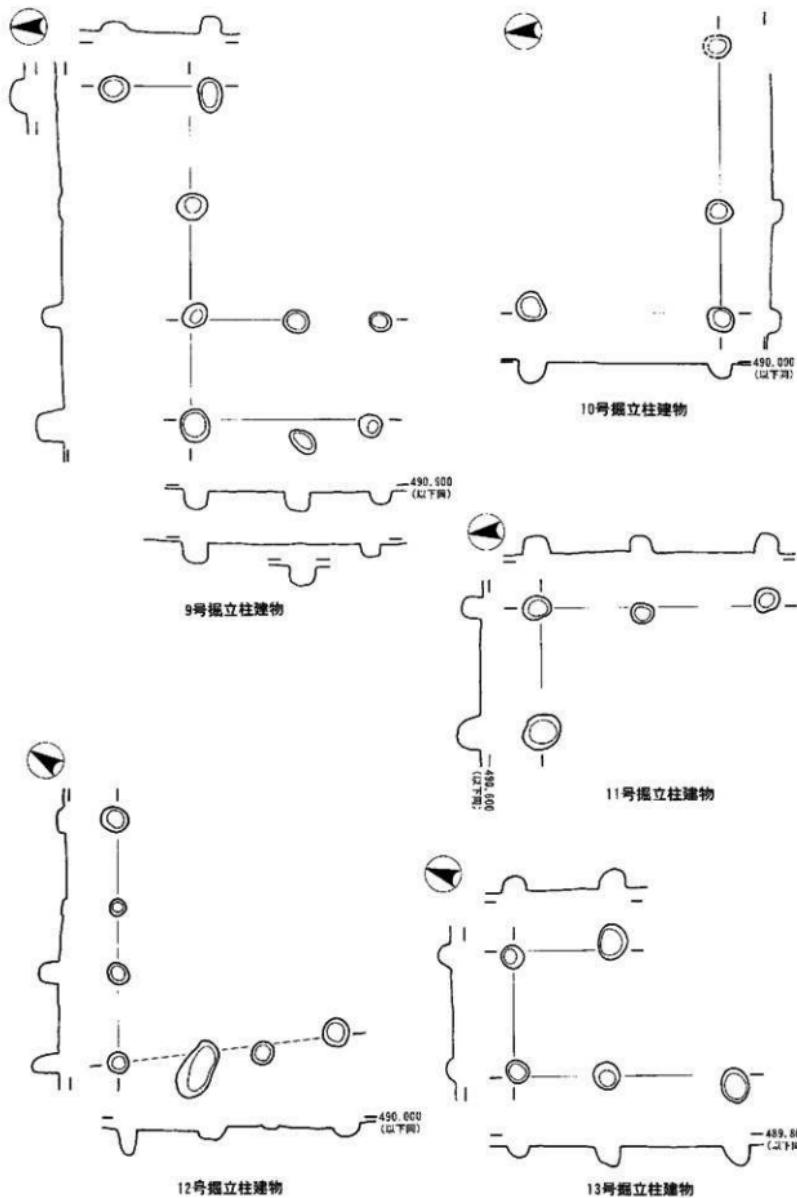
3号据立柱建物



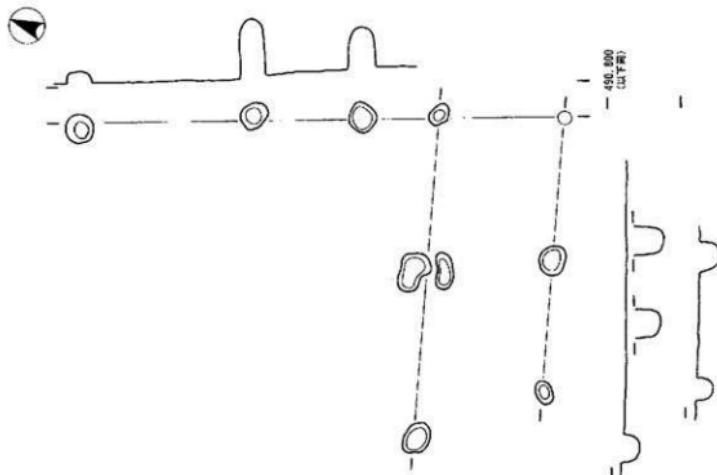
5号掘立柱建物
-489.167



第82図 掘立柱建物 (1/80)



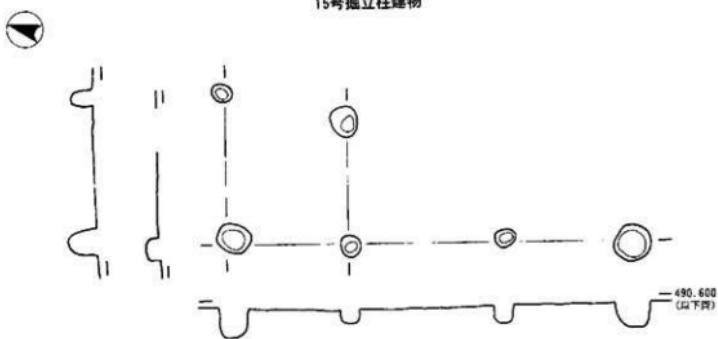
第83図 掘立柱建物 (1/80)



14号掘立柱建物

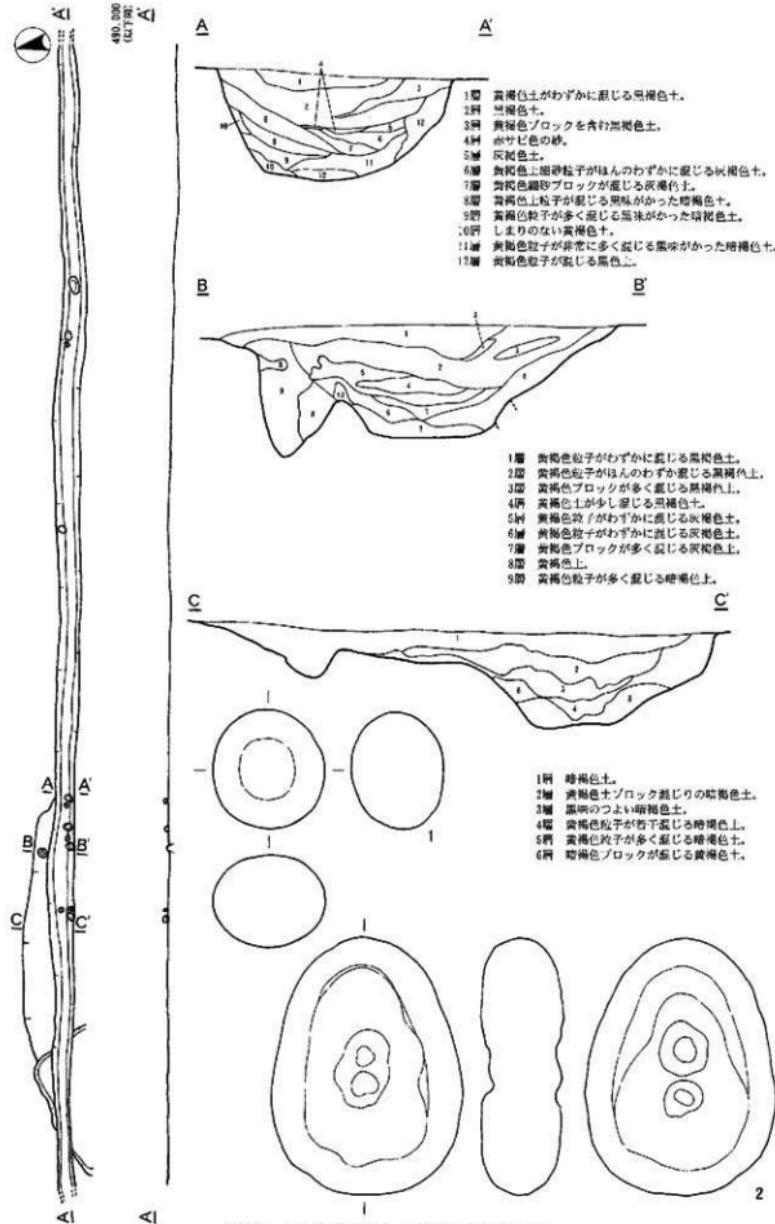


15号掘立柱建物

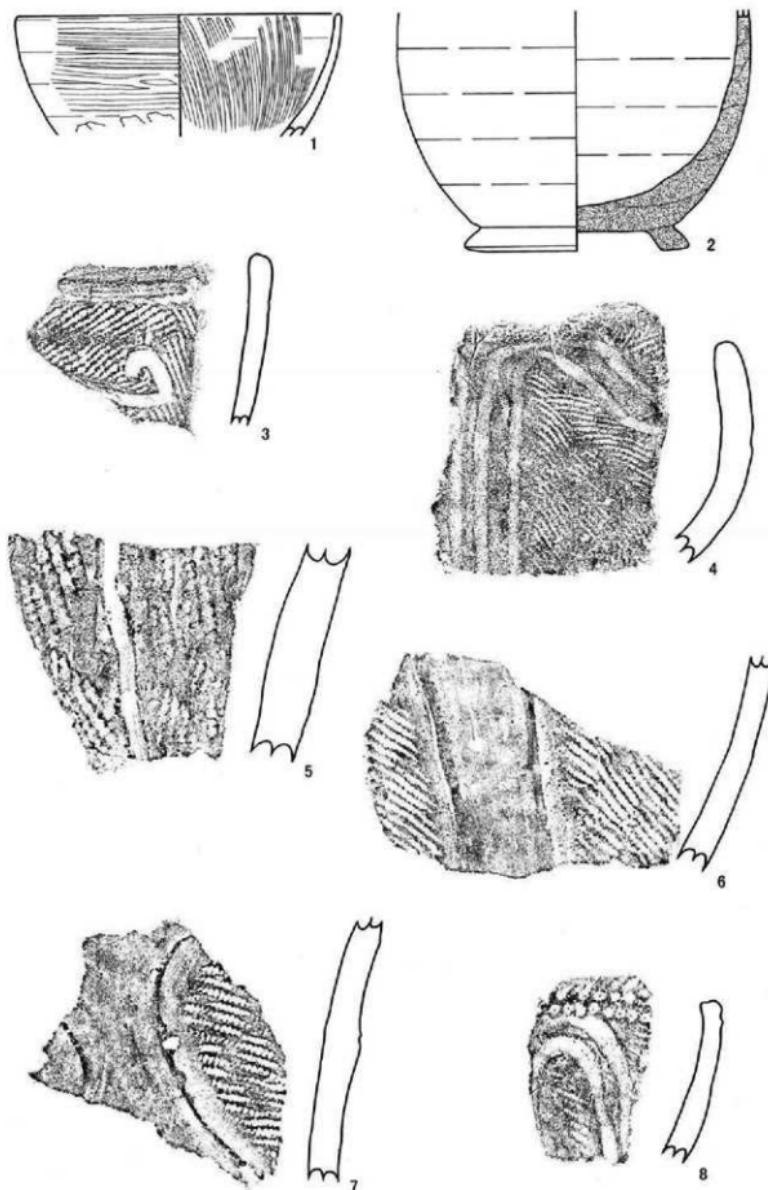


16号掘立柱建物

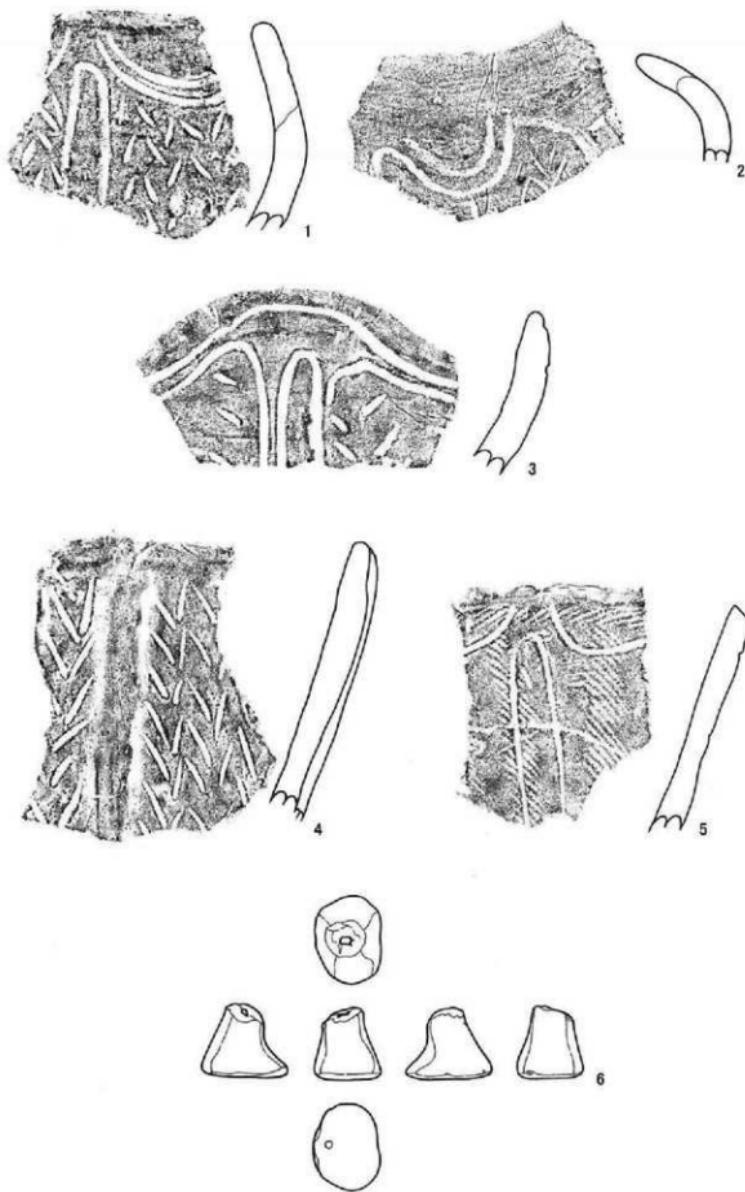
第84図 掘立柱建物 (1/80)



第85図 1号溝 (1/200) 1号溝出土遺物 (1/2)



第86図 1b号・2号据立柱建物出土遺物 (1/2) その他の時期の遺物 (1/2)



第87図 その他の時期の遺物 (1/2)



第88図 遺構外出土遺物 (1/2)

第2表 遺物類聚表



腰巻遺跡遠景（中央の森の右側が調査地）



1号住居



3号住居



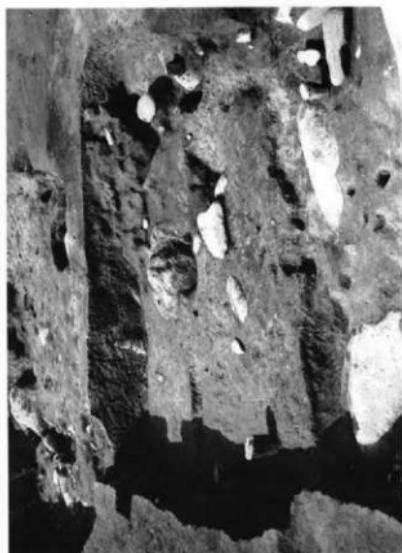
4号住居



5号住居



8号住居



9号住居



10号住居



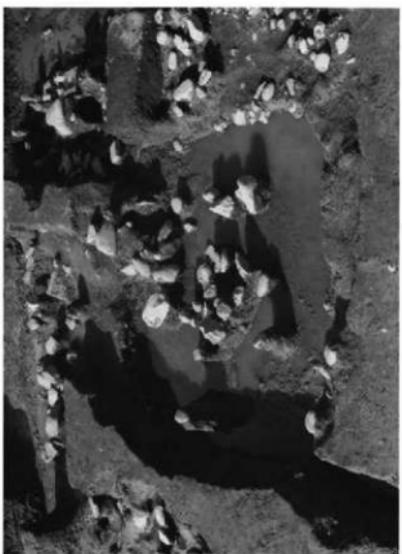
11号住居



12号住居



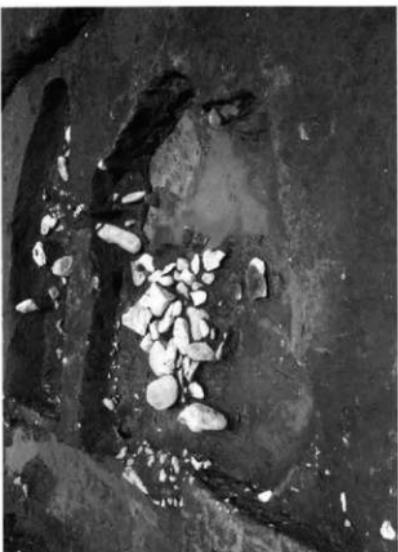
16号住居



17a号住居



17b号住居



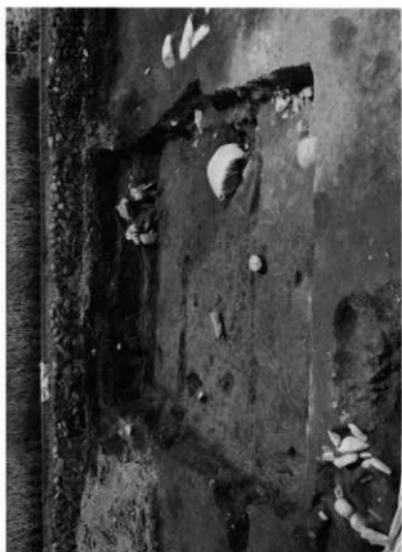
17c号住居



17d号住居



18a号・18b号住居



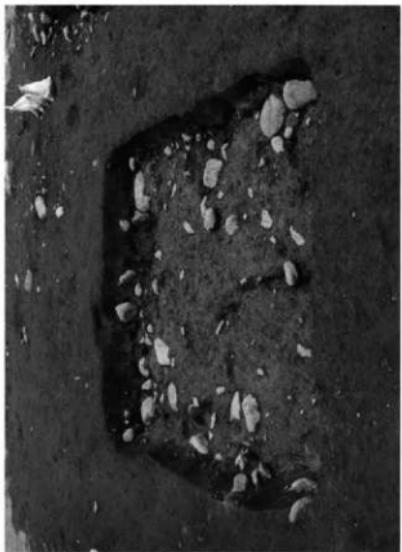
19a号・19b号住居



20号・22号住居



21号住居



26号住居



27号住居



28号・36号住居（右側が36号住居）



30号住居



32号住居



35号住居



37号住居



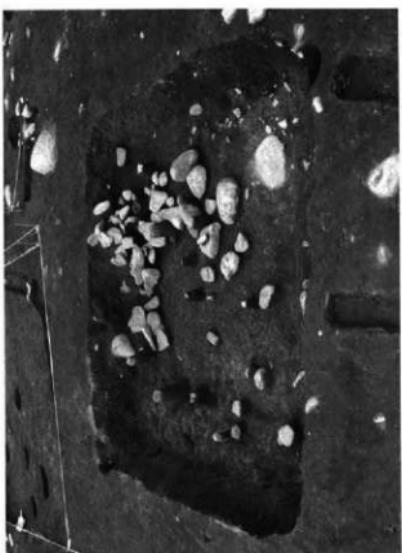
(左から) 34号・38a号・38b号住居



(上から) 34号・38a号・38b号住居



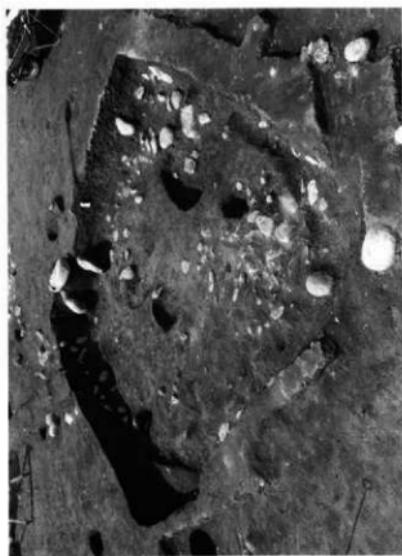
41号住居



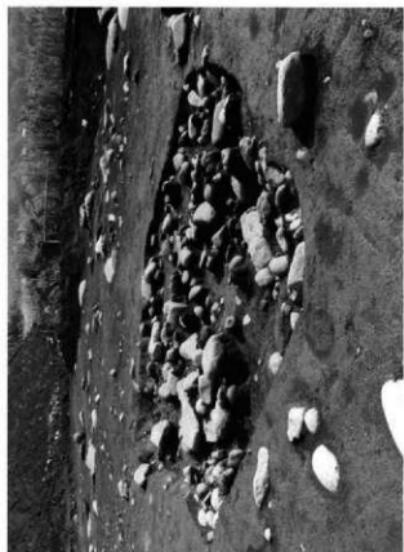
42号住居



43a号・43b号住居



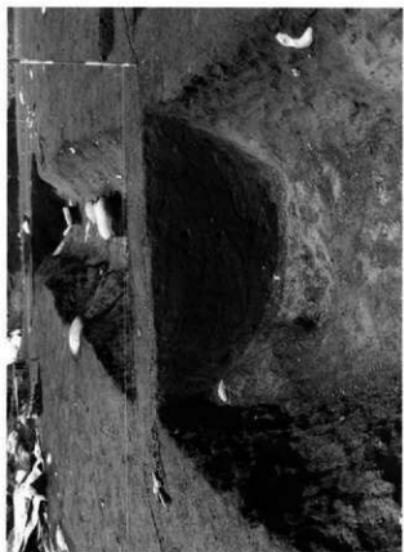
46号住居



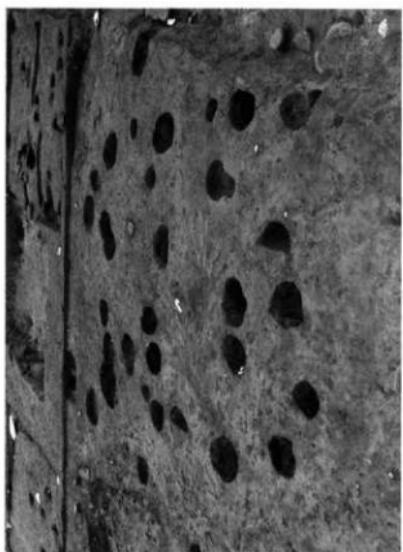
51号住居



52号住居



1号溝跡



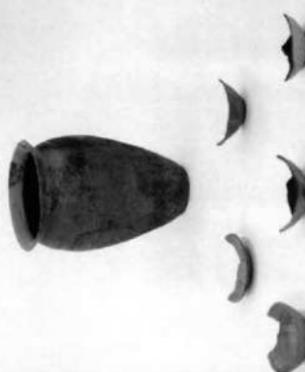
1号掘立柱建物



古墳時代の遺物



奈良時代の遺物



平安時代の遺物



調査参加者

腰巻北遺跡（第2次）

腰巻南遺跡（第3次）

塩川病院増築ほかの建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

須玉町教育委員会

例 言

1. 本報告書は、塩川病院増築ほかの建設に伴う発掘調査をした、山梨県北巨摩郡須玉町 799-1 番地ほかに所在する腰巻北・腰巻南遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、須玉町教育委員会が調査主体となり実施した。
3. <発掘調査組織>

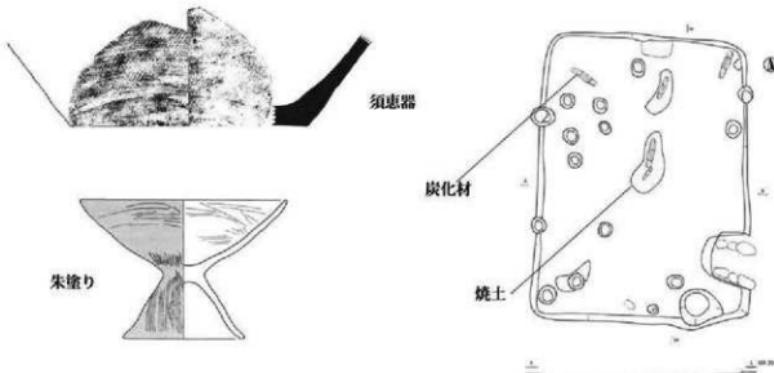
調査主体	須玉町教育委員会	教育長	藤巻宣夫
調査担当	須玉町教育委員会	山路恭之助	
調査委員	深沢裕三		
調査補助員			

浅川英光 角井保之助 伏見徳芳 深沢照明 橋口勲 深沢直江 宮崎夏子 白倉恵美子 石川モト子 小澤久恵 八巻まさ子 中込鶴子 小尾嘉子 向井直子 小沢紀子

整理員
高橋正明 高橋香精 市川道夫 岡本美恵子 市川博子 小尾裕美子 浅川佐知子 三井ちぐさ
4. 本書の執筆・編集 山路恭之助 深沢裕三
5. 本調査の出土品、諸記録は須玉町教育委員会が保管している。
6. 株式会社シン技術コンサルに写真測量・図化を委託した。

凡 例

1. 図版中の網掛部等の意味するところは以下のとおりである。



目 次

例言・凡例

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 遺跡の立地と環境	1
第3章 造構と遺物	2

挿図目次

第 1 図 北 - 全体図	10
第 2 図 北 - 1号・8号住居 2号住居	11
第 3 図 北 - 3号・5号住居 4号住居	12
第 4 図 北 - 6号住居 7号住居	13
第 5 図 北 - 9号住居 19号住居	14
第 6 図 南 - 全体図	15
第 7 図 南 - 1号・2号住居 3号住居	16
第 8 図 南 - 4号住居 5号住居	17
第 9 図 南 - 6号住居 8号住居	18
第 10 図 南 - 9号住居 10号住居	19
第 11 図 南 - 12号住居 14号住居	20
第 12 図 南 - 15号住居 16号住居	21
第 13 図 南 - 17号(18号)住居 17号住居カマド	22
第 14 図 南 - 20号住居 22号住居・溝4・溝5	23
第 15 図 南 - 溝1・溝2・溝3	24
第 16 図 南 - 土坑4・土坑5・土坑6	25
第 17 図 北 - 1号住居出土遺物	26
第 18 図 北 - 1号・2号住居出土遺物	27
第 19 図 北 - 2号住居出土遺物	28
第 20 図 北 - 3号住居出土遺物	29
第 21 図 北 - 3号・4号住居出土遺物	30
第 22 図 北 - 4号・6号住居出土遺物	31
第 23 図 北 - 6号・7号住居出土遺物	32
第 24 図 北 - 15号・19号住居出土遺物	33
第 25 図 北 - 27号・29号住居出土遺物	34
第 26 図 南 - 1号・2号住居出土遺物	35
第 27 図 南 - 3号・4号・5号住居出土遺物	36
第 28 図 南 - 5号住居出土遺物	37
第 29 図 南 - 6号・8号住居出土遺物	38
第 30 図 南 - 8号住居出土遺物	39
第 31 図 南 - 8号住居出土遺物	40
第 32 図 南 - 8号・9号住居出土遺物	41
第 33 図 南 - 10号・11号住居出土遺物	42

第34 図	南-12号住居出土遺物	43
第35 図	南-12号住居出土遺物	44
第36 図	南-12号住居出土遺物	45
第37 図	南-14号・15号住居出土遺物	46
第38 図	南-15号住居出土遺物	47
第39 図	南-16号・17号住居出土遺物	48
第40 図	南-17号・18号・19号住居出土遺物	49
第41 図	南-19号住居出土遺物	50
第42 図	南-19号・20号・21号住居出土遺物	51
第43 図	南-21号・22号住居 溝1～溝3・土坑出土遺物	52
第44 図	南-住居外出土遺物	53
第45 図	南-住居外出土遺物	54
第46 図	南-住居外出土遺物	55

写真図版目次

写真図版 1..	北-発掘風景・北-2号住居・2号3号5号住居	58
写真図版 2..	北-2号カマド・北-4号住居・北-6号住居	59
写真図版 3..	北-6号カマド・北-7号住居・北-9号住居	60
写真図版 4..	北-11号住居・北-12号13号14号住居・北-15号居カマド	61
写真図版 5..	北-19号住居・北-19号住居カマド・北-27号住居	62
写真図版 6..	北-27号住居カマド・北-28号30号住居・北-28号住居カマド	63
写真図版 7..	南-発掘風景・南-1号2号12号住居・南-4号住居	64
写真図版 8..	南-4号住居出土遺物・南-5号住居・南-6号住居	65
写真図版 9..	南-6号住居カマド・南-8号住居・南-17号9号住居	66
写真図版 10..	南-10号住居・南-12号住居・南-14号住居	67
写真図版 11..	南-15号住居・南-17号住居カマド・南-20号住居・溝4・溝5	68
写真図版 12..	南-22号住居・南-溝1	69

第1章 調査に至る経緯と経過

既存の塩川病院の西側約1800m²の土地に病院施設の増築することになり、須玉町教育委員会と塩川病院事務局並びに工事施工者早野組との三者の協議の結果、試掘調査後の平成15年2月3日、ただちに本調査に入った。調査区域の3分の1を占める土地所有者「長田氏部」の移転前と移転後の二期に分けて調査は行われた。第一期は15年度の3月末まで。第二期は5月13日に再開し現場の実測を残して5月20日に発操作業は終了した。調査の結果、縄文時代後期の住居1軒・弥生時代後期の住居13軒・平安時代の住居2軒のほか、溝5条・土坑6基・ピット多数が発見された。

第2章 立地と環境

本遺跡は、須玉町若神子から南東へ、塩川右岸の河岸段丘状にあって標高489mが測られる。平成6年度の介護支援センター「福寿の里」建設に伴う発掘調査が終了した腰巻遺跡が塩川病院を挟んだ東側に、平成8年度の須玉町デイサービスセンター設立に伴い発掘調査した腰巻北遺跡が病院の北側に位置している。共に縄文時代、古墳時代、そして平安時代の遺構と遺物が多く出土しているが、特に古墳時代後期鬼高郡の集落跡であり、平成13年度、若神子城（古城）下の湯沢で発見された2基の古墳の被葬者が、腰巻遺跡、北遺跡の集落を統治した権力者である長^{ナガ}であろうとの指摘を、県内の考古学にたずさわる諸先生方から頂いている。

第3章 遺構と遺物

腰巻北遺跡（第1次）

（第1図～第5図・第17図～第25図 写真図版1～6）

表土上には暗褐色土が堆積し、次いで土器包含層の褐色土、その下が黄褐色シルト土層となっている。確認された遺構は、古墳時代後期の住居が16軒（1,2,3,5,6,7,8,12,13,14,15,16,17,19,27,28号住居、うち2号住居は焼失住居であった）、平安時代初頭の住居が2軒（4,29号住居）、性格不明の方形窪穴遺構3（9,18,30号住居）、焼失した方形窪穴遺構1（11号住居）、また当調査区南端から方形プランを呈し、竈と思われる焼土を確認できた遺構が7軒（20,21,22,23,24,25,26号住居）であるが、そのほとんどが重複しており、あるものは住居の大半が調査区外に広がっている。7軒が検出された区域は盛土によって永久保存されることから、遺構の振り分けは行わず、確認のみに終わった。本遺跡で検出された遺構の規模は、6m以上のもの3軒（1,4〔平安〕、6号住居）、4m以上のもの6軒、小型で3m台以下のもの5軒、住居の大半が地域外にある小型のもの5軒である。竈の位置は、平安時代の4号住居、29号住居は東壁に構築されており、古墳時代後期の住居全てが北竈であるのが、本遺跡の特色である。埼玉県五領遺跡の鬼高窓住居（古墳時代後期）と同様に、竈穴の規模に著しい相違が認められ、竈穴住居の大小によって竈の大きさや構造を異にし、出土遺物の多寡も規模に比例していることから、すでに住居によって階級的な相違があった事がうかがえる。

出土遺物 古墳時代後期鬼高窓の十節器环、裏口縁部、胸部、底部破片、鉢、手扣ね土器、須恵器环、須恵器壺、須恵器壺脚部などである。平安時代の遺物としては、花弁状、放射状暗文を施した甲斐型土器環、「大徳」と読める墨書き器、在地系の内黒土器环片、甲斐型裏口縁部片、胸部片に加え、小型丸底壺の元形が出土している。遺物年代は9世紀第4四半期から10世紀第1四半期に比定される。鉄製品では、耳環2、刀子片、鐵鎌片各1点が出上している。

腰巻南遺跡（第2次）

1号住居（第7図・第26図 写真図版7）

規模形態東西2.8m南北3.1mの方形の竪穴住居で、南西隅を2号住と重複し、これによって切られている。覆土は床面まで褐色土で床面は固くしまっており黄褐色の砂質土である。壁高は北壁が2.6cm東西が20cm前後で南壁は1cmとかすかに遺存する。地床炉はなく柱穴は住居の壁に沿って等間隔に5本検出され、住居内には、住居中央ピット1長径50.5cm短径40cm深さ43cmがあり南壁中央に長径35cm短径30cm深さ31.2cmのピット2があり西壁の南西寄りに長径45cm短径40cm深56cmのピット3がある。

出土遺物 出土遺物数は少ない。弥生時代後期に比定される壺型土器片で赤色塗彩したものの他に、縄文時代中期末の深鉢片、平安時代の鏡頭部片、中世の内瓦土器、深緑色施釉陶器片、北宋銭（大聖元寶）が出土した。石器は小型打製石斧と思われるものが出土している。

2号住居（第7図・第26図 写真図版7）

規模形態は、東西3.6m南北2.9mの隅丸方形の竪穴住居で、1号住南西隅を切っている。覆土は黄褐色が斑点状に混入した褐色土で床はサラサラした淡黄色土で固くしまっている。壁高は北壁18cm南壁と西壁が10cm、東壁は5cmが測られる。地床炉はなく1号住と同様に住居の外側には柱穴と思われる穴が認められ、住居内の主軸上にピット1が50cm×30cm深さ24cm、ピット2 40cm×35cm深さ42cmがあり、北西隅に直径30cm深さ14cmのピット3、南西隅に長径40cm短径30cm深さ43cmのピット4がある。東壁際のピット5は梯子受穴で直径35cm深さ52cmが測られる。

出土遺物 内、外ヘラ磨き後赤色塗彩の土器片と口唇に刻み目を施した甕形土器片のほかに中世以降の縄釉陶器片が出土している。石器では黒曜石の剝片石器と球状で安山岩の丸石が出土している。

3号住居（第7図・第27図）

規模形態は、東西3.7m南北3.2mの隅丸方形の竪穴住居で、覆土は10cm以下の褐色土で床面はやや固めながらも凹凸が激しい。壁高は東壁10cm西壁が7cm、北壁は4cm、南壁6cmが測られる。東壁に2ヶ所南壁と西壁に各1ヶ所、直径30cm～35cm深さ22cm～37cmの柱穴が戦と仄を切って穿かれている。住居内には直径20cm～30cmの穴が13認められ、深さも6cmから20cmとさまざまであり、主柱、支柱の区別が判然としない。南西寄りに長径7.5cm短径5cm深さ12cmの掘り込みがある。地床炉は認められない。

出土遺物 遺物数ほどなく一部欠損した甕形土器が出土している。

4号住居（第8図・第27図 写真図版7・8）

規模形態東西2.7m南北3.0mのやや隅丸ぎみの竪穴住居で、覆土は炭化物混入しザラザラした褐色土が6cm～8cm堆積して床は固く床の中央と北壁と南壁と南西隅に炭化材が焼失のまま残っており、南西壁際の床面に認められる焼上層は東南の床に置かれた平石は長さ30cm幅15cm及び10cmで表面が平らな安山岩で調理用に使用されたものかもしれない。壁高は北壁8cm南壁7cm、東壁10cm、西壁約5cmが測られる。柱穴は住居内に6つのピットが認められる。直径は、25cm～40cm、深さ18cm～28cmを割る。北壁の中央よりやや東に寄った柱穴は、直径30cm深さ24cmで壁と住居の床を切って穿かれ西壁外、中央と南西隅と東壁の北寄りに直径28cm～40cm深さ13cm～31cmの柱穴が認められた。

出土遺物 坯部が円錐形の高坏1は丹彩しているが、坏部内側に赤色塗彩された破片、脣部をナデで施し内が櫛目痕のある甕形土器片の外に口縁下に突帯が巡る深鉢片、脣部に縄文を施した深鉢片など縄文時代の遺物も若干出土している。住居内のピットから外にタテ刷毛目、内ヨコ刷毛目の甕形土器頭部片が出土している。

5号住居（第8図・第27図・第28図 写真図版8）

4号住居から約3.5m南西に占地し、規模と形態は、東西3.6m、南北3.4mの方形堅穴住居で、覆土は6cm～8cmの褐色土が堆積しており一部炭化物を含む黄褐色土が混入している。北壁からやや西寄りの床面に80cm×70cmの範囲に炭化物が混入したピンク色と赤色土の地床炉が認められた。かたわらに灰色粘土も遺存していた。主柱穴は主軸上の4本でピット1は直径25cm深さ32cm、ピット2は直径25cm深さ23cm、ピット3は直径35cm深さ24cm、ピット4は直径25cm深さ14cmが測られ、ピット2とピット4のそれぞれ南側に接し検出されたピットは深さが40cm～50cmで支柱穴であろうか。他に北西隅、住居の外に直径30cm深さ26cmの柱穴と東壁と住居の床面をきって長径50cm短径30cm深さ21cmの柱穴と直径35cm深さ15cmの柱穴の三つがある。住居の北東コーナーには長径85cm短径70cm深さ64cmの十坑があり、長さ65cm最大幅45cmの巨石が崩落していた。

出土遺物 床に施文する櫛目より細かい櫛目文片で大竈川水系の變形土器片が多い。波状文の變形土器頭部の外、3は小型壺で底部を抜き、口縁が一部欠けているが内外研磨され、祭祀用かと思われる。1は煮沸具として供された變形土器の口縁片で口唇に刻目を施し、内にススが付着している。丹彩の高坏片が瓶片で若干出土。4は台付壺の底と台との境にあたる破片も出土している。青磁片と施釉陶器片が覆土内から検出されている。

6号住居（第9図・第29図 写真図版8、9）

規模と形態は東西3.5m南北4.7mの隅丸方形を呈し、東壁の南側に6ヶの河原石を併立させてカマドを構築した平安時代の住居である。焼失した炭化物が北壁際に3本放射状に遺存し、西壁際にも焼土と炭化物が、南西コーナーのピット周辺から炭化粒子が35cm×60cmの範囲で検出されている。住居の中央部からは、1m×40cmの範囲に厚さ4cmの剥けた炭化土と焼上質の赤褐色土が堆積している。

窓の脇、南東コーナーには直径60cm床面から22cmの深さの貯蔵穴を検出した。住居内の柱穴は11本あり、壁と床を切って穿かれたピットは、東壁際に1本、西壁に2本認められた。西壁を切って穿かれた穴は、長径45cm短径35cm深さ64cmで最も大きく廃絶後の土坑と考える。東壁と西壁際のピット1とピット2南西隅のピット3がそれぞれ直径30cmで深さも18cm～20cmが測られ主柱穴であろう。覆土は炭化粒子を多く含む褐色土でしつりしていた。床面は中央から南全体が貼り床で、北側は軟弱である。壁はやや外反し北壁は13cm東壁12cm西壁10cm南壁13cmを測る。

出土遺物 上部質上器片、壺口縁、腹部片、タタキ目がのこる須恵器壺片と底部片に混じて丹彩研磨された高坏片や細かい櫛目文の變形土器頭部の弥生土器の外に古墳時代後期鬼高式土器の体部に稜をもつ坏片が出土している。在地系土器2ヶ1、2はほぼ完形で、山梨編年での底径／口径比は4.37%でIX期、10世紀第1四半期に位置づけたい。

7号住居

塩川病院の送迎用バスが駐車するコンクリート壁直下から8号住居と共に検出された遺構だが、幅1.4m奥行80cmの範囲に半円状の落込みが認められるものの遺構の殆どが調査区境外であるため詳細な調査は出来なかった。

出土遺物 体部に櫛目文の變形土器片、口唇に刻目を施した變形土器口縁片のほかに繩文を地にした器厚の厚い深鉢片、無文の厚手の深鉢片も出土している。

8号住居（第9図・第29図～第32図 写真図版9）

7号住の南側から検出された円形に近い裏丸方形の堅穴住居で、遺構の3分の2が駐車場下に隠れるものの北壁2.5m、西壁4.5m、南壁は1mほどが遺存するものの、その殆どが壊乱されている。西壁から駐車場脇の2.5mの範囲が住居の3分の1に当るものと考えられる。壁はやや外反し北壁30cm、西壁32cm、南壁30cmを測る。床面全体が黄褐色砂質土の貼床で、固く踏みしめられている。主軸上に2木の柱穴がある。

北壁に近いピット1は直徑30cm深さ39cmで南壁に近いピット2は長径30cm短径20cmで深さ50cm余りが測

られ、梯子受穴と考えられる。出土遺物は丹彩された高环片、壺などが遺構の中央辺りから出土している。

出土遺物 出土遺物を細分まで数えると 200 点近い内、3 分の 1 を縄文時代中期後半から後期の深鉢片が占め、次いで弥生時代赤色塗彩の高环片、口唇に刻み目を施しごく細かい鶴目文の壺形上器片、棒状浮文を縦に貼付けた広口壺口縁部などが 3 分の 1、残りは平安時代の土師器片、須恵器片、中世から近世に亘る施釉陶器、磁器等である。駐車場追加調査によって半月形一孔の、磨製石臼丁と長方形で孔のない石臼丁を検出することが出来た。町内遺跡での初見である。

9 号住居（第 10 図・第 32 図）

8 号住居から約 10 m 西へ隔てて検出された。隅丸方形を呈する竪穴住居で規模は東壁が削平され焼失するものの、東西 3 m 南北 3.2 m の規模と思われる。壁の立上りは外反は少なく北壁が 5 cm、北壁 2 cm、南壁 3 cm と極めて浅い、覆土は褐色の自然堆積土である。床面は軟弱で地火炉と梯子受穴は見当らない。住居内の柱穴は 4 本ありピット 1 は長径 30cm 短径 25cm 深さは床面から 38cm、ピット 2 は直径 24cm 深さは床面から 12cm、ピット 3 は直径 27cm 深さは床面から 16cm、ピット 4 は直径 25cm 深さは床面から 21cm が測られる。南西コーナーの直径 35cm 深さ 17cm の土坑が認められた。他の 30cm と 40cm のピットは住居廃絶後のものと考える。

出土遺物 出土遺物总数 45 点の内 17 点が縄文時代後期の深鉢片が占める。内外に刷毛目の壺形土器片の波状文片のほか赤色塗彩の高环が壺形土器の細片など弥生時代後期の遺物が残りを占める。他に器体にタタキ口痕の須恵器片と蓮弁文の青磁片各 1 が出土している。

10 号住居（第 10 図・第 33 図 写真図版 10）

調査区域西側中央、4 号住居の北側から検出された。規模と形態は東西 2.8 m、南北 2.4 m の隅丸方形を呈する。壁面はやや外傾し、壁高は東 13cm、西 5.4cm、北 6.4 cm、南 4.5 cm である。床面は、中央から南壁にかけ貼床を認められるが、北壁にかけては全体的に軟弱である。南壁寄り、ピット 2、ピット 3、ピット 4 の間で 70cm × 80cm の範囲は炭化材を含む炭化粒子と焼土が堆積した地火炉である。ピット 1 は長径 35 cm、短径 25cm、深さ 14cm が測られ、ピット 2 は、直径 35cm、深さ 18cm、ピット 3 は直径 27cm、深さ 15cm、ピット 4 は直径 25cm、深さ 14.5 cm である。ピット 5 は直径 30 cm、深さ 20cm で梯子受穴である。

出土遺物 外面がヘラ磨き後赤色塗彩、片面ヨコ刷毛目の高环脚部 2 のほか壺形土器の壺部、胴部、底部の各片が 10 点余り出土している。

12 号住居（11、12、13、21 住）（第 11 図・第 34 図～第 36 図 図版 10）

調査地区内の瓦戸部が移築前の調査で、3 月に前庭の 3 分の 1 を削掘した際に 11,12,13 住の重複住居があると思つていたが、5 月になって移転後の精査から 11,12,13 住は、1 軒の 12 住が 21 住を切って構築されていると認識した。然し、これも精査が進行中に地火炉の発見から 12 住単一の住居であることが判明した。規模と形態は、東西 5.1 m 南北 9 m で胴が張らない隅丸方形である。壁面はやや外傾し、壁高は北 11cm ~ 15cm、東 10cm ~ 13cm、西 15cm ~ 20cm、南 17cm ~ 20cm が測られる。壁下には床面から 3cm ~ 5cm の浅い溝が全周する。床面は、北壁際の幅約 1.5m は軟弱ぎみながら全体的に貼床で固くしまっている。西壁ぞいの床面は、炭化粒子の中に赤色粒子が混ざった黒色土が 14cm × 12cm の範囲に認められ、そこから 2 m 北の床面に、1 字状で幅 3cm、長さ約 12cm ほどの炭化材の一部と炭化粒子、赤色粒子が確認されている。炉は北側柱穴間にあって、南側に 2 ケの炉石があり、東西 80cm、南北 100cm、深さ 12cm 舟底状に窪んでいた。

主柱穴は 4 本で、ピット 1 は、直径 30cm、深さ 30cm。ピット 2 は、長径 60cm、短径 50cm、深さ 27cm、ピット 3 は、長径 40cm、短径 30cm、深さ 57cm。ピット 4 は、直径 28cm 深さ 30cm で、ピット 4 は梯子受穴と思われる。住居中央から 8 本のピットと南壁際からも 6 本のピットが検出された。地火炉の北側のピット 5 は、直径 30cm、深

さ 8cm と浅いが支柱穴と思われるが他は判然としない。

出土遺物 当該遺跡の中で最大の規模を持つ住居だけに出土遺物数も 170 点余りあり縄文時代の遺物は、抽象文で通称「わらじ虫」の中期中葉の深鉢片 16、蛇行隆線に爪形文を配した深鉢片など中期から中期末の破片が 10 片出土している。石器類と陶器を除き、弥生時代後期の内外研磨し赤色塗彩の高环片、口唇に刻み文、頭部に波状文の壺形土器片、信濃川水系の箱清水式土器で口縁に棒状突起貼付け文の壺形土器 9 等が出土している。石器では黒曜石小型石族 3、錐葉状口呑石族 1 や打製石斧の茎部のみが 10 点出土している。土製品では紡錘車の紡輪が 21、他に全長 5cm 余りの六角柱水晶と中心部に種子と見られる果実の化石化したもの 1 が出土している。

14 号住居（第 11 図・第 37 図 写真図版 10）

12 号住居の西に位置し、12 号住居に次いで大きい住居址で、東西 6m、南北 6.1m の規模で床面形は隅丸方形を呈する。壁はわずかに外反ぎみで、壁高は東 10cm ~ 13cm と高く、北と西は 8cm ~ 9cm 南は 3cm ~ 5cm と低い。覆土は、斑状の暗褐色土の混ざった褐色土が主で極めて細かい黄色砂質土も認められた。床面は、黄褐色砂質土の貼床で固く踏みしめられている。北壁寄り中央に、北と西を除いた 1 字状に並んだ漆の石圓炉が、長軸 40cm、短軸 30cm の規模で認められ、右圓炉を廻んで南北 1m、東西 75cm の範囲にロームブロックと炭化粒子が混ざった暗褐色土が皿状に広がり、深さは 12cm が測られた。炉の東隣に直径 110cm 深さ 128cm の皿状に盛みをもつ十坑と、直径 25cm ~ 30cm の柱穴が 6 本あって、北西に位置するピット 3 は深さが 17.4cm、南西隅のピット 4 は 20cm 南東隅のピット 6 が 23.5cm で、これらが住居の支柱と考えられる。他に長径 50cm 短径 45cm 深さ 15.4cm のピットと長径 55cm 短径 35cm 深さ 25cm のピットがある。

出土遺物 縄文時代中期末の深鉢片 3 片のほかは、弥生時代の丹色塗彩した高环片、櫛描波状文の壺片、内外磨きの壺形土器片等が 20 点余り出土している。住居内のピットからも内外を研磨し、赤色塗彩の高环片が検出されている。

15 号住居（第 12 図・第 37 図・第 38 図 写真図版 11）

9 号住の南東に隣接する住居で規模と形態は、東西 3.8m、南北 3.7m のやや五角形に近い隅丸方形である。覆土は、自然堆積した褐色土で、壁西はやや外傾し、壁高は北 25cm ~ 30cm、東 30cm、南 22cm ~ 26cm、西が 21cm が測られる。床は、全面的に貼床で、固く踏みしめられている。北壁に近い床面から、70cm × 65cm の範囲に、炭化粒子と炭化材が褐色土上に混じって 2cm ~ 3cm の厚さで堆積し、西壁から住居中央へ向かって幅 15cm 長さ 70cm ほどの炭化材が横臥状に検出された。床から 12cm ~ 13cm の厚さが測られる。東壁と南壁から焼失した柱と思われる炭化材が各 1 と北壁近くの床面から L 字状に幅 15cm 長さ 30cm の炭化材 2 本が検出されている。柱穴は、4 本で西壁に近い位置に 3 本（ピット 2、3、4）と南壁にピット 1 があって東床面からは検出できなかった。ピット 1 は直径 30cm、深さ 10cm、ピット 2 は東西 30cm、南北 22cm、深さ 32cm で梯子受穴である。ピット 3 は直径 20cm、深さ 24cm、ピット 4 は直径 25cm、深さ 9cm と浅い。

出土遺物 縄文時代中期末葉から後期の深鉢片が比較的多く出土したが全てが小片（80 点余り）、平安時代の須恵器盤の破片 8 点の外は弥生時代の台付壺 10、赤色塗彩した壺形土器片 8、彩色しない小型の壺形土器、内刷毛目の大甌底部 11、口唇に刻み文の壺形土器片は出土しないが波状文片や、内外研磨した壺形土器など、12 号住に次いで出土数が多い。茎部が欠けた黒曜石の小形石族 2 ケ 1、2 と刺片が出土している。

16 号住居（第 12 図・第 39 図）

15 号住居から 5 m 程南から検出された住居で、住居址の東と南部分が病院駐車場道路の調査外に入っている。平面形は、隅丸方形であろう。遺存する西壁は、約 2.7m、北壁が 2.3m の長さである。壁高は北が 7cm 西が 6cm を測り、壁面はやや外反する。床面は軟弱な黄褐色土で凹凸がある。柱穴は 3 本で北壁中央のピット 1 は直径 20cm 深さ 18cm、ピット 2 は長径 25cm 短径 22cm 深さ 10cm、凸壁の土坑の脇ピット 3 は直径 25cm 深さ 27cm が測られる。

西壁を切って検出された土坑は直径 60cm 深さ 4cm と皿状の縦みをもつ。

出土遺物 出土数 20 数片の内、縄文が地文の深鉢片、無文帯のもの、波状口縁下に沈線による区画文を施すもの、半截竹皆工具による沈線の三角状区画文片のほか、14 点が彌生時代土器片で、両面研磨、赤色塗彩の窩坏片、口唇に刻み目のある形土器細片等弥生時代のもの 9 点と平安時代後期の羽釜のつばの破片などが出土している。住居の掘り込みが 3 cm ~ 7 cm と浅い上に 6 m 道路の下に住居の跡が隠れているため時代を決定づけることが出来ない。

17 号（18 号）住居（第 13 図・第 39 図・第 40 図 図版 11）

9 号住居と 15. 16 号住居に埋められた位置から検出された。6 号住居と同様の平安時代の住居である。隅丸長方形の平面形を呈し、調査の初段階で重複住居と思われたが、住居内西寄りが 2.5 m の範囲に擾乱を受けており、覆土中から戦時中使用されたマイカ（雲母）の細片が灰褐色粘土と共に出土し、遺構確認面から約 30cm の深さに達していた。床面を精査するに従い、1 軒の住居址である事が判明した。竪は北壁東よりに位置し、左石の袖石と焼七、浅い掘り込みが検出された。焚口部の前方に床から浮いた状態で楕円形の河原石が出土している。床面は擾乱が認められた西側の 1.6 m ~ 1.7 m の幅は軟弱ぎみで、中央から東側、全体の 2/3 は固くしまっている。ただ結して床面の凹凸が著しい。竪周辺を除いて周溝はほぼ全尾する。付属施設として土坑 1 とピット 7 が検出された。南壁の東寄りに住居址を切って土坑 1 が検出されている。

出土遺物 復元し、ほぼ完型の上師器環 2 住居内土坑から出土の 4、内黒土器小片、末広口縁型壺口縁、土師器底部片等、平安時代住居に用う遺物 40 点余りの他に、縄文時代後期を主にした深鉢片 30 数点、弥生時代後期の赤色塗彩した壺形土器片、口唇に刻み目を施した壺形土器片など 10 数点に加え、中世～近世の施釉陶器碗口縁片などの遺物が 2 ~ 3 点出土している。上沿の位置づけが可能な 2、末広口縁型壺から山梨偏年でのⅦ期（9 世纪第 3 四半期）とⅨ期（10 世纪第 1 四半期）の時期の住居と考えたい。

19 号住居（第 40 図・第 41 図・第 42 図）

5 号住居南西寄りに黒褐色土の堆積層内から散在的に縄文上器をはじめ、近世にかけての遺物を収集したが住居址の遺構検出には到らなかった。

出土遺物 縄文時代中期末の曾利式土器片 12 を含め 35 点。弥生時代後期から古墳時代前期にかけての S 字状口縁台付窓片 2 が 1 点、平安時代 9 世纪第 3 四半期に出現し、11 世纪初頭までの末広型壺の口縁片以外の 70 点余りは、弥生時代後期の赤色塗彩の壺形土器や、口唇に刻み目、頸部に櫛描波状文の壺形土器片等である。

20 号住居（第 14 図・第 42 図 写真図版 11）

規模は 3.2 m のほぼ正方形に近い隅丸方形を呈し、住居内は北壁から幅 70cm、西壁から同じく幅 70cm、鍵手状の張出し部があり、黄褐色砂質土を掘り込んで 2.4 m 方形の落ち込みを持つ。二段目の床面は周く踏み込まれ、炭化粒子と炭化材が東壁に沿って約 80cm の帯状に認められた。特に東壁下の 50cm の円形の範囲内から赤色焼土と炭化粒子が検出されている。壁高は北 5cm、西 8.4 cm が測られ、東は 27cm、南 28cm を測る。柱穴は西側張出し中央を切って穿かれている。直徑 40cm、深さは遺構確認面から 30cm、ベッド状張出し部から 18cm が測られる。他に柱穴及び地床炉を検出できなかった。

出土遺物 遺構の構築年代不明の遺構であるが、遺物には縄文時代前期の織維土器片 1、刻み目を施した渦巻文片 1 は中期、そして外周をヘラ削き、内側に刷毛目のある形土器片など弥生時代の土器片 3、深緑色施釉陶器 1 に黒曜石剥片と磁石 1 が出土している。

22号住居（第14図・第43図 写真図版12）

調査区域内唯一検出された縄文時代住居である。耕作による削平によって遺存する壁は円形プランの東側と西側に認められるものの、北側の一部と南側は殆ど検出できなかった。遺存する東西の壁から約5.4mの円形の竪穴住居と推定される。壁は東が7cm、北から西にかけ2cm～3cmで、覆土は褐色土で床面は黄褐色土で炉の周りを除いて、よくしまって囲い。

石圓炉は、住居址の中火よりやや北寄りにあって、3ヶの長方形礫が遺存していた。炉は長軸径90cm、短径85cmの褐色土が5cm～6cm堆積する中にあって、焼上は見当たらなかった。住居内のピットは10ヶあって、炉の西側と住居の南東壁際に沿って認められた。住居の南床面は東から西へ流れる2条の溝によって切られている。

出土遺物 出土した遺物は少なく、縄文時代の深鉢で無文の腹部片2、縦に三本の沈線を施した深鉢片1と、摩耗が著しい底部片で、かすかに崩代痕が認められるもの等4片の外は、弥生時代、波状文を施した壺形土器片1、外周ヘラ削り、内面布によるナデの裏形土器片1、そして近世の施釉陶器片1が出土している。

土坑（第16図・第43図）

上坑は住居戸邊から検出された土坑と住居施設後に住居の中、又は住居の壁を切って穿かれた土坑の二種類に分けることが出来る。

（1）住居周辺の上坑

上坑1 5号住居とL字状の1号溝との間から上坑2と並んで検出された遺構で、形状は楕円形で長径70cm、短径65cm深さ20cm、底面は皿状に盛む。

上坑2 土坑1の南壁に在って、径55cmの円形を呈し、深さ20cmの平底で土坑1と共に褐色十一層の自然堆積土である。

上坑3 土坑1、2と5号住との間に在って楕丸方形を呈し、南北120cm、東西95cm、深さ35cmを測る。底面は舟底状で土坑の東壁には巨石を挟んで4ヶの礫が壁際に一列に積まれていた。

上坑4 4号住から東へ4.5m離て検出された土坑で規模は南北140cm東西70cmの楕円形で深さ22cmが測られ壁に礫が露出する。

土坑5と6 共に14号住から約2m南へ届てて位置し、土坑5は径100cmの円形で深さ14cm。上坑6は長径70cm短径60cm深さ16cmで共に舟底を呈し、覆土は褐色七・層で底面は黄褐色砂質土である。

上坑7 10号住の北壁寄りに在って、長径60cm短径50cmの楕円形で深さ12cmで底面は平らで黄褐色砂質土の地山を検出した。

（2）住居内或は住居を切る土坑

上坑8 5号住の北東隅にあって長径85cm短径70cmの円形を呈し、摺鉢状の式は遺構確認面から63cm、住居床面からは約50cmが削られる。長さ65cm幅45cmの巨石が土坑の半分を底ぐように崩落している。

上坑9 14号住内の北壁沿い、やや東寄りの床面を掘り込む。遺構確認面から約27cm、床面から12cmが削られる。床面は平らで黄褐色砂質土が床面を覆う。

上坑10 16号住の西壁隅を切って掘られ、長径70cmの円形で遺構確認面から10cm、床面から3.5cmを測り、皿状の底面を呈する。

上坑11 17号住の中央から東寄りの南壁を切り、平面形80cmの円形で摺鉢状の底径は50cmで住居の確認面から40cm弱、住居の床面から10cmが測られる。

溝の規模と形態（第15図・第43図 写真図版11・12）

溝1 5号住居を囲むようにL字状を呈する長さは12m 幅は30cm～35cmで深さは12cm～35cmが測られ北東へ流れ。底は黄褐色砂質土で多少の凹凸は認められるが砂や小砂利は認められない。

出土遺物 繩文が地文の深鉢片、無文帯の深鉢口縁片、地文が縄文で枕線による区画文を施した深鉢片など6片、波状文の壺形土器頸部片、台付裏の台部、内外研磨し朱彩の壺形土器片は、格子口文と棒状貼付文が遺存する2など弥生時代後期の遺物20点余りと須恵器片2と施釉陶器片1が出土している。

溝2 17号住の西から南壁に沿って流下する。長さは7.5mで幅70cm～90cm、深さは17住確認面から5cm～7cmが測られ、溝内は礫が多く途中で消滅する。

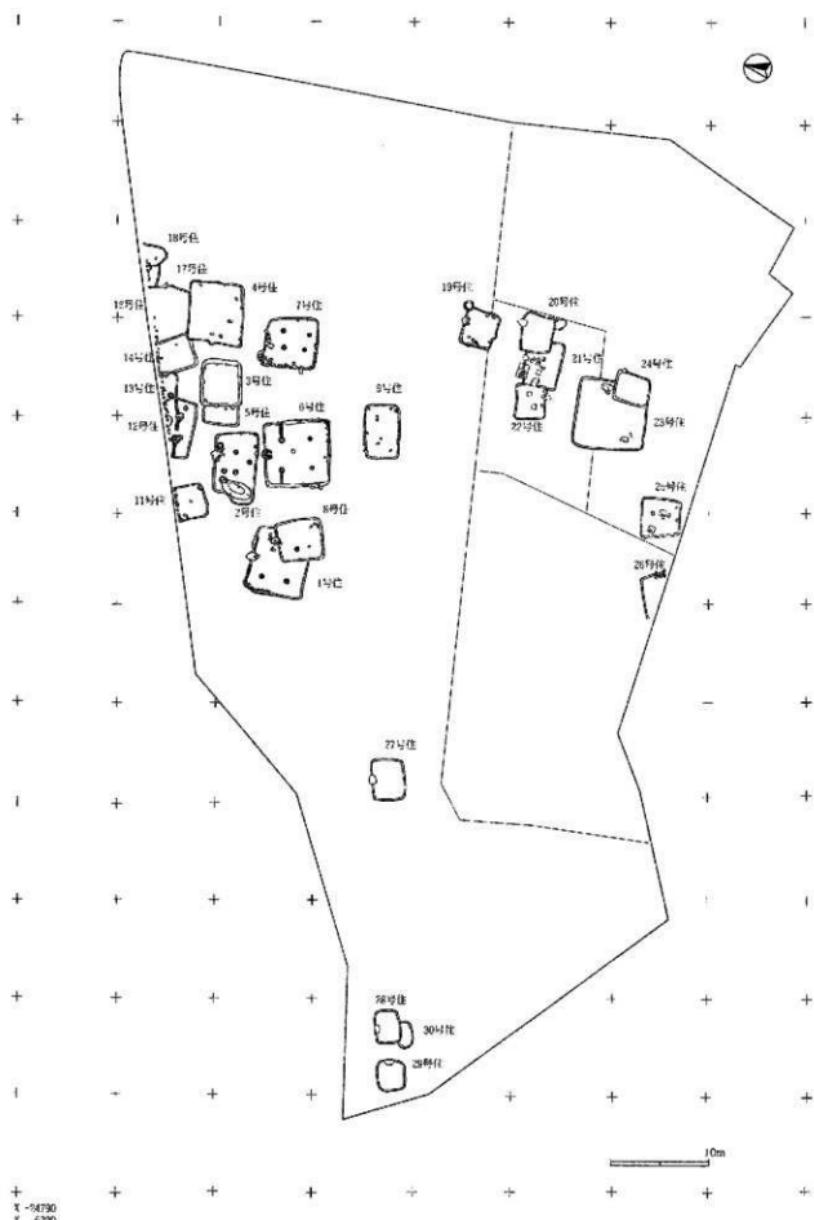
出土遺物 無文帯の深鉢口縁部破片1の外は、弥生時代後期の赤彩土器片、外のみ朱塗りの壺形土器片、壺形土器片が4点と、平安時代の蓮弁文の青磁片が出土している。石器では打痕がある1の破石が出土している。

溝3 2号住と3号住の間にあって東から西へ流下する溝で長さは10.5m、幅60cm～90cmで溝壁は3cmで中央部分は6cm～7cmの舟底形を呈する。底は凹凸がはげしく、少量ながら砂が認められた。

出土遺物 無文の側部に障帶を貼付した深鉢片、地文が縄文に沈線文を施した深鉢片、円形区画を半裁竹管土器で施文した深鉢片など縄文時代後期を主に6片、朱塗りの壺形土器細片、赤彩土器片など弥生時代後期の上器片11点が出土している。

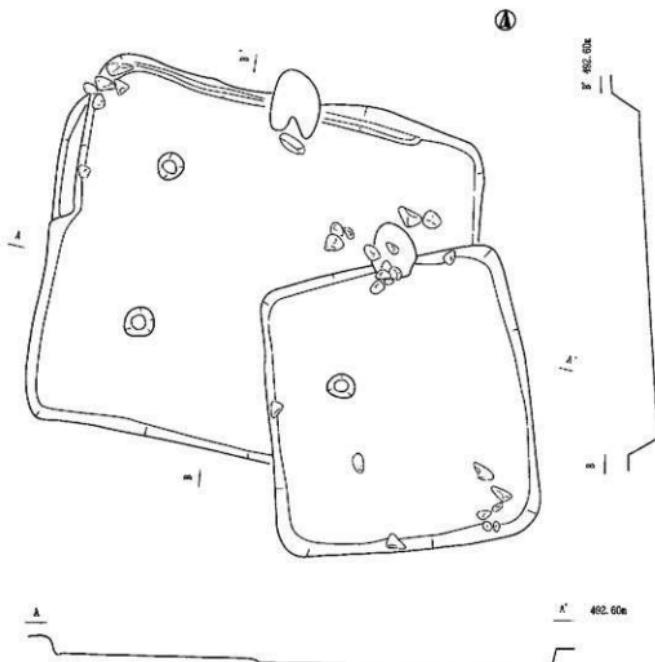
溝4 潘森区の北端から検出され、塩川病院北側駐車場下から西へ22号住を切って西、調査外へ延び、19mまで確認できた。幅は50cm～60cm、深さは東で6cm～7cmと浅く西へ流れる程深く14cm～15cmとなる。底は平坦で黄褐色砂質上の地山である。

溝5 溝4と同じように駐車場下から西へ流れ、途中で溝4に切られている。長さは20m、幅35cm～40cmで溝の深さは4cm～5cmで浅く、溝4と溝5が交錯する周辺に砂が少量ながら堆積している。

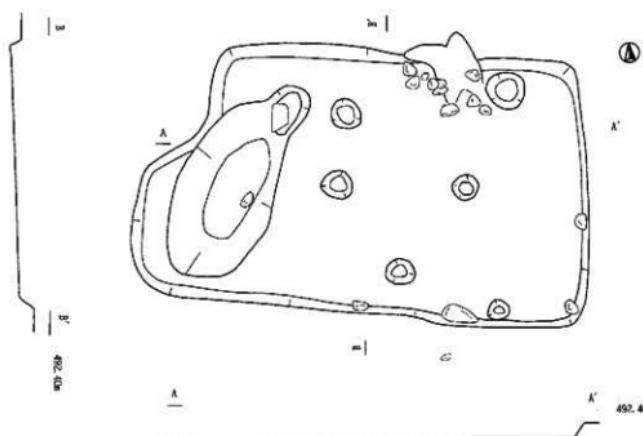


第1図 腰巻北全体図 (1/500)

北-1号・8号住居



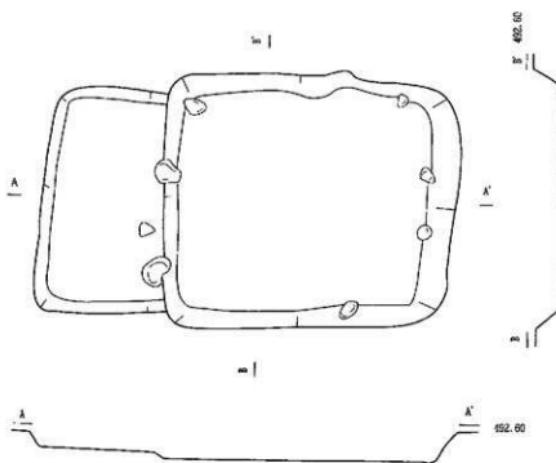
北-2号住居



第2図 北-1号・8号住居 (1/80) 2号住居 (1/80)

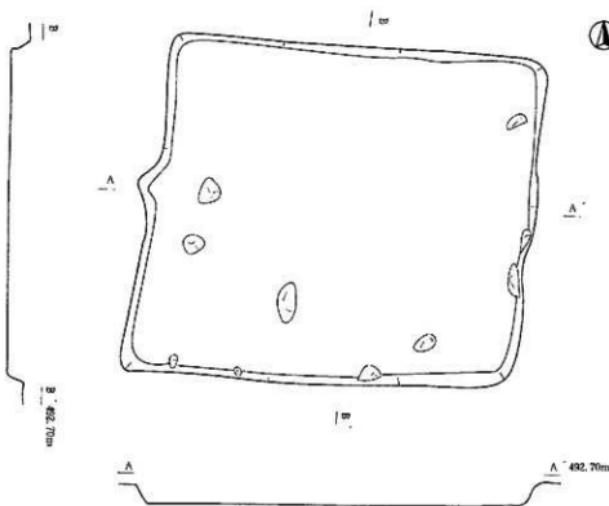
北-3号・5号住居

Ⓐ



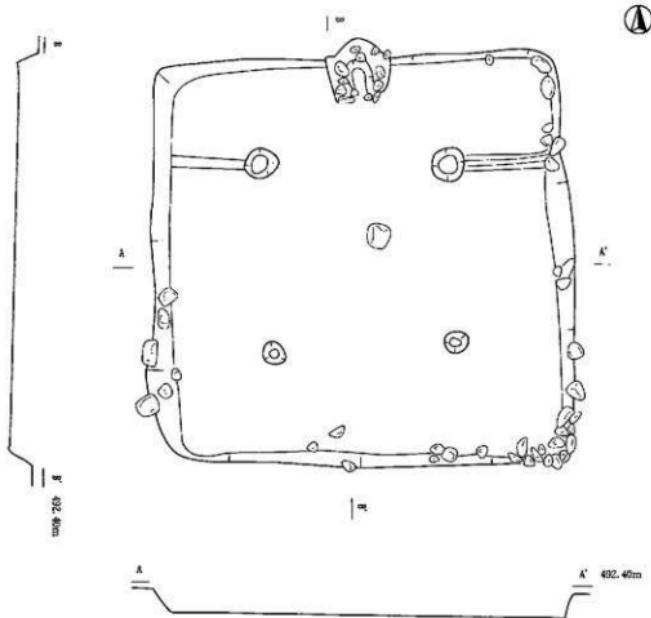
北-4号住居

Ⓐ

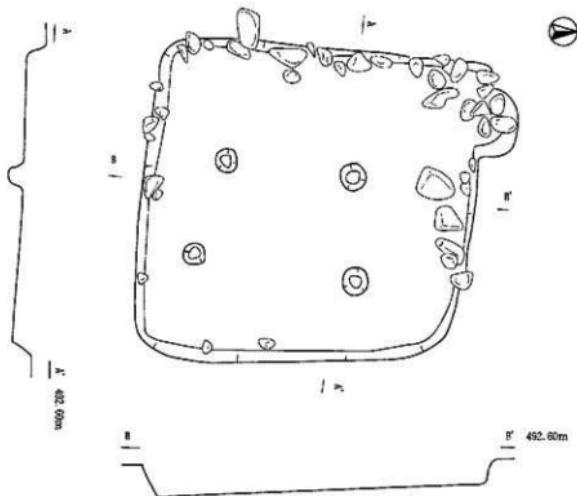


第3図 北-3号・5号住居(1/80) 4号住居(1/80)

北-6号住居

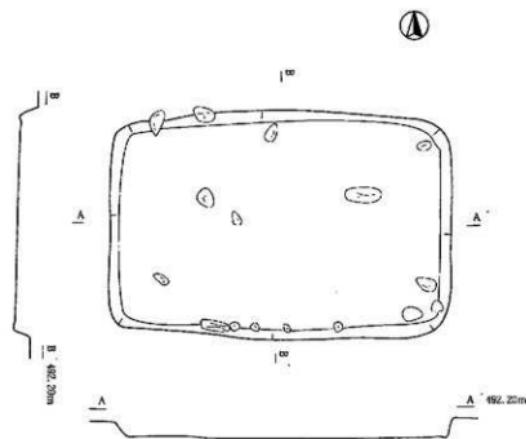


北-7号住居

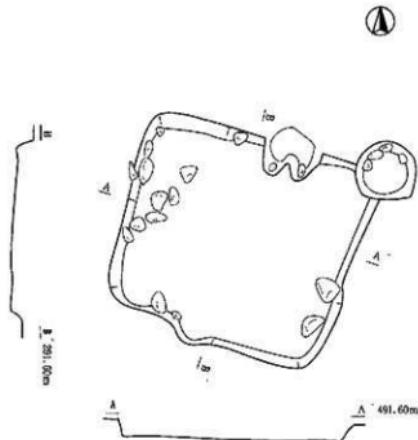


第4図 北-6号住居(1/80) 7号住居(1/80)

北-9号住居

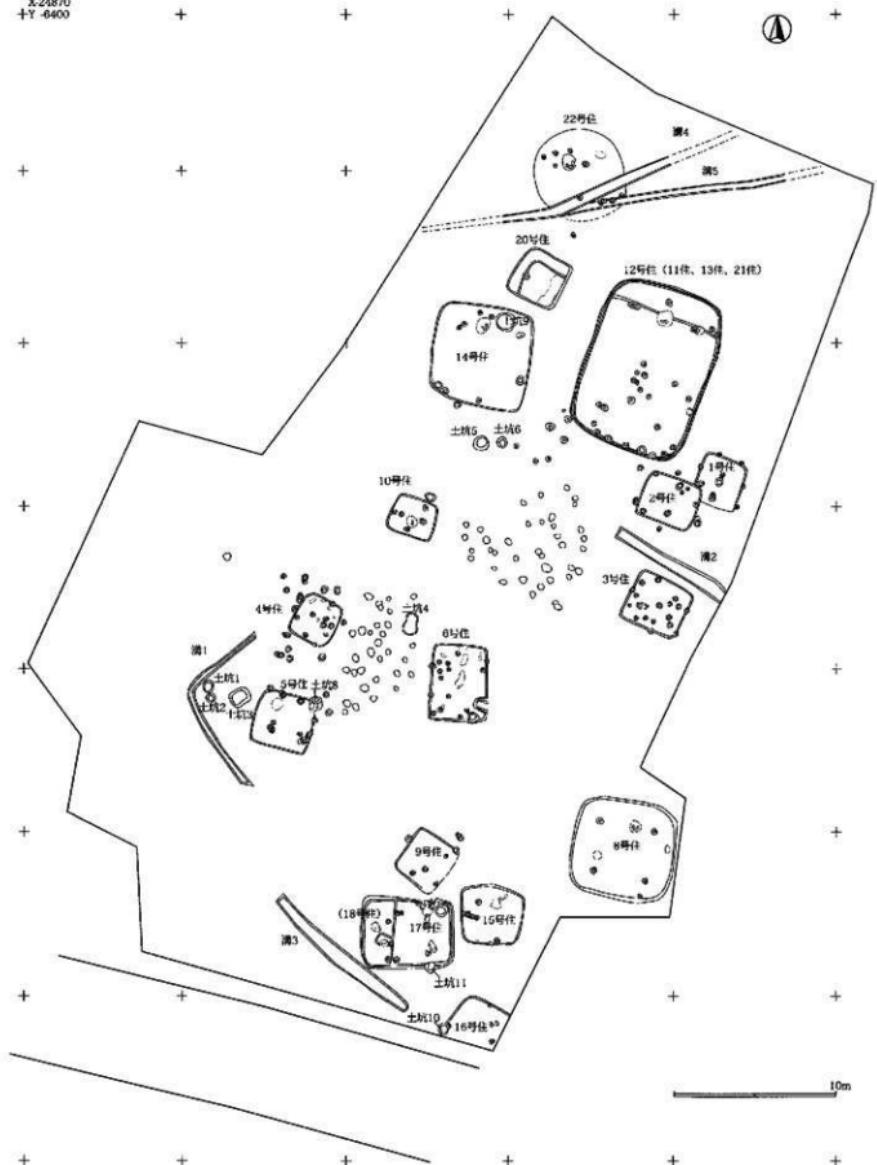


北-19号住居



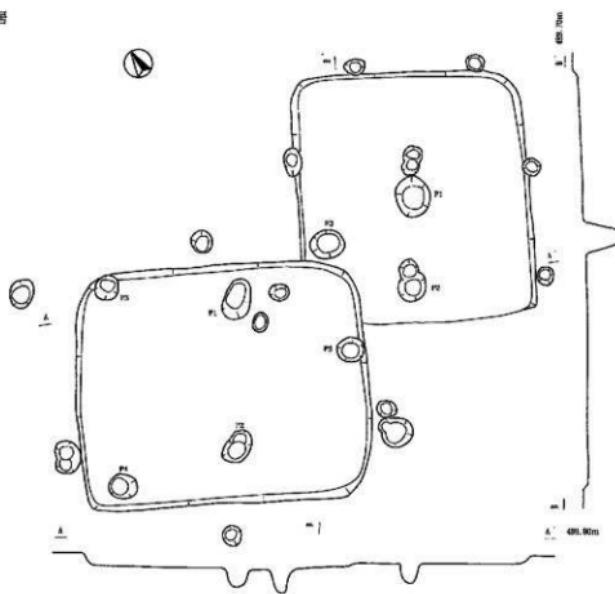
第5圖 北-9号住居 (1/80) 19号住居 (1/80)

Ⓐ

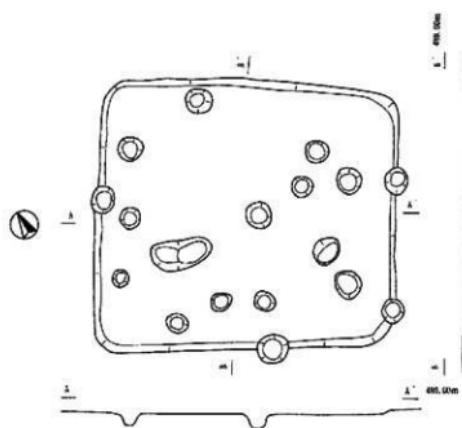


第6図 腰巻南全体図 (1/300)

南-1号・2号住居

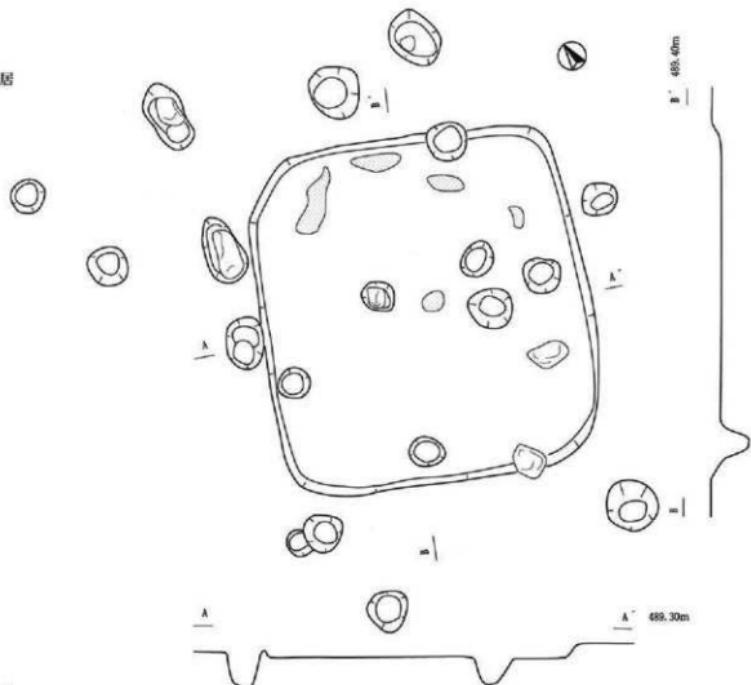


南-3号住居

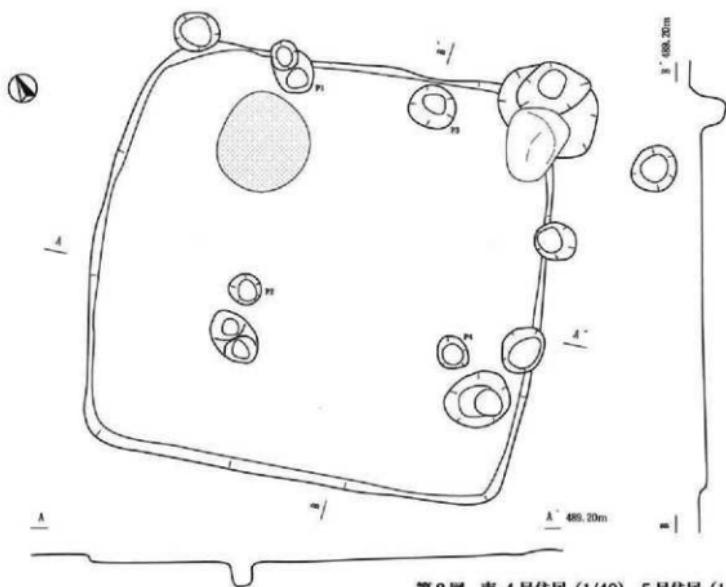


第7図 南-1号・2号住居(1/60) 3号住居(1/60)

南-4号住居

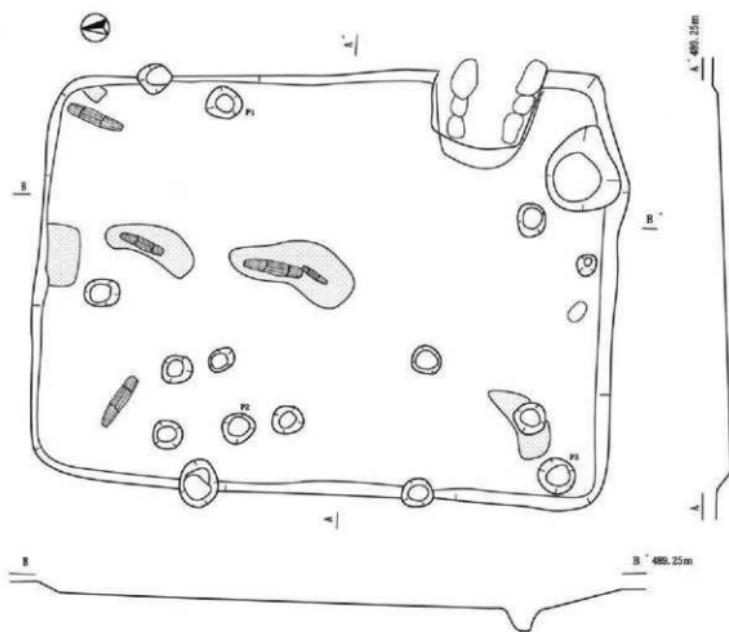


南-5号住居

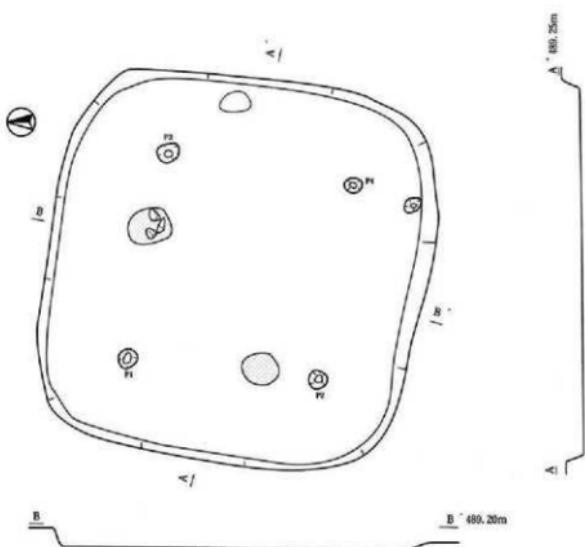


第8図 南-4号住居(1/40) 5号住居(1/40)

南-6号住居

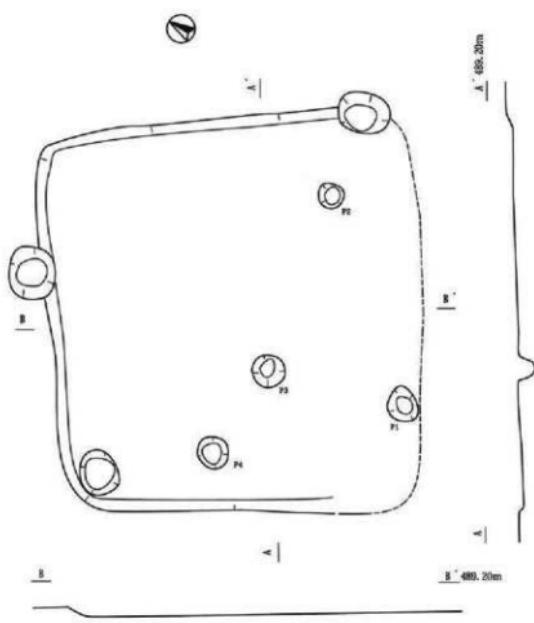


南-8号住居

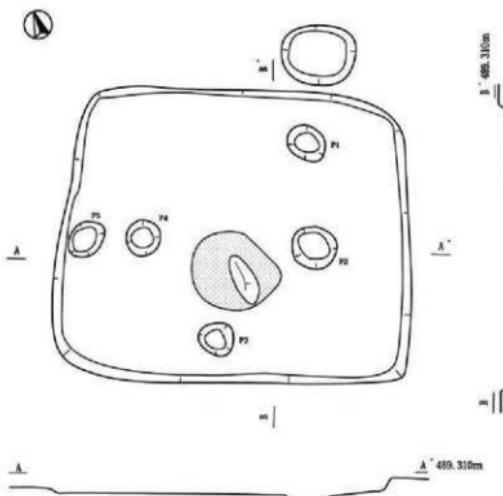


第9図 南-6号住居(1/40) 8号住居(1/80)

南-9号住居

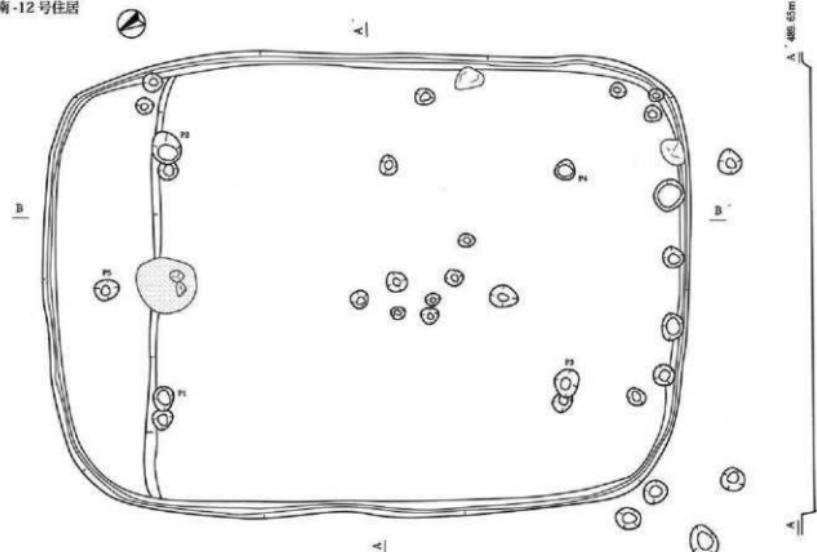


南-10号住居

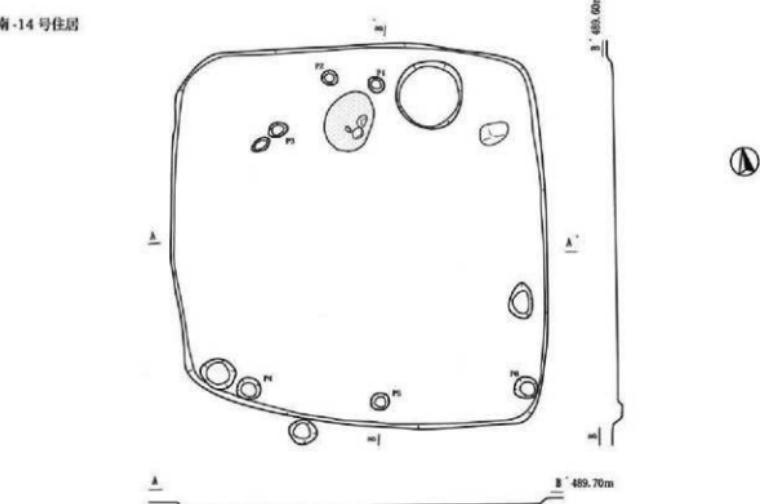


第10図 南-9号住居(1/40) 10号住居(1/40)

南-12号住居

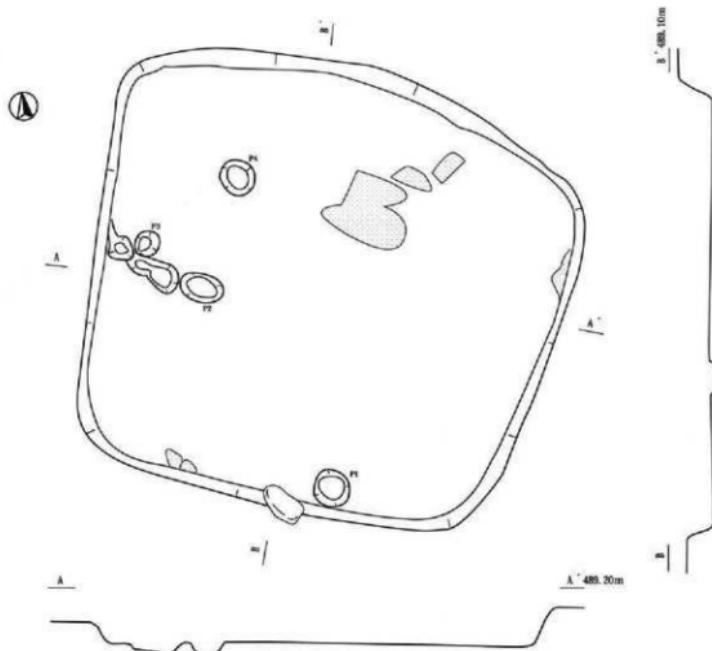


南-14号住居

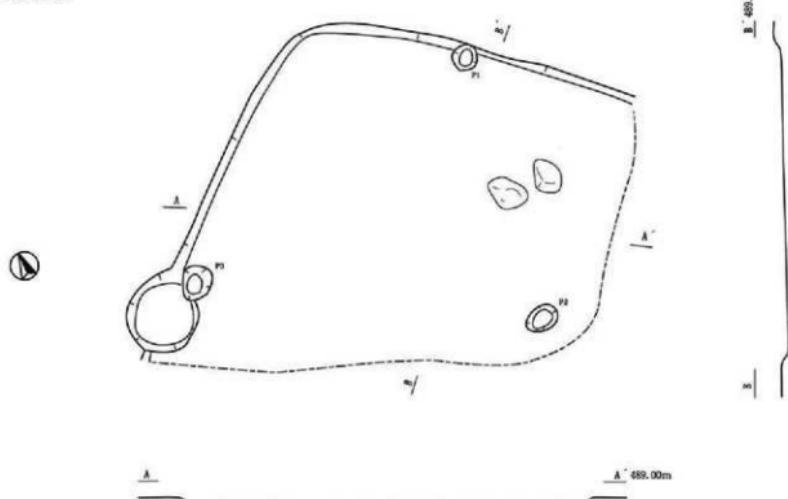


第11図 南-12号住居(1/80) 14号住居(1/80)

南-15号住居

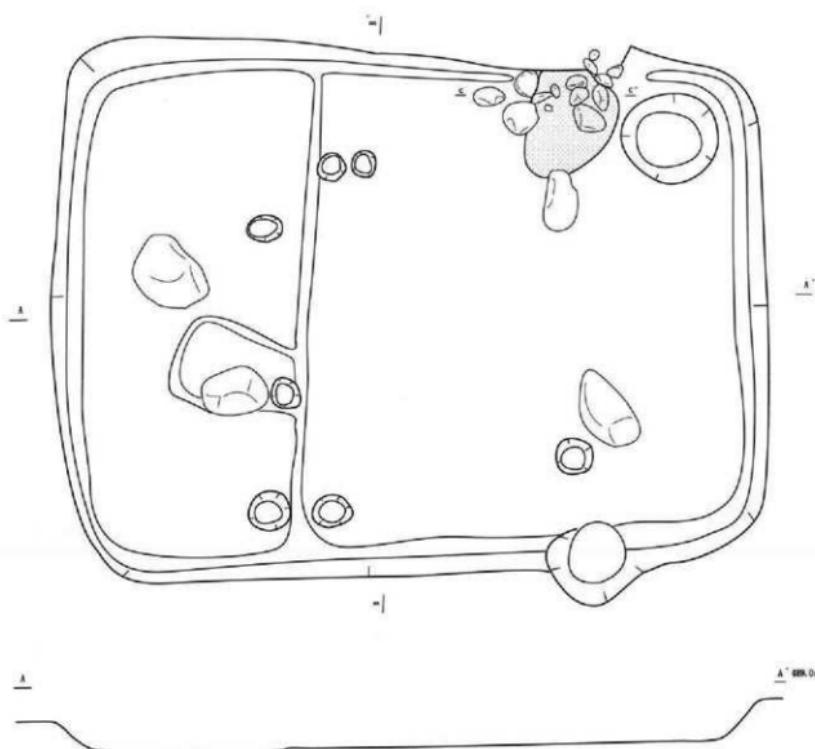


南-16号住居

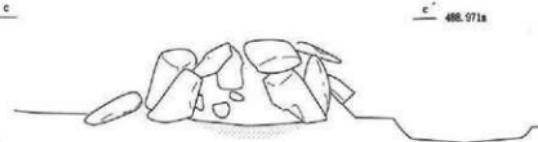


第12図 南-15号住居(1/40) 16号住居(1/40)

Ⓐ

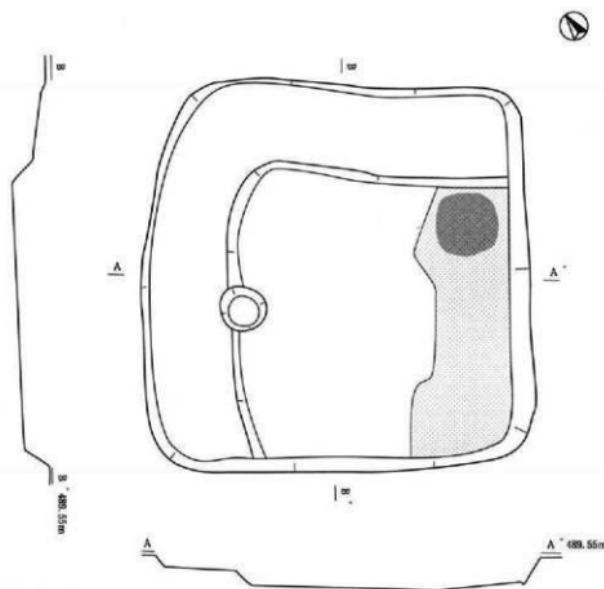


南-17号住居カマド

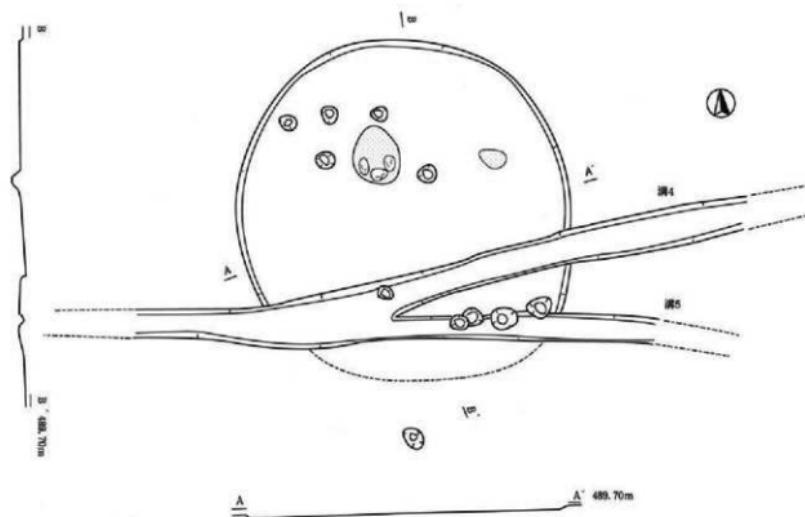


第13図 南-17号(18号)住居(1/40) 17号住居カマド(1/20)

南-20号住居

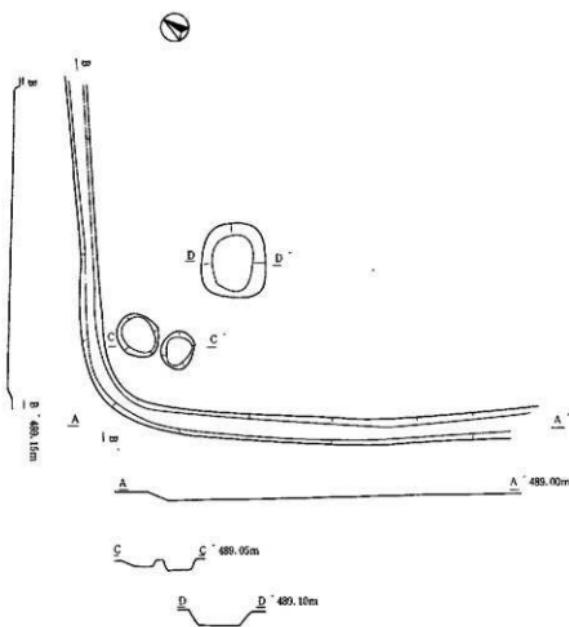


南-22号住居・溝4・溝5

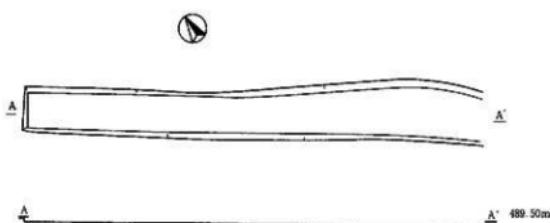


第14図 南-20号住居(1/40) 22号住居・溝4・溝5(1/80)

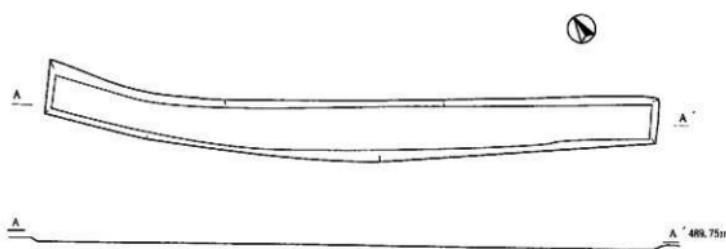
南・溝1



南・溝2



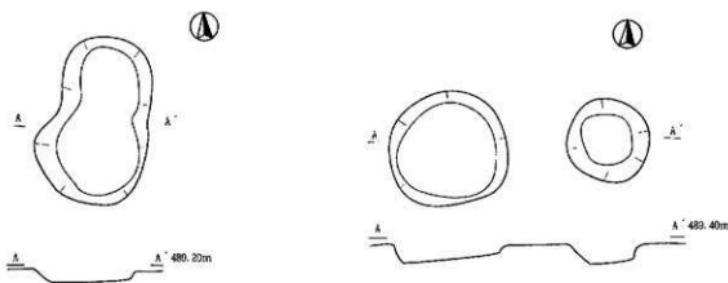
南・溝3



第15図 南・溝1 (1/80) 溝2・溝3 (1/80)

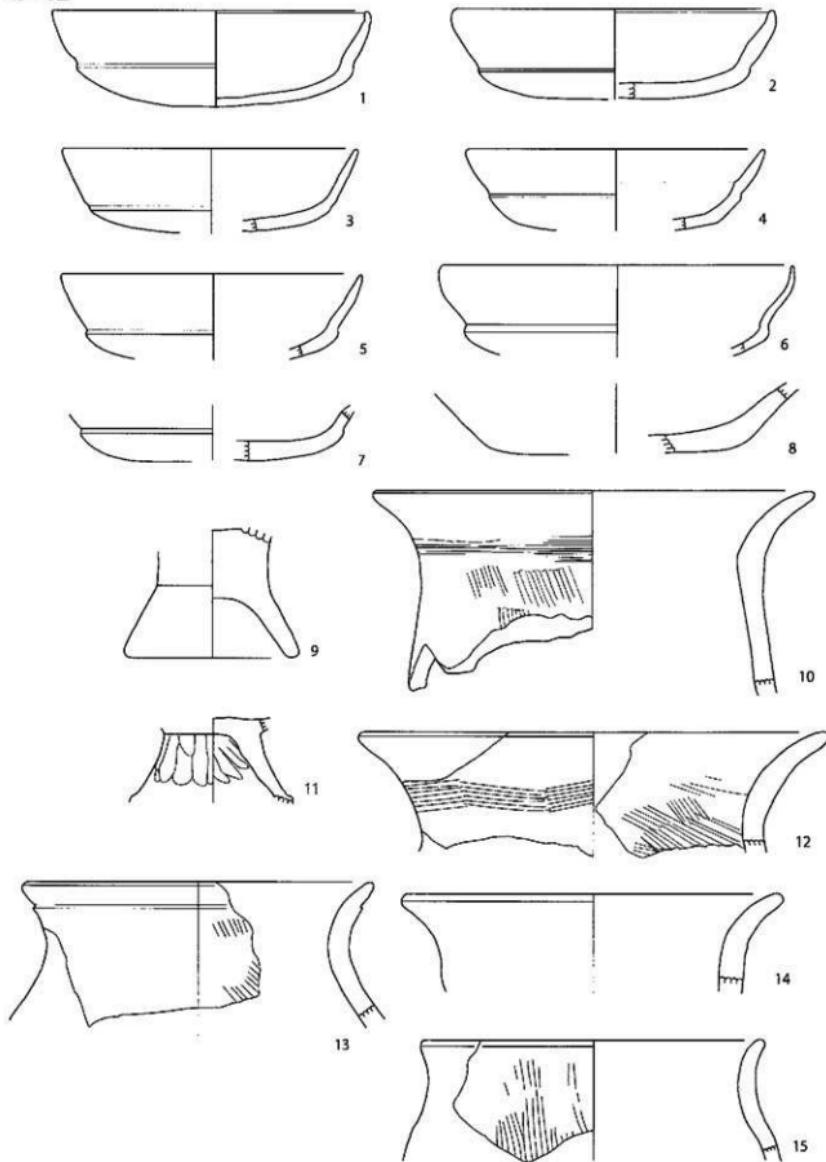
南・土坑4

南・土坑5・土坑6



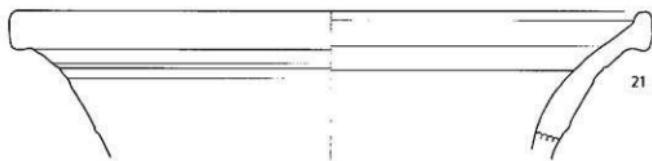
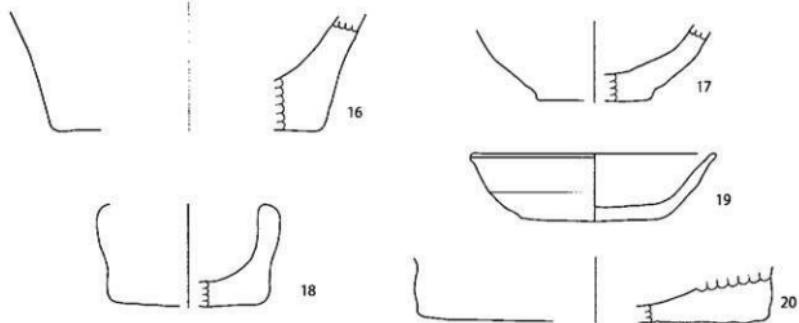
第16図 南・土坑4・土坑5・土坑6 (1/40)

北-I号住

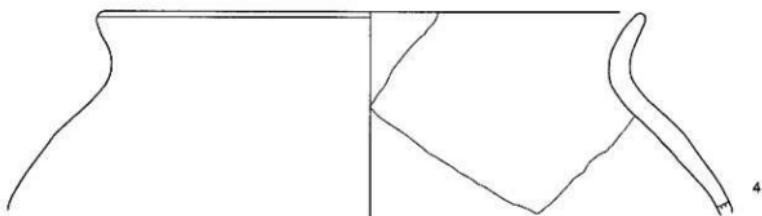


第17圖 北-I号住居出土物 (1/2)

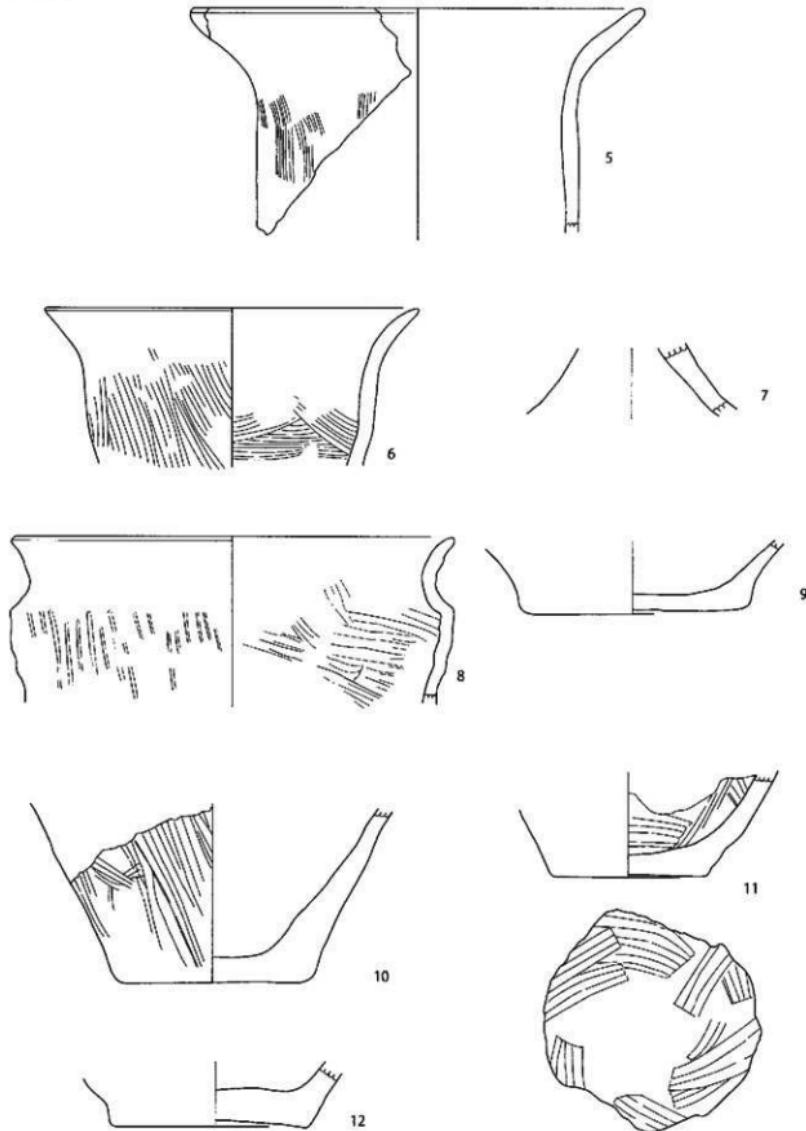
北-1号住



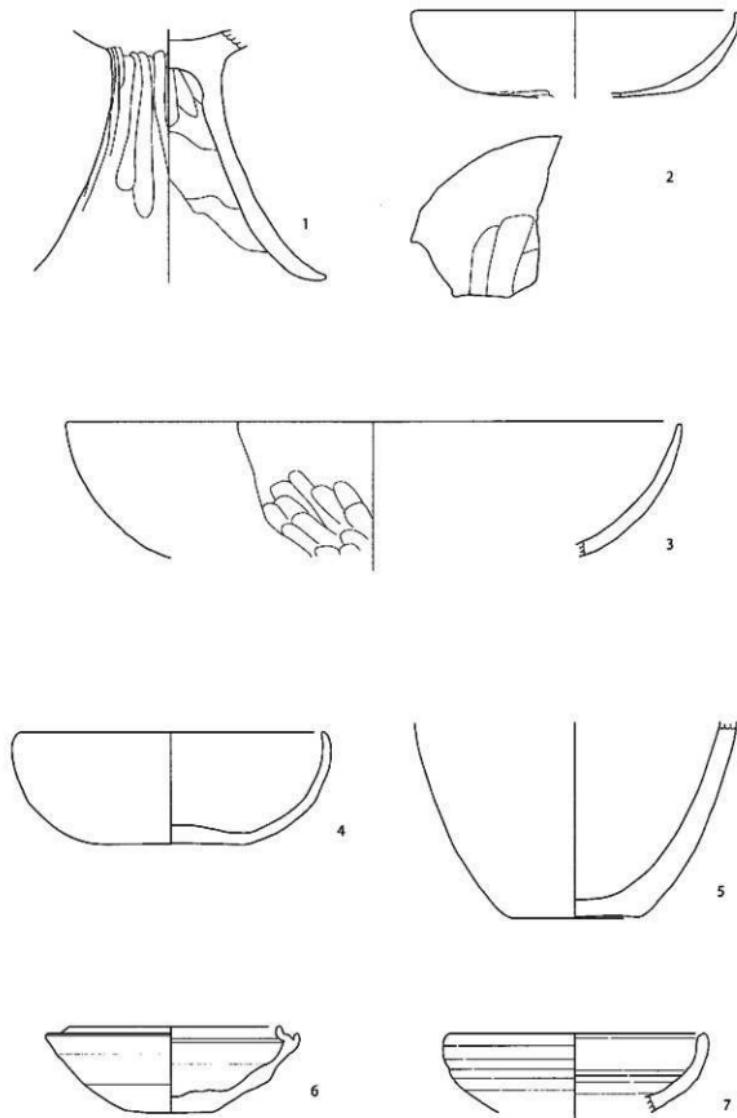
北-2号住



第18図 北-1号・2号住居出土遺物 (1/2)

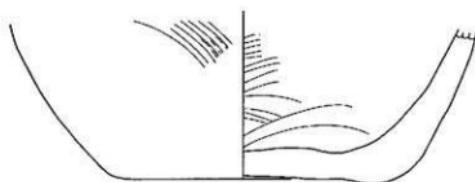


第19図 北·2号住居出土遺物 (1/2)



第20図 北-3号住居出土遺物(1/2)

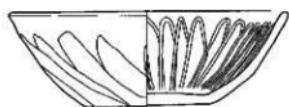
北·3号住



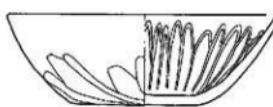
8



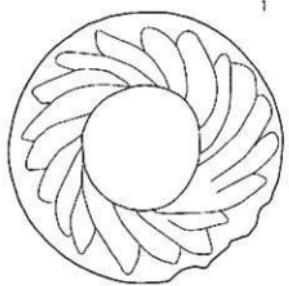
北·4号住



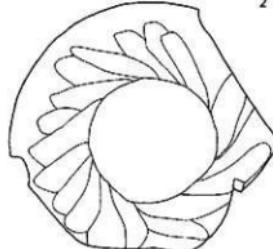
1



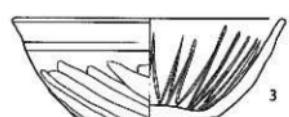
2



3



4



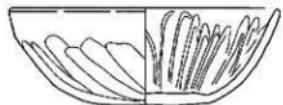
3



4

第21図 北·3号·4号住居出土遺物(1/2)

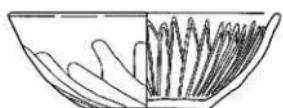
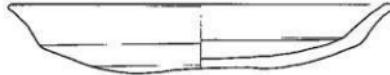
北-4号住



5



6



7

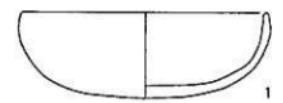


8

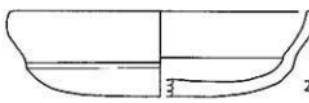


9

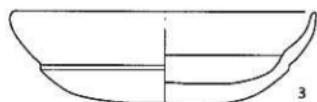
北-6号住



1



2



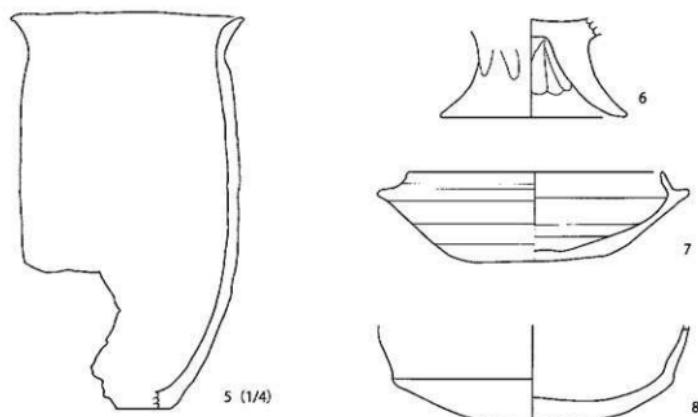
3



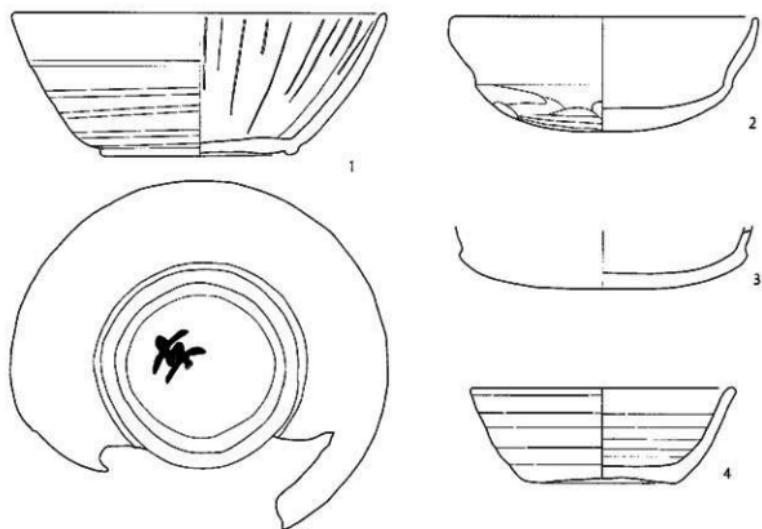
4

第22図 北-4号・6号住居出土遺物 (1/2)

北·6号住

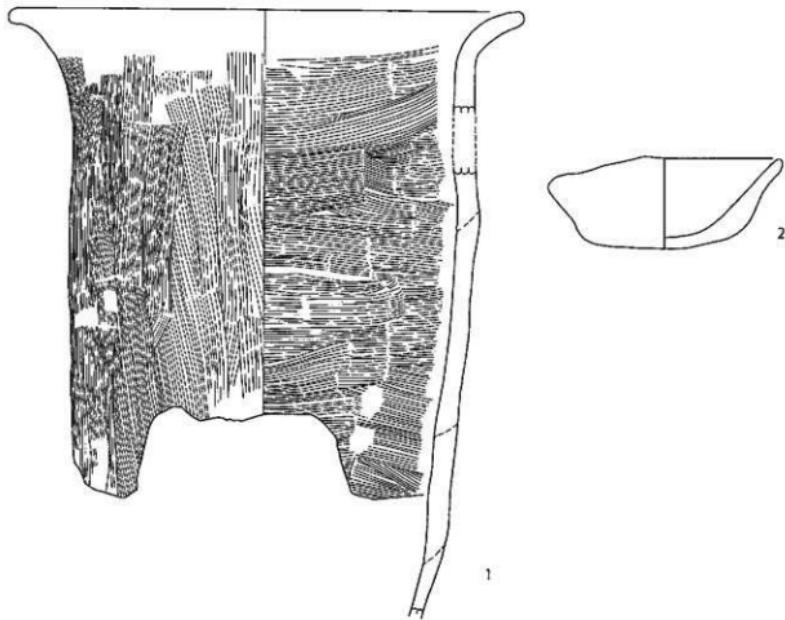


北·7号住

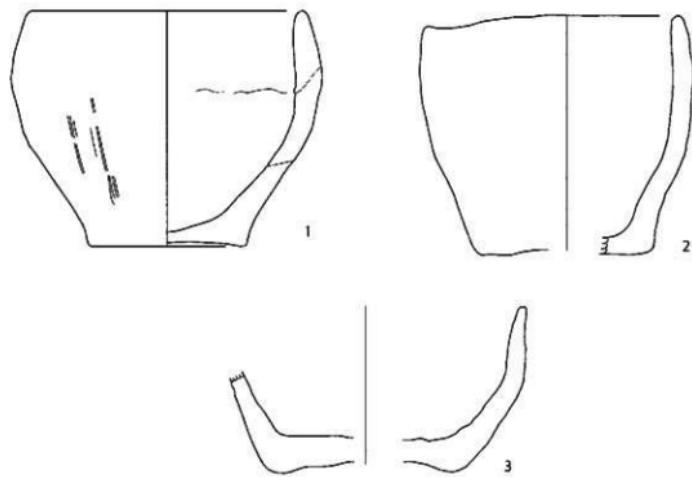


第23圖 北·6號·7號住居出土遺物 (1/2)

北-15号住

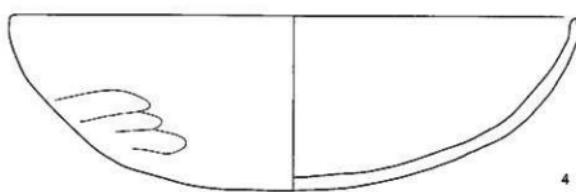
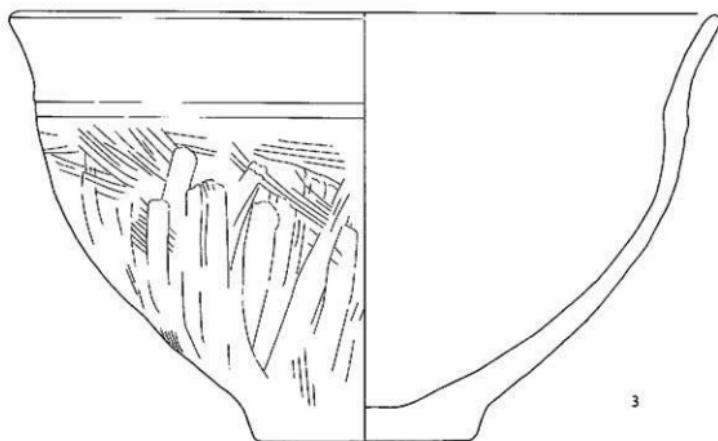
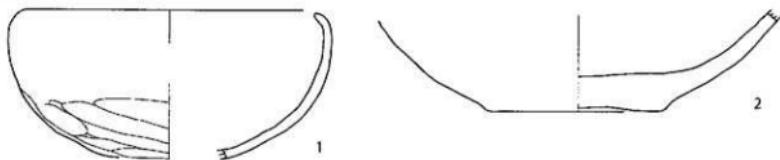


北-19号住

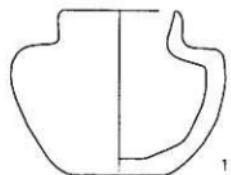


第24図 北-15号・19号住居出土遺物 (1/2)

北-27号住

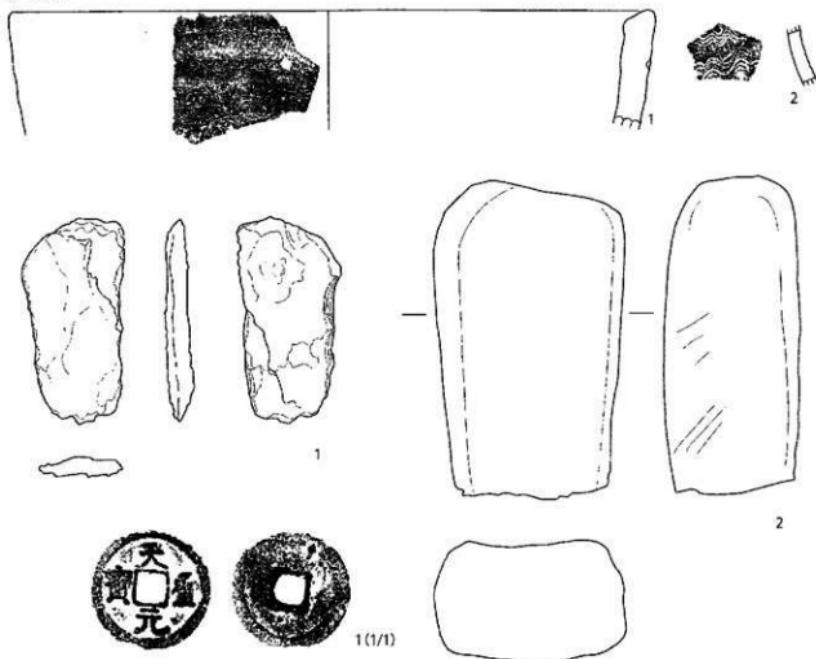


北-29号住

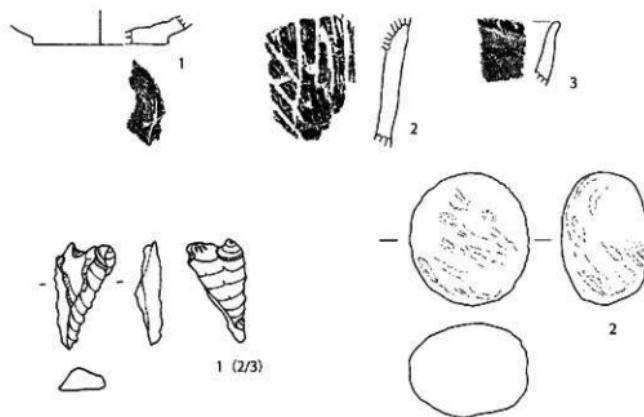


第25圖 北-27号・29号住出土遺物(1/2)

南-1号住

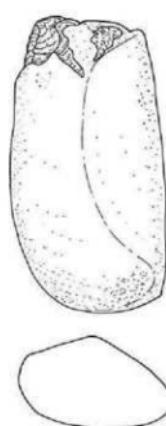


南-2号住

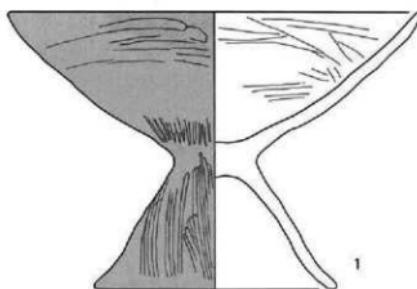


第26図 南-1号・2号住居出土遺物 (1/2)

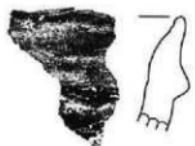
南-3号住



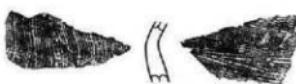
南-4号住



1



2

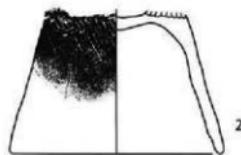


3

南-5号住



1

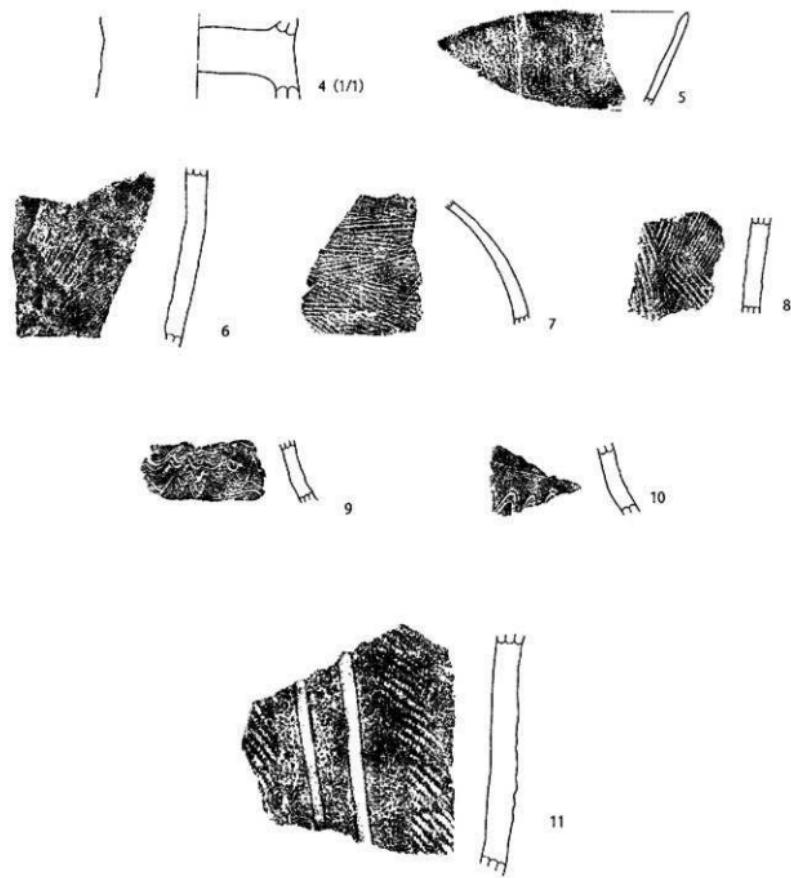


2



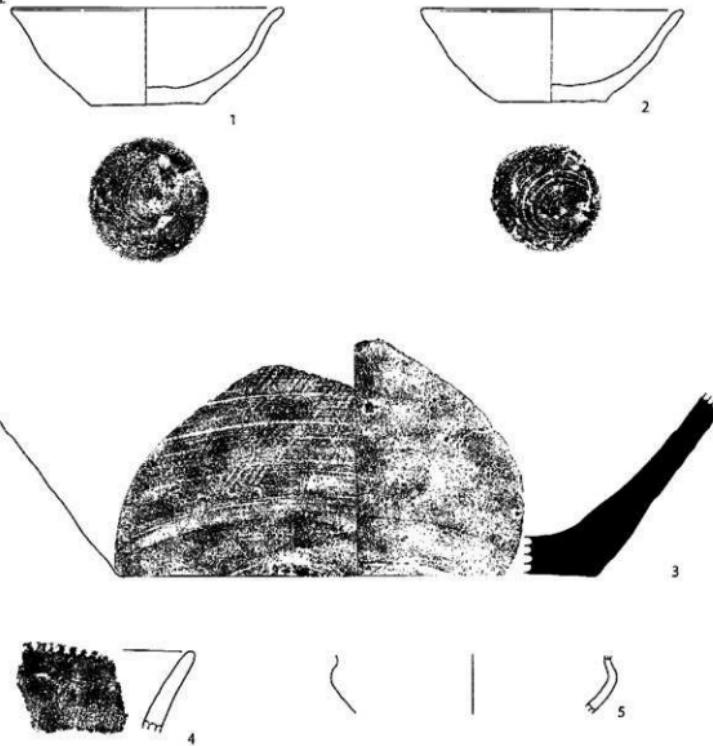
3

第27圖 南-3号・4号・5号住居出土遺物 (1/2)

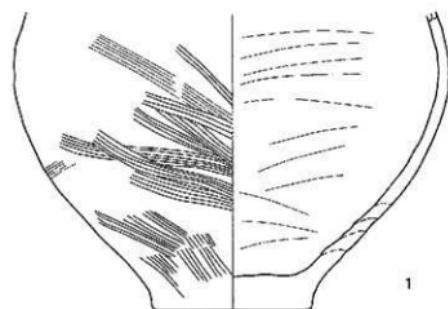


第28図 南-5住居出土遺物 (1/2)

南-6号住

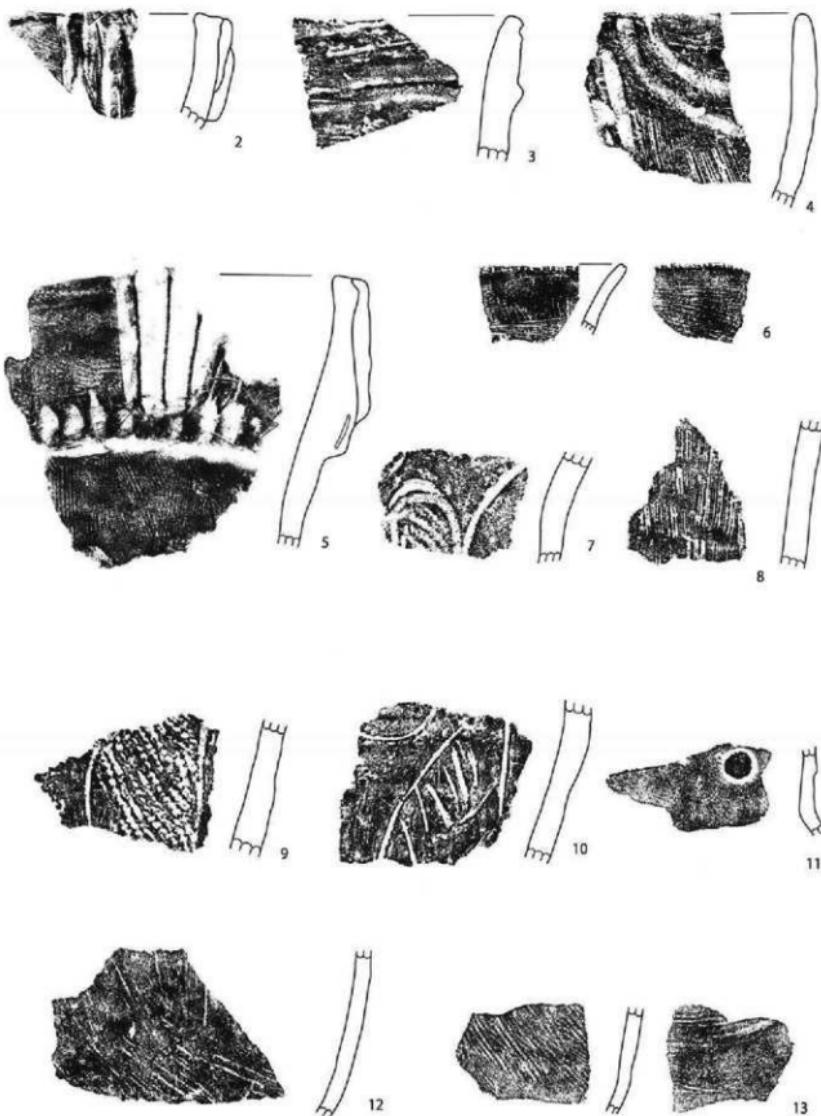


南-8号住



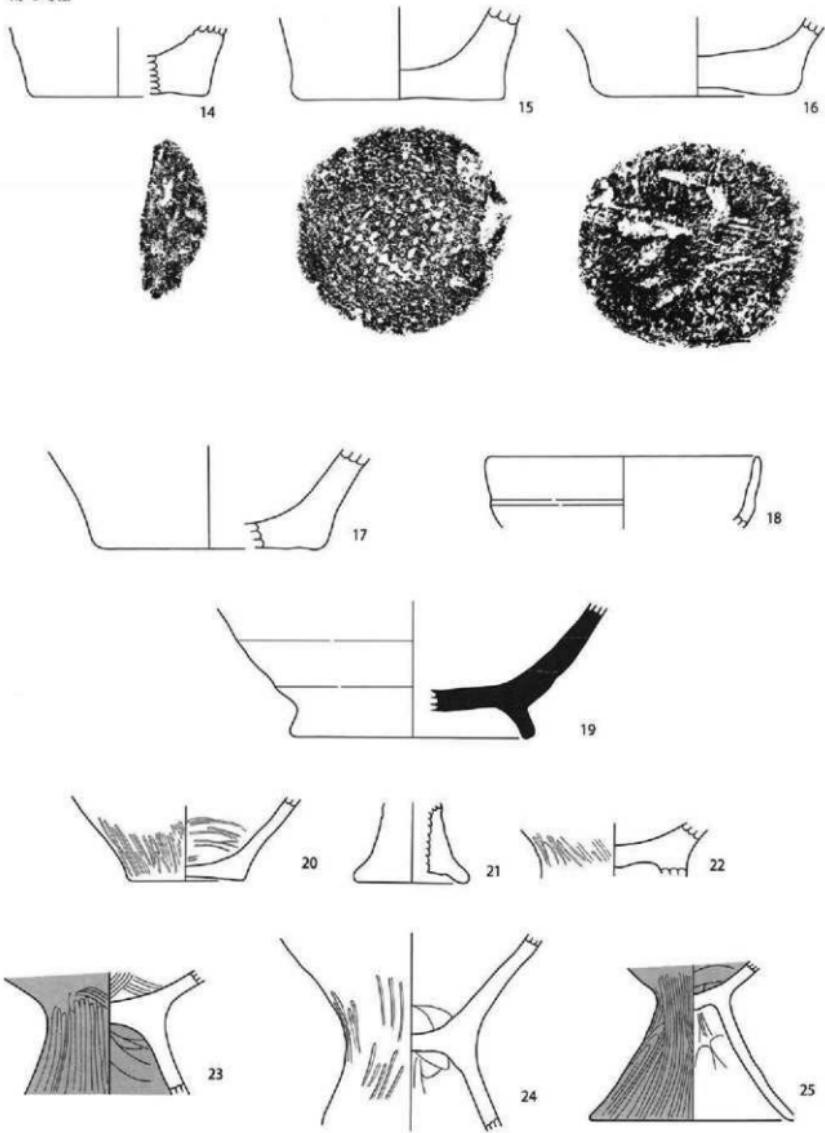
第29図 南-6号・8号住出土遺物 (1/2)

南-8号住



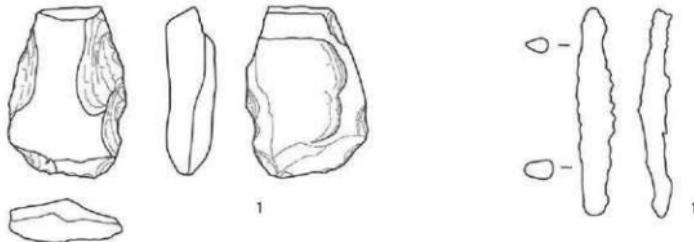
第30圖 南-8号住居出土遺物 (1/2)

南·8号住

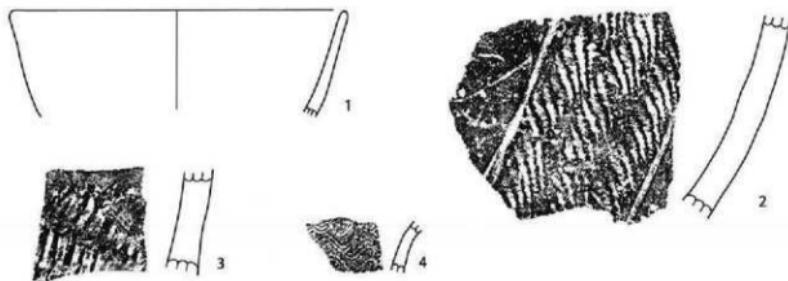


第31圖 南·8号住居出土遺物 (1/2)

南-8号住

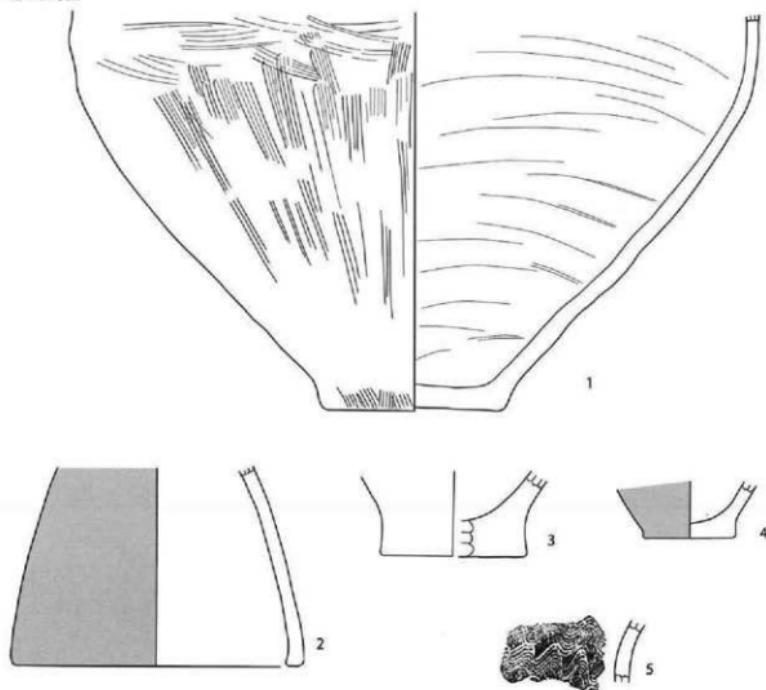


南-9号住

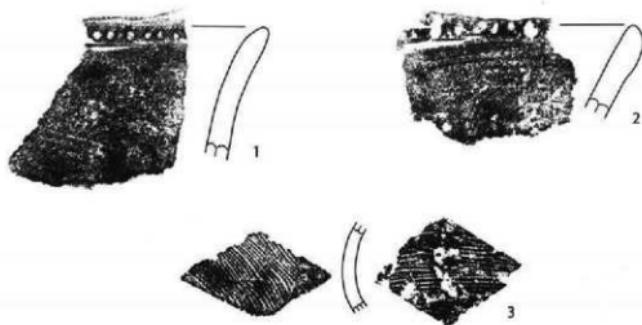


第32図 南-8号・9号住居出土遺物(1/2)

南-10号住

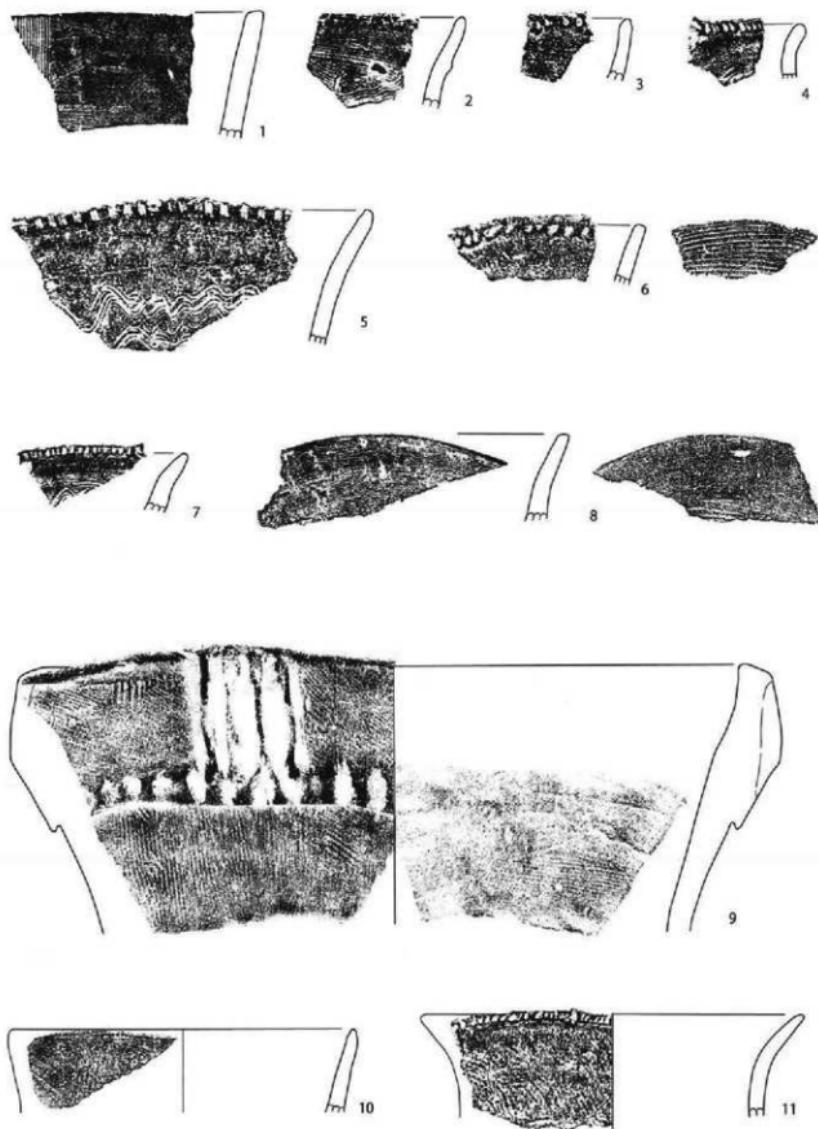


南-11号住



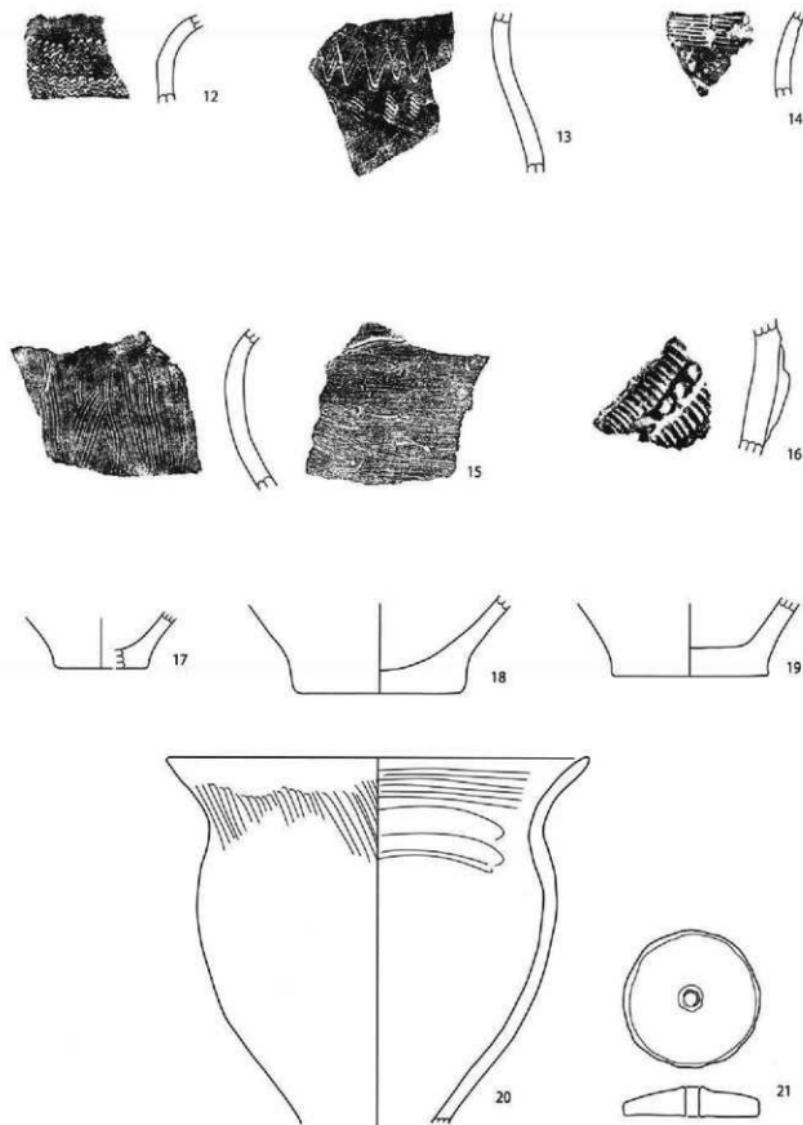
第33図 南-10号・11号住居出土遺物 (1/2)

南-12号住



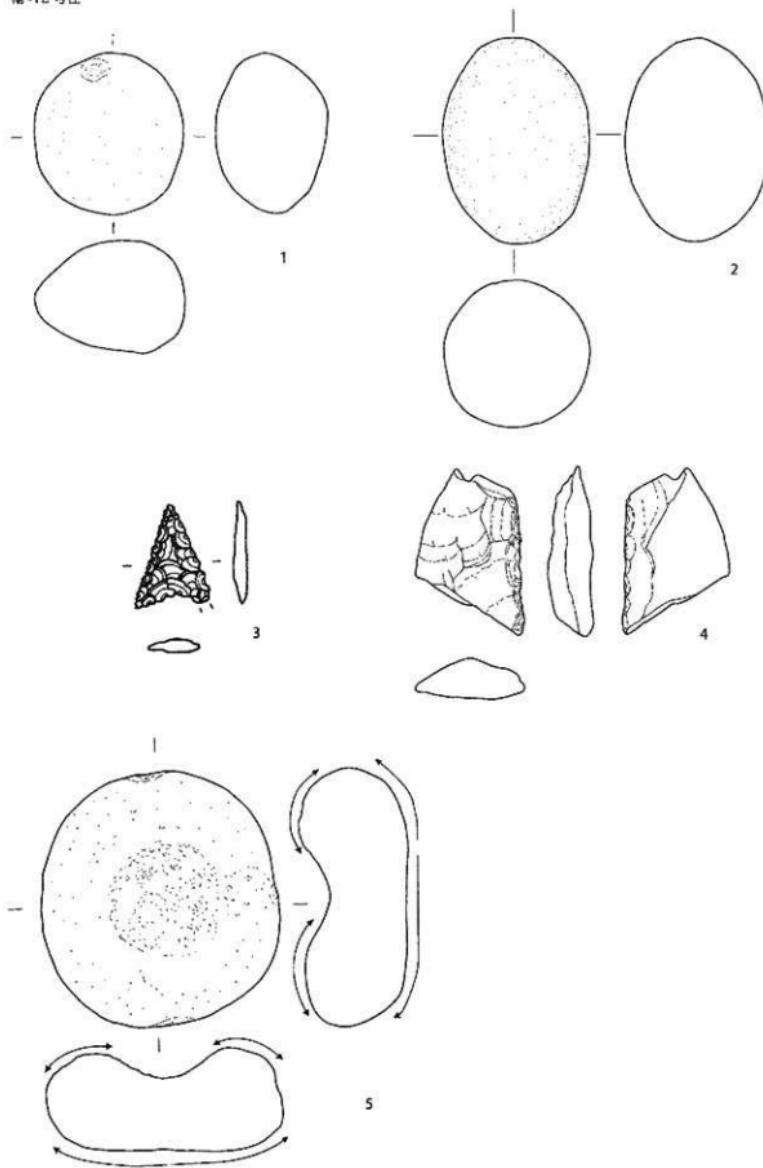
第34圖 南-12號住居出土遺物 (1/2)

南-12号住



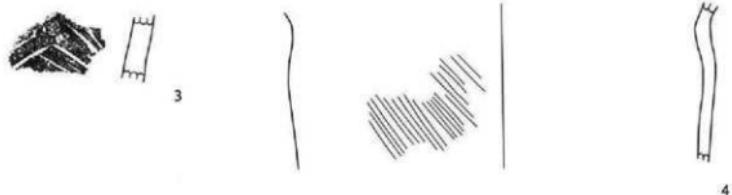
第35圖 南-12号住居出土遺物 (1/2)

南-12号住

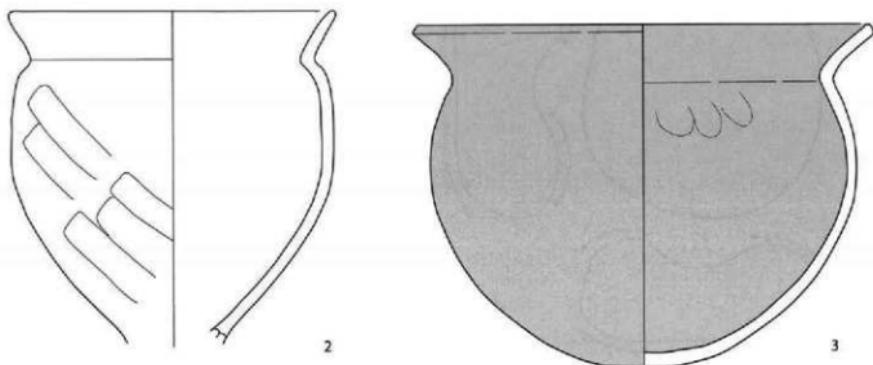
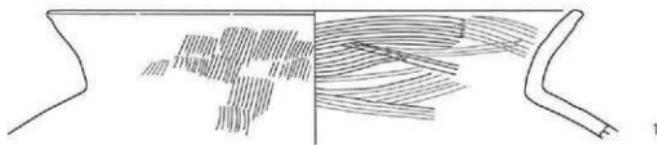


第36図 南-12号住居出土遺物 (1/2)

南-14号住

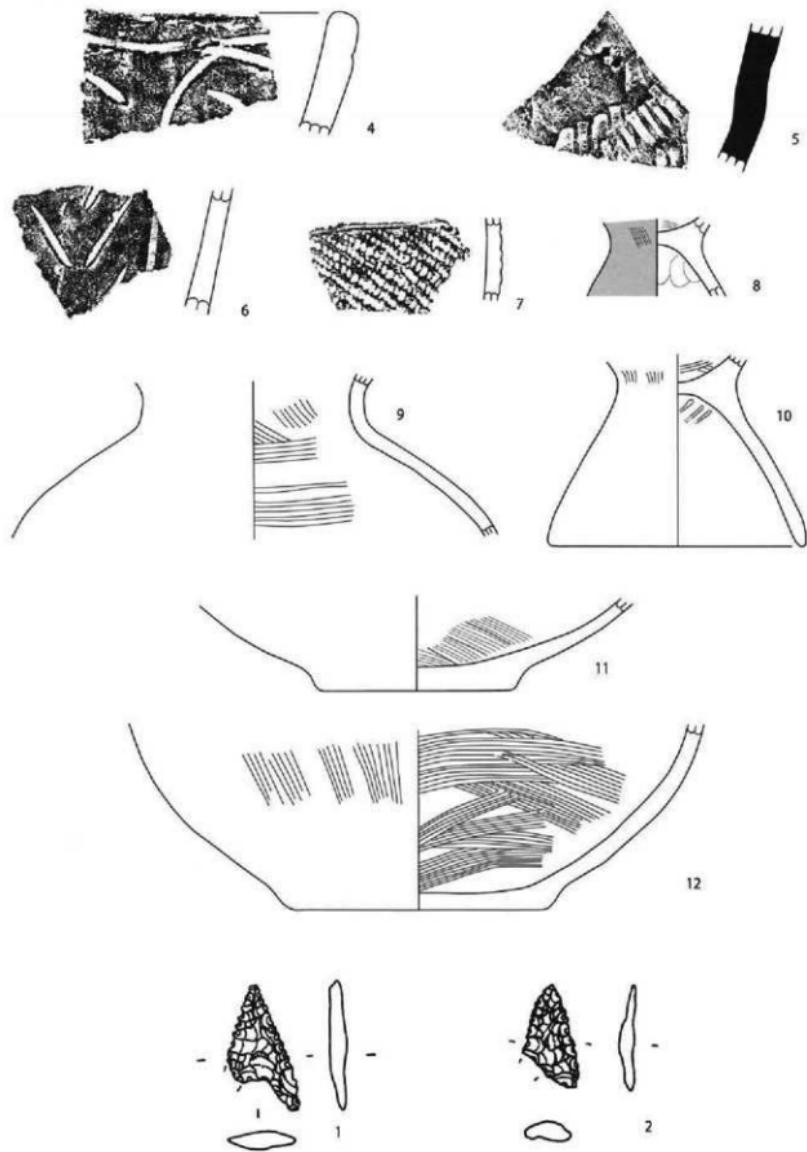


南-15号住



第37図 南-14号・15号住居出土遺物 (1/2)

南-15号住



第38圖 南-15号住居出土遺物 (1/2)

南-16号住



|



1

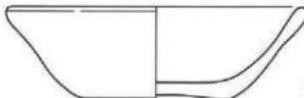


2

南-17号住



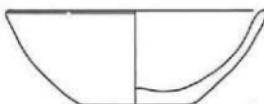
1



2



3



4



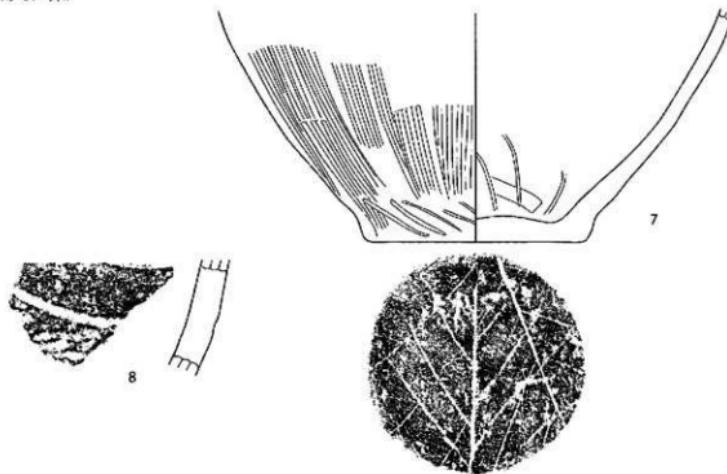
5



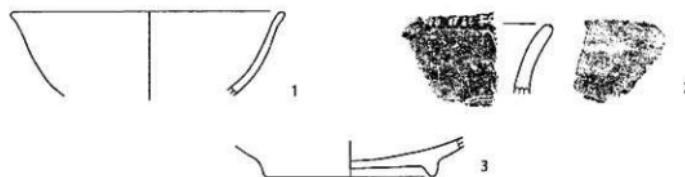
6

第39図 南-16号・17号住居出土遺物(1/2)

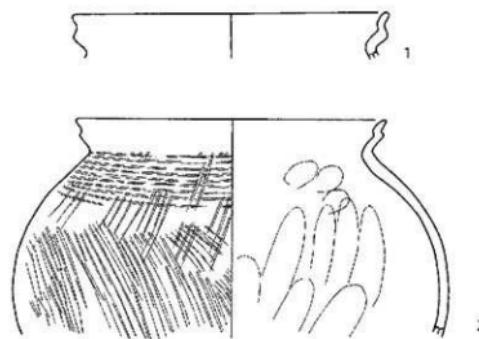
南-17号住



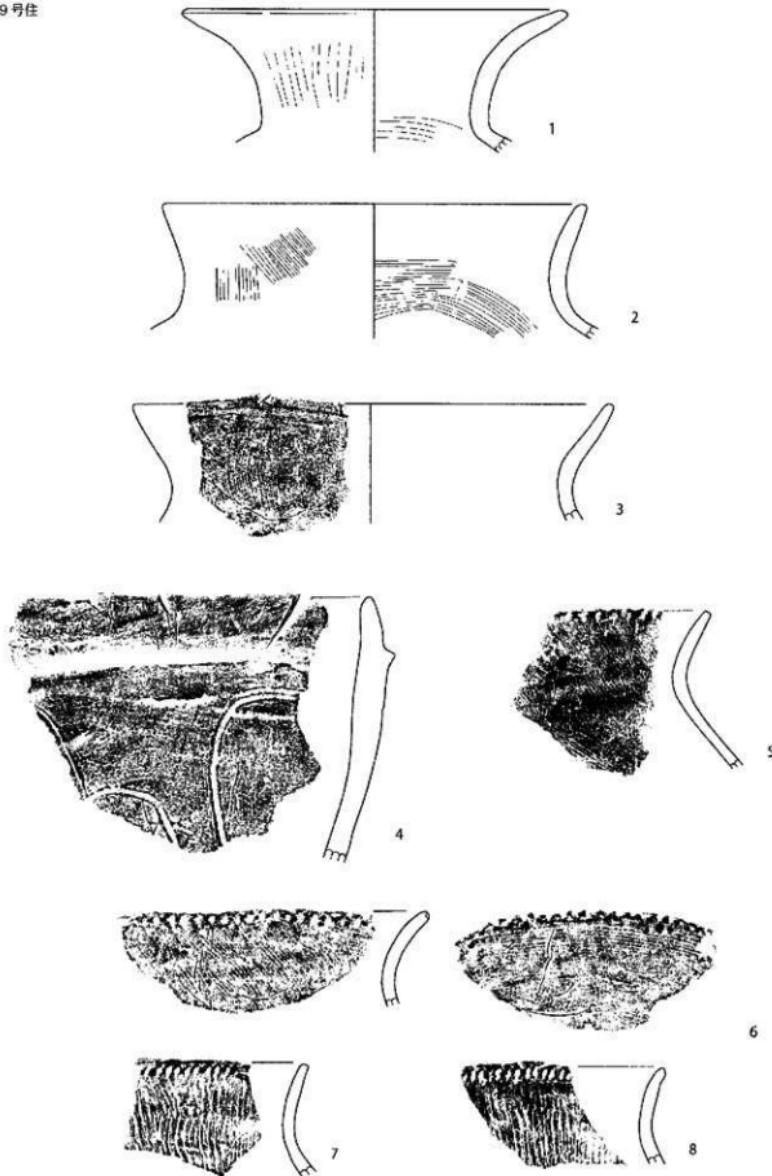
南-18号住



南-19号住

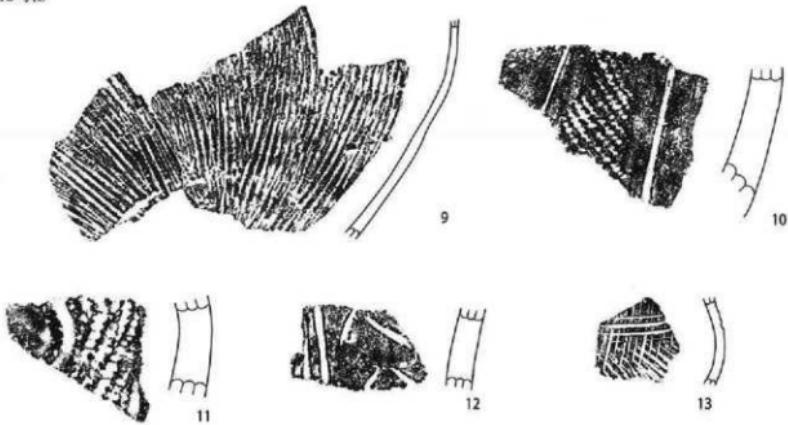


第40図 南-17号・18号・19号住居出土遺物 (1/2)

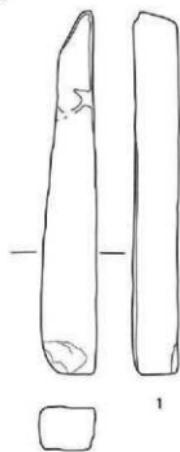


第41圖 南-19号住居出土遺物（1/2）

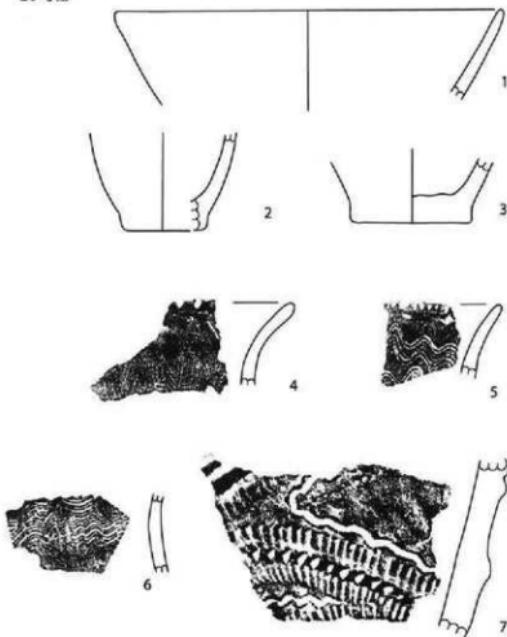
南-19号住



南-20号住

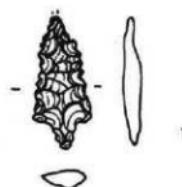
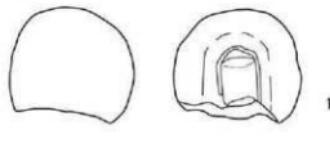


21号住



第42図 南-19号・20号・21号住居出土遺物 (1/2)

南-21号住

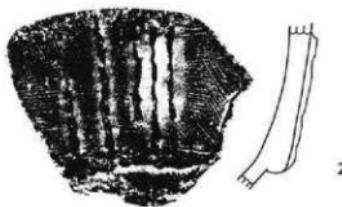
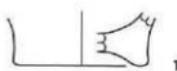


南-22号住



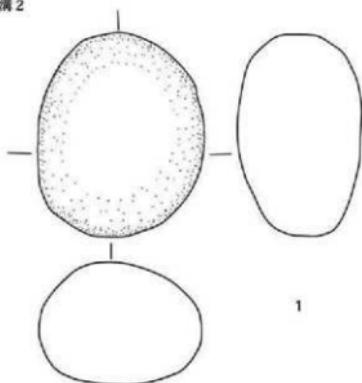
2

南-溝1



2

南-溝2



南-溝3

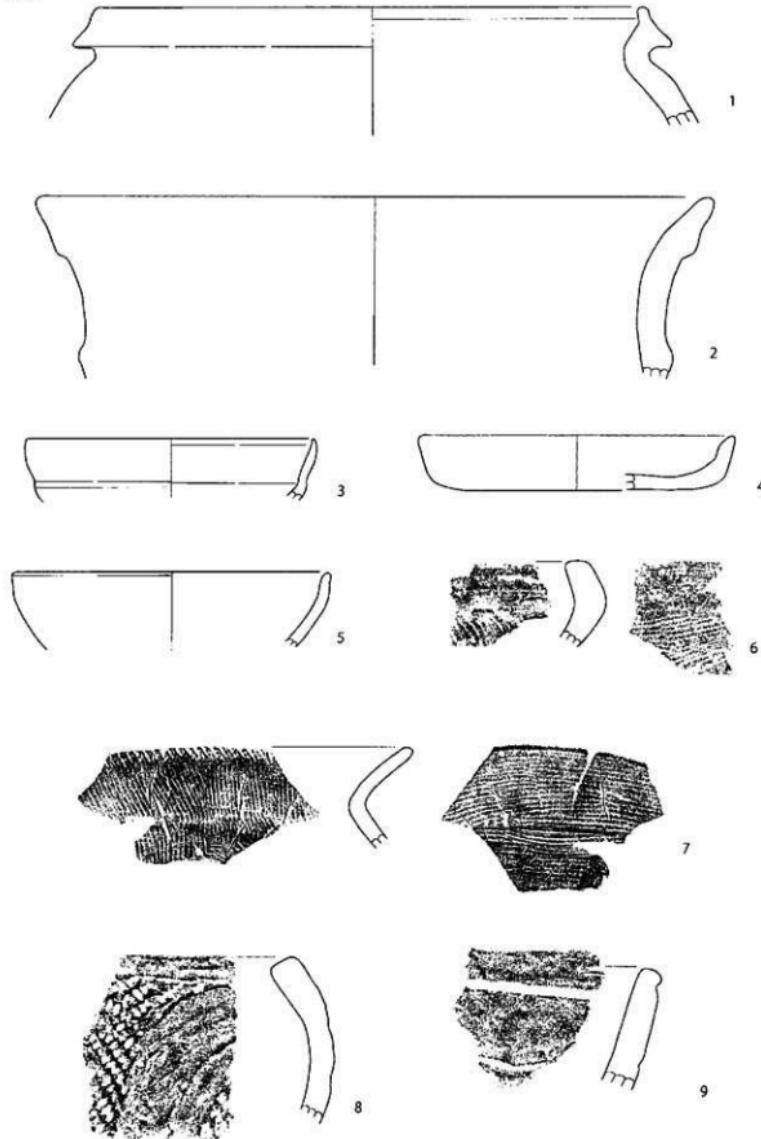


南-土坑3



1

第43圖 南-21号・22号住 溝1・溝2・溝3 土坑3 出土遺物 (1/2)

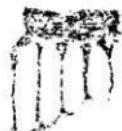


第44図 南・住居外出土遺物 (1/2)

南・住居外



10



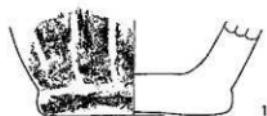
11



12



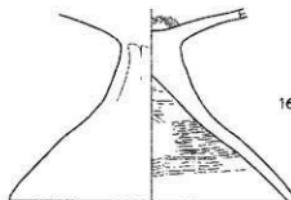
13



14



15



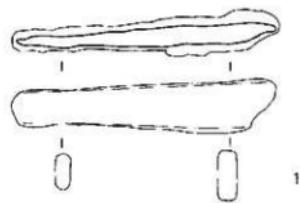
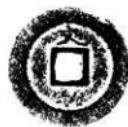
16



1



1 (1/1)

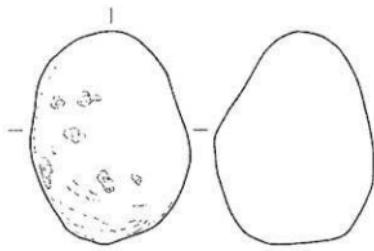


1

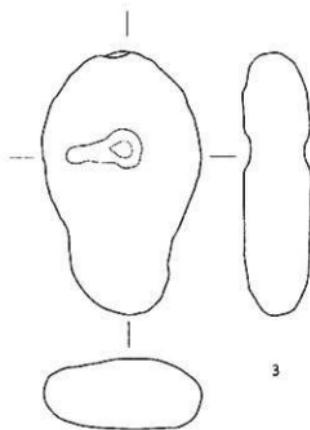
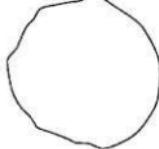
第45図 南・住居外出土遺物 (1/2)



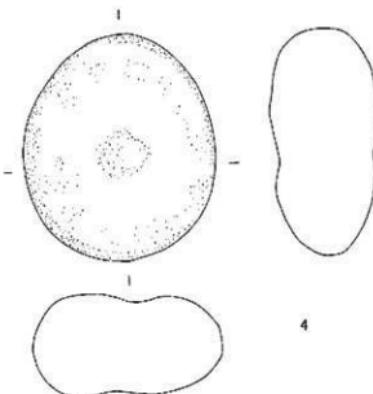
1



2



3



4

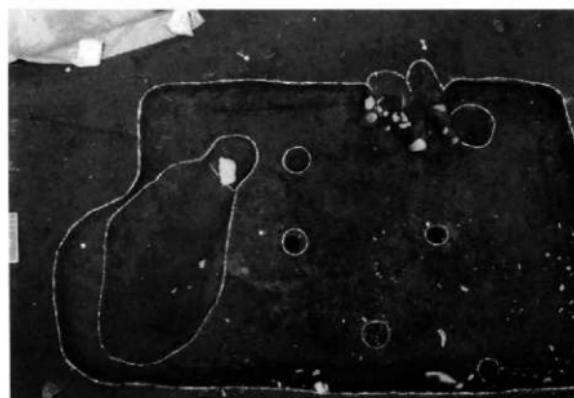
第46図 南・住居外出土遺物 (1/2)

写真図版

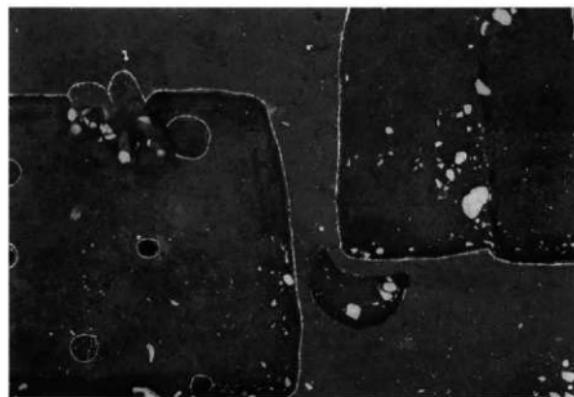
写真図版 1



腰巻北遺跡発掘風景



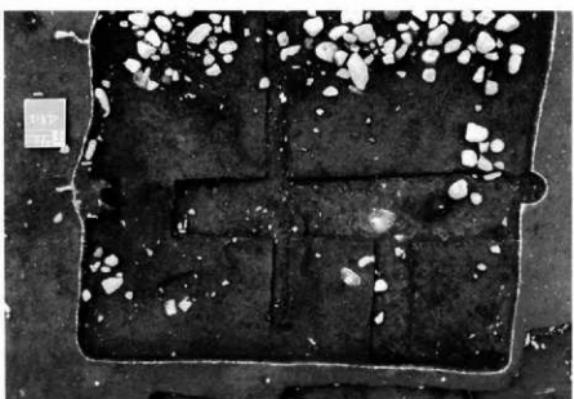
北・2号住居



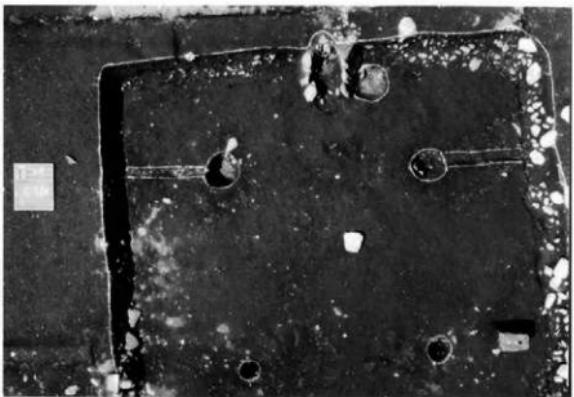
北・2号3号5号住居



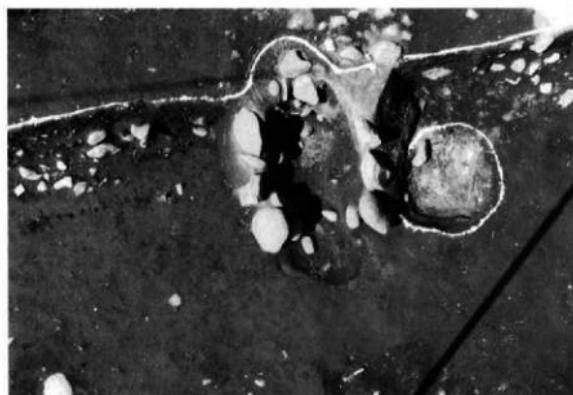
北-2号住居カマド



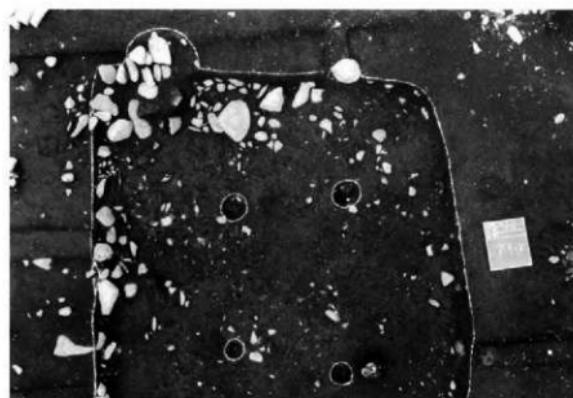
北-4号住居



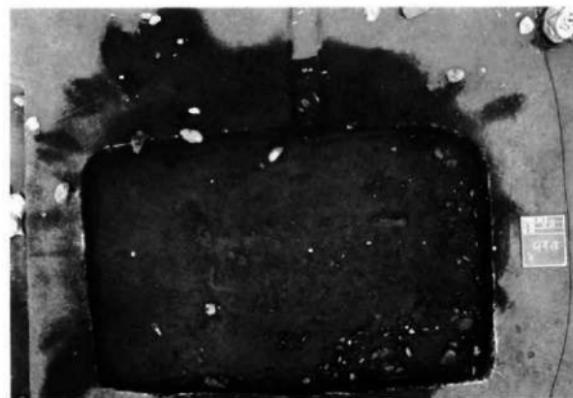
北-6号住居



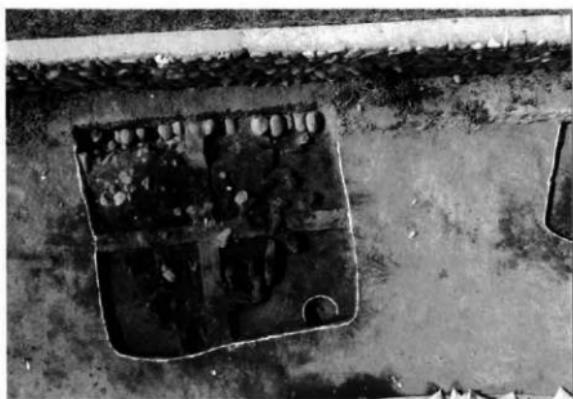
北-6号住居カマド



北-7号住居



北-9号住居



北-11号住居



北-12号 13号
14号住居



北-15号住居カマド



北-19号住居



北-19号住居カマド



北-27号住居



北-27号住居カマド



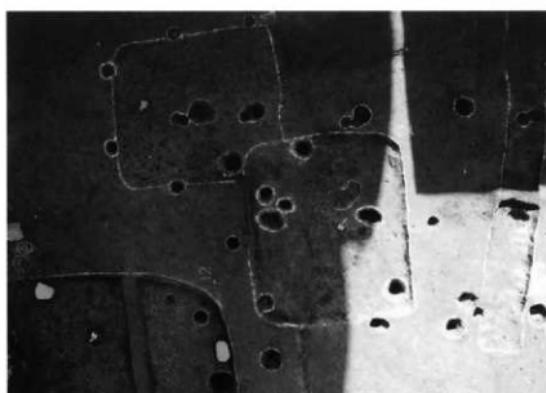
北-28号30号住居



北-28号住居カマド



腰巻南遺跡発掘風景



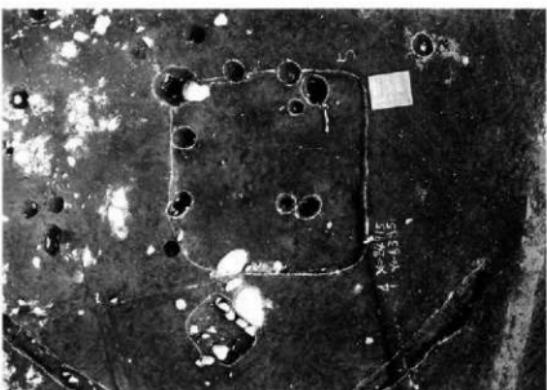
南-1号・2号・12号住居



南-4号住居



南 -4 号住出土遺物



南 -5 号住居



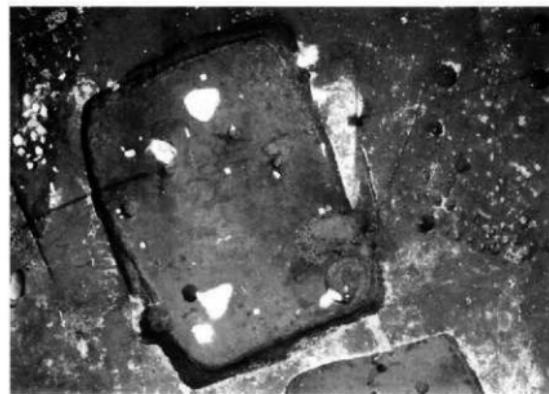
南 -6 号住居



南-6号住居カマド



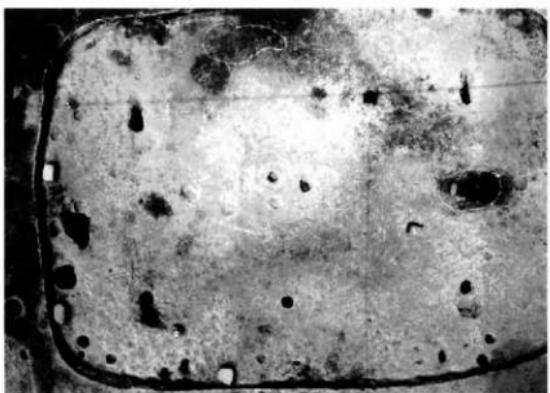
南-8号住居



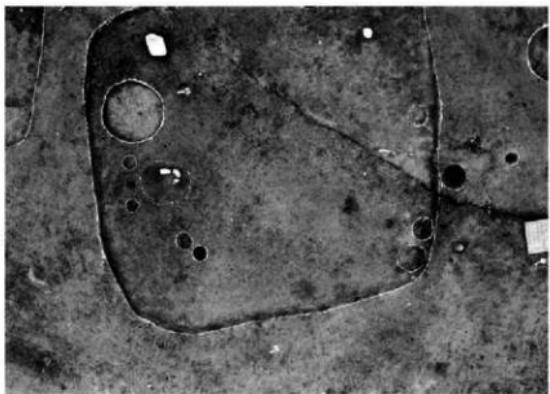
南-17号・9号住居



南-10号住居



南-12号住居



南-14号住居



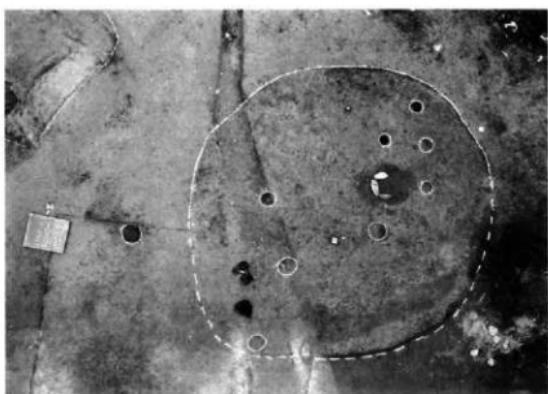
南-15号住居



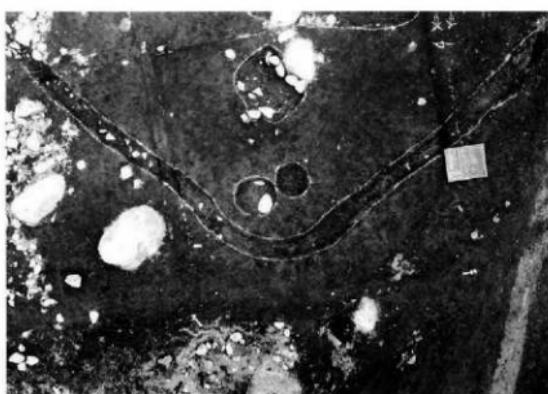
南-17号住居カマド



南-溝4・溝5
20号住居



南-22号住居



南-溝1

報告書抄録

ふりがな	こしまきいせき	こしまきたいせき	こしまきみなみいせき
書名	腰巻遺跡(第1次)	腰巻北遺跡(第2次)	腰巻南遺跡(第3次)
副題	塙川病院増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書		
シリーズ	-		
編著者名	佐野隆 土路恭之助 深沢裕三		
発行者	須玉町教育委員会 明野村教育委員会		
編集機関	須玉町教育委員会 明野村埋蔵文化財センター		
所在地・電話	〒408-0112 山梨県北巨摩郡須玉町若神子 521-17 TEL 0551 20 6111 〒407-0204 山梨県北巨摩郡明野村上手 6310 TEL 0551-25-2019		
調査原因	塙川病院増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査		
発行日	平成15年3月31日		

ふりがな	こしまきいせき
所収遺跡	腰巻遺跡(第1次)
所 在 地	山梨県北巨摩郡須玉町藤田字腰巻
位 置	北緯35°46'43" 東経138°25'40"
調査原因	老人保健施設建設事業
調査期間	平成6年6月20日～平成6年9月13日
調査機関	明野村教育委員会 須玉町教育委員会
調査面積	4600m ²
主な時代	縄文時代、古墳時代後期、奈良時代、平安時代
主な遺構	古墳時代後期住居、奈良時代住居、平安時代住居、奈良平安時代建物
主な遺物	縄文土器・石器、古墳時代～平安時代の土師器、須恵器、石製品、石獅、金属製品

ふりがな	こしまきたいせき
所収遺跡	腰巻北遺跡(第2次)
所 在 地	山梨県北巨摩郡須玉町藤田 799-1 他
位 置	北緯35°46' 東経138°25'
調査原因	須玉町デイサービスセンター建設に伴う工事
調査期間	平成8年3月1日～7月31日
調査機関	須玉町教育委員会
調査面積	4700m ²
主な時代	古墳時代、平安時代
主な遺構	古墳時代住居、平安時代住居
主な遺物	古墳時代後期、平安時代の土器

ふりがな	こしまきみなみいせき
所収遺跡	腰巻南遺跡(第3次)
所 在 地	山梨県北巨摩郡須玉町藤田 728 他
位 置	北緯35°46' 東経138°25'
調査原因	塙川病院増築建設に伴う工事
調査期間	平成15年2月3日～5月20日
調査機関	須玉町教育委員会
調査面積	1800m ²
主な時代	縄文時代、弥生時代、平安時代
主な遺構	縄文時代住居、弥生時代住居、平安時代住居、土坑、溝、ピット
主な遺物	弥生時代、平安時代の土器及び弥生時代の石包丁

腰巻遺跡（第1次）
腰巻北遺跡（第2次）
腰巻南遺跡（第3次）

平成15年3月31日発行

編集 須玉町教育委員会
明野村教育委員会
発行 须玉町教育委員会
明野村教育委員会
印刷 有限会社 高速プリント
